



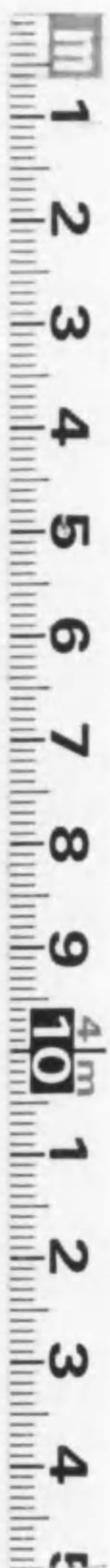
桃川燕林

溝演

7919

大正豪傑

塙團右衛門



始









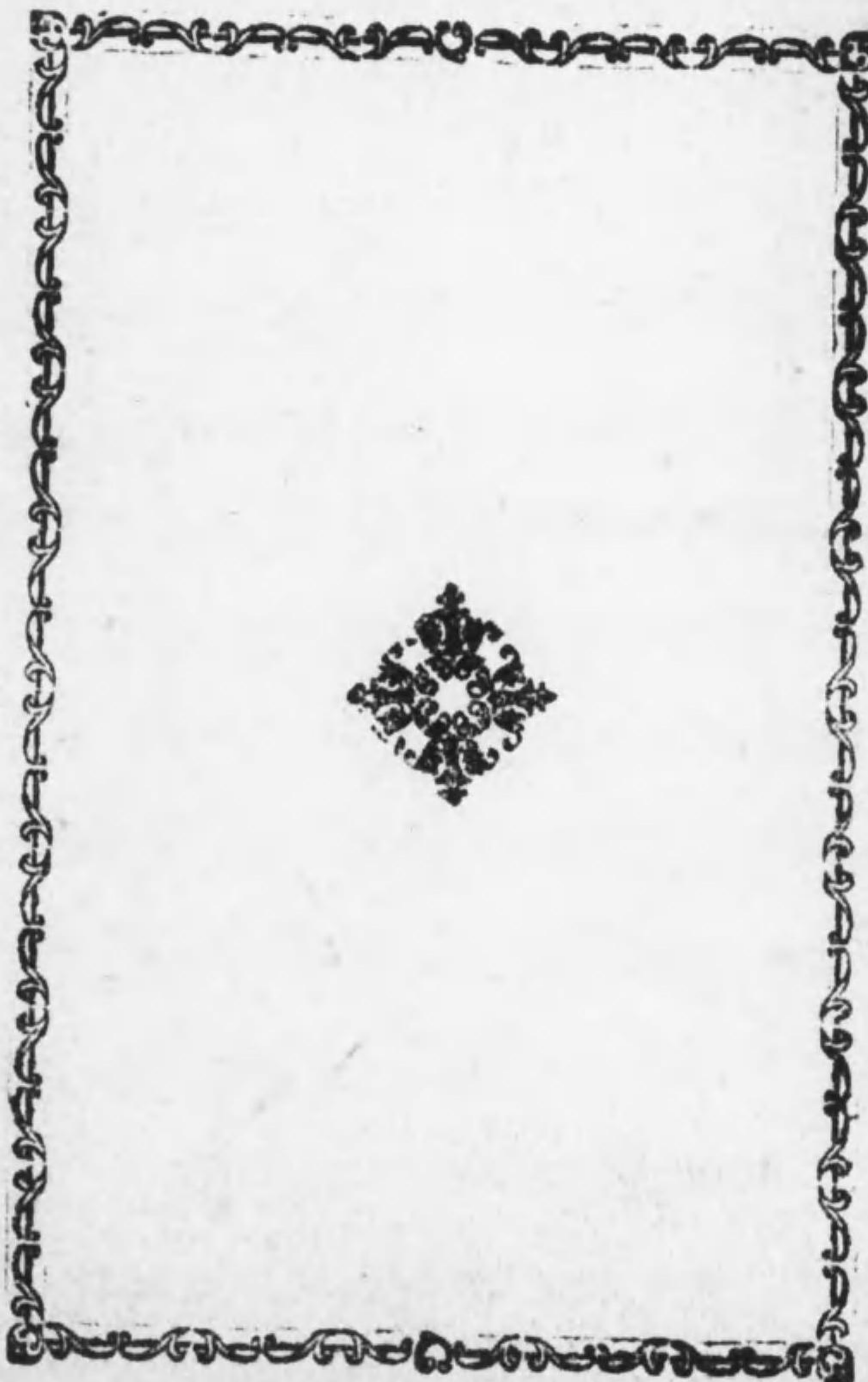
門 衛 右 團 塙

塙團右衛門

第一席

桃川燕林口演  
速記競技會員速記

今日より講演致しませるは塙團右衛門直之の武勇傳でございませる此塙團  
右衛門と謂ふ人は加藤左馬助嘉明の股肱の臣と唱へられたる勇士で獲物を  
取つて戰場に進み敵と相對して戦ふ時は百萬の兵をも崩すと云ふ位の勇を  
備へて居り又采配を取つて指揮する時には百萬の部下をも自由に致しませ  
る位の名士でございませる、けれども左馬助と脚か意見の衝突致しましたる  
所より遂に加藤の家を浪人して長らくの間難儀致します其浪人中のお話  
から大坂へ入城致しませる迄即ち慶長十九年より元和元年に掛りませる御  
物語大坂城攻の時には浪人組の大將に相成りまして後藤隠岐守元繼と共に



塙 團 右 衛 門

武勇を顯はす塙團右衛門橋直之入道鑑中と謂つて鳴野今福の戦ひには關東の同勢を三度まで追返したと云ふ位の人でございませぬ此お話は始めから申上げませんとお慰みにも相成りませぬゆへ第一に加藤左馬助の傳記から言上致すみに致します

元來此左馬助嘉明と云ふ人は至つて小兵を人でありませ左れば豊臣の大名の中でも綽名を山椒と人に謂はれた位小さくも辛いと云ふ意味でございませうか此人は參州岡崎城主徳川源藏入元康公の家來御案内の通り元康公は後永祿五年に至りまして徳川家康と仰られましたる君で此元康公御繁昌の頃には門徒宗信者が數多くございまして參州浪崎の正福寺の門徒一揆の時

時に於きましては嘉明の父三之丞は之れに加藤を致した左馬助は即ち此加藤三之丞廣明か伴で前名を孫六と謂ひ後に左馬助嘉明となつたのでございませぬ勿論其時門徒一揆に與みしたのは獨り加藤三之丞一人のみではございませぬ波邊新吾左衛門も同じく門徒信者であつて共に之れに味方を致した

塙 團 右 衛 門

のでありませけれども其一揆は成立たずして條ちに鎮定致して了ひました併し其時波邊新吾左衛門は畏入つて元康公の軍門に降服を致し切腹を願ひました所が上格別の思召を以て命をお助け下し置かれましたが此人は遂に坊主に相成つた其情と申すは徳川名代の名士波邊半藏でございませぬ然るに三之丞廣明は剛情な人と見せまして却々降參致す所でかく戦ひ破れての後に家内を召連れまして一時九州の方へ身を避け其後女房と共に長らく諸方を彷徨ひ歩きまして然るべき主人を訪ねて仕へを求めんと致しけるが抱人もなかつたものと見えて廻りくつて越前の敦賀在なる長崎村に参りました何故敦賀在に参つたかと申すに此長崎村の名主に與惣次と申すものがありませぬか此仁は素と加藤三之丞の處に奉公を致して居りましたもので其縁故があるに依つて遙々與惣次の許を訪ねて参つたので事の次第を打明けて身の振方を願入つたものでせから與惣次も舊主人ではあるし至つて律義な人物でありませゆへ快く承諾致して取敢へて村内に些かある家を構はて

門 衛 右 團 塙

其處へ三之丞夫婦を住はした片田舎の事として武家上りの爲る仕事と云ふものも幸ひ其村方には手習算盤の師匠と云ふものも別にございませんに依つて手習素讀の師匠ををるが宜からうと云ふやうな譯で三之丞は村夫子を氣取つて百姓家の伴や若者に手習と四書か五經くらゐの素讀を致して居りまゐる其中に豫て懐妊して居りました家内が十月満ちて産み落したのが男子でございまゝを零落して居るとは謂ふものゝ子を受もるは親の情兩親殊の外悦んで其名を孫六と命けました然る處其母は産後の肥立ちが悪るかつたものと見て暫くの間病の床に臥して居りましたが療養叶はせ到頭鬼籍に入りました取残されました三之丞廣明の悲歎一方ならぬ戰場にて受けたる創も一旦は癒りましたが何故か其古傷が歳経るに従つて痛み出し大きに難癒を致します

第二一席

ソコハ田舎の事として近隣の者が三之丞の不幸を憐み野菜を持つて來る者も

門 衛 右 團 塙

あれば屑米を持つて來る者もあり悉く大切にしてい呉れるので其日の活計は何うやら破ぎも付く小供は貰い乳で育つて居る幸に虫氣もまゝ追々成長致しました丁度孫六が七歳に相成りました時三之丞廣明がドット病の床に臥したり固より獨身者の事として充分な療養も出来ませんで病は益々重り行くばかりで三之丞の命は今日か明日かと云ふ旦夕の間に迫りました時に臨んで孫六を枕元へ呼び人を遣けて遺言致しました其言葉に孫六や其許はマダ年齒も行かぬ頑是なき小供何の因果で斯る父を持つたか今も其許も農家に育つて居るが此父は固く侍成人した後は此父の志を襲いで必ず百姓にはあつて呉れるを申すまでもなく加藤三之丞の家は其方が相續すべきものであるから縦令小身なりとも苦しうない何卒侍になつて親の名を汚さんやうにして呉れよ某の弟は一人あつて加藤權兵衛と申す當時執れに參つて居るか存せぬが此者は馬術の達人であつて腕力も坐つて居れば才略もある男だに依つて大方執れの名か仕へて居るだらうと心得る其許が成人

門 衛 右 團 塙

の後には其叔父なる加藤權兵衛と謂ふものを尋ねて立身出世の力頼みと致すが宜いぞ併し斯る亂世に在つて徒に甥だ身内だと言つた處が先方に於て容易に信じもすまい就ては此短刀は家傳の重寶であるに依り若し遇ふた其時は加藤權兵衛に刀を示して名乗り合ふやうに致せよと枕元にありました一文宇野直の傳系傳の短刀を手渡し致しました孫六はそれを聞いて涙でも流せかと思ふと少しも落涙する容子もかく小供ながらも父の枕邊に寄りまして父上様只今の仰は孫六確と承知致しました私も今は斯う遣つて農家に育つて居りますすが何うか侍にありたいと思ふて居りました處幸い父上様が加藤三之丞の家を相續せよとの仰せ有難く承知致しました此上は仰の通り江近に居ります叔父の加藤權兵衛と云ふ御仁をお尋申して必ら父上様の跡を襲いで家を興そやう致しますから逆も敵は凶事から一刻も早く苦痛を免れて極樂浄土にお出で下さるやうにと立派に答へましたので三之丞も大に悦んで莞爾と笑ひまして間もなく往生致しました扱此加藤權兵衛と云

門 衛 右 團 塙

ふ人は舊幕時代の伊豫の大系の加藤遠江守の御先祖でございませす父三之丞の身亡りました後は孫六一人で假令些かなる家にせよ正可に小供一人を其儘置く譯にも参りませんから家を疊んで名主の與惣次殿が自分の處へ引取りました孫六歳は七歳でこそあれ至つて氣象の勝れた子でございまして日頃何をするかと思ふと村の小供を相手にして劍術を使ふ眞似を致したり爾うかと思ふと大きな石などを持つて力競を致して居ります十三歳になるまでは別段にお話もございません丁度孫六が十三の時辰の事でもございませ名主の與惣次が孫六に向い孫六や 孫六ハ 與惣次殿の城下に候に行くのだが往つても途中で遊んで居ては仕かんぞ手紙を貰いたら直に歸つてお出で知つてるだらうが西町の近藤と云ふお醫者様の所は 孫月三度行きましてから能く存じて居りますと 與爾うか只手紙さへ置いて來れば宜いのだ併し今日は馬市だから定めし遊んで居たからうが馬市へ往つて馬にでも蹴飛ばされるぞ狂かんから餘り遊んで來るな 孫六ハ畏りました田舎育ちの事で



其扮装と云つた所が草鞋穿きで誠に粗末な衣類孫六はスタ〜教賀の城下へ出て参つた此城下までは鶴に一里半の里程依頼された手紙を醫者の所に置いて直ぐ歸れば宜いのだが其日は馬市でござ〜して居るものでございませすから孫六も主人に言はれた事は打忘れて仕舞つて彼方此方と廻り始めた何うも大層な人だ成は五頭十頭と馬を連れて立つて居るものがあるかと思ふと此方には馬の買人が居つて何やらん所らぬ言葉で押問答の末チャン〜と手を拍つると誠に市は盛つて居ります

第三席

常人はホカンとして彼方此方を見て歩いて、馬市と云ふものは大變賑かおものだと思ひながら歸らうと存じて二丁ばかり町端に来る此處は又淋しい處でございまを柳の樹が一本あつて其柳の樹に馬を一足繋いで其側の草叢にドツかり腰を掛けて五十二三になる親爺がバツリ〜短草を喫んで居る容子孫六は親爺には眼を着けんで柳の樹に繋いである馬を見て居たが

て孫爺さん此馬は前さんの馬か 爺、オー乃公の馬だ 孫、爾うかえ、良い馬だ、今乃公ア馬市の中を通つて来たがドツさりある馬の中に此位良い馬は無いぜ何うも盛いたみれば一番良い馬だ 爺、此小僧中々感心な奴だ、マダ歳は往かんが此處へ来て一寸見た許りで此馬の一番良〜と云ふ所か分ると云ふのは剛毅だ譽められて頭に乘る譯けではないが小僧みれば自慢の馬だ孫、こりや何處の産だに爺や 爺、みれか是は南部産だが南部にも此位の馬は寡さい 孫、老爺さん馬は南部が宜〜のかに 爺、南部と云つた事もないがア總じて奥の方が宜〜な 孫、ハテ爾うかけれども老爺さん乃公は南部は宜〜と云ふ話は聞いて居るがケッ(湯の煮)が暖くて往かないと云ふ話だ 爺、馬鹿謂ふな小僧馬と鐵瓶と一緒にしては不可ない 孫、ア、爾だッけを 爺、外に何も自慢する處は無いがマア小僧一つ後足の工合を見ろ 孫、後足も宜〜へが脚も宜〜な 爺、馬にヨセがあるものか 孫、時に老爺さん此馬は賣物かえ 爺、賣物よ 孫、何せ這塵漉しい處へ繋いで置くのだ賣る氣から馬市の人

門 衛 右 團 塙

のゴタ／＼して居る處へ牽いて往つたら宜からう。爺、ろりや小僧眞の素人  
了簡だ、彼様處へ引張ッて往ッて二束三文の馬と一緒にされて堪えるものか  
孫、ろりや老爺さんお前の了簡が違ふ、そんな中に入れて置いて見ても見る人が見  
れば良へ馬だと思ふに違ひないから買はうと思ふ人は買うと斯う云つた勘  
定だけれどもそんな良へ馬でも人も通らない道塵淋しい處へ繋いで置いて  
は買人があるまい、お前は馬喰渡世から馬市へ連れて往つて二束三文とかの  
馬の中へ交せて置いたら尙ほ宜へたらう枯樹も山の賑ひと云ふから枯れた  
樹の中に櫻が一本咲いて居れば其櫻が一層能く見えると同じ事だから連れ  
て往かッせい。爺、成程、爺は往かんが理屈は旨ひ大きに乃公が思かつたけれ  
ども今更乃公が彼處に牽いて往く譯にも往かねへ。孫、老爺さん乃公ア此馬  
に乗つて見たいと思ふが乃公に此馬を貸して呉れまいか。爺、何うする。孫、  
此馬に乗つて馬市の混雑して居る所を乗廻して賣物だと云ふふとを知らし  
て來れば心あるものは此方へ買ひに來るぢやないか。爺、成程斯う遣つて置

門 衛 右 團 塙

くより其方が幾らか早い旨い事を考へて呉れたが小僧お前に乗れるか。孫、  
乗れぬことはおまい乃公馬が好きだから何んな馬でも乗るよ。爺、乗れるなら  
一つ貸さう。孫、ぢやア爺さん爾うして呉れど云ひながらツカ／＼と往つ  
て突然書に手を掛けてガツナリ／＼遣つて居たが馬は大人しくして居る、老  
爺は此体を見て感心して。爺、小僧馬ぢや餘程苦んだか。孫、イーエ些つども  
乗つたよとはねいよ、老爺さんは一体何處だね。老爺、乃公か乃公は江州長濱  
だ。孫、此處からどの位ある。爺、二十四里と云ふが少し延びて居る。孫、ぢや  
ア老爺さんは二十四里も馬を引張つて賣りに來たんだね。爺、ア、爾よ。孫、  
老爺さんの名は何と云ふか。爺、乃公ア江州長濱に居て馬喰の彌兵衛と云  
へば響を吹くやうだが馬喰仲間では知らねへものはない。孫、ホト爾うか。爺、  
此處へは最う毎年來て了度十四五年も來て居る定めし今日は仲間の奴等の  
三四人も來て居るだらうが乃公ア自慢で賣りに來た。孫、道理で彼處に在る  
馬とは違ふ、老爺さん少しお借り申すよと柳の樹に繋いであつた手綱を解い

てヒラリと馬に打乗つて乗出した馬喰の彌兵衛は煙草を喫みながら見て居たが、爺小僧仲々感心だ、孫往つて来ますよとトッ／＼と走らして行く、彌近頃は年寄は往生だ何うしても若へ者は智慧の廻り方が早い、奴が彼處をト廻り廻つて来る中は氣かあれば五人や三人は買人が来るだらうと見送つて居りまゝと孫六の取し方が手綱に合つたと見えて馬もバツ／＼と威勢能く駆けて行く有様は仲々小供のやうでは無い、

第四席

爾う斯うして待つて居たが幾ら経つても歸つて来ね、小僧何を暇取つて居やがる、最う歸つて来る頃だ、餘り長過ぎるを待草臥れて居る所ろへ一人の馬喰が汗を拭きながらドン／＼飛んで来て、一人「親方／＼、彌何だ、一人、彼の鬼黒を何うした、彌何に、一人「イヤサ彼の自慢の鬼黒さ、彌今小僧が乗つて往つたらう、一人「皆な吃驚して居た、小僧が彼の市中を此馬は賣物だ、賣物だと怒鳴つて居たが騙て馬市を通り越そとめめた／＼と云ひながら何

處かへ往つて仕舞つた彌兵衛は吃驚して「へい、一人「何處かへ飛んで往つて丸で影も形も見えなくなつた、變な事だと思つて茲に来たが那の馬は親方賣つたのか、彌兵衛驚いたのか、彌最う馬喰は罷めた、五十面を下げて十三四の小僧に欺されて一番良い馬を只持つて行かれるとは情け無い、最う乃公ア馬喰は罷めるよと聞いて乾兒も驚いた、今更罷めたつて仕方か、い兎も角尋ねませう、夫れから手別をして諸方を索ねたが何處に往つたか、知れぬ、彌兵衛も仕方がないから馬市の引けるのを俵で惜々江州長濱へ歸つて参る併し馬を引かきに馴染の馬宿へ泊る譯にも行きませんから普通の商人旅籠に止つて三日目に長濱に歸つて来た

扱我家に歸るとは云ふ條、彌兵衛も商賣物の馬を盗まれたことであるから如何にも歸り悪い、密然と門口に立つて居ると女房のおカドが之を見て所天さん今お歸りかえ、何處で遊んで居る、彌色々用があつたもんだから途々……と口吃る、女房自宅でも色々用があるのに本當に氣樂ふ人だよ、けれど、那

門 衛 右 團 塙

の奴がドノ位働いて呉れるが知れまいよ 彌ウーム其奴と云ふのは 女屋  
何だね自分で鬼黒に乗せて先きに還して寄越してさ 彌何を 女屋を  
て那の小僧さ 彌小僧が鬼黒へ乗つて歸つたど 女屋ア、最う鬼黒は疾う  
に歸つて居るよ彌兵衛は聞いて二度吃驚訝を顔をして顔を見詰めて居る  
女屋十三四にある小僧がね教習の馬市場で親分から蓋を貰ひました是から  
何分お願ひ申そと云つて自家に来て居るが本當に恂好者で大變儲く好い小  
僧だみどねと話をして居る處へ四下でも使つて居たものと見えて彌彌を掛  
けて孫六が出て参り 孫親方 彌ヤア小僧厭がるさ 孫老爺さん勘忍して  
お呉れ彼處でお話を爲やうと思つたが間が悪かつたから先きへ此方へ來ま  
した實は乃公ア馬喰になつて疾うから生物を扱つて見いと云つて居た何う  
か老爺さん乃公を子分にして立派な馬喰にしてお呉れ 彌此野郎道理で乃  
公の國所をスツカリ聞きやがつた 孫彼處で能く聞かないと方角が知れな  
いから 彌そんなら爾うと那の時に言へば何も這樣に心配しやしねへ 孫

門 衛 右 團 塙

そんなに心配したのかへ乃公だつて馬を乗逃げはしまいよ 彌手前許りで  
はちい馬まで眼を減して來たらう 孫イーエ 彌手前錢でも持つて居たの  
か 孫イーエ 彌それとや何うしたんだ 孫乃公ア道々馬宿へ泊つて來や  
した長濱の彌兵衛と云つたら大概知つてるだらうと思ふから何と云ふ村だ  
ッけを村の名は忘れて仕舞つたが鎌倉屋と云ふ家へ泊つて彼處の家で四下  
を使つたり飼料を與れたり其外金を二分借りて來ました 彌此野郎どんで  
もねへ野郎だ汝幾歳だ 孫十三 彌兩親はあるか 孫兩親は死んで仕舞い  
ました 彌國は何處だ 孫親方罷しやせう何處だと云つた所が仕方がない  
乃公ア馬喰になりたいと思つて來たんだから那樣事謂はせに置いて下さい  
決して悪いものではまいから 彌マアそんなら居るが宜い誠に昔は那樣事  
は至つて粗漏でございまして只今のやうに親元へ照會するの戸籍を調べる  
のと云ふことはいない

塙 團 右 衛 門

孫に兵衛は馬喰の事で腹の大きい男でそれから其儘孫六を自宅へ置きまし  
た忠實々々しく立働いて二三年居る間にマア一通りの事は何でも覚えて  
了つた十三で彌兵衛の處へ参りまして十八に相成ります迄は別段に申上  
げるゝもございせん十八に参りました時は最う馬喰として一人前の事  
は出来るやうに相成りました根が根でございせんから人品も卑しからず起  
居舉動も他の者とは違ふ所から彌兵衛夫婦も行く／＼は養子にしやうと思  
ふ下心があるものですから誠に可愛がつて呉れます至つて氣象の善い人物  
で錢切れも宜いから仲間の者も自づと尊敬して居る或時孫六彌兵衛に向ひ  
親方願ひがござんせ親方何だえ孫外の事ぢやとあせんが今自分が這  
様事を言ふと孫六は罷けて居ると思召すか知れませんが私は十三の時から  
此家へ参つてお世話になつた上に一通りの事を教えて貰つたのでござい  
まそから何處へ往つても御恩は忘れせん彌今日又妙事を言ふをソ  
レが何うしたと云ふのだ孫六は親方今歳から來年三月迄お暇を戴きたい

塙 團 右 衛 門

と思ひます親方フーム暇を遣れば何うぞる孫親方の家に居て此近所は  
かり廻つて居ては修業にかりませんから一年許り西行して來たいと云ふの  
です國から國を廻つて歩きまゐる事を西行と申さうでおさいませ親方  
フーム最う手前も何處へ往つたつて差支ない技倆になつて居るのだから爾  
う云ふ譯あら往つて來るが宜い孫ぢや親方一通り廻れば歸つて参りま  
すから親方爾うか何處へマア行く心算だ孫美濃の岐阜が大變に繁昌を  
するさうでも何でも信長と云ふ人が戦争をしては勝つものでそれから織田の  
家來や羽柴の家來が金があるので馬の良いのを引張つて行くと幾馬でも置  
ふさうでまだから私も一つ往て金儲けをして來たいと思ふ親方フーム旨  
い處へ眼を着けた乃公も此間開いたが大分濃州路が繁昌だと云ふから美濃  
から尾張の方へ掛けて行かうと思つて居た丁度宜い處だソレぢや往つて來  
い何時往くか孫善は急げと云ふから今日是从出立致しませ親方爾う  
か今から立つか孫エッ今から立ちます就ては種馬がないと仕方がないか

ら何うか馬を五頭ばかりお割り申して行きたいと思つて、親方「ア、爾うと  
も手前が如何に目利を馬喰でも空手で往つては仕方がない種馬は貸して遣  
るから立派な馬と取替へて来て呉れ、サア小遣を遣るよと云つて六兩出した  
孫親方「濟みません小遣まで買ひまして、親方「孫六や併し一年も経つたら歸  
つて来てお呉れ、乃公はお前の事を眞の小供だと思つて居るのだから、孫六  
有り難うござんず、眞に小供見たやうに可愛かつて下まつて、誠々辱ない、一年  
も廻れば必ず歸つて来ますから、又面倒見て下さい、孫六は致つて淡泊を男で  
ございませすから、最う爾うなると、一刻も猶豫せず旅支度を整ひました、此種馬  
と申しまするは馬喰は四頭なら五頭馬を引張つて出て例へば二十兩の馬な  
ら馬を三十兩に賣つて来ると云ふのは決して功績ではございません、一ト廻  
り廻る中に五疋の馬を十疋にして来るのが馬喰の手柄なんで、併し幾ら廻つ  
て歩いたからと云ふて只五疋の馬が十疋になる氣遣は、おいが先づ自分の馬  
を賣つて其金で良い馬を安く買つてソレを人に高く賣り買つては賣り賣つ

ては買ひ段々良い馬にして始め率出した時より數を多くして歸つて来るの  
が目慢だソレが十分に出来ぬやうでは馬喰の中でも一人前と云はれんさう  
で、孫六は五頭の馬を牽いて出掛けました、サア爾う云ふ伶俐を小僧ですか  
ら何處へ往つても可愛がられる、長濱の彌兵衛の子分だと云ふものであるか  
ら何處でも粗略を扱ひはしません、

第六席

直に岐阜に往くかと思ふと爾うぢやあ、諸方を廻り廻つて歩く中に到頭馬  
い馬ばかり十一頭牽いて来ました、岐阜へ這入りまそと南街の馬宿に市右  
衛門と云ふものがある馬を牽いて居るから外の客に泊る譯には往かん、是處  
馬宿に泊らなければならん、孫御免下さい市右衛門と云ふ方は此方で、まか  
主人「私が市右衛門、孫ハ、爾うてまか私は長濱の彌兵衛の若イ者孫六と申  
します、賣物があつて来ましたが何うか一つお願ひ申しませ、市ア、爾うか  
ね、大層良い馬を引張つて来ましたな、早速手配をしやう、孫「有り難うかす、庭

塙團右衛門

は裏の方でそかど裏へ行かうとする 市待ちを乃公が一緒に往くからと市  
右衛門が案内して廐屋に参りまして十一頭の馬をチャンと底に繋いで飼料  
を宛がつて之を繋いで仕舞ひました夫れから孫六は草鞋を解いて自分の仕  
度をした凡そ馬喰と云ふものは馬宿へ泊つても先づ馬に宛がひをした後で  
なければ茶一杯飲むものでは無い必ず自分の事は後にして馬の事を先きに  
しなければなりません 孫親方一寸お尋ね申しまそが當所のお馬役は何と  
謂ひまそか一寸顔出しを致して置きたうござんすから此馬喰と云ふものは  
城下へ這入ると直に馬役を訪ねて賄賂を使つて置かんと殺ら良い馬を持つ  
て参つても又家中の人は彼れは良い馬だから買はうと申しても馬役の方へ  
賄賂が使つてないとも馬役の方で此馬は疳が強いとか癖が悪いと難癖を付  
けられるれば一疋も買ふことが出来んソレ故に袖の下を使ふのでございませ  
袖の下さへ使つて置けば少しは悪い馬でも見通して呉れる孫六も始めて  
はなし其呼吸を知つて居るから先づお馬役を尋ねたので 市ぢやア往つて

塙團右衛門

来るが宜いが何時行くかね 孫明日の朝早く往きませう 市爾うかソレな  
らソレで宜がお馬役の家は二ノ丸内の柳の小路と云ふ處ソコへ往つてお馬  
役の加藤權兵衛と聞けば直に分る 孫へエ御當所のお馬役は加藤權兵衛さ  
んですか 市爾うよ 孫ぢや馬の先生が加藤權兵衛様と云ふんですか 市  
爾うだよ執念いなオイ 若イ者何を呻つて居る 孫加藤權兵衛ですな種  
蒔の權兵衛とは違ふね 市爾うぢやあゝ孫六は加藤權兵衛と云ふものだと  
云ふことを聞いた時にホロリと涙を流して何處に何う云ふ便があるか知れ  
ないマダ遇つて話をして見なければ確かりした所は分らんが親仁の一言に  
も馬を見分けるみどが上手で殊に氣象の勝れたものである是から先き他へ  
出たら叔父の加藤權兵衛と云つて尋ねると云つたが此御城下のお馬役をし  
て居ると云へば一任間違つた所が差支ない何でも往つて當つて見なければ  
分らんから往つて見やうと其夜荷物の中に入置きましたる親仁の紀念の短  
刀を纏ゑて加藤權兵衛の處へ参り是が一つの縁と相成りまして遂に秀吉公

に御本公をして加藤嘉明と相成り追々其家を富まして遂に伴右衛門の  
きものを抱えるまでに相成りまそる加藤左馬助の生立でございませる

第七席

塙 團 右 衛 門

前回には塙團右衛門の主人加藤左馬之助嘉明の傳記を申し上げましたが前に  
も申し上げた通り此人は前名を孫六と言つて越前の敦賀在長崎村に生ひ立ち  
其の後江州長濱の馬喰の彌兵衛の許に居つて暫く馬喰を致して居りました  
美濃國に参りました時分に伯父に當ります加藤權兵衛に圖らるも面會致し  
た其時に江州から率いて参りました馬を残りす賣つて仕舞ましたのが恰度市  
場に來合せました權兵衛孫六の懸引を見まそると實に他人より立優つて居  
るア、どうも年若には珍しい男が何處の如何なるものか屋敷へ招んで當人  
の素性を糺し次第に依つたら自分の手下に使ひたいものだと思つて宅  
へ歸るや否や孫六の所へ是非來て貰ひたいと云ふ手紙を持たして遣ります  
此方孫六は權兵衛と云ふのは萬一我伯父ではいかと思つて居つた所へ招

塙 團 右 衛 門

かれましたから殊の外喜びました早速權兵衛方へ参りまして一應の挨拶を  
爲したる未 孫六唐突に申上げては甚だ失禮で御座います但拙者は加藤三  
之丞廣明の孫孫六と申す者で御座います拙者の伯父に加藤權兵衛と云者の  
ある事を親父より承知致して居ります萬一其者に會つた時は此短刀を証  
據として此物語をそるやうにと云ふ遺言で御座いますそれ故何方にてか會  
り合つたらと斯う思つて居りました所か圖らるも今日お招を蒙りましたの  
で私の伯父と同姓同名若しや貴士が此孫六の伯父に候らはせやど其の短刀  
を取出して一部始終の物語を致そ權兵衛聞いては我身の甥でありしかど  
其の短刀を取り上げて見ると紛ふ方なき三之丞の遺物ツク、孫六の様子  
を見よど如何にも體は小さいが天晴勇士の相貌を備へて居ります故權兵衛  
も殊の外頼母しく心得酒杯を出して饗應致し四方山の話をして居ります  
所へ立歸りましたは權兵衛の侍で作内と云ふ者で御座います此人は豊臣の  
家臣の中でも有名な人でまだ其頃には年も僅か十六歳で御座います右の



門 衛 右 團 塙

話を聞いて俄に一人の兄弟を得たやうな心地で大きに喜んで作内は孫六に對つて 作内豫々父より承つては居りましたが御目に懸るは今日が初めて此後は弟と思召して下されど優しき言葉に孫六も打解けて話を致す孫六志を聞いて居りし作内は聽て孫六に對ひまして 作内侍士に成うと云ふ御志は御尤も量見今こそ隠しき身分とは言ひながら元を正せば立派な者左程武士に成りたいと云ふ丁簡があるなら及ばせながら御周旋致さう就ては織田家へ推舉を致す心得で御座るが如何で御座らうと斯う申した所が孫六は頭を振つて 孫六イヤ拙者は信長公に御奉公致さうより切望同じ御周旋に成るからば羽柴公に御周旋を願ひたい幸ひに加藤作内は秀吉に仕へて御小姓の一人に御座いませから此の縁を以ちまして秀吉公に周旋をせると云ふゑとに相成つたそこで加藤權兵衛が孫六の身の上一切萬事を引受けまして秀吉公に履歷を申し立つて願ひませると流石は大量の秀吉公大きに喜んで早速御召抱に相成りまして御小姓の一人に加へられた所が御小姓と言つて

門 衛 右 團 塙

も大勢ある加藤虎之助片桐助作其他朋輩が澤山ある其中に交つて居りました然る所御小姓の一人に福島市松と云ふ者がありまして至つて口の悪い人物と見へて動もせると孫六の事をば加藤とも言はなければ孫六とも呼ばんで 福島さうだ馬喰々々と言つて頭をさしに遣つ付けるものですから孫六も憤つとして 孫六福島…… 成程拙者は先日まで馬喰をして居たに相違ないが併し腹からの馬喰でも無い拙者も加藤三之丞の侍であるが仔細あつて一旦町人百姓の群に下つて馬喰を渡世に致して居つたが最早今日は御小姓の一人に引立てられて各々方と同様に務めて居る者を何も左様に拙者一人を目的敵に馬喰々々と輕蔑ぬでも何んとか物の言ひやうがありさうかものではないかと申しませる

第八席

福島何を言つて居やアがる馬喰ウ其方は馬喰と言はれるのが厭さらせうか拙者共が目の醒めるやうな働をして呉れ…… 戦争の時に戰場に於て他人の

門 衛 右 團 塙

目を驚かそやうな働きをして見せたならば成程孫六は眞の馬喰と云ふ譯ではない根は全く武士に違ひないと思ふも其働きの貴公に出来ぬからば以來は孫六ども加藤氏とも言つて遣はさう併し其の働きの出来ぬ内は終令十年経たうが二十年経たうが矢張馬喰々々としか言はぬから然う思ふて居れど餘り福島が甚い事を言ふから傍の者は聞き兼ねて福島氏其様を事を言ふものでは無いか哀れに取押へるけれどもナカノ聞かぬ矢張馬喰々々の一點張 孫六成程尤もだ然らば戰場に於て播磨者が目覺しい働きの致せば馬喰と言はぬと斯う云ふのであるナ 福島勿論然うぢや 孫六然らば戰場に於て必き目覺しき働きのして見せるぞ 福島宜しいとも貴様が戰場に於て十人殺せば此市松は十五人貴様が二十人殺せば此市松は三十人殺して見せるノウ馬喰ウモ貴様が意地あるならば此市松に劣けぬやうに心懸けて呉れ馬喰ウツカリして呉れど能く當て付けて言ふ實に福島市松と云ふ奴は意地の悪い奴で御座います傍の者は如何にも氣の毒に思つて居る

門 衛 右 團 塙

孫六は馬喰々々と罵られるのが口惜しさに何か機會があつたら一ト働かして福島の目を驚かして呉れやうと思つて居りますと恰度天正の三年信長公が中國征伐を仰付けられ羽柴筑前守秀吉が其の目代として播州へ出張致し事を相成り寄富山を本陣として大軍を率ひて参る事に相成りましたが中國十州の司宰毛利右馬頭輝元公は吉川小早川杯云ふ名士を率いて中國の鎮臺ども申すべきか方で御座いますから如何に秀吉智略に長けたりと雖どもナカノ一様で攻め落すとは出来ぬ其内に中國の諸候多くは毛利輝元に款を通じて共に信長に敵對をみる其中に播州三木の城主別所小三郎并に其伯父に當る別所彦之進の面々は眞ッ先に毛利家に味方を致し充分に籠城の手當を致して居ると云ふ事が分つたので秀吉公大に憤り第一に此三木の城攻を致した所が要害嚴重に致してさしも勇猛なる秀吉の先鋒が力を竭して攻め陥れしことが容易であかつた併し此城攻の事を申上げまると大間記に移りまを故略して申上げまを備此の三木の城を攻めるに就いて非常に惱

門 衛 右 團 塙

んで居りませる時に福島と日頃争を致して居た加藤孫六は此戦に於て大勝  
二人の内是非共一人の首を討ち取らんければ益々福島の爲めに悔りを受け  
るは必定と孫六は抜け騙けして城内に飛び込み小三郎を討ち取り剩へ此の  
戦闘に加藤虎之助清正は孫六を援けて首尾克く別所彦之進をも討ち取つた  
福島市松是も同様に城を乗り越へて侵入致しましたが充分なる働きも出来  
る爲めに加藤孫六程の功名を爲すことが出来なかつた此時よりして福島市  
松正則は加藤孫六の技倆の尋常ならざるを知り殊に其勇氣のある事を知つ  
て深く先非を後悔致し是までの事を詫入り其後は馬喰々々と云ふことは口  
の先きにも出さぬやうに成つた此御話は加藤孫六が三木の城を攻めて別所  
小三郎を討ち取りました功名話丈けで御座いますそれが手初めで瞬く内に  
出世を致し江州日野に於て一萬石の諸候と相成り豊臣公の勇士の内へ加へ  
られるやうに成りました

第九席

門 衛 右 團 塙

借此江州日野の在に大瀧村と云ふ所が御座いまして其處に郷士を致して居  
りまする塙敷右衛門に團右衛門と云ふ伴があつて頗る大膽な人物で御座  
いませ唯だ力量ばかりでは無い武藝も能く辨へて居ると云ふものは田舎者  
とは言ひながら亂世に生立つた事故廻り來る武藝者に就ては劍術或は槍杯  
の修業を致したもので御座いませから大分技倆も勝れて参り殊に氣象の立  
ち勝つた男で田舎杯に老ひ朽ちると云ふ志は無い、どうか猶一層剣道を修業  
致して何處かの大名に仕へたいと云ふ志を以て居つた然る所日野の城主は  
前に申上げました加藤左馬助嘉明即ち彼の孫六で御座いませ成人の後團右  
衛門は日野の所へ訪ねて参りまして取次を以て居りました取次鳥渡申上げま  
した徒然なる所より兵書を繕ひて頼りに見て居りました取次鳥渡申上げま  
した嘉明何んぢや取次エ、唯今塙團右衛門と申そ者が罷り出ましてお目  
通りを願ひたいと申しますすが如何致しませう嘉明ウ、其者は如何云ふ人  
物であるか取次左様に御座いませ至つて身の丈の勝れて居りまする速れ

塙 團 右 衛 門

勇士と心得ますと聞いて嘉明は小首を傾けて居つた、勿論其頃浪人して居る者でうれしく名ある者は何んど云ふ人物であると云ふことは大抵人の知らぬ事は無いけれども塙團右衛門と云ふ姓名は聞いた事もない、嘉明ハツナと云ふ分らぬ浪人物で少しく名のある者は大抵拙者が知らぬ者はない併しと云ふ人物であるか一向聞いたとも無がヨシ、マア兎も角案内致せと云ので取次の者は團右衛門を唯今で申せば徳接の間に通しまそ嘉明は正面の顔を見て其處に立出見ると團右衛門は如何にも立派な男で御座います、左馬助の顔を見て頭でも下げると思ふと頭を下げる所では無い、仰向いて居る、團其許前名加藤孫六殿當時左馬助嘉明と言ふ、御人で御座るか、嘉明如何にも拙者が嘉明で御座る、團然らば御身は拙者の主人として耻しからぬ、此方と極めることに致さう、嘉明何んだ貴様は狂人だ、其方は如何なる望みあつて罷越したか知らぬが突然に主人に極めやうとは何事である、此方に於て抱へやうとは申さぬにさりとば禮儀に缺くる所は御座らぬか、團イ

塙 團 右 衛 門

ヤ必ら老拙者をば召抱へると極つて居る拙者は當家を殊更に望んで見つけた者である、今天下の諸侯山の如く是ありと雖も借さうも相折り敵へて見れば何れも其氣風が氣に入らぬ、貴公の事を聞いて如何にも孫六嘉明と云ふ方は行末頼みのある人である、さうかさう云ふ大名の許に奉公して共に家を興したいと斯様に存じて態々尋ねて参つた、今御身の人相を窺ふに思ひしに違はぬ如何にも恰好寛にして天晴行末大家を爲すべき相貌あり、今我れ大家に奉公なさは従つて大碌を頂くは何んの造作も無い事併しそれで此方の働さが見えぬ、當家は今朝かの一萬石……嘉明何んぢや聊の一萬石とは……團先つゝ暫く御聞き召され、それに相違ない、今は一萬石の城主であるが行々頼みある御方と見受けられた依つて一萬石の當屋敷に奉公致して十萬石に致せば拙者も働ぎ甲斐があると云ふもの、だに依つて召抱へる方でも大きに好都合であらうと存ずる、此時嘉明は怪訝な顔をして團右衛門の様子を見詰めて居たが、團も團右衛門は嘉明に對ひ、團それ故さうか當家の家臣にして頂

門 衛 右 團 塙

きたい嘉明は暫く考へて居りましたが 嘉明宜敷い其方は何んぞ知行に  
があるかそれを承知致したい 團何んど申すか知行に望がある是は怪し  
らぬ成程知行に望がないではないが併し今聞んだ所が君公の知行は前申  
通り聊の一萬石拙者の望は逆も満たす事は出来ぬ就いては唯今の所は無  
で奉公致そ軍に出る度に働きを致して成程此働ならば千石遣はさうとか  
至此働きでは二萬石遣らねばならぬとか又此度の働きには格別勝れて居る  
に依つて知行を獲らせ遣つて仕舞ふとか…… 嘉明貴様狂人ぢやナ其方が  
幾ら戦功があつたからと申して知行を獲らせ遣つて仕舞つて拙者は如何致  
す 團其時は此團右衛門尊公を御護ひ申上げる

第十席

嘉明馬鹿を申そお主人が家來に知行を獲らせ遣つて仕舞つて食客に  
があるか兎に角其方は武藝を心得て居るか 團武藝と申して種々あるが何  
を指して言ふので御座る 嘉明弓術は 團弓を弾く事も少々心得て居るが

門 衛 右 團 塙

取て申立てる程の事もかいか 嘉明然らば鎗術か 團鎗も突き出そ位の事  
は存じて居るが是も表面能書を言つて奉公を求る程の技拙でもない 嘉明  
ハ、ア、して見ると武術は何を専門と致そ 團イヤ拙者は是と言つて申立  
程の武藝を心得て居らぬ唯だ此團右衛門が申立つべきまゝとは軍に出で敵を  
殺そ事と城を攻めて破る事とは心得て居る又無事泰平の時に相成れば多分  
の政治は出来るけれども三十萬石や四十萬石の政治をすれば拙者一人で預つ  
て見せる是丈の事は拙者が能書を申立つて必らず請負つて見せる此事を傍  
に於た加藤嘉明の家來が聞いてヤどうも寔に人も無げある亂暴の奴だ軍に  
出ては多く敵を討ち城攻をすれば必らず攻陥を無事泰平にあれば三十萬石  
や四十萬石の政治を預ると此上の大言はないと囁いて居る加藤嘉明は暫く  
聞いて居たが心の中に是は面白い男だ實は戦國の世の中拙者も斯かる人物  
の出来れかしと待ち居つた 嘉明然らば其方は當分無碌で宜しいと云ふを  
團勿論無碌で宜しい其代り一言御断りして置く彌々軍に出た時に大將は右

門 衛 右 團 塙

と云ふ指揮をしても拙者の都合で左も右もあつてもあり又左と云ふ指揮をして  
も右に兵を配る事もあつた若し其指揮が國に中つて果して戦に勝つたならば  
後々に至つて大將の指揮に背いたと言つて叱るやうでは困る兎角戦は勝ち  
さへすれば宜しいのであるから警令拙者が下知に背いても勝つたならそれ  
で許して遣ると云ふ御許を頂きたい 嘉明宜しい承知致したるれでは當分  
客分として置かうとそこで嘉明の家臣と相成りましたが遂々此一言が主従  
相分れる種になつて關ヶ原の戦の時に團右衛門が加藤嘉明の指揮を用ぬぬ  
爲め縁を切つて浪人する事に相成つた併し是は團右衛門が悪いとは申さ  
れぬ何故かど云ふに最初より主人の指揮は用ぬぬ併し軍は勝つたら擲弁し  
て呉れど云ふ事は豫々約束してあつた事で嘉明に於ても委細承知したと斯  
う云つて抱へたのであるから強ち指揮を用ぬぬとて家來の道に背いたとも  
言はれぬ

門 衛 右 團 塙

傍若無人の働きを致すもので御座いませから其他の家臣共も今度の戦場で  
は目覺しき働きをして團右衛門に一泡吹かして呉れんど一同の者も勇氣を  
増したと云ふ位で御座います御案内の通り其當時は亂世の事で昨日は郊野  
に戦ひ今日は城攻めと云ふやうな實に戦争烈しくして夜間も碌々休む事も  
出来ぬ有様で團右衛門が戦場を往來する時には自ら好んで紺糸の纏を着  
用を同じく毛糸の三枚纏を纏ひ頭には兜を戴き襟には白絹に富士山を書  
き抜いたる差物を挟み千軍萬馬の間を驅散して歩くうれ故敵が團右衛門  
の姿を見てソラ加藤の家來の富士山が見えるを塙が乗り込んで来た團右衛  
門が乗り込んで来たと言つて皆恐れを爲す位モウ仕舞には遠くから富士山  
の指物を見たばかりで夥多の敵も戦はせして走ると云ふ位に相成つた此有  
様を見て加藤孫六嘉明も深く胸中に感心なし成程彼は大人に違はる戦に出  
て何時も功を爲さんと云ふことはないア、感心なものぢや天晴勇士なりと  
一人で賞めて居るで嘉明の家來の中にも村河甚兵衛、服部解由、左衛門河村權

塙 團 右 衛 門

七环云ふ英雄が御座います、其人々もどうか今度の戦の時には團右衛門を出し抜いで一番鎧を入れやうとか、團右衛門に立勝つたる働きを仕様どか互に競つて居りませ、前に主人嘉明に對つては大言を吐きましたから定めし團右衛門は戰場に出て著しき働きをしたならば、傍若無人の如き振舞をするであらうと斯う思召せ、かも知れませぬが決して他の家臣に對つて驕る事はありまは、威心なもので御座います、それ故嘉明は猶々團右衛門を尊重して右の腕ども左の腕ども頼みに思つて厚く疑待が團右衛門は増長することはい

第十一席

或時嘉明は團右衛門に向へ、嘉明、團右衛門……團、ハイ、嘉明、其方も永年當家に居るが未だ其方の碌を定めない無碌で今日の勤めは辱く存せ、今更めて其方に三千石遣はせ、から左様心得ヨ、團右衛門は暫く腕を拂いて考へて居りました、が團、恐れながら申上げませ、拙者が當家へ御奉公致した時には御身は一萬石の御身代然る所追々御高も増して今日は七萬石までにお成り遊

塙 團 右 衛 門

ばした、がまだ此團右衛門の丁簡では聊か不足に存じます、せめては御身が今三萬石増して十萬石の諸侯にお成り遊ばした、から其時に更めて知行を頂戴致すことに致したい、明日が日一戦して直に三萬石御高をお増し下さるか、但しは此先五年も六年も掛りまするか、それ場合は依ての事、兎に角拙者は今まで無碌で居りまして、差伺ないから此儘で宜敷い、何れ大功を願はして、から更めて頂戴致した、う御座る、之を聞いて嘉明心の中に當世には珍しい男だ、威心を者ぢやと思召して、嘉明、然らば其方か隨意に任ずると云ふ事に成つて、團右衛門は其儘碌を頂か、せ無碌で客分同様に致して仕へて居りました、如何に團右衛門豪傑ありと雖、ども如何に主人思ひなりと雖、ども一ト度び戦つて二萬石も三萬石も加増をして貰ふと云ふ事は、容断に出来るものでは、ない、團を廣くすると云ふ、ふとは容易に出来るものでは、御座いませ、ん、然る所こゝに團右衛門の思ひ通り加藤嘉明が前代未聞の働らきを爲したと云ふのは、外では御座いませ、ん、文祿元年二月十四日肥前名古屋に於て秀吉公

塙 團 右 衛 門

の命令に依つて朝鮮へ出張することに相成つた。うのどきの先鋒の大將は  
藤主計頭清正、副將小西行長、總勢十七萬の兵を率ひて出征す。海陸兩道より  
攻めなければならぬので、此時加藤左馬助嘉明は海軍に目を注いで居つた。さ  
ればにや、船手の大將には島津薩摩守、參謀は九鬼大隅守、之に従ふ者は藤堂和  
泉守、脇坂中務大輔、加藤左馬助嘉明、長曾我部宮内大輔を始めとして、總勢二萬  
餘人、唯今のやうに、潭山の兵を送ると云ふ譯には、参りません。此一隊は、韓山  
唐島の方へ、進みました。勿論、此韓山と唐島との間は、日本の里程で一里ばか  
り隔つて居り、まゝ其間に間切と申して、四十二の島があり、ます。此の方面には  
我海軍が充分の手當を致して居る。然るに敵の兵數如何にと申せば、大明船手  
の總大將、鄭伯並に朝鮮船手の總大將、元均の率ひたる同勢、合して十二萬と  
聞えたり。此十二萬人の同勢が、船陣を作り、一擧我艦隊を打破らんと待構へた  
其勢ひは、實に可驚きもので、御座います。我兵は敵の兵に較べては、實に六分の  
一しか無い。此時の戦は、本講談の本旨で、御座いません。から朝鮮征伐記に讀り

塙 團 右 衛 門

まゝ我兵の朝鮮に渡海したのは、文祿の元年で、御座います。して文祿五年十一月  
の十七日に、改元して慶長元年と相成つた。渡海してより、恰度五年目で、御座い  
ま。此文祿五年の十一月に、一旦和談に相成つて、兵を日本に返したが、此和談  
破れて再び渡海致す。ことに相成り、此時加藤清正は蔚山に於て、兵糧攻めに遇  
つて、非常に艱難辛苦を致した。是れが、後止の戦ひで、御座います。前後七年の戦  
とは、申す條、眞實事を父へて、血を流した。のは、漸々三年位のもので、御座います。  
其間には、唯だ談判、懸杯を致して居つた。次第、朝鮮征伐の事は、御案内の通り、加  
藤主計頭清正は、釜山の港に於て、小西行長の爲めに、先陣を占められ、自分  
は、モガイの港より進んで、朝鮮八道を蹂躙致し、兀良哈の境まで、兵を進め、猶ほ朝  
鮮國王、李元大王の王子、イナハヤコエ、ナノ兩王子を、擄とあし、八ヶ道の節度  
使、白寧の首を、計取り、猶ほ釜山界まで、兵を進め、た小西行長と云ふ人は、隨分  
病未練の人ではあるが、是も朝鮮に於ては、可ありの働きをして居る。又、小早川  
隆景、杯は、南大門、碧蹄關に、一手限りの合戦をして、明兵十二萬を、翳の如くに、碎



く杯と云ふ目覺しき働きを爲した凡て陸兵の働きは大層なものでありま  
然るに一ト度び和談に成る前まで云ふものは海軍の方に於ては一度も戰  
をしさい之に依つて肥前名古屋に和滯陣に相成つて居りまする關白秀吉公  
より改めて船手の總大將島津家に對して御沙汰に成つた其主意は陸兵五年  
の間に著しき働きを爲した軍報屢々到るもろれに引き換へて海兵は未だ一  
ト度びも戰を交へないは如何なる譯であるか或は海中に空しく居眠でもし  
て居るのではないかと云ふやうな御主意を嚴重に御認めに相成つてお遣は  
しに相成つた、

第十一席

うこで島津薩摩守を初めとして九鬼大隅守、毛利豊前守、藤堂和泉守、脇坂中務  
大輔、加藤左馬助の面々大將分三十六人と云ふものが本陣に集つて軍議評定  
を致し諸將何れも策を講じて一ト度敵船と戦つて彼の船を打ち砕くか若し  
打ち砕くことが出来ぬとも逐ひ散らか何んとか戰を交へて捷報を秀吉公殿

下に報しなければならぬと一同勇氣を鼓舞して居る加藤左馬助嘉明も其の  
評定の席に出やうとぞる時陣中に居りました團右衛門人を拂つて暫時の間  
嘉明と密談を致して居りましたが懸て左馬助嘉明は團右衛門の話を聞いて  
大いに喜び嘉明團右衛門克う氣が附いて呉れた拙者も左様致そが宜しいと  
心待て居る必ず其時にころは宜しく……團委細承知仕りました何か其時  
にだか何か委細承知だが是は兩人の密談で御座いますから側の者には一向  
分りませんが何やらん左馬助と團右衛門とに戰の手筈でも約束致したも  
と見へる斯くて左馬助は評定の席へと參つて其席に連ちります其時の參  
謀長ども申すべきは九鬼大隅守でございます即ち九州名古屋表に出張致  
して居ります秀吉公殿下より致して御遣しに相成つた書面を此處に披露  
致し且つ申しけるやう拙者共が今日まで一ト度も戈を交えんに依つて殿下  
のお叱を蒙るやうな場合に相成りしは尤もな事である詰り拙者共が今日  
まで戰争を致さんと云ふのは何を申すにも向ふは十二萬餘の同勢にて船陣

塙 團 右 衛 門

を張つて嚴重に固めを致して居る其處に纔に二萬や三萬の同勢で此方から  
戦を挑むは不利であるから今まで對陣致して居たのであるが殿下の御命と  
あるからは是非も無い此上は死を決して戦ふより外ないが各々方何ぞ寡を  
以て衆を挫く御名策ありやあらは承知致したいソレに基いて評議を致さう  
からと披露に及ばれましたが忝斯うなるも誰一人斯う致したら宜らうと云  
ふものも無い中に脇坂安治一人進み出でまして殿下の仰如何にも御尤我々  
共如何に敵の軍勢多しと雖も出入五年の間安閑と此處に船を浮めて只敵  
の船を守つて居るばかりでは出陣致した甲斐がない殿下の御怒は如何にも御  
尤事である只今軍師の御言葉の中にも味方より兵を出すは不利なりと仰  
は一理あれど去ればとて只此儘にして居つては此先き五年経つても十年経  
つても何の詮も無いことである拙者の考では朝鮮大明の將は十二萬の大兵  
を卒ゐて充分に備へて居るとは申すものゝ元船より離るゝよと夥しく殆ん  
ど一里餘り東方に寄つた沖に見張番船が數十艘出て居る 九鬼如何にも

塙 團 右 衛 門

脇坂、彼の見張番船に對して此方から戦を排んでは如何でござらう 九鬼成  
程な……然か致れば各々方へ御評議に及ぶが只今脇坂の申さるゝ通り此  
方から戦を挑んだ曉に先方で應戦すれば格別若し逃げたら追蒐けて參つて  
黒船をば五艘かり十艘かり分捕つて右の次第を書面に認めて名古屋に送り  
我々共に於ては大軍をも恐れ死を決して戦を挑むと雖も敵の船は日本の  
旗印を見て戦はずして逃失せたり然るに味方の船は之を追跡して黒船を何  
艘分捕りましてござると申上ぐれば殿下一旦の御怒か宥むであらう且つは  
調練懸引にも相成ることであるに取敢えぬ番船に向つて明早朝戦争を仕掛  
くるも一策然る上にて徐ろに敵船を悉く分捕乃至擊流むる謀を我が上策  
と考ふるが各々方如何でござる、藤堂和泉守之を聞いて至極御尤もなる仰戦  
の目的は敵の大將を擒にせむにありと雖も凡う戦ひには橋架りと云ふもの  
がなくはからん就ては軍師と仰せらるゝ通り取敢えぬ番船斥候の船に向  
つて戦ひを排む義至極全意にござる若し敵の大將番船を救はんとして出で

來れば其時ころは眞の戦ひ見ん事敵將を擒にして呉れん早速此儀御實行  
つて然るべう存せる居並ぶ面々 甲「至極宜しい 乙「某も全意でござる 丙「  
拙者もソコだと大抵皆全意を表する其中に纏一人柱に凭れて大鼻息で眠て  
居るものがある見と濃染の帷子を着て紺地錦の丸括帯を締め其側に貞宗の  
陣刀を置て評定の席をも仰らず寝て居は加藤左馬助嘉明でございます 同  
登「加藤氏く〜と揉起す加藤はハツと眼を開くと側に居るもの只今勝坂氏の  
献策は御聞かされたか 加藤「イヤ聞ぬ 側の者然は御聞せ申さう明朝  
番船斥候の船に向て戦を挑むと云ふ議に略々一決致したであるが異存はこ  
ざらんか 斯と聞て嘉明は欠伸をしながら宜い 側の者「欠伸を致とは無禮で  
ござらう宜いか 異存はござらんか 嘉明「至極ソレは面白からう 側の者「お  
手前さへ承知すればソレで宜しい然らば軍師閣下…… 嘉明「イヤ待て暫時  
併し明朝出船の際には斯く申そ左馬助は拙者の持船は出さんから此段九鬼  
殿までお届けに及ぶ」

第十三席

側の者「ソレぢや何も宜いの面白いのと云ふ譯ぢやない、貴公は何か早朝船を  
出せと云ふのが不服かえ 嘉明「左様不服であるが最前から各々方の話を聞  
いて居れば何事ぞ殿下への申譯の爲に未練にも番船斥候の船に戦を挑めて  
五艘より十艘なり分捕つてソレを土産に日本へ歸るとは呆れ果てた御評議  
只今殿下のお答を逃れん爲に戦争の眞似事とはソレで武家の面目が立つと  
思召しおさるか聞くと面白うなく睡氣が催はして來たに依つて寢たに相違  
ないが痴呆千萬を策ソレども殿下よりの御書簡に番船斥候の船を分捕つて  
日本へ引擧げよと云ふ文言がござるか、同じ事から敵の大將を引擧げり  
の首を取つた上五艘より十艘なりの黒船を分捕つて之を土産に日本へ引擧  
げると云ふから聞えて居が去とは未練々々ソレども各々方番船斥候の船に敵  
の大將が居ると思召さるか、爾う云ふ船を見當に戦をしやうと云ふのは必  
竟各々方は腰振武士であるからであらう 臆病風に誘はれたからの事であら

う此嘉明は隠病風に吹荒まる、其仲間入は御免蒙むるでござらうと傍に扣  
ねて居りました臨坂安治ソレへ進み出て 臨坂左馬助殿隠病風は何事  
だ右の一條に斯く申す安治が申した兎角戦争には手掛りがなければならん  
に依つて取敢は番船に向つて戦ひを挑む次第である、若し其時に元船より  
應戦致すに於ては夫れこそ眞實の戦になる、然るに腰拔とは近頃無禮でござ  
らう 加藤無禮は承知だ氣の毒だが左馬助は左様な兒戯に類する戦ひに同  
勢を出したり船に乗込むやうな戦はござらん、懼り乍ら拙者は戦ひに臨んで  
敵將の首を出ふことは心得て居るが番船斥候の船齊同様の物を取つて何と  
する、甚麽せ腰拔連中には其位の事であければ出来ぬでござらうと聞いて臨  
坂始め居並ぶ面々赫と激怒し鯉口切つて一刀の下に切刻まんとする此の時  
九鬼軍師アイヤ各々方お扣えめされ夷狄と戦を構ふる今日此場に於て味方  
同志相争ふとは不覺な心得、腹藏なく意見を吐露して宜きに決定するのが評  
定席上の過言に鯉口切るとは何事である併し左馬助近頃言葉が過ぐるやう

に心得る臨坂座に反つて座に反つて……各々方明日改めて巳刻時に評定致  
す其砌り銘々の意見を述べらる、やう今日は是れにて軍議を撤する、一  
聲據ろかいに依つて一同怒りを忍んで座に復り、一回委細承知致したりと  
其の日は夫れにて退散致しましたが、臨坂安治は評定の席に於て愧かしめ  
られたるを無念に思ひ、両眼に血を注いだやうに相成り、恥と加藤左馬助を睨  
んで居る、けれども加藤平氣だ、臨坂ばかりではない、皆な加藤を睨み付けて怒  
つて居る、容子左馬之助固々萬事心得て居て言つた事であるから、幾ら睨まれ  
やうか意に介せず致して阿々笑つて居る  
扱陣中に立歸りましたる臨坂安治に於ては早速家令の眞名部倉之助を招ぎ  
今日評定の席に於て左馬助の暴言愈々置かれん、明日改めて評定致しと云ふ  
ことであるが、此上の評議は無益なり、早速出陣の用意に及べ、敵の大將鶴野伯  
元均の乗込み居る元船に踏込んで、彼れ首を取り、左馬助に示さば、彼れ如何  
に暴慢無禮なりと、誰をもヨモヤ後來此臨坂に向つて高言は吐かれまい否か

悪言致したる彼れ加藤左馬助の舌の根を切取つて呉れん、イザ出戦の用意致せ 倉委細長りましてござるどあつて茲で臨坂の率いたる十二艘の船と云ふものは悉く夜の中に旗印帆印等を隠して商船に仕立て、拔驅を致します心底でマダ夜明けの放れん間い裡にサツ／＼(水の音)と船を漕出して既に漢山島を離れました然る處豈思ひきや前の方に當つて七八艘の船が見える是も同じく旗印なくサツ／＼と進み行く船があるから 臨坂ハ、アして見ると那摩事を言つて左馬助が拔驅をしたに相違ないと思つて船を早めて近寄つて見た所が藤堂和泉守高虎でございまを 藤堂ソレに來たのは臨坂氏ではござらんか 臨坂イヤ藤堂氏か 藤堂大方貴公も來るだらうとは心得たが果して參られたな、マダ左馬助は見えんやうだが彼奴が來る氣遣いはない昨日の暴言甚だ心外に存せる併し其塙に於て争はんより夜の明けぬ中に拔驅して我々共十分の働を致して彼が高言の舌の根を切つて呉れやうと心得て出船致した 臨坂拙者も同様でござる 藤堂然らば共々敵船に

向つて一ト働き致すこと、しやうと臨坂安治と藤堂高虎と二手に別れて行かうとせると其前に十艘許り行く船がある是は又早いわい何者か知らんと思つて容子を見ると軍師九鬼大隅守の船其他來島出雲守毛利備備守を始めとして昨日評定の席にて左馬助の爲に罵られたる大名孰れも無念に思つたものと見えて各々一騎拔驅の功名を願さんどて夜の明けぬ中に船を出したものでございます其惣勢五千人然るに左馬助並に塙團右衛門は逸早く敵船の船を幸ひて漢山唐島に乘込み敵船鶴伯を討つて前代末聞の働きを願し再び評定の席に於て大氣焰を吐くの一條、

第十四席

エ、軍中評定の時に加藤左馬助嘉明が暴言を吐いたるのを憤りまして夜明に至つて總体の船銘々は忍びやかに乗り出した積りだが皆意を同じうしたものと見へて何れも漢山島の沖へ出ました然る所大明朝鮮の船陣を張つて居りましたる者日本の船を見るより早く沖ある方へ走りまゐるなれども番

塙團右衛門

船斥候船是は小船で御座いまするが此番船に對して戦争を仕掛けして  
く間に十二艘の黒船を分捕ります此船は聊か御座いますから大略し  
て申上げまそ夜が明けて討陣を作り引き上げます此時鶴野元均等の船は  
遙か沖の方へ三里も離れた十二艘の分捕船は鎖を繋ぎ仕舞ひ捕虜の  
者三十六人討ち取ましたる首は四十餘と云ふ者總大將の島津公を始め謀  
九鬼大隅守に於ても悉く悦び陣中に於て銘々功名の訴をする中に加藤左馬  
助嘉明が見へない脇坂安治皆の様子を見て居たが脇坂如何致した左馬助  
は出て来ないが我々共が夜襲を仕掛けたに就いてそれを見て彼は恐縮した  
と見へて船を出さないに相違ないけれども加藤左馬助が船を出さんでも加  
藤の家來に塙團右衛門と云ふ奇抜な奴があるが彼れも共に驚いて居ると見  
へる呼參れくと云ふので直ぐに是から使を以て加藤の陣中へ呼びに遣は  
しまそ左馬助直ぐに參る其の扮装は濛染の帷子に九細帯を締めて貞宗の陣  
刀を背負ひ差添を前にたばさみ扇を以つて風を入れながら軍中會議所と申

塙團右衛門

そやうな評定の席へ出まして来て見ると何れもまだ服を脱らす具足を着て  
居るのもあれば下兜を被つて居るのも鎧下で居るものもある銘々勇しき有様  
嘉明御一同お早う傍に扣て居た脇坂安治は昨日言はれた事が充分胸にある  
から左馬助の來るのを待ち受けて居た様子で脇坂左馬助々々々 嘉明何  
んだ脇坂早速ながら申入れるが昨日評定の席に於て番船斥候の船へ戦争  
を仕掛けた所が大人氣ない戦争をそるなら鶴野伯なり元均なりの本船へ乗  
り込むと云つて我々が番船斥候の船へ戦争を仕掛けると言つた其時に貴公  
が臆病だとか腰抜だとか申した番船斥候船を捕虜つては殿下の命令に背  
くと我々大勢居る所で悉く悪口をしたが忘れはしまいな 嘉明忘れはせぬ  
腰抜けに相違ないから腰抜と言つたが如何致した 脇坂サ腰抜と言はれた  
其方はどんど出船の用意もしない我々共は十二艘の船を分捕り大勢の者を  
生捕り首とあしたるものは山の如くに積んである位人の事を識り悪口をそ  
る貴公は今まで寝て居てそれでも我々共が腰抜けか 嘉明ヤア是は驚いた

塙 團 右 衛 門

か成程敵船は遙か沖の方へ離れて是は是とも誤つた英雄々々各々は豪傑だ  
是は是とも感心だ 脇坂馬鹿にする各々は感心だとは何んだ降参をした  
ら降参をしたと言はつしやい昨日は暴言を吐いて相済まぬと我々共の前へ  
手を突いて誤つたら勘辨して遣はさう 嘉明誤る事もないが併し拙者は番  
船斥候の船へは手を出さぬれ故昨日申した各々が腹を立つて此騒ぎを  
して多くの船を分捕つて來るとは天下の英雄だ豪いナ何れ此捕虜乃至其許  
等が孫へ來つた首級の中に鶴郎伯より元均より太將の首があるのか……大  
將の首が見へない第一目に着くやうな軍船は十二艘の中にないやうだ渡し  
船同様の船ばかりだが是れでも各々は英雄か 脇坂まだ悪口をそる我々共  
の働きを尊公は悪様に申すのか 嘉明決して悪様に申す譯では無いが一朝  
兵を出し先方で軍船を動かさぬに於ては拙者なれば本船に職を仕掛ける心得  
で居つたが逃げるものは仕方がない併し斯う戦争の口が開いて見れば先方  
から再び寄せて來るかも知れぬ其時こそ日本魂を出して我々共の技倆を見

塙 團 右 衛 門

せる所だと左馬助は脇坂安治と頻りに議論を闘はして居る所へ九鬼大隅守  
進み出で 九鬼各々暫らくシテ左馬助殿貴公へ申入れる今日呼び出し  
たるは餘の儀でない實は今晚戦争をした次第を書面に認めて早速名古屋の  
御陣にお在陣遊ばす殿下の許へ送る積り就ては書面は出來て居る念の爲め  
申入れて置くが尊公は除名してあるからどうか悪から思ひ給へ 嘉明日  
本へ通知致そ其書面の中へ左馬助一名除名してあるそれは可かん拙者一人  
除名してあれば歸國をした時殿下より何様の御禮責を蒙るか知れぬ第一  
番に加藤左馬助嘉明を書いて貰ひたい 九鬼鐵談言ふては可かん働きのし  
たものと寝て居た者と一緒に出來ぬ 嘉明左様言はずに第一番加藤左馬  
助嘉明を書いて貰ひたい 九鬼それは可かんよ 嘉明然らば除名文は書  
辦して貰ひたい拙者が悪るかつたから詫る詫るから日本へ知らせる書面の  
中へ加藤左馬助の名を書き加へて貰ひたい 九鬼拙者は書いて進せたいが  
それでは御一説が不満足であらうからして見ると働きのした方へ貴公の名

を書き譯には可かぬ 嘉明さうでもあらうが頼むから書いて呉れど左馬助  
が九鬼大隅守と押問答をして居るのを見て向ふに居た藤堂和泉守脇坂中務  
大輔來島出雲守毛利豊前守杯は、どうだい左馬助の様は…… 今日と昨日とは  
大層な違ひだ、詫まるから書いて呉れどは意氣地の無い奴だ

第十五席

出雲守は其處へ出て 出雲左馬助がさう云ふから書いて進せたら宜からう  
嘉明「ウム功名の中へ……」 出雲「功名の中へは可かん証人に書いたら宜から  
う 九鬼是は至極宜しい左馬助証人で宜いか 嘉明「何んだい証人と云ふの  
は……」 九鬼「銘々が全く朝掛けの一戦をして敵を遙かの沖へ追拂つて仕舞  
つた其砌り十二艘の船を分捕つた其の証人だ 嘉明「それは可けんい働く方  
は宜いが証人は可かん 九鬼「うれで悪ければ除名だ 嘉明「仕方がないか  
ら証人でまけて置かう銘々クス」 笑つて居る、左馬助トツツ「証人とまつ  
た除名より餘程悪るいゝので証人の所へ左馬助の姓名を記して 九鬼「サ、

左馬助「印影をお出しなさい 嘉明「印影を押さなければ不都合だ」ど加藤左馬  
助首へ懸けて居た印影紐を解いて渡すかと思ふと渡さない參謀の九鬼が書  
面は出来て居る少しも早く送らなければならぬ印影を出せと云ふから左馬  
助「印影を出そには出したが併し印影は他人に渡すことは出来ぬ、自分で押さ  
なければならぬ、嘉明「此方へ出し給へど書面を前へ置いて左馬助印を出し  
て捺すかと思ふと其さうも出し方の遅い事印影に巻いてある紐を解き少  
しづゝ解き始したのを見て 一回、左馬助何をグス」して居る、サツサと印影  
を押ささいとヂリ」して居る 嘉明「さうは可かぬ各々は功名をしたの  
であるからさぞ急ぐであらうが拙者は恥を大日本へ晒すのであるからさう  
勇んで印影を捺す譯には可かんと巻いてある紐を解いて居るが長いこと勿  
論實印と云ふものは大きき方が宜いさうで御座います昔し御老中若年寄の  
印形は四寸五分に極つて居りまして八尺の紐を纏めてありましたもの何故  
ろんかに長い紐を附けて置くかど申せば死刑を月番の御老中へ伺ふ事にな



塙 團 右 衛 門

つて居つて何と云ふ者を何日死刑に處せ其罪科左の通りと云ふ所へ月番の御老中の印影が居はる八尺もある印影の紐を静かに解いて居る解いて居る内に八つの太鼓が鳴渡ると今日は刻限が過ぎたからと印影の紐を結んで其日は調印をしないさうすれば一日丈け罪人の首が助かる其内に目出度い事があつて遠島島流しと云ふ事でもあると人一人助るから能く悠然紐を解いて居る併し紐を解かないで臨から出るやうに成つて居るから急な時には何時でも出せるが憂の事は延ばさず悦びを延ばすのが天下の法で御座います勿論首と釣代同様の印影を懐中へ入れたる袂へ入れて歩くなんて云ふのは大きに違つて居る借左馬助の實印は彼は五寸もありましてそれへ紐がドツサリ巻き附いて居る左馬助の印影の紐は二丈八尺もある 嘉明「印影の紐が長いから、マア二日も掛るゝ 九鬼「氣の長い事を言はせにサツサとお説きなさい 嘉明「貴公達は功名をしたから宜いが拙者は耻を晒すのであるからさうは急げぬア、暑い〜 九鬼「汗杯を拭いて居ないで…… 嘉明「暑いか

塙 團 右 衛 門

ら汗を拭いて居るのに然んかに急ぎ給ふおど、加藤左馬助は猶も悠々と印影の紐を解いて居る折しも漢山唐島と申す島と島との間より一般の船が沖の方へ乗り出したる様子銘々並び居る真ッ先なる方へ白地に富士山を書いたる轡を打ち立てたる事にて舷先に立つたる大將の扮装を見てあれば紐糸の錠同じく糸三枚綴白絹の指物を爲し白檀磨きの陣刀を帯取り附けて背負ひ采配を振り船子に指揮を傳へて居る是れ余人で無い、加藤左馬助自慢の家來塙團右衛門此船に乗り込んだる二百人ばかりの者に指揮して鶴野伯の本船目掛けて乗り出さず様子早くも認めたる九鬼大隅守、來島出雲守、九鬼、彼れは何んだイヤ、彼處に乗り出したるはウム加藤の家來…… 加藤氏貴公の家來だ富士山の指物を指して居るのは塙團右衛門だらう 嘉明「サウ〜塙團右衛門〜 九鬼「塙團右衛門々々々々もかいものだ軍令を破つて拔驅を致そとは怪しからぬ早々止めなさい斯の通り一同引き上げて居る中に一般の船を出して鶴野伯の本船に近づくは軍令を破つて居る貴公止めなさい 嘉

明止ませう大將の指揮を聞かいで團右衛門が船を出のは宜くかい宜くないが併し考へて見れば家來と云ふ者は可愛イ者だ各々は働きをするに此左馬助は此通り耻辱を取つて居る之を調印して送れば殿下よりの御體責があるに相違ないを匠として傍觀して居れぬと思ふ所から鶴野伯の船なり均の船を討つて功名をかし拙者の耻辱を雪ふと云ふ團右衛門の心底感心ものぢや 九鬼其様な事を此處で言つて居る處でかい早くお止めかさい早く調印をして…… 嘉明「調印もしたり家來を止めたりする事は出来ない九鬼調印の方を先きに……まだ解けぬのかい 嘉明「さうも結び玉が出来たので誠に困つた糸が揃んで仕舞つた 九鬼何をグズグズして居るんだ」嘉明「さう急ぎ給ふ今出たばかりでまだ何處へ往けるものか」とまだ「印影の紐を解いて居りまする、

第十六席

第二番船と見てあれば白地に山道の旗一流白絹に鐘旭を書いたる艦を立て

たることにて旗下に現はれたる大將の扮装を見れば白糸割小座根の鐘同じく糸三枚鏡兜は被らぎ綾を疊んで鉢巻どかし小手当鷹當を着け二間穗長の鎧を突き乗込んで居る兵士に指揮を傳へ船を指揮して居るは是又左馬助の家來河村權七なり見るより一同の者 一同ソレ一番船が出るぞ云ふ内に又も岩と岩との間よりチラ／＼見へたるは紺を以てスアマを染め出したる旗一流を翻へし金のナイ竹を先きに二枚短冊を附けるは加藤の家來東勘右衛門其日の扮装は小櫻緋の鐘同じく糸三枚鏡獅子頭の兜を戴き小手当鷹當嚴重にして大薙刀を毘沙門突きに突いて沖へ乗り出を様子鏡々之を見て驚いた一番塙團右衛門二番河村權七三番東勘右衛門と見て居る處へ又もや一艘の船現はれたり白絹に紺を以て八幡大菩薩と書いたる幟を立てたることにて旗下に立ち上がったる大將の扮装は洗皮の鐘を戴き同じく糸三枚鏡の兜を戴き是も大身の鎧を毘沙門突きに突いて兵士に指揮を傳へ四番船を急がしたるは是なん加藤左馬助自慢の家來家來次郎兵衛此船に乗り込んだ

塙 團 右 衛 門

る人数二百人ばかり以上四艘元均、鶴野伯の本船を指して参る様子、大將島津薩摩守之を御覽に相成つて、島津左馬助……其方の家來一同斯の通り軍令を背くとは怪しからんこと、調印を後にして早々止めおさい、嘉明「どうも怪しからぬ拙者の家來一艘なら三艘四艘船を出せと云ふのは怪しからぬ譯唯今止めまをせと出し掛けて居た印影の紐を前の通り巻いて之を懐中なし其儘左馬助は駆け出した海岸に出でたる事にて小高き岩の上に突立上り扇を開いて左馬助大音を上げたる儘に、嘉明「オーイ」塙團右衛門、河村權七、東勘右衛門、秦次郎兵衛能く承はれ軍令を背き總大將の指揮參謀の許を受けず出船なしたるは不届なり歸せ」と呼はつて居るかと思へば何時か扇を横にさし急に進め」と指揮を致すこと、故忽ち矢を射る如くに船を押し切りくさながら百足の走るが如く本船指して進み往く有様に人々は驚く間もあらせせ横合より一艘の船來たかと思へば左馬助早くも其船へヒラリと打ち乗つたり銘々様子を見てあれば白絹一丈二尺に春日大明神と書いたるは

塙 團 右 衛 門

加藤左馬助自筆の旗自分に於ては扇を水中に投げ込んだるみどにて貞宗の陣太刀を引き抜いて轟く大音を上げ、嘉明「ヤア」腰抜共能く承まれ番船斥候の船を分捕して高名顔するとは大人氣なし真誠の武士加藤嘉明は唯今鶴野伯元均の首級を揚げ我が功名を汝等に見せて呉れん眼を醒して見物せよ……進め」とあつて水夫の方へ指揮を傳へたるみどにて百足の足の如くに船を押ししたる事にて忽ちの間に沖ある方へ乗り出した自分は陣刀を乗配の代りに打ち振りまして指揮をさしサツサツと水の音見る間に忽ち鶴野伯の先陣間近く乗り込む様子一同是はと顔を見合せて居る本陣に於て御覽に成つて居りました島津薩摩守は加藤左馬助嘉明を見殺しにしては殿下に對して申譯けが立たぬ、島津ソレ船を出して加藤を助けよとの指揮に一同支度をなす實に大將として其任を與かる所で御座いませ、茲に依つて忽ちの間に乗り出す面々中にも脇坂に於ては借は一ぱい食つたるかと思ひ又憤はりを發し打ち乗りました船金輪輪違ひの旗印ハレン着いたる船印を立て

塙 團 右 衛 門

たる事にて臨坂が引續いた其跡より九鬼大隅守、來島出雲守、毛利豊前、藤堂和泉守と船手の大將此處を出船なし船を鵜野伯の船陣目掛けて進みました然る所臨坂安治に於ては重なる意恨骨髓に徹し我今日鵜野伯か若くば元均を討たせんば何面目あつて加藤左馬助に合そ顔やあるべきかど船子へ指揮を傳へて急げとあつて臨坂の船が一番先きへ乗り出しました此時眞鍋倉之助に於ては白糸威の鎧同じく糸三枚鑲鎧は水中へ投げたるものと見へて白髪の頭に綾を以て鉢巻を致し陣太刀を引き抜いたる事にして船子の者に指揮を傳へ進んで参るさう斯うする内に鵜野伯の船より射掛けまする矢に於ては雨霰の如く鼓を打ち鐘太鼓を打ちたることにして彌々大船を此處へ動かしたる有様敵に於ては十萬餘の大軍で御座いまして船の數に於ても夥しき數なれば加藤左馬助嘉明遂に敵船の爲めに取巻れたり茲に於て臨坂安治、加藤を助けて呉れんと進み來りしが是又敵の船に取巻かれ進退に谷まる様子之を見た九鬼大隅守、毛利豊前守、加藤、臨坂を助けんと乗込み來つた

塙 團 右 衛 門

るが是又敵船の爲めに包まれ恰て日本の船は朝鮮大明の海軍の爲めに悉く包まれて仕舞ひまして彌々苦戦と見へた然る所一旦乗込みました加藤左馬助一手の軍船左馬助を始めとし塙團右衛門、河村權七、東勘右衛門、秦次郎兵衛の乗組みました五艘の船一度は何れへ参りましたか戦ひが始まると見へなくなつて仕舞つた如何して居るかと思はれませうが固より船軍には馴れて居る加藤左馬助殊に團右衛門と云ふ名士が従つて居りますから一旦は態ど戦をさして置いて沖へ出たかと思ふと大戻りに戻つて朝鮮船手の總大將元均の本船目掛けて五艘の船矢庭に塙團右衛門橋直之元均の船へ乗り込んで總大將の首を揚げ、加藤左馬助嘉明働きの一條に相成ります、

第十七席

諸塙團右衛門直之は諸國を經風致しまして天下の志士有志と交を結び大坂城に於て眞田後藤等と肝胆相照して時勢を談じ木村と死を誓つて滿心の熱血を捧げ豊太閤の爲めに徳川家康と云ふ天下の英雄に及向ふと云ふ傑物也

塙團右衛門

ち加藤左馬助嘉明の膂甲斐なきを憤つて浪々の身と相成りました豪傑の御  
話續いて言上致しませぬ既に前回はなきましては朝鮮船手の戦争迄を申上げ  
たやうに心得て居りますすが併し此戦ひの一條は朝鮮軍記に精しい事で御座  
ますから凡て略致しませぬ申させぬ秀吉公に於きましては一度朝鮮に對つ  
て戦を起して後勇氣大いに衰へ何日までか戦争をして居るよりは此際和睦  
を爲して天下を静謐に成さんと云ふ念を起しましたのは餘の儀では御座  
ませぬ最初秀吉公が朝鮮征伐を企てられたのは捨丸和子の死したる文  
祿の初めで御座ました然る所此度浪井の淀君の腹に秀頼公が御姫姫遊ば  
れて誕生おされたそれ故に以前と變つて心も打ち解けたものと見へて沈  
敬の偽を信じて一ト度和睦を致しましたけれども忽ち此和睦は石田小西等  
の奸計に出でたる事を知り就中小西の偽を憤つて明王より送り越したる衣  
冠を抛ち密封を引き裂いて斯くては我國辱を凌ぐに由かして大いに怒つて  
再び戦争に及びましたのは是ぞ太閤の太閤たる所以にして其の勇氣實に賞

塙團右衛門

そべきの限で御座います然れども此稀世の英雄に天年を假させ秀吉公が再  
び軍を起したる間も無く慶長の二年より病起つて慶長三年八月十七日彌々  
此世を捨つるに當り一同の者を枕邊に招び寄せ徳川家康前田利家等の御本  
行に對つて 秀吉進も叶はぬ此の病吾か亡ひ後は其方共然るべく取計らふ  
て呉れ徳川前田の兩人畏つて候萬一御身に萬々一の事の候はゞ後の事は如  
何取計つて然るべく候哉御伺奉ります此時秀吉公さればなり嫡子秀頼十五  
歳に相成らば秀頼に此の天下をば相渡し両公等は其後見と成つて萬事心附  
呉れるやう併し秀頼十五歳に至らざる其の間は利家家康の兩人に於て然  
べく治め呉れるやう頼むぞヨと流石の豪傑も子を思ふの一念厚く此の一言  
を殘して利家家康に頼み且つ仰せらるやう 秀吉朝鮮に出陣なしたる我  
か猛勇豪傑の人々此際總令一人にても討殺せば傷をる如き事あつては本  
意ならぬ希くは一刻も早く戦争を止め呉れヨと流石武勇の秀吉も吾が亡き  
後は戦捷覺束おしどや思ひけん深く征韓の事を思ひ此二事を遺言おして後

門 衛 右 團 塙

ち彌々臨終の時孝藏主あるものに一書を與へました

露と起き露と消えぬる我身か

浪華の事は夢の世の中

是ぞ秀吉公の辭世とこそ思はれずす秀吉公御他界の後ち家康利家の兩人早速石田三成を肥前名護屋に遣はし朝鮮在陣の人々を我邦に引き戻そ下知を傳へました依つて加藤清正島津義弘加藤嘉明其他の諸將は兵を収めて日本に戻らんと海陸共に其の準備に掛りました此時小西行長は敵兵に迫はれ必死の戦鬪最中平壤の戦鬪に破れたりとは云ひながら小西行長も又一塵の強の者此の引上げの際に鄭司長李業進と相對して花々敷く決戦を致し勝敗何れに歸するが分らんと云ふ有様島津義弘は小西行長の軍が危急に臨むを見て大軍を卒いて之を救い海陸全軍悉く十一月に朝鮮より肥前名護屋表に引き返しまして御座いませ敷若し強かりしならんには是を追撃すべき筈で御座いませが明王も之を追撃して塵殺にせると云ふ程の力も無くそれが爲め

門 衛 右 團 塙

我が軍兵は無事に朝鮮より本國に引き上る事が出来ました家康公は戦争を好まないので御座いませから最早再び開戦は爲さぬと云ふ決心既朝鮮に向ひたる諸侯が歸つて参りました以上はそれ〴〵恩賞の沙汰になはなければならんそこで功を論じ賞を行ふに當つて加藤嘉明には充分の御恩賞がありましたけれども其の麾下に居つて相應に功名を現はしたる塙團右衛門直之は何と云ふにも足輕大將として身分が卑いもので御座いませから朝鮮に於て大功ありしにも拘らき僅か千石の御恩賞それよりは少しも昇りません

第十八席

流石塙團右衛門とも言はるゝ者が僅か千石の祿を食んで生涯を送ると云ふのは如何にも残念な事ぢやと不平を鳴らして居りますのが眞逆に臣下の身として争ふ事も成らず不平満々として其日を送つて居りました然る所慶長川年四年五年と年の經つに従つて大坂の勢ひと云ふものは次第に衰へて

堀 團 右 衛 門

りました之に引き代へて關東の勢は旭の昇るが如く益々盛んに相成り少しく天下の形勢に通ずる諸侯は何れも江戸表へ勤交代をして徳川の鼻息を窺ふと云ふ有様炯眼なる家康公は天下の權柄を握るは此時なりと思ひしか東北の豪傑と聞かたる伊達政宗其人を我が手の掌の物となし又加藤清正をも我が股肱の臣と爲さんと致し其他の諸侯にて少しく短つたく思ふ人々にはうれしく手を廻はして皆を我が味方にすると云ふやうな下心が見へました、うれしが爲め石田三成はナカ／＼知恵の勝れた男で御座いませから家康の心中を看破つて斯の如き形勢では縦令秀頼公が十五歳に成りおされたからとて彼れ家康ナドに此の天下を渡すべきか彼れが近頃諸侯の敷心を買はんと努むるは己れ取つて代らんと云ふ心底に相違なしと合点致して是より容易ならざる所の謀叛を企みます其の謀叛と云ふのは今改めて申すまでも御座いませんが關西野ヶ原の戰岡慶長五年七月十二日に秀吉公の御爲め關東の徳川内府を討ち滅し御幼君の御身を長久からしめ以つて君寵を專

堀 團 右 衛 門

らにして天下の權柄を握らんと云ふのが三成が心中の計略斯う後々の人は石田三成を兎角悪様に申しますが此人も又多少人道があつたに違ひない茲に唯だ疑念に抱えおいたのは加賀中納言利家が相果てし仕舞つた一事で御座います利家公の生きて居る時分には家康公如何に野心ありと雖も其の意を察しする事は出来ません相果るや否や直ぐに此騒ぎが始まつた借此時諸侯より大坂方の味方と相成つたるは安藝中納言毛利輝元嫡子秀元吉川元春片田純金吾中納言秀秋浮田秀家筑前中納言島津兵庫守小西行長石田三成長曾我部兼島立花安國寺其外の諸侯の軍勢十三萬九千人中にも大谷刑部格と云ふ人物も御座いまするが三成は孫ねて謀つて會津の上杉にことを起させやうと云ふ計略で直江山城守と通じて居るもので御座いませから直江山城守は其の用意とは言はないが新に砦を築いた直江山城守が砦を築いたもので御座いますから徳川家康に於ては謀反の證據顯然たりとて兵を下野の宇都宮まで進められました之に従ふ所の人々は徳川譜代の家

搦 團 右 衛 門

來は勿論の事其他太閤恩顧の郎等にては福島黒田細川藤堂を始めとして上杉征伐に参りひました清正は本國熊本に居りましたから此の軍には關係致しませんか加藤嘉明は一同の者と共に宇都宮まで進んで参り上杉征伐を致して居りまると大坂方に於ては十三萬余の大軍を卒いて關ヶ原に押出すと云ふ觸れが傳つたる其場は流石の徳川家康も顔色が少し青う相成つてハツと溜息を吐いたがそこが後年天下を一統して徳川の基礎を立てる位の豪傑で御座いますから居並ぶ諸侯に其の心中の憂若は少しも見せない早速加藤嘉明福島左衛門尉正則黒田長政細川忠興藤堂眞田おんどの面々を招かれまして一同に参り言はるゝやう家康諸各々方今此の家康が斯く申すも如何なれど此度幼君秀頼公の御爲なりとて佞奸邪智ある石田三成が計ひにて關西の諸侯を語らひ此家康を討んとすの計略にて兵を出すも云ふ事おれど足下等は何れも大閤恩顧の人々勿論三成は悪と思ひ給はんおれを併し三成に如何ある奸計あるにもせよ幼君の御爲なりと吹聴して兵を卒いて關東に向ふ

搦 團 右 衛 門

とあればヨモ眞逆に弓矢を引く事は叶はぬ事就ては今日より足下等に腹を差遣はるに依つて速に本國にお歸りなされ其の上大坂方へ味方せらるゝともし決して此の家康は恨み申さる次第に依つては後日戰場に相見ゆるやも知れぬそは又其時の事なれど此の場合大坂方に向つて弓矢を引く事は叶ふまじと心得るが如何思はるゝや御勘考の程願はしう存する併し歸還するどあれば遠慮に及ばせ早う御歸國あれと言ひ放つた語氣には勇氣満々と満ち渡つて居るやうであるが何んど無く顔に憂を含んで述べられた此時加藤左馬助嘉明は厚く家康を信じて居る者で御座いますから嘉明イヤ君の馬前に討死せんとの顔付にてヨロリと黒田長政を眺め長政は又細川忠興を白眼みましたが黒田福島の向人は何かヒソヒソ申合せ又加藤嘉明にも語り合つて後一同唯今の俤には候へど其の儀なれば拙者等の存じよりも御座るに依つて御返答の儀は暫く後刻まで御待ち下し置かれたし何れ勘考の上明朝までには必ず御挨拶申上げまると言てられ己が陣屋へ立歸りました



銘々陣屋に戻りました内黒田の家來なる後藤又兵衛は塙團右衛門と大坂城に於て相互に兵馬の事を語り合つたこともあるが此の後藤又兵衛は家康の言葉を聞いて何やら考へながら歸つて参りましたが頓て長政に對ひ 後藤、是は申せどもあく關東のお味方を爲さるが宜いで御座らう 長政うは又何故か 後藤何故では御座らん關東へお味方なさるが至極良策と存じまそる 長政、シテ其の譯は 後藤御人拂を願ひまそると云ふので長政は家來を遠ざけ 長政、サ話して呉れ 後藤、申上げまするが御父君恕水軒は太閤と無二の御友御友とは云ふものゝ是れには仔細のある事今其の理由を申さんには御父君と太閤との御仲一方ならず睦じかりし折或時太閤が當世に於て此の天下をば望む豪傑は誰れであらうかとお言ひなされし其時に父君は天下を望む者はサン候當世に在つて此の天下の權柄を握らんと望む者は二人御座る……ハア二人とは誰々で御座らうな言つて見候へ……一人は毛利輝元で

御座る……今一人は誰れか……今一人は些と申上兼ぬると御父君が答へた此時太閤ニツコと笑つて天下を望む今一人は黒田其許であらうと星を指されて御父君はハツと胸に答へ遂に秀吉の慧眼に恐れやしけん其の翌日頭を丸めそれから恕水軒と成なり遊ばされ斯く秀吉公に我心底を看破られたるからは最早此世に於て爲すべき事なしと斷念めて世を棄てさせられたでは御座らんか斯く天下の權柄を我が掌中に握らうと云ふ思召が御座つたが太閤の存生中は逆も目算を成就する譯には往かねが併し我之を斷念したればとて太閤の亡き後は天下を覗ふ者は石田三成か但しは家康が天下を取るであらうとお言ひなされたと云ふ事を確かに承つて居る其の言葉に違はせ果せる哉今や三成は叛逆を起したれども家康の徳に及ぶべからず戰破れて彼れ關ヶ原に屍を晒すは必然の事敗軍と極つたる謀叛人に味方なさるより關東方にお味方遊ばし三成を滅すは得策では御座らんか併し三成も奸智に長けたる強の者一日二日と過ぎ去つて後年に至りしならば彼の勢力は

塙 團 右 衛 門

益々襲り來つて容易に滅すことも出来ないで御座らう然らば之を二葉の中  
に朽らきんばなるまじ彼れは古狐なりと雖も其の技倆は侮るべからず依  
つて兎も角彼を滅して天下の勳亂を静め然して秀頼公十五歳に相成つた其  
時に内府何んぞ此の天下をば大坂に返さんと云ふ事の候はんや必ら走二代  
秀忠に此天下を譲るに相違なからん其時に至つて大坂の御爲なりと言ひ觸  
して兵を起し先づ目の上の瘤ある徳川を滅してマンマと黒田家にて此の天  
下を取つたから御父君の御志を果す次第左様遊ばされては如何で御座ると  
後藤又兵衛は剛い遊敵滅方界も無い計を吹き込んだ長政は呆然として呆氣  
に取られて居られて居りましたが聽て又兵衛に對ひ兎にも角にも此度は家  
康に従はねばならぬと斯う答へられた斯く決心した上は加藤嘉明、福島正則  
に後れを取らじと逸早く徳川に味方を致す福島正則其他の面々何れも皆徳  
川は味方を致すと云ふ事に相成つた其の中に唯だ一人眞田昌幸は兄の信幸  
を家康に従はしめ自分は末子の幸村を連れて心を二つにして信州上田に歸

塙 團 右 衛 門

りましたるれから夜を日に繼いで青野ヶ原へ出て参り大坂方の軍に投じま  
した關ヶ原の戦開始は徳川方の苦戦と云ふものはイヤハヤ一方からぬ事  
で御座いました此の戦に於て關東の軍勢中で最も功の有つたのは第一福島  
是は皆様御承知の通り砲煙彈雨の中に非常の働きを致しました強の者續い  
て藤堂黒田も又一方ならぬ働きを致したる其時鬼と呼ばれたる加藤左馬助  
は横槍を入れて小西の軍を突き破り大層も無い勢ひで御座いました足輕  
大將の塙團右衛門直之は加藤の前に來つて言ひけるやう 團、此度の戦に  
於ては最早關東方の御勝利は疑ひも無い事然るに此度の後藤の働き振りは  
一方からず勝れて居る就ては拙者に於てもどうか君の恩命を蒙り無二無三  
に石田小西の陣營を突き破つて見ん事彼等の首を討ち取つて關東に御味方  
あして天晴功を現はしたる黒田福島藤堂に勝つたる功名を現はしたく存す  
ると云ふや否や左馬助はハッタと團右衛門を睨め付け

第二十席

嘉明、黙れ汝は足輕大將おれば足輕を卒いて萬事我が命に従つて兵を進むること宜けれ既に朝鮮に於ても度々拔擢を致し或は我が命に従はせしめて勝手な振舞を爲し實に惡むべき奴手討にも致すべき所であるが日頃の功名に免じて今まで許し居つた以來は深く慎むべき筈であるに今又斯の如き乱暴狼籍の事を申し出して君命に背かんとぞるは是れ臣たる者の道に背くと云ふもの汝の如き下郎齒牙に掛くるに足らず我ながら唯勇あつて智なき識なき其方が君命を用ゑて自勝手の戦を爲すとは心得違ひ此度の戦に關東方が御勝利に相成りしは全く黒田細川福島藤堂我等の働きあり此上猶ほ進んで石田小西の首を覗はんとは鳥渡ッ敷い勝つて兜の緒を締めろと云ふ諺を知らずや我軍が斯くまで勝利を得たからは石田の陣は最早我軍に敵をべくもあらざ此の上深く進んで追撃するは窮鼠を追ふが如きもの若しや強いて彼れが首を得んとして深入りすれば破れを取る事おしども言ひ難し汝の如き智なき識なき匹夫下郎は軍の驕引も知らず扣へて居らうぞと叱

り付けられた直之みれを聞いてカラ／＼と打ち笑ひ團令足輕大將にもせよ一隊の兵を與かるからは矢張軍師あり我れ敢て君の恩命を待たざるにあらねど今日の戦君の御命のみ守つては軍功を立つる事難し何時も黒田細川等に先んぜられて憐れや我軍に屈強の兵を持ちながら却つて後れを取つて言はゞ高見の見物同様の始末斯くては戦に臨んで充分の功名を現はす事もかるまじ幸にして吾等が君命に背いて先き掛を爲したるが爲め是まで相應の働きを爲して我軍隊の面目を保つたのでは御座らんか見られよ後藤の如き者そら敵軍を破る事敵竹の勢ひにて十文字の鎧を振つて石田の軍兵を突き破る様さかがら虎狼の群羊中に荒るゝが如し彼れに敗を取るが口惜しさに君命を待たず相働き吾等の面目を立てしは不届にて候か嘉明、黙れ、黒田の後藤と汝と一様に成るべきか黒田の臣たる後藤又兵衛は天下の人傑なり汝の如き匹夫下郎の凡俗と同一に語るべき男にあらす團、アイヤ我君黙りめされ匹夫下郎凡俗の者に何故あつて千石の碓を食ませ候か出下を輕蔑

塙 團 右 衛 門

そるも程こそあれ 嘉明「黙れ下郎ッ千石の祿は何の手柄に與へたるにあら  
を我が慈慈を以て恵みたるあり此時直之は烈火の如く怒つて 團我が慈慈  
を以て與へたりとは何事ぞ高の知れたる千石足の裏にあり附き申さず若し  
御身眞の眼あつて見給はらば此の直之の戦功に對して申すは如何はしけれ  
と五千石乃至八千石の祿を與へたりとて何かある若し御身眼有つて直之を  
軍師と取り立てたらんには我又うれだけの働きを爲して見んイヤ〜斯く  
云ふものゝ逆も人を見るの目なき主君の下に居つては思ふ儘なる働きも出  
來せ張良は錦を買つて韓信を味方に付けた誠には天下の名士と申すべき均  
沛公計らずも張良を得て遂に項羽を破りしも畢竟人を知るの明があつたか  
らでは御座らん然るに御身は我身が屬々戰場に於て武勇を現はしたるにも  
抱はらず此塙團右衛門直之を凡俗下郎と侮つて失禮ながら此の直之に韓信  
張良の智略あるを知り給はず此の直之に言はしむれば御身こそ却つて普通  
凡俗の大將たりイヤ普通凡俗の大將は愚か御身は誠に匹夫下郎一文奴なり

塙 團 右 衛 門

と威猛々しく怒鳴り立つた斯くと聞きたる加藤左馬助嘉明憤つたの憤らん  
のつて髪は逆立ち眼を釣り立て眼中に火を發してアハヤ切碎まんぞとする  
此時又も戦が始つたので御座いますから眞逆に戦の始まつたのを捨置いて  
家來どの争に屈托する譯にも往きませんからそれあり其場は濟みましたが  
是より左馬助が團右衛門を惡むの念強増して戦が濟んだ上は塙團右衛門直  
之に對し何んとか處置を爲さんと陣營に立ち歸るや否や團右衛門は豫て左  
馬助の許を去る決心で争ふた事で御座いますから急ち陣營の表に張札を爲  
した

遂不止江南野水

高飛天地一閑關

其陣營へ這入らず黒皮鱗の鱧一領に尺銅作りの太刀を打ち込んで是だに  
有らば大丈夫なりと草原を踏み分け〜遂に京都へ参り豫ねて巳れが隅  
に致して居る松原通の松葉楓と云ふ旅宿に足を止めて是よりして京山邊を  
周ぐり或は北山比叡山に登り悠々日を送り又或時は嵐山より高野に下り杯

して紅葉の色附く頃まで遊んで居りましたが借も昨日まで五奉行の一人と  
時めきたる石田治部少輔三成が關東の大軍を相手にして關西の諸侯を手に  
附けたる強の者も今や情けなくも安國寺惠瓊小西播津守行長と共に京の六  
條河原に於て首を刎ねられると云ふ憐れ果敢なき話に團右衛門は其噂を  
聞きうは見物あり往つて見せんばあるべからずと身に震れたる裳を纏ひ尺  
銅作の太刀を腰に帯び雨傘被つて毛氈を現はしトットと六條河原に馳  
せ往きましたたが此後の御物語は如何相成りませるか次席に精しく辨ませ

第廿一席

前回に續いて言上致します時は霜月の始めにて加茂の流の水も氷らんとそ  
るばかりに冷えませる頃しも三條四條の市街を曳き廻されて石田三成小西  
行長安國寺惠瓊何れも身に着けたるは薄き衣類ばかり九月の頃ひ着致した  
其儘の衣類故見るも氣の毒の有様で御座いまも奥平美作守の手に捕はれて  
以來六七十日の其間獄中に苦んだ擧句の果今日しも六條河原に於て處刑に

らるゝと云ふので罷はボクくとして肉落ち骨現はれ唯だ眼ばかりギラ  
光つて市中を曳かれながら四邊を見廻はして往く様子

雨霰雪や氷と隔つれど

落つれば同じ谷川の水

往昔榮華を極めた者も斯く成り果ては乞丐同様心ある者おどか其身の零落  
を嘲たざるものあらんや都内の人々は皆此の姿を見て 甲如何とすえらい  
事やふまへんか彼の太閤はんの御在世の頃は飛ぶ鳥落した小西はんや石田  
はんが今日は罪人に成んおはつて曳かれるとは知らんぞす 乙爾うとすは  
んまどす夢のやうとす可哀想におまを頻りに話をして居るものもあれ  
ば中には關東の侍士らしき男三成等の曳かれて往く様子を見送つて居りま  
したが 侍どうだ人間の榮枯盛衰と云ふものは先づ彼様なものだ見給へ朝  
鮮に往つて一度抜驪をして王城を取り平壤まで進んだと云ふ小西行長の末  
路を見ろ京都市中を曳き廻はされて六條河原で御仕置に成ると云ふ此の有

門 衛 右 團 塙

様思へば馬鹿の奴では無いか彼若し功に誇ら身身の分限を知つて現在の位  
置に安じて居たならば安々と此の世も送られるであらうに何が不足で關  
を相手に大坂方の味方と成つて戦つたであらうかと罵つて居る者もある又  
此方の軒下には九州侍士と見へて馬鹿何を言つちよるか三成程の奴が餘計  
有るものでは無い方公の眼では關東内府か但しは三成と天下の豪傑は此の  
二人しか無いと思つちよるア、英雄の末路憐むべき事であると嘆息して  
る者もあれば中には又振舞いて無心の涙を拭つ居る者もある倍其塙に驅  
け付けてツクムと其の後姿を見送つたる塙團右衛門思は定聲を放つて  
團ア、凡そ人と云ふものは死して後に始めて英雄豪傑か三文奴かは知れる  
ものである今刑塙の露と消ゆぬる石田三成意氣地をしと言は云へ勝敗は  
武士の常一ト度戦破れて四年の身と成れば盜賊同前の取扱を受くるも是非  
なし然しながら彼れ石田三成は天下の諸候を綾釣つたる大智者ありと聞く  
少し後れ馳せに來た爲めに能く彼れ三成の顔を見る事も出来なかつた兎も

門 衛 右 團 塙

角さんな男であるか知らんと跡追ひ驅けて六條河原まで附き來つて瞬きも  
せず見て居りますと情けあや流石の三成も悄然として乗輜より降りて突  
つ立ち上つた其の時の容貌は情らしくはあれど又何處となく泰然として少  
しも悪恐れを勇氣満面に満ちて見へたり其の身の丈は五尺にも足らざ  
る小男なれど何處となく氣性の勝れたる姿が見へる塙團右衛門思は定聲を  
放ちア、適ばれな奴だ姿を見れば五尺に足らざる小男なるが彼れ今まで秀  
吉公の御側に付き添ふて居つた萬事萬端の相談相手と成り何かに付けて天  
下の諸候をさながらデグの棒の如くに綾釣つたるはア、彼れ石田三成ある  
か、それに付けても我が主人加藤左馬助杯は彼の石田奴に手足の如く使はれ  
たのである倍又拙者は天下の英雄豪傑なりと日頃自ら名告つて居る彼の福  
島黒田細川淺野さんども一廉の豪傑には相違ないが彼れ石田三成の爲めには  
皆小使奴の如弄ばされた奴等ぢや、殊に此方の主人加藤左馬助は馬鹿な奴ぢ  
や兎に角あの小兵の體軀を以て關西の諸候を綾釣つて關東の内府を相手に

して天下の政權を争つた其器量其の見識は見上げたものぢやわい」と座ろに嘆じて居りまゐると何人か知らぬも傍に有つてア、石田は天下の豪傑諸部は天下の英雄天晴者なり」と思はず怒鳴つた者があつた、誰であるか知らんと塙團右衛門は振り返つて見れば顔は同じく笠に隠れて相分らぬ、ハテ何者なるかと考へて居る、此時三成は刑場に立つて莞爾と笑を含み大音を上げ三成三成運拙かうして今や刑場の露と消んどそれと我果して非あるか宗康果して悪からざるか志は天能く知る地能く知る天地の此儘に有らん限りは後世我名は尽きじと叫んで眼を閉ぢたり、

第廿一席

此時論視の役人は何を吐言くぞと一言の下に叱り付けツカ／＼と其の側に進み今や六條河原の塙場に敷皮を布き三成等をして其上に座せしめたり石田三成小西行長安國寺惠瓊等がメシリ敷皮の上に居並らんだる其の有様は實に見る目も氣の毒なり彌々今日を限りの命戦國の世の中にも又幾分の情

けもあると見へ門跡より錦織の袈裟着けたる僧侶三人水晶の珠數を爪繰りて三成等の前に來り立つて居る之を見て見物人 甲「因果應報と云ふものは是非も無い事だがそな 乙「ハ、ア因果應報と云ふのは何んでおまそ 甲「何んでおまそつて和郎さん御存じないかアノ石田三成が前の關白様を嘯着したものだに依つて關白様がヤケを起して無暗に人を切つたり獄牢の中に苦しめたりしたと云ふ事だがす 乙「ハ、アさうでおまそかあ、それがどうしたんでおまそ 甲「どうした所の騒ぎぢやアがんせん御自分で御手をお附けなすつた三十二人の妾を始めとして其の妾の腹に出來た子供衆一同罪も無いのに彼の石田三成が縁辨を振つて讒言をしたるれを秀吉公が信じてトウ／＼お妾やお子供衆を此の河原に引き出して……ア、其時は四條河原でありました、が情けなくも女や顔はさい子供の皆んな首を刎ねたるれで其の死骸は直き此の近所の寺に今以つて葬つてあるが其の當座は夜毎に怪しい所の人魂がブラ／＼飛んだと云ふことですが其人々の一念でも三成は無事では居

られんと思つたがトウ、徳川様の爲めに討ち滅されて捕はれの身と成り  
今彼處で首を刎ねられると云ふのは是が因果應報では御座らんか、と一人が  
言ひますると又一人「乙、それに違ひないけれども仕方がない匹夫より三侯  
の位に登るものは位劣けすると云ふ例言もある秀次は匹夫より起つて關白  
に昇つたから秀吉公の屍未だ冷えざる其の中にもやうき最期を遂げたの  
も無理は無い 丙、何を言つて居るさる見當違ひの事を言つちやア付けませ  
ん始めは三成の話をして居たんですよ併し爾う言へば太閤様とても匹夫か  
ら起つたのではありませんか 甲、イヤ彼れは人が違ふ別のお方だ 丙、好い  
加減の事をいひなされる彼の石田三成と云ふ人は本名石田佐吉と言つて元  
を洗つて見れば近江の觀音寺の坊さんの所に居た稚兒だ秀吉が近江に往つ  
て其の寺に立ち寄つた時に三成と云ふ奴はナカ、如才ない男で温るい茶  
を出した二度目にはナマ温の茶を出し三度目には熱湯を以つて煎えた茶を  
出したので秀吉公は之を見て居りましたが其の年にも似合はぬ氣轉者後々

には何んぞの用に立つてあらうと見込を付けて御小性に取立てたから  
遂に昇り昇つて五奉行の一人と成つた奴其間に何か手藝がなければ其様を  
に出世の出来るもので無い今日斯うやつて此の河原で首を刎ねられるのも  
當り前の話 丁、ハア爾うでおまをか、それでは茶を出さものは皆を首を切ら  
れまをかな 戊、籠徒奴らんか馬鹿な事があるものか、ガヤ、言つて居る  
内に六條門跡の僧侶は小西に向ひ 僧、御十念をお授け申す御覺悟あれと云  
ふと小西は頭を上げ 小西、僧坊さん拙者共は最早此塙に於て首を刎ねられ  
るのであるが是は固より覺悟の前併し死して後ち極樂に往かうと云ふ望は  
無い地獄の閻魔の廳に引かれて牛頭馬頭の苛責を受ける身の上なれば何も十  
念を授けて下さるには及ばぬハヤ、首をば討たせ候へど述べたる時に石  
田三成も莞爾と笑ひ 三成、小西々々其様を女々しき事を言ふは心苦しい何  
も言ふな、ハ、ア五年も十年も要つたもので無い兎角凡俗は我心だに潔白  
なれば誠の神は守るとか謾らんどか言ふのが常であるがそれは世の中に有



門 衛 右 團 塙

内の事ぢや死して往く身に何の地獄も極楽もあつたものぢやない黙つて居るが宜しいと素然として扣へて居りまゐる獨り安國寺は唯だ呆然として是非なき最期と思ひ極めたるものゝ如し其の内に時刻來れりとして奥平美作大音上にハヤハヤ首を討てよと云ふ命令と諸共に大刀取は後方へ廻つて第一石田三成の首を刎ね次に小西行長の首を刎ね最後に安國寺の首を討ち取り此時北山下風の風寒く加茂川の流も今や紅の色と變りしかと思ふばかり今までザツザツと騒ぎ立ちし群集の人々も敵と思ひ味方と思ふ差別なく何れも皆グツグツともスツツとも言はず片唾を飲んで見詰めたる様子は流石は人の死を悦ぶものはないものと見へて何んど無く濡り勝ちの有様心も胸も裂かるゝ面地にて一人去り二人去り仕舞には蟻の如く寄り集つたる人々も悉く其邊を立去つて仕舞ひました

第廿三席

數多の人の事として人の心は十人十色歸る道には三成の事を嘲けり罵るもあ

門 衛 右 團 塙

れば憂を帯びて狐鼠くゞと往く者もある其の中に唯だ一人默然として練り往く人の跡に附いて参つた團右衛門ア、人の思ひは種々かもの石田を罵んで罵るもあれば又哀と思ふ者もあるやうだが倍も是非かい世の中か否はより徳川の威勢は益々盛んになるであらう佐和山の城主より五奉行の上昇つたる強の者も首と胴別々に成りしからは最早再び事を起す事もならじやれども彼等の靈魂天地に飛んで徳川内府を惱むか知らんイヤそれ程の事もあるまじ兎に角石田が滅びし上は世は徳川の天下なりと塙團右衛門直之は腕を組んでアラリノソリノソリと歩み往く善かれ悪しかれ彼の石田は思へば豪傑死に至るまで自若として更に變つた様子も無い併し我が主人たりし加藤左馬助の如きは言語同断の奴逆も石田の如き大勇智略は夢にも見る事は出来ん此團右衛門直之の如きも若し石田の味方に有つたならば思ふ存分奮闘を爲し呉れんもの鎧を捻つて敵軍の間を縦横無盡に突き廻はし徳川内府の軍勢を突き殺し惱ました其上力盡きて如何とも仕方なくば見事敵の

塙 團 右 衛 門

大將の首の一ツ二ツも討ち取つて深く關青野ヶ原の露と消へて仕舞ふも  
ア、我れ加藤左馬助に事へしこそ殘念なり今まで人を見るの明なき左馬助  
の許へ事へおまじ生中生を保つて後世人に笑はるゝ事の口惜さよア、益を  
き事を心配したものかを兎に角此後徳川内府が秀吉公の御遺言通り秀頼公  
が十五歳に相成つた其時に萬一天下を引き渡さされば其時こそ我れ大坂の  
味方と成り關東内府の首を取つて秀吉公の靈魂を慰め又二つには加藤左馬  
助は舊主人とは言ひおがら我れに耻辱を與へて面目を汚せし者斯くありし  
上は何んの遠慮かあるべき戦に臨んで縁類親者の見界なきが常況してや  
我れを辱しめた舊主人取場に於て彼を辱しむるとも何のうの、ヨッそれまで  
は何處へか落ち附いて時の到るを待たんと心を定めブラリ〜と祇園町に  
掛りまゝと云ふのは祇園豆腐と其名も高き大丸と云ふ茶屋に這入りました此の祇  
園豆腐と云ふのは其味又格別ださうで御座います、團右衛門は笠を取つて此  
家へ這入まゝと云ふと、女能う御入來やと、團早く何んぞ暖い物で池田伊丹の

塙 團 右 衛 門

極く良い所を一杯持て來て呉れんか、女何んで召上りませ、團何んでも能  
い早く持つて來い豆腐々々を促したもので御座いますから女中は聞も無く  
ハモの骨抜きと祇園豆腐に酒を持って参りました團右衛門は舌打ち鳴して  
ガブリ〜酒を飲んで居ると其傍へ這入つて参りました、一人の侍士年齢未  
だ幾干でも無い漸く二十歳の上を二つか三つ出たか出まいかと云ふ若侍士  
淺黄紋附の衣類に袴を高く取上げ足には草鞋を穿ち腰に大小を帯び其の太  
刀の長サ三尺八寸ズル〜と引き摺つて這入た時は恰かも大地に穴を明け  
んばかりの有様其の男も同じく腰を掛けて矢張祇園豆腐でガブリ〜酒を  
飲んで居る、團右衛門はヨロリ〜と見て居りましたが何思ひけん傍の若侍  
に對ひ、團失禮ながら其處に御居でになる御方は何れに御出に成るお方に  
候哉、若侍、ア是は御貴殿は何人なるか存せられぞ我等は當都に當分足を  
止めんと來た者なれと今日の姿を見て少しく心變りし故再び當地を去らん  
と存する、我は借前岡山の浪人にて攝原左門と申す者で御座る、團、ハ、ア、探

塙 團 右 衛 門

原左門の言はるゝは、壁さればト傳流の擊劍を學び諸國を經歷して歩るく  
者で御座る。團然らば塚原ト傳殿の御一門にて候か。塚否々我れ塚原を名  
乗りト傳流を學ぶと雖も強ちト傳の一族にも候はせ唯だ塚原の姓を名乗  
るのみの事で御座る。我は我が父塚原一郎左衛門よりト傳流の術を授けられ  
希くは是より關東の家康に仕へて祿を食んぬ心得にて懐しき山陽を後方に  
見て今ぞ此地まで参りし所思へば徳川内府は天晴の名將に似合はぬ智勇兼  
備の各將石田三成を六條河原に首を刎ねたり。是生涯の過ありと拙者は考へ  
たり、それが爲に一旦徳川に仕へて立身出世を致さんどの心も遂に消え去つ  
て仕舞ふた。徳川には豫ねて名高き智者あり武勇ある大將を側に置き天下の  
政治を爲そと聞き實に斯の如き名將は當世にあるまじ之を唐土に譬へて見  
れば家康は日本の浦公ありと思ひ出て來た譯であるが最前申を通り三成の  
首を刎ねたる所を見て斯く申しては如何であるか拙者は家康の敵を取扱ふ  
處置振に愛想を盡したモウ、彼れの碌を食むの念慮は毛頭御座らぬ

塙 團 右 衛 門

第廿四席

塙ハ、ア然らば尊公は三成を夫程の豪傑と思召さるゝか。塚原「豪い豪く  
さいのつて先づ當世に立つては三成位の人傑は寡ありでござらう」塙團右衛  
門は此時莞爾と笑らつて其様な事を言はれて若し其言が關東に聞えたから  
は却て足下の身の爲めにもなるまじ。塚原「イヤ我身の爲になるからんは暫  
く措いて徳川家康今は其勢日の出の如くありと云へ秀吉公のお頼を反古  
にして己れ自ら取つて代りし大逆無道天神地祇争でか之を容れ給はん察そ  
る處徳川内府は數年を出でる中に都を江戸に造るでござらう哀れや大阪  
の有様見る眼も痛しき次第あり併し榮枯盛衰を以て志を變へざるは武士の  
本領此塚原左門は一先故國に歸り暫く天下の形勢を見て同士を語らひ再び  
大阪に來たつて秀頼公に使はんと思ふのでござる去りおがら又此世を果敢  
かしと思はし高野の山に登つて僧侶どもおらんが何分今は天下の形勢も見  
定め難きに依て實は彼此と迷ふて居る最中足下は孰れの御方に候か善き分

塙 團 右 衛 門

別もあらば教え候へど遠慮尊釋もかく大言吐いて警乎と團右衛門の顔を見  
詰めて居る様如何にも不審の体に見受けられる 塙左様如何をか隠さん  
者は關青野ヶ原の戦ひより以降浪々の身と相成つた塙團右衛門直之でござ  
る 塚原然らば御身は自ら主を棄て給ふて陣營に一閑ノ鬮と書を殘された  
名代の塙氏に候か宜き處てお目に掛つた御無禮ながら一献參らせませう  
塙這は辱かうござる就て其許にお尋ね申す足下は關東の事を大逆無道であ  
るとか容易に人の放つ能はざる大言を吐いて徳川内府を悪様に言ひ做し石  
田三成を天下の豪傑ありと賞美せられたが乃公は左様思はる當世に在て天  
下の名將豪傑と云ふべきは徳川内府であると思ふが如何に斯くと見て取つ  
た團右衛門の眼力それとは知らず塚原左門それは拙者も承知して居る 塙  
承知して居りながら罵しるとは 塚原イヤ〜左様な事は酒の肴として  
面白うかい實は拙者は尊公が天下の豪傑と思ふが如何に 塙左れば豪傑  
か英雄かは知らぬが今は浪々の身分 塚原浪々の身とは云へ豪傑は豪傑に

塙 團 右 衛 門

相違ない併し尊公は左馬助の家を去て孰れに身を寄せ給ふ御了簡なるか  
塙別に身を寄せべき所もござらん併し金吾中將は少しく其以前に御恩を  
はりしこともあれば當分金吾中將の處に參らんと存する 塚原ハ、ア成程  
金吾中將殿は關ヶ原にて裏切せられ御覺え芽出度入なれば中將の許に身を  
寄せられるは至極宜しいでござらうなれど塙氏打割れたお話を申そが足下  
の伎倆を以て徳川内府の許に身を申せおぼ定めし立身世出するもどござ  
らう例令ば左馬助の許に在つて千石の祿を食むものならば内府は必き三千  
や五千の祿は與へ給ふであらう塙氏徳川氏に仕へて三千と五千の祿を食  
むやうなれば左馬助は舊主主人にもせよ足下を今迄の如く侮蔑むことも叶  
ふまじと言はせも取えず嗚と憤つたる所の塙直之案の如く這奴は徳川の  
者あり始め心にもおき事を言ふて内府を罵りしは我心を探る所存なりしか  
今又我を内府に仕へしめやうとは悪くき奴と思ひしが怒を忍んで大口開い  
て阿々と打笑ひ足下は扱も善い事を謂はるゝかおイヤ併し足下が始めの言

葉と只今の言葉とは些と相違は致さぬかど詰られて有繋の塚原左門も言葉塞つて何と挨拶のしやうもかくボン／＼煙草盆を叩いて居る此時團右衛門お手前の如きは幕侍と申すもの浪々の身とは謂ひながら苟くも武士たるものに向かつて内府を罵しつた其の舌の根の乾かぬ中に仕へよとは何事とさる左様な心底の邪しまある侍いと言葉を交ゆるも穢らはしい能く承まはれ古語にも忠臣二君へ見えせとやら我れは仔細あつて主人左馬助を棄てたどろろの某し何の顔あつて舊主の仕ふる内府の許に腰を屈せんやとは謂ふものゝ兎も角拙者は金吾中將の許に身を寄せて其後又好い分別もござらう其時には大侍イヤ足下にお目に掛る折もあらう申し石田は徳川と角力を取つた見上た人物當世石田の右に出づるものは斯く言ふ塙團右衛門直之より外には一人もござるまい、塚原氏如何でござると餘りの大言に塚原は煙に捲かれて只茫然と呆氣に取られて居る許り 塙又折があつたらぬ目に懸ると致さうと云ひ放つてノソリ／＼出で行きました此塚原左門と申そは實

は本多作左衛門の家臣にして塚原左文治と云ふ豪のものにて京洛中洛外を徘徊して浪人其他の動靜を搜り關東に對し敵意あるものを味方に引入れんとする所の謂はゞ徳川の懐力の闊達でございまゝる當時は斯る闊達は随分諸君に徘徊致して居つたものとございまゝる

第廿五席

扱も塙團右衛門直之は其塙を立出でし金吾中納言秀秋殿の館に參る固より金吾中納言は知己の御方進々訪ねて參つたもので其から其款待も亦格別でありまゝる直之は訪問の次第を打明けて暫時金吾中納言の館に厄介に相成つて居りまゝると不思議ある哉中納言秀秋は此頃夜毎に覺されまゝ其毎夜々々覺さるゝと云ふは何者の爲に覺さるゝかど云ふに大谷刑部吉隆が毎夜深更に及ぶと秀勢と眼前に顯れて秀秋を睨付けると云ふ話斯くと聞いた塙團右衛門直之怪しからぬ事もあるものぢやない、あの癩病の化物坊主何が不足で當館へ顯るゝか死んだものが生とし生ける面かも人に知られる豪の者

門 衛 右 團 塙

に祟る杯と云ふことのあるらう筈はない併し眞實當館に祟をかそとあらは好  
し此團右衛門が一躍の下に彼をば一つ追拂つて呉んず者と思ひ立つては片  
時も猶豫ならぬ早速此事を金吾中納言に申入れました其頃ひ金吾中納言の  
邸と云ふものは京都の三本木の脇に在りまして塙直之は其新長屋を預つて  
居りましたソコで前申を廻り近侍の一人なる月田に向つて後詰仕りたうと  
ざると申上げたものでございませすから近侍の者も殊に心配して居る最中大  
に悦んで然らば中納言の御側を御守置なし給へどの御返答團右衛門は幽靈  
に一泡吹かし呉れんものと月田歳高に伴はれて御前へ罷出でました中納言  
秀秋は固より適れある御方かれと近來は一種の病に悩まされて一陽茲に來  
復して長閑けき春とありぬれど中納言の爲には霜枯同前韻都たる梅が香が  
春風に送られて枕邊に香へども中納言の鼻は只生臭き怪物の香を嗅ぐのみ  
臙に氣の毒の有様でございませる扱月田歳高に山川半平の兩人は寸時もか  
側を離れず付添ふて居り看病の女子原七八人は毎晩夜を徹して金屏風の裡

門 衛 右 團 塙

に詰切つて居りませる又月田の傍に自若と扣え居りませるは塙團右衛門直  
之、直之は勇氣凛々として今にも怪物來らば挫き呉れんと黒の紋付に袴を付  
け先祖傳來の大小を傍に引付け右手に南蠻鐵骨の扇を携え、イデや妖怪變化  
出でなば出でよ大谷刑部の遊魂來らば來れど待構えて居る頃は二月の始め  
颯々ど吹荒む北山風々々ど云つた處が元來京都は風のない處でございませる  
から左のみ荒き風ではございませんが何とあう氣に掛る北山下庭の泉水に  
引きたる鴨の水はゴリ／＼として其音凄まじく殊に今宵は雨さへ降りて一  
入淋しく思はれませる夜は次第々々に老け渡つて四隣人定まりて聞ゆるは  
只街の犬聲のみ 近侍ア、今宵も亦殿は驚され遊ばすか如何して宜きこと  
やらんど各々思案に暮れて居る折しも早や響渡る北刻の鐘草木も正に眠り  
流れの水も止まると云ふ此真夜中ゴーンと響の音凄く一同鳴を鎮めて居り  
ますると何やらんサツ／＼と聞ゆる音怪し此時月田歳高も山川半平も眠氣  
の滯して居つたものと見まして思はを睡つてグエー／＼側のもの皆眠つ

塙 團 右 衛 門

て居るものでそから團右衛門も我を忘れてグユー〜と寝入りませると中納言はウーン〜と呻き始めた其聲は何となく物凄く身に染みたものでございませうから團右衛門不圖眼が醒めた眼が覺ると秀秋公謝しき聲音にて「誰ぢや又予を悩ませは刑部あるか刑部なるか大谷なるか」と刎起さんどぞ此時眼瞼として影暗く屏風の彼方に其身の長さ八九尺もあらんかど云ふ大坊主面部よりは膿血滴りて其形相物凄く眼を赫と見開き如ッ龜と立顯れたかと思ふ間もあゝ月田の襟元を押えたる其妻人にして人にあらず坊主にして坊主にあらぬ怪物はニヤ〜と笑つたると思ふと倏ち満面に怒氣を舍んで秀秋能ッく承れ爾は天地神明に誓つて大坂方となりて徳川内府を討つべき筈あるに左はあく義に背き汝れ一人裏切あしたる其爲に全軍残らぬ敗走して大坂の天下は遂に徳川の掌に歸したりとは無念やな殘念やな我討死は固より厭ふ所にあらぬ石田小西安國寺をして京の六條磔に於て無慘の最後を遂げて末世末代に耻辱を遺したるも誰ゆえぞ待つた秀吉公の天下は果敢

塙 團 右 衛 門

あくも奸智に老けたる家康の爲に奪れたるは誰ゆゑぞ皆是れ汝の處爲に非ざるか悪ッくき秀秋目に物見せ呉れん覺悟をしろと確と睨んで五体を揺ぶる様は何とも箇とも物に喰えんやうもなし有藥の秀秋も悶え苦んでウームと呻つたが嚇と眼を見開いて殘念々々汝れ何とて我を悩ませよこのあるべきかサア〜汝れ刑部……汝れ安國寺惠瓊と岸破刎起きて大刀引抜きて飛蒐らんとする此時其幽霊の爲に何の小癩ふと忽ち頭を押へられたと思ふと無手と黒髪を掴まれて吊し上げられんとした此時中將ウアッ〜と叫ぶ此時までも何者の所業なるかと思ひ殺して見詰めて居りし塙團右衛門直之聲振絞つてアイヤ金吾殿如何おされた中納言殿左りとは憶病なり假初にも天下の英雄豪傑の居る處何ぞ悪魔の來る筈やあらん夫れ妖は徳に勝たずと云ふ左るが故公の君薄ければ妖怪夫れ或は犯そなしとも云ふべからぬ若しも妖怪枕邊を犯そとあらば願くは誓つて徳を修め給へ……コリヤ是れ妖怪其處退けやと大音に呼はつた確とばかりに彼方を睨み付ければ今迄狂亂の如く

吼り立つた金吾中納言「ウム」と叫んで其の處に打倒れた。

第廿六席

塙團右衛門

此騒ぎに近習のものも一同驚いて醫者よ薬よと厚く介抱致したに依て秀秋  
稍やく我に反つて床の上に起上りました見ると顔色も本に反つて正氣付い  
たる容子聽て 秀秋「直之何ぞ怪しきものを見たるか 直之「何も見申しませ  
ぬ 秀秋「左様か然らば妖怪と思ひしは予が迷ひなるか 近習「定めし御病氣  
ゆゑと察し奉りませる何を申すにも金吾中納言秀秋は長く煩うたことで  
さいますから身体の疲勞甚だしへ當館に居るは何となくお嫌ひおさる容子  
近待の者も御意を察して兎に角故郷へお歸りあつて御保養然るべう存じ奉  
ると中納言も其意に従ひ幸ひ備前備後の両國は其領地なるがゆへ愈よ國元  
に御引取に相成りませる然る處中納言の合數盡きたるにや國元へ引取る途  
中に於て病の爲に相果てませる、  
塙團右衛門直之に於きましては頼りに思つた金吾中納言が妖怪の祟る所と

塙團右衛門

あつて遂に相果てました爲に正可に此家に厄介にあつて居る譯にも行か  
又候此處を飛出した併し其隣國なる越州に福島左衛門尉正則が居ります  
に依て正則の許を音づれて厄介にならうと云ふ了簡で安藝國を尋ねて参り  
ました處が正則は關東へ参つたと云ふ塙團右衛門の失望一方から如何致さ  
んかど一時思案に暮れたが隣國には手頼りになるべき人もないに依て兎に  
角大坂に引返して果して關東に下るや否やを尋ねんものと夜を日に繼いで  
大坂へ参りました所が最早正則の邸は取毀はして江戸詰に相成つたと云ふ  
噂有樂の豪傑も身の寄場なきには確と窮した併し人の話は當てにはからん  
と思つたが無駄と思つて福嶋の邸を尋ねんとか併し人の言ふこととして強ち  
嘘もあるまじとグラ／＼江戸堀までまいりませると今しも左衛門尉正則の  
行列正しく館に還入らんとするに出遇ふた塙團右衛門の悦び一方ならず後を  
暮みて其館に入り正則に面會の上浪々の次第を打明けて暫時の厄介を願入  
つた然る處正則は大に悦んで然るか予は此邸をば疊んで一度越州に歸りし



門 衛 右 團 塙

上江戸表に罷越して第を江戸に構えて所存あれば何は兎もあれ其許も蕪州  
に來られよと答わられた浪人の身の上なれば斯くと聞いたからには悦んで  
一も二もなく従ふべき筈あるに其處は有繫に團右衛門だ福島正則に向ひ只  
今のお言葉は道に背かず候や關東殿は御身を如何に思召て如何なる御縁を  
與へたるかは知らねども今は夢の跡と消え去つたりとは云へ豊太閤の御恩を  
忘却せられては天道如何あるべき當邸を取毀はするとは以て外の御事あり  
縱令今は關東方に従はねばあらぬ身にてあれ昔蒙むつた鴻恩を忘れ走どあ  
らば責めてもの事に當邸だけは取殘し置かれて然るべう存する熊本の加藤  
主計頭殿の如きは縦令屍を野外に曝そまでも大坂城の傍は離れじと申され  
し其言葉は今猶ほ我耳に在り武士たるものは一度恩義を受けたからは主に  
して不道を以て臨まぬからは飽迄其恩義に酬ゆるの心あなくては叶ふまじと  
諷めたに依て福島正則も固より心に一点の曇りある人でございませんから  
實にもと團右衛門の言葉に従つて大坂の邸に其儘に置きまして其後關東へ

門 衛 右 團 塙

参りまする時分には何時も大坂の邸を中邸として滞留致したと云ふことで  
ございませぬ夫れから京都にも邸があくは不都合だと云ふので此時伏見に  
も邸を構はて夫れから塙團右衛門同道にて蕪州廣島へ歸りました團右衛門  
は福島の下に在つて閑日月を送つて居ります中に早や慶長八年と相成  
ました今まで天下は紛々として亂麻の如き後を承けた事とて誠に穩かに相  
成り士氣も幾分か衰へて今は歌舞音曲にさへ耽けるやうに相成つた茲に奇  
なるは福島の城内は夜ふく怪物顯れて諸人を惱まその一事でございませ  
る御城内に怪物が現れる云ふ噂はバツと立つたが誰あつて見たものもあ  
いられども毎夜臣下のものの中には或は坊主にさるゝもあれば鼻を殺がる  
ものもあり或は耳を削られた者もあると云ふ始末ソコで邸内のももの不  
思議に思つて何物の所業あるかと夜番まで置いて容子を窺つて居りましたが  
一向認めがつかぬ實に不思議千萬事とございませぬ此時塙團右衛門直之  
汝れ怪物退治て呉れんと夜ふく付廻つて居ります中に果して怪物に出

遇ひ通らせも世にも稀なる怪物を蘇州廣島赤津の御殿に於て見顯はして退治に及ぶと云ふ一條後編と致しましむ。

第廿七席

世に不可思議なることは多くございませけれども就中狐狸好怪の棲む所に於きましては折々人の儲まざるゝことなしたも知らんでございますされど高が狐や狸遂に人の爲めに退治せらるゝは勿論の事でありませぬ。茲に福島正則の館に暫く身を遣して居る所の古狸かございまして容易に人に本体を示すもどなく或時は火の玉どかへて婦女子を驚かし又或時は不意に男子の髪を抜去ることもありしきに至つては人の股間を潜つて驚かす杯云ふ實に奇々怪々なる仕業を爲すこと多く愈々出で愈々不思議の振舞をかし此頃は又人が浮かりして居ると冷かき手を以て頬を撫でたり鼻を摘まんたりと云ふ評判が専らでございませけれども常館の主たる正則に對しては少しも怪しき事を致しませぬ有繋狡獪ある狐狸も天下の

門 衛 右 團 塙

門 衛 右 團 塙

豪傑に對しては其威に怖れて魔術を施すことの出來ぬにや誠とに不思議な事でもございますと去ればにや正則は最初の程は家來共の噂を聞きましても誠ども思はせ少しも氣に留めなかつたか一日と其噂が高くあつて正則の耳に入ることも度々あるものですから有繋の正則も茲に始めて疑ひを起し或時近侍のものに向つて其方等は折々妖怪の話をして居るやうであるが何ぞ不思議な事でも之れあるか 侍臣畏れながら申上げませぬ夜な／＼怪物顯れて臣下の者共も惱ましますると委細言上に及んだ正則は呵々と打ひに「假にも萬物の靈とし言はるゝ人間を何條怪物に魅するゝと云ふことこの道理やあらん爾等能く鑑みよ我れ幼少の折より怪物變化の怪談を聞かぬにあらねど其本を尋ねれば皆我心に迷ひ凡そ天下に妖怪變化かし然るに之れありと思ふもあしと思ふも一に我心に存るゆえ汝等若し當館に妖怪ありとの迷思もあらむには須らく心を鎮めて遠觀せよ世に怪しき者のなきを悟りかんと仰せられましたゆへ近侍のものも仰に従ひまして心を鎮めて幾度考いても考

へれば考へる程先に鼻を摘まれ頬を叩かれた事など思起して却て心淋しく相成りまそる夜は既に森々として草木も眠りしかと思ふ頃近侍のものは俄に廁に行きたくありました。が例の事を思ひ出して一人で行く譯にも往かん甲「同役々々々」乙「ハイ」又怪物顯れ候か 甲「イヤ左様ではござらん拙者廁に行きたう存するが御身も序に御同行なされては如何でござる 乙「廁のか供は近頃感服仕らん 甲「でもござらんか同役の情誼付合ひ給へ」乙「然らばお供致すでござらん實は拙者は疾うに廁に行きとう思ふて居つたのでござるが一人で行くも如何あらんと心得で只今迄堪えて居つた幸ひぢや」乙「ドンと起上つて縁側へ出る 乙「御同役手燭は身共に貸して下さらんか 甲「イヤ拙者先きへ用便致すければ尊公は殿の袖仰る通り氣を鎮めて此處にお待ちなされ」御同役何うも氣味が悪うござるなど廁の戸を開いて手燭を突出して中を覗いて居る 乙「何を怪さるものでも居らるゝか 甲「別に怪しきものも見ぬやうであるが何となく頬の邊りが冷たく相成つた、ヒヤ」

致してござる 乙「左様な臆病では往かん…… 兎角魂は臍の上に收めて行かんければ往かん…… 御同役何ぞガサ」音がそるではござらんか 甲「イヤそれは蘭の上を渡る風音でござる爾う云ふ尊公が魂は臍の下に落附いて居らんではござらんか 乙「御の通り拙者は臍の下に收めやうと思ふが何分魂が言ふことを聞かんで臍の上にフラ」して居るうれゆ責めて尊公の魂を落付けて呉れど頼むのでござる 甲「イヤ拙者も御同前ぢや併し尊公は餘りど云へば意氣地がないではござらんかと云つて居ると燈先が暗くあつたり明るくなつたりして居る 乙「御貴殿燈光が大分暗う相成つたではムらんか 甲「左様でござるか右の手に持て居た手燭の中を覗くと何者にや氷よりも冷かある手を伸してピヤリと頬を叩いたギャツと云つて手燭を投出した儘其の侍は一人の侍の袖に飛び付くソレ來た」ツと叫びながら座敷へ逃込たり倒れると妖怪は無手で鬚を掴かんで顔をスーッと撫で廻はされて是れ

亦たギヤツと叫んで氣絶してしまふ此の物音に驚いて奥のお小姓共が来て見ると二人の侍が手燭を投げ出した儘厠の通り椽に倒れてウムウム呻つて居る お小姓如何をされた 兩人イヤ何うも遣られましたお小姓共は左様の事のあるべき道理をしど交る 厠へ這入つて見たが何の不思議もかいお小姓御座公手前共只今替る 厠へ這入つて見候へど何の不思議もござらん尊公方の心の迷ひに候はせや 兩人イヤ決して迷ひではござらん其夜は其儘一同臥床に入りました

第廿八席

翌朝此事をお小姓が正則へ申上げると正則も不審に思ひ然らば身共が今宵厠に行つて妖怪を見現はし呉れんと其夜人定まり夜静かある頃正則は厠に這入つて暫く居りましたが別に類を撫でるものもなければ頭の毛を引くものもかい夫れからお小姓が這入つて見たが同様不思議はないソコで厠内の侍共は最と不審の事に思つて怪しからん妖怪ぢやわい拙者共にばかり無

戯をして殿には勿論お小姓に對しても何の悪戯もせんと云ふのは横着な妖怪なりと口々に悪口謂つて居るもの、夫れからと云ふものは夜に相成りまゐると女達は勿論の事誰あつて厠に行くものもありません、そるとお庭先に火の玉が轉がり出したり夜中に額をトントン叩いたり不相變妖怪が顯れまゐる容子正則に於きましても今が今迄何の不思議もございませんでしたが此頃は夜な々怪しき夢を見る、一晚二晩から格別毎夜の事でございませるか福島正則も大いに激して怪しき夢を見ると云ふも是れ未だ我徳の足らざるかり我心正しく行ひ邪からずんば怪物何ぞ來らん、我れ不肖なりと雖も幼少の頃より未だ曾て天地に俯仰して心に耻づるの行ひを爲したる例なし然るに如何なる妖怪なるにや敢て我を脅かさんとそるぞ此儘には棄置きならしど大に怒つて邸の掃除を仰出したものでございませから家來の面々は手を別つて邸内を隈なく掃除致されましたけれどもイヤ早や何處を捜しても更に怪しいものにては何にもない最う一度と云ふので今度は竹藪の中を掘

塙 團 右 衛 門

つて見るものもあれば或は古社床下を堀るもあり又は古池杯に飛込んで隠  
かく搜つて見たが矢張怪しいものどては鶴の毛だもあいな斯くまで搜しても  
見當らぬ上は是非に及ばんとて其儘に致して夜に入りまそると不思議ある  
哉天井裏にてガタ／＼ガタ／＼と云ふ音激しく家鳴り震動する様は地震か  
と疑はる許り天井裏で何者か暴廻つて居ることであるから如何とも手の  
着けやうはない夫れが爲に正則も神経が高かまつて寝るにも寝られませ  
／＼気が焦燥つ許り正則は起つてゐりや小川々々 小川ハイ何御用にて候  
か 正則盤面を持って 小川畏つて候然らば殿は今宵碁をお圍みおさる御意  
でござるか 正則イヤ敢て碁を嗜む譯ではあいが何うも近頃は夜分寐付か  
れんに依つて責めて碁でも嗜んだら氣が安らかに相成るだらうと心得る相  
手致せ 小川畏りました 正則併し其方に於ては乃公と碁を圍むからと云  
て諷ふやうな事があつてはあらぬぞ 小川決して左様な事は致しませぬ  
正則若し故意と負けるやうな事があると此正宗の名刀を以て汝の首を刎ね

塙 團 右 衛 門

るから左様心得ろ 小川畏りました必きワザ負け致そやうな事は仕りませ  
ぬ夫れから正則は白を持ち小川は黒を以て戦ひましたが固より正則は碁を  
嗜んで打つたと云ふ譯であら極下手なのでございませすから直ぐに負けて了  
つた 正則手は何目程負けたか 小川殿には十六目程お負けに成りました  
正則十六日ウ十六目負けては往かん爲らば今一番打たう今度は負けんぞ  
小川宜しうござりませ何うかお勝ち下さるやうに正則は宜しいと言つて相  
變らぬ白を調んでパチリ／＼と打ち始めた半過に至つて攻合ひになつた  
正則此の攻合ひは其方の負であらうな 小川御前御冗談を仰せあつては困  
ります五目申手は十三手と申して拙者の方は五目中手でございませすから攻  
めるには中々容易ではございませぬ御前のは目が一つも次ぎ落ちにある所  
が二番遠ございませすから都合八手しかございませぬ最う拙者の方が餘程目  
がよございませす 正則ナニ其方は何と言ひ居る五目中手は十三手とは何  
んだ左様なことがあるか 小川ございませす五目中手は手数にすれば十三手

で之を攻むるには矢張ソレだけの手数を費さなければならぬのでございま  
そ 正則「フム左様か然らば予が負けた打直さうと言つて三度目にまた打始  
めた前にもうそ通り正則は碁の道にかけては碌々心算も有りませぬに依つ  
て忽ち負けて仕舞つた小川に於ても三度が三度ながら負かしたくは無いが  
若し負ければ首を斬られると云ふ一件だから如何に殿様とは言ひながら  
「負けをそる譯にも往かぬから無嫌く三度が三度負かしたのでございま  
元來福島正則は負けることが大嫌ひの姓分三度に一度は是非其勝を取うと  
云ふ心で打つたのでございまそ所が三度も負けて仕舞つたから赫と怒つ  
て 正則小川「其方は如何に不慮なりと雖も主に向つて斯くまで敗北  
させたは不慮ではないか凡そ碁とか將碁とか云ふものは固より勝利を争ふ  
ばかりが能ではない再度勝つて一度負けるのが一度勝つて再度負けるとが  
云へばゐる愛嬌のあるもの然るに其方は不慮にも程こそあれ主従と勝負  
を爲して三度まで勝利を得るとは沙汰の限り一番位此方に勝を譲つても宜

さうなものではないか汝は主人を主人と思さる不届奴と言ふがらボカアリ  
と小川の頭を撲りつけた撲られて小川は御免と言ふて其座を下つて仕舞ふ

第廿九席

正則は小川が下つて仕舞つたがまさか後を追ふて何うそると云ふ譯にも  
往きませぬから 正則鈴木鈴木來つて碁の相手を致せ 鈴木「へ  
エぢやない何を愚圖々々致して居る早速此處へ罷り出うと言はれて鈴木勸  
兵衛は恐るゝ其處へ出ました 正則小川は不埒な奴ぢやに依つてもう予  
は彼と碁を圍たん今度は其方を相手に致し其方は碁にかけては強いか弱い  
か如何ぢや 鈴木左様にございまそ拙者は強くもなし弱くもなし大抵の碁  
打と碁を圍ちました分には負けもせん勝ちもせん何れにでも意の儘でおさ  
います併しおがら勝つても負けても故意と負け勝ちを致しましては諷ひ  
に相成りませ故可成は腕限り力を出し積りでございまそがソレも殿方と碁  
を圍むに於ては如何でございまそから…… 正則「イムニヤ文句は要らぬ免

門 衛 右 團 塙

も角も相手を致せ 鈴木長まりました、ソレから打ち始める所が最初の勝負  
では福島正則が二目勝つた、二番目には福島正則が二目負けた、ソレで福島不  
思議に思つて 正則「ヨッ勘兵衛最初は余が二目勝つて二番目に其方が二目  
勝つた」と云ふのは何う云ふ譯だ 鈴木左様にございませ先刻承りますれば  
凡そ勝負と云ふものは愛嬌があければおぬと併せられましたに依つて殿  
の御言葉の如く拙者が程よくやりましたのでございませ 正則「ナニ程よく  
やるど不埒なこと申さず、主を何と心得て居る」とまたもや鉄拳を固めてボカ  
アリと鈴木を頭を撲る 鈴木「是れは堪えられぬア、タ、」と言つてコン、  
下つて仕舞ふ 正則「岡田、岡田、」と叫ぶ 参れと申すに 岡田「へエ、恭  
の御相手でございませ、か 正則左様ぢや併し相手を致すにも法がある故意  
負けをしては往かぬ又勝らぬ道ぎても往かぬ、宜い加減に打つて往かぬ左様  
に心得分もつかしい注文だ故意負けをしても往かぬ、勝ち過ぎて往かぬ  
宜い加減に打つても圓つても往かぬと云へば最う別に恭の打ちやうが在り

門 衛 右 團 塙

ソレが殿様のことで己むを得ないから岡田は一番勝つては一番負け一番負  
けては一番勝つと云ふやうにして甘くやつて居りませと如何なる譯か正則  
の御機嫌を損じた様にて 正則「岡田、岡田、」ハエ 正則其方は手を玩弄物に  
致して居るナ不禮沙汰の限り此儘には捨て置く譯には相成らぬと言ひ終る  
や終らぬに突然ボカリと撲る 岡田「是れは恐入りましたと言つてまた御前  
を下つて仕舞ふ、次には誰れ参れ彼れ参れと云つて、出る者、」撲られぬ者は  
ない、カレコレ十五六人も御相手を申上げたけれども相手變れど主かわらず  
仕舞にはボカ、」撲られて引下つて仕舞ふ御側の御附杯と云つた所がさう  
数多の人数を抱へて居る譯でもないから今度は前に撲られた小川が出なけ  
ればと云ふやうな場合になつたが前の事もあるに依つて出る譯にもならず  
如何して宜しからんと一同が頭を集めて心配致して居りませ、所へ塙團右衛  
門直之が参りました、一同の者は之を見てホット一息吐いて直之に向ひて 甲  
直之氏直之氏 直之「へイ 甲甚だ申兼を次第であるが今宵殿に於かれて

搦 團 右 衛 門

は御殿なされることが出来ぬと仰しやつて斯様々々の次第拙者共は何れも二つ乃至は三つづゝ頭を摸られて如何にも御相手の致方もござらぬ就ては直之氏一つ殿の御相手を願ひたいが如何でござらう 直之、ウム、ナニうれば最と安きこと併しおがら拙者として性來基を齎む者ではござらぬおれとさう申をど何うやら知らぬらしく相聞えるが英雄の胸中自から閉日月ありて拙者も間暇の時分には以前加藤嘉明と一面の盤面に向つて雌雄を決したみどもある、基も中々やつて見れば面白いものぢやア、正則殿に於かれては基を御嗜みおさるど、ヨシいでや直之御相手仕つらんと云ひながらツカ〜と正則の居間に詰掛けました今夜は天が曇りて今にも雨降らんと云ふ有様にて最と寂しくなまぐさく覺ゆる夜 直之御前此夜は大分穩かならぬ夜でござる承はれば御前に於かれては基を御嗜なみおさると云ふこと此直之も以前加藤嘉明の許に在つた時分には随分基も團つた事もある先づ〜素人には負けぬ積りでござるに依つて御相手仕つらうと存じ推參致してござる元來直之

搦 團 右 衛 門

を高言を吐くのが癖でございまそから其氣質福島正則も豫め承知致して居るものでございまそからニツコと笑い 正則直之汝常に予に向つて戰場の物語りを爲す折柄には恰も天下に敵なきが如くに誇ると雖も此盤面に向つては汝も矛を倒にして降參んせずはあるまいナと聽いて直之カラ〜と打笑ひぬ

第三十席

直之、卿は天下の英雄豪傑と仰がると雖も此直之が眼より見る時は幸運兒たり傳へ聞く所に依れば若も豊公無かりせば何ぞ斯ゝる大身にあり榮華を極むることを得んや且又世人に其名を知られしは眼々嶽の戦争に於て僅かに鎗を打振つて聊かの敵を敵ぶりに過ぎざりしに今日斯ゝる安藝の大守とまで相成りしは是れ全く故の關白豊公の御蔭ありと言はざるを得んやソレに反して直之の如きは不幸にして主家を離れ今に斯ゝる姿に相成り候へ共然りとて舊主嘉明を怨みもせまソレは何かど云へば必竟吾が身の如き者



門 衛 右 團 塙

が人の知る所となら申して斯く浪々の身と相成りしは是れ天の命にして  
人力の如何ともすべからざる所と嘆息致すのみでござると聞いて正則大に  
激して 正則「黙れ直之餘りと言へば汝不禮至極なり此福島を目して幸  
兒とは何事ぞ汝又何者ぞ元ト匹夫にして加藤嘉明の許に事へ左馬助の爲  
めに放逐せられしは是れ汝が智能と武勇の用ゆるに足らざるに依るなり其  
後僅か五尺の身を寄せる所なく流れくつて予が家に参つて今日の飢を凌ぎ  
居るにあらせや一夜の宿りも恩の中其恩をば打忘れて吾れに向つて大言を  
吐くとは不禮至極なり汝少しく慎む所あつて可ありとは云ふものゝ直之  
吾れ汝が平生の暴慢不禮なるにも拘らる聊か見る所あつて今日迄汝の大  
言を氣にも留めを客の待遇を爲し居たり然るを今更一局の恭は汝の暴慢を  
咎むるも益なきこと何れ戰場に於て汝が平生の高言を實にせることもあら  
んなれ少しく其方も大言を慎しむが宜からうサア早く盤面に向つて勝負  
を致せ直之カラくくと打笑ひ 直之「御前の仰せられることは宛然猫の眼の

門 衛 右 團 塙

如く寝めるかと思へば叱り叱かるか思へば怒りもせ直之至極面白く存  
る 正則「コレ直之其様かとは兎も角も今此盤面に向つて勝負を決し其方  
が若し此正則に勝てば汝の望み通りの碌を遣すであらう此時 直之「開は至  
極面白き事なり然りながら卿が此直之に碌を興ふると言つたからとて強  
拙者の所望通りの碌を下さる氣支もあるまい又此直之は碌などは少しも  
望み申さん斯く御前の養ふ所となつて善がやく生命を全ふして居る身の上  
あるに尙ほ此上に何をか望まん縦令戯れとは言ひながら其義は眞平御免を  
蒙りたいと存せる 正則「フム成程其心根は正則感心致した宜い其力が強  
碌を望まんとならば強いて興ふる譯はかい併し何ぞ留みがあるであらう  
直之「左様聊かござるナ然らば斯う仕つらう若し拙者が勝利を得たならば殿  
の頭を一つポカリと撲るとは如何でござる吾れ若し碌を取れば如何に  
強く殺かれても其處は殿の御心任せ決して苦しくござらぬ左様御極めさ  
れては如何でござる御眠氣さましの一興ども存せる 正則「是は面白い宜し

門 衛 右 團 塙

い敵け々々……併し直之一つ二つでは互手とたえもないやうに思ふ若し  
予が勝たば汝の頭を三つ叩かる汝亦予に勝たば三つなり四つあり勝手に敵  
くが宜しい 直之、是は近頭面白し〜と直之膝の進むを覺ねませぬ 正則、  
只今も言ふ通り予が勝ちを得ば汝が頭を三つ撲るから左様に心得ろ 直之、  
宜しうござる然らば殿三つ叩きの勝負でござるナ 正則、如何にもと兩人約  
束を致した近習の者は何れも今迄ボカ〜撲られたばかりで如何に勝つ  
たからと云つて殿の頭へ手を上げる杯と云ふことは思ひもよらんことで中  
々左様なるとは臣子の分として出来る譯のものではございませぬ併し殿に  
於かれては元來基の下手なることは知つて居るものでありませぬから殿度負  
けるに相違ないどうか直之に勝たしたいとか直之が吾等の仕返しをして呉  
れるか杯と一同思ふて居りませぬから是は面白しと心の中で思つて勝負如何  
と待つて居りませぬ勇今や一箇の盤面に對つて戦を始めんとするに當り  
直之、御免下へと言へながら白石を取らんとする正則も亦白石を取らんとし

門 衛 右 團 塙

て双方で引張り合つて居る 正則、直之其方は客の分際として白石を掴まん  
と致そは不禮至極ではないか 直之、客なればこう白石を取るんでござる  
正則、黙れ直之假にも一宿の恩を受けたる正則と黒白を争ふに白石を掴まん  
と爲そは禮にあらずと正則は白石を自分の方に取つて仕舞つた仕方がない  
から直之は黒石を取つた 直之、然らば御身が先手でござるナと言ひながら  
パチリ〜と圍ち始めた直之も随分高言は吐くが矢張基は餘り上手ではな  
いけれども正則より幾分か上手らしい頻りに勝負を争つて居る中に果せる  
かな正則は直之の爲めに破れがいつて來た 正則、コレ直之、チヨクト待て  
直之、へエ 正則、予は剛に往つて參る 直之、今や決戦最中に剛に御出になら  
ぬでも宜しいではござらぬか 正則、イヤさうでない立上つて正則は剛に  
烈つて凡そ一時半ばかりも四方八方の話を近習共と致して居た戻て來い、  
直之は頻りに欠伸をして居りませぬと聽て剛より出て參つたサア勝負を致さ

第 卅 一 席

うと云ふのでまたバチ／＼打ち始めた所が前の勢えに引替へて何處を何うしたか勘定して見た所か直之が一目の負けになりか、つた最早碁の終局に近づいたことであるから直之は自分の盤皿の石を數へて見たり、正則の盤皿の石を何目なるか杯を數へて見たり、盤面の明地を一目二目三目、イヤ是では往かぬ斯うすれば一目の勝ちで二目の損になるとか、斯うしては如何かア、してはどうかと頻りに數へて見たり考へて見たが何うしても一目の負けらしい、ハテ是で一目の負けになるのか、残念千萬と暫らく首をひねつて考へて居つたが如何にしても最早恢復の仕様がな、ソコで直之も斷念めて此處で先きに一度負けて頭を撲らしてやらうとバチ／＼と碁を仕舞つて數へて見た所が案の定一目負けた、正則の喜び一方からす、直之も立上つて、正則アハ直之の吾が鐵拳の痛さを知れッ、と榮螺の如き殿元を以てボカリ／＼と直之の頭を三つ撲つた、家來連中は定めし直之が勝だらうと思つた所が此始未だから何れも皆な顔を見合はして居る中には、縦令自分が撲られても殿様

の事だから仕方がないが直之が平生の高言を憎んで居る者もあつて、野郎撲られて宜い氣味だ杯と笑つて居るものもある、此直之と云ふ男は中々負惜みの強い奴でございまをから斯く正則に撲られても、直之ア、快い心持だア、快い心持だ今夜は空合が何となく曇り勝ちであるから氣分も宜しからず、自然に肩身が凝つて參つた所へ殿から鐵拳を賜つて下された爲めに頭の重みも和らいだ、殿の鐵拳は斯様かものではあるまいと思つたが、此分では按察をどるよりも至極宜しい、正則は苦笑をしながら強情の事を吐かす奴ぢやア、イとは思つたが勝つて撲つたのであるからして何となく勇んで居る、もう一番と云ふので復たバチ／＼と打ち始めた、結局に至つた所が今度は正則が二目負けた、正則も餘程困つた様ではあるが前の約束もあるもので、それから嫌と云ふ譯には往きませぬ、正則直之サア約束の通り予が頭を打て、直之固より殿の御言葉を待たせして撲る積りなりと直之立上つて榮螺の如き鐵拳を振あげて正則の横面を狙つてボカリ／＼と眼から火の出る程續け打ちに

塙 團 右 衛 門

打つた直之もう宜しうござる正則はにがい顔をしかがら正則直之能くも予に鐵拳をわて居つたナ直之約束でござるからは是非に及び申さぬ拙者は今晚は是れにて御免を蒙りたうござる正則イヤもう一番打たう今度は予が必らず勝つ予が勝つて汝が眼と鼻の間をウツと力を入れて撲るが左様心得ろ直之左様なことは固より厭はねど併し吾れ若し勝たば先刻に勝る鐵拳を以つて殿の眼と鼻の間を殴りますれば如何に天下の英傑たる福島殿と雖ども氣絶するでござらう正則何を小癪な事を申す予若し汝の面部をしたゝかに打たば汝の面は微塵となつて打くだけんサア高言は無用なり卒さ勝負致さんソレども逃くるかサア如何ぢや直之イヤ決して逃げ隠れは致さぬ宜しうござる岡を挑まれて逃ぐるは卑怯の所爲にして武士の爲す所にあらぬ奇くも武士と生を得たからには敵に後を見するもとやあらん卒さ闘はんど両方一生懸命にあつて又バチリ〜と打ち始めた所が岡より下手ど下手どの勝負だから負けるも勝つも極つたことではない唯其時の調

塙 團 右 衛 門

子で負けたり勝つたりそのので少しも的にはならぬ中半過ぎに至ると直之の見當がはづれて大きな石を攻撃で取られた爲めに凡そ三十目の敗を取りさうにかつた直之殿暫らく御待ち下さい正則暫らく待てと言つたても今は勝敗を決する所何を因循致そ早や勝負を致せ直之イヤ拙者は一寸剛に参らねばありませぬ正則イヤ岡最中に至つて剛に往くとは卑怯なり直之否や〜然らぬ殿も先刻剛に往つたではござらぬか拙者も是非剛に往つて勘考致さなければならぬ何卒暫らく御待ち下さい正則宜しい然らば一遍は許して遣はすサア早や往つて参れ直之然らば御免と言ひながら直之はツカ〜と通縁を傳つて奥の剛に行く往つて見た所が中々下様の剛と異つて大層廣やかある剛で中には疊が敷詰めて香の物が焚いてある直之是は又すばらしい雪隠だナ流石は安藝の城主の雪隠は違つたものだとは云ふものゝ其元を質して見れば桶屋の伴市松なり榮枯盛衰は實に計られぬものだ彼の市松其人ではへ斯る出世を爲したるに何とて此塙團右衛門直

之に於ては淺間しくも人に厄介の身と相成り居るぞ嗚呼吾も亦不運なり今更愚痴を言つても追ひ附かぬ他口に出世を待つのみなり嗚呼是非もなき次第ありと直がの豪傑も團の中に思案に呉て居る斯てあるべきにあらまどて用便を足さうとして居ると怪むべし直之の眼前にゴツと青白き火の玉が現はれた

第卅二席

ハテ變だと思ふて能く見て居ると消ねて仕舞つた然うかと思ふと現はれるあつたかと思ふと忽ち消えて仕舞ふ直之の不意に火の玉が現はれて見えたものですから不思議なこともあるものだ尙ほ瞬つて居ると冷やかある毛だらけの手を差し延べて直之の顔をスツト撫でた已れツと言ひながらビヤリと叩くと斯は如何に怪しき物の手は叩かて自分の頬邊を力任せに叩いた因がの直之も氣味が悪くなつた斯様な所に長居は無用ありと思つて早々用便を足してズツと外へ出て雨戸を明けて手を洗つて居りまそと身

の丈稍一丈もあらんかと思はるゝ怪物黒髪を振り亂して眼は宛然松明の如く燦々と光らしたる妖怪が團右衛門の前に現はれてゲラ／＼笑つて居る其様の氣味の悪いこと言つたら普通大低のものならば氣絶した所であるが團がは剛勇並びなき所の直之ニツコと笑つて直之己れ不届き怪物奴が物見せ呉れんすと息巻けば時しも其怪物石影の如く幻の如く何れへど消ね失せたスルと復た團右衛門の眼と鼻の間をスツト撫で廻はした是は不思議ありと云さま力まかせにボカリと叩くと又も自分の鼻柱をしたゝかに撲つた是は仕舞たりと云て居ると又もや其妖怪はスツト現れたかと思ふ影の如く消失せて兩眼と鼻の間をスツと撫でた手を押へんとすると耳朶を押へる押へた手を握らんとすると頭の毛を掴む流石の直之も氣を蕉立てドツカリ廊下に座ると何やら頭上からドツチリ落ちて直之の頭を押附けたまた出て居つたか悪くき怪物の手業かと思ふ遠端直之の脇の下をゴソ／＼とぐぐり初めた如何に豪傑と雖もモヂヤ／＼の手を以て脇の下をくすぐられ

門 衛 右 團 塙

ては笑はせには居られない思はそワツハ、と笑ふとまた頭の上へ重き石を載せたるが如くにゐるさうかと思ふと復もや脇の下に手を差入れた此時直之滿身の力を込めて己れ怪物逃がしてゐるものかど其の差入れた手を搦つた怪物は引離さんとそれ如何にして團右衛門の力に適すべき直之前に引寄せて膝下にふまへ力を極めて頭を狙つてボン／＼打撲ぐると怪物はギイー／＼と屈を聲をして噛み附かんとする此時直之立上り一振りグツト振舞はしていきなり椽板の上へ投げつけて其上へ乗驅つて頭を搦へのける此物背に近習の者はバラツ／＼と現れ出で 甲「直之氏如何遊ばされた直之、イヤ何かは知らんが怪しき物現れ出でたり 乙「ソレは怪物でござる今日迄長らくの間吾々の頬を叩き或は撫で髪を引きたつた脇の下をくすぐる等様々の事を爲す怪物直之氏如何がござるしか 直之「う様に候か直之只今其怪物を膝の下へ引据はて息の根止めた所でござる今迄各位を惱ましたる怪物は如何なるものと致せしぞ 甲「イヤコレは餘の儀にあらま只今も

門 衛 右 團 塙

甲をる通り吾々を惱ましたつた殿を惱ました妖怪變化でござる 直之「最早各位左様な事は今後憂はござらん斯の如く疾に踏殺して候へば御安堵遊ばされ正則も今度は勝戦かり直之團より出で来れば十分に押負かして先刻の意趣返へしに一つ殿りつけてやらうと鉄拳へ力を込めて待兼ねて居りまそ所が此騒ぎに近習の者は手燭を點て先に立つて夫れへ參つて聴きました所がコレ／＼の始末見ると眞黒な怪物宿は今迄匠下の者を惱まし刺へ予に迄で煩ひをなした怪物あるか憎くき怪物直之能くも殺して呉れたるを賢みしと御褒め遊ばされた近習の者皆喜んで直之の力を賞讃へぬはございませぬけれども直之は少しも力を誇る氣色もなくグツと息の根を止めてもう是でよし何れへなり片附けて下さるやうと其怪物を側へに置いて手をうらぎ座敷へ戻つて参りまた碁盤に向ひ正則に向つて 直之「サア御相手仕づらん、イヤ今一戦と両方に石を取つて今や盤面に打下ろさんとする此時又彼の怪物古狸は氣の附きたるものと見えて瓦破と障子を蹴破つて座敷へ轉げ込ん

で恭盤の下にオツと立上つた之を見た家來共の面々は驚いた最早死んだことと思つて居た所がムツクと起上つて座敷へ轉げ込んで来たものでございませから驚いて倒れるやら逃込んで戸障子へ頭を打附けてマゴクして居るものもある正則は盤面を見詰めて居つた所がアワヤ怪物が眼前に現れたものでござい升から 正則は是は面白しどく 鐵拳を固めて突然怪物の横面をボカリと撲つた毆られて古狸は前にも直之の爲めに打懲らされて居つたものでございすから一聲高叫んで堂と其へ倒る所を直之も亦鐵拳を固めてボカリと眉間を叩く正則もボカリ眉間を叩く兩人代るゝ毆た

第卅三席

強力の正則直之の爲めに叩かれては如何に妖怪變化ありと雖も堪つたものではございませね、忽ち息の根絶えて冷やかになつて仕舞つた此時正則カラくと打笑ひ 正則直之吾れ今汝が頭を叩かんと全身の力を鐵拳の中は集めたが此怪物を叩いた爲めに最早力抜が致した 正則汝は運の宜い男だ

ナ 直之然りとば言ひながら今迄も此古狸の爲めに萬物の靈長たる殿を始めど致して御屋舖臣下の面々が迷はされしどは最と愚かなり愚かなりどカラくと笑つて居る今更正則も面目を古狸を見詰めて居る此時家來の面々も漸やく人心附いたと見わて恐わくながら部屋へ来て見ると彼の古狸は今度は正しく死んだらしい併し又もや生きたふどがあつては大事と四足を縛げ首をしはつて大きな木へ結び附けた翌日見た所が全く古狸に相違ないツコで正則は直之に向ひ 正則直之彼の古狸を予は食したう存するが願はくば料理をして貰ひたいものじや 直之此狸を食したいと仰つしやるか 正則如何にも狸汁と云つて是は豪傑の食ふべきもの 直之如何にも吾は亦一年朝鮮征伐の或る時虎を一匹捕獲致して主人嘉明と共に料理して其刺身を食ひしことあり 正則成程予も蟒蛇を退治して其の味噌漬を食ひしことあり狸杯は茶漬の菜には至極適當なり 直之拙者も其御接待致したうござるに依つて然らば是より料理仕つらんとソレより其狸を料つて其朝狸汁と

塙 團 右 衛 門

稱して主従の者が大に喜んで食たさうでふいます其後は正則の屋鋪に、物  
物が失たすと云ことでございませしが實は狸と云ふ奴は不可思議なる動物で、  
分人を魅惑することもあるさうでございませす、屋敷の者は平生團右衛門の高言  
を憎むやうでありましたけれども今度の働にて其贖玉の大なるを誰とて賞  
賛せぬものはございませせん、楮て正則に於きましては客とは言ひながら塙團  
右衛門直之は氣性も勝れて居る天晴勇士あるに依り斯て置べきにあらざれ  
ば遂に直之を以て伏見の御番代に言ひ附けられた、直之は番代となつて大に  
喜び愈々伏見に参るふとにありました言談にも英勇色を好むとかや、直之は  
伏見の番代とあつて伏見へ参りしより是とて別に爲ることともなきまゝ、家來  
一平を連れて昨日は東山に遊び今日は西山に遊び又明日には嵐山に杖を曳  
いて月を眺め夕には鴨川の邊に涼をとり美味飽食しく一年ばかりの間と  
云ふものは毎日々々のやうに遊びくらして居りませ、直之の身にとつては伏  
見の番代は眞に結構の役あれば自分も此外も喜んで實に福島番代の役

塙 團 右 衛 門

目位い、好い役はないと屋敷の者と打語らつて居るふともありませ、一年は  
かりの間は眼珍らしい所から空しく遊んで居りましたが人と云ふものは暇  
があるどさうしても横道に這入り安いものと見え、殊に直之とても尋常一様  
の人間で木石ではございませぬから女を愛する情のさい譯では、さい、遂には  
月に浮かれ花に戯れて面白く遊んで居るのを課業にして居りましたが其頃  
京都の賑ひと云ふものは一通りからず徳川の威勢まをく、盛んにして九州  
の諸侯で見れば大坂に足を留め、走して伏見に足を留める者も多く是が爲に  
伏見に集まる諸國の諸侯方は皆な京の祇園にあらざれば島原島原にあらざ  
れば祇園と思ふ方に足を向けて浮れ遊ぶ者も多く、四條の南には芝居小屋が  
掛つて居りまして其繁昌言はん方なく其南小屋の劇場には誰を出づるかど  
云へば其頃の女歌舞妓勿論其頃は藝妓舞妓に至るまで歌舞音曲に身をよせ  
ざるはないと云ふ有様従つて花柳の巷に足を踏入るゝ諸侯方も亦歌舞音曲  
を弄ばざるものはございませせん、毛利島津或は伊達等は殊の外歌舞妓役者に



塙 團 右 衛 門

最負なされて日毎夜毎に浮かれて居ると云ふ始末其中で最も歌舞妓役者を愛されましたのは伊達政宗其人で伏見の屋舖より屢々四條の南に参りまして夜になれば鴨河の流れに沿ふて居る丸山の二階に女歌舞妓男歌舞妓の面々を招いで打興すること日も亦足らぬと云ふ有様塙團右衛門直之も足を南に向けた借て此所に於て最も名高き女歌舞妓は誰れぞと言へば出雲より出た所のお國とて其頃には日本第一の女俳優と持囃された位に美麗なる役者でございませぬ道が直之も一目お國の姿を見て戀風ソツと身に染みて夫が爲めに計らずも伏見番代の役目を擲ち毎日々々南座に通つて居りまを又男俳優で其當時名高かりは名古屋山三郎と云ふ俳優でございませぬ直之は日毎に南座に参る所よりして少々のいさかいより此男俳優の名古屋山三郎と四條河原に於て決闘を致して其面目を汚すと云ふ一條は次席と致しませ

第卅四席

塙 團 右 衛 門

でございませぬ就中京大坂の女子は口跡はやさしいけれども腹に畏ありとか成は口には蜜を含んで居るけれども心の中には刺ありとか言ひませぬが私には其眞偽は知りませぬ兎に角關東の女子に較べて見れば最も艶麗に致して男子を腦殺せるの價値ありさうに見受けますチョット會つても腰が低い中々其應對も巧者でございませぬ然るに出雲から出ました所の國と云へる女子は容貌至つて美しく粧りかざつては居りませぬが其見識は又格別で大名の前に出ても容易に頭を垂れぬと云ふ位ぬお女子でございませぬと申すも何か心に思ふ所があるからでございませぬが伊達政宗公の御前へ出てさへ少しも平身低頭なぞ致すと云ふことなくくに貴所はん何卒是れから御最負を下されと云ふて秋波を注いで物やわらかに言へば流石の政宗も茫然として手に杯を取上げ 政宗「國ヨ予が前に参つた其時は唯一曲の舞曲を舞ふて來れんばソレで宜しい」トはもう酒の相手をして呉れさへすれば東にびめの政宗は却つて其方が喜ばしう存する其方も其方が結句氣樂であらう

塙 團 右 衛 門

かくに左様で御座まそ殿の御方たの御側侍に侍れば是より有難ひはございませぬと云ふに言ふばかりにて心の中は少しも見せず偶々扇子を執つて舞曲を演ぶると云ふのが關の山にして僅か一席の興味を誂へしのみにて諸侯方は貴重なる所の黄金をも塵垢の如く興へ口には珍膳美味を味ふて歸ると云ふのが絶世の美人出雲のお國が日々の勤めでございませぬ左様を講でございまそから仕舞ひには京都所司代たる板倉伊賀守の屋敷にさへ時に依つては往かぬとも暇らぬ程の全盛に相成りました龜川家恩顧の人々はお國のためには幾許かの黄金を費さなければ幅がきかぬと云ふやうな有様でありますからお國の全盛實に察すべきでありませぬ西九州の大名は固より其他何れの人々も色香には迷い易いものでございませぬから吾れもと黄金を散らしてお國の歡心を買はむとて集い來れども中々お國は頭を左右に振つて容易に愛嬌を賣らぬと云ふ俳優の輩にしては珍らしき大見識のある女子でございませぬ其本心を現はしおば課業の妨げとぢつと堪えて多

塙 團 右 衛 門

數の男に向つてはザッリと流眼に秋波を注いでニッコリ笑ふ其容顏真とに數多の諸侯をして鳥頂天に迷はしむるも左こそと思はれませぬ外面女菩薩内身女夜叉と云ふ程ではございませぬが諸侯方の御前に出でましては少しも恐るゝことなく又日毎毎に黄金は眼の前に山の如く撒き散さるれども決して黄金に迷ふことなく之を見ることが宛然石礫の如しと云ふ恐しい見識の女當節の女子のやうに金を見るとビョコ／＼頭を下けて御世辭を使ふと云ふやうな俳優ではございませぬ、  
父手此のお國と云ふ俳優を慕ふて居る人は演の眞砂の如く數多くあれど一指をさしたものはございませぬ諸侯の中でもイヤ尊公若し尊公がアノ女子を首尾よく手に入らば二つ掛換のない捕者の首を遣らう杯と首を臨け物にして争ふ者さへある位でございませぬ所がお國と二おき交はりを爲して居るのが名古屋山三郎と云ふ男でございませぬ其男は表面唯たお國の良人と云ふのでございませぬけれども今はお國とわりなき契を結んで南座の

後見を致して居りませぬ公然の男風に頭には深網笠を冠りて腰には人並の大  
小を打込み身には美しく綺羅を纏つて日々女歌舞妓の後見に行く折々は男  
歌舞妓に出席して舞の一曲を演ずることもありませぬ其手振足振は世の常  
のものにあらぬ名人上手と言はれる位の男普通大低の者では到底企て及ぶ  
所ではございませぬけれども山三郎は格別好い男と云ふ譯ではございませ  
ぬが當世俳優社會に生活するやうな奴ではなぬ唯一種の藝術を備へて居る  
古今一徹でございませぬ男俳優中で傑物とも云ふ程の男でございませぬ此山三  
郎の顔は無茶苦茶として賣面の男ではありませぬが舞曲は大層やさしい所か  
ら浮氣女杯は頼りに兎や斯くと評判致して居るも可笑しい 甲「アノ名古屋  
の山三はんのやうな奴い男が此世に二人とあらうかいナ 乙「ホんにさうぢ  
やませアノ鬘の生振が何とませア美しいぢやアませぬかと互に噂をして居る  
女もありませぬ、

第卅五席

當今でも鬘の生え方が好いと云つて女子に好かるゝ者もありませぬが併  
し類が多い爲めであるか但しは時勢の進歩の爲か餘り鬘は賣れませぬけれ  
ども其時分は鬘が随分賣れたものと見えて山三郎は大層な評判をどつて居  
りませぬ勿論鬘の爲めばかりでもございませぬが兎に角眼に若程の美鬘で  
あつたるものと見る借塙團右衛門直之に於ては今日も南座の機敷に下僕の  
一平と二人にて酒嗜みながら芝居を見て居りませぬ一平に於ては何時もお國  
の出る度大喜び 一平「殿様えらア好い女子でござりませぬ」と獨ホク「と  
喜び口から唾れ垂して呆氣にとられて居 一平「オ、若し殿様御覽じまし  
團右衛門「コレ」一平「殿様と言つては往かぬゾ 一平「ソレでは親方……イヤ  
大將と呼ませうか 直之「黙れ一平吾は塙團右衛門直之であるから塙殿と呼  
一平「ハイ畏りませぬ 直之「併し貴様のことは一平々々と無暗に此方が呼か  
ら左様心得て宜らう 一平「ソレに用もないのに一平々々と呼ないでも宜  
ぢやありませぬか 直之「イヤ何時もお國が出ば乃公が一平々々と怒鳴るか

門 衛 右 團 塙

ら其積で居れ 一平其様な事を言れちや私はお國にほれられる氣支はありませぬ 直之馬鹿奴貴様のやうなボクネンヨンに誰がほれるものかイヤ何でも構ぬお國が乃公の顔を見て來れ、ばソレで満足するのだから彼が出て來からば彼が耳に響わたる程一平々々と呼から其積で大き返事を致せが宜 一平ハ、アソレではお國に聞えるやうに怒鳴のでござるかと言て居中にチョンと打た拍子木を相圖に舞臺に掛たる引幕が開や否や劉曉たる音樂の響と共に現れ出たる一個の美人がございませぬ其嬌妍と粧いたる姿は宛然雲の上にいる天人も斯やあらんと思はる、ばかり支度ははでやかに飾たつて舞曲まふさまもたよ、と年は二八の花盛り、コレでも人かど怪まる、位な優さ姿數多の諸侯を悩も實に理はりや眉は秀で目差を、しく口元しまり齒は皓く三國に其名も高き富士びたい容顏驪として言に云れぬ妙味あり腰は細そり柳腰之を見て居る見物一同は唯ヤンヤ、の聲ばかり暫しは鳴も止ざりけり、聽て其呼ぶ聲も少しく穩かにまつたと思ふ頃にも棧敷

門 衛 右 團 塙

の 中段に見て居たる塙團右衛門は大聲を張あげて 直之「コリヤ一平々々一平」ソラ初まつたゾ 直之一平「アノ女俳優のお國は名人だ出雲のお國は名人だが情夫があるさうぢや其男のあるのも知れ毎夜々々見物に來る愚鈍者が大層あると云のは借て、笑止々々世の中に随分愚か者もあるものぢや、一平其男と云のは如何ある人物ぢや 一平「塙殿遊興の場所へ來て左様を歸ぬことを仰やらぬが宜しうございませぬ 直之「イヤさうでない、ア其男と云のは誰ぢや何物ぢや其方は知つて居らう、一平教えろ 一平「左様でございませぬ誰か情夫でございませうかど云は定めし立派な人と思ふでございませうけれども其男と云のは武士か何だなら兎も角名古屋山三郎と云た同じ俳優の仲間ださうでござると聞て塙直之カラ、と打笑ひながら 直之「何うせ役者風せいの如き下賤の女子はソナ者より外に己の思ひ人にせることは出來ない、又彼等が如き者は眞の豪傑の弄あそぶべきものにあし容貌は如何程麗はしと雖も其心の賤しさを加減を思へば嘔吐が出るワイ、ソレも知

塙 團 右 衛 門

きに隠々の諸侯方が毎夜々々招いで宴席に侍らせるとは何たることかア、  
見い嫌らしい嘔吐が出るわい 一平「旦那々々餘り汚ないことは仰しやらん  
が宜がそせ 直之「ア、心持が悪くかつた 一平「サア歸らう 一平「オヤ旦那  
もう御歸りになるのでそか 直之「イヤ歸ると言たからどて強ち歸る譯でも  
かい 杯と二人が大きな聲を揚げて怒鳴り居ります見物人は顔を皺めて五月蠅  
奴だナ 乙「本當に五月蠅奴だ芝居見に来て何を怒鳴り居やがる世の中にア  
ノ位な大白痴があるかど口々に悪口を言て居る者もあれば又「ヤイ 三品  
武士何を愚圖々々吐しやがる、夫程嫌な芝居からばサツ 乙「歸りやがれ  
間拔め 乙「何處の穀潰した人並に大小ばかり御大層に二本も差して居やが  
つて芝居の見方も知らねへ野郎だ野郎サツ 乙「歸りやがれど何れも大き  
おピン 乙「響く聲で口々に塙團右衛門直之を誹つて居ります其機敷の中に  
大坂にて中々輻の利いて居ります、斯の大野修理が團右衛門の雜言を聞て居  
りましたが 修理「コリヤ彼は何物あるか無禮千萬な奴ぢや、誰か鎮めて參れ

塙 團 右 衛 門

と言はれて近習の者は忽ちの中に大野修理の命を奉じて塙團右衛門直之の  
機敷へツカ 乙「踏み込みぬ

第 卅 六 席

近臣「アイヤ其許は何れの御方かは存せされど大坂に於て今や飛ぶ鳥を落す  
大野様が今日は御見物でござる靜かに召され 直之「ナンだ、大野と云ふ飛  
ぶ鳥は……鳥からば飛ぶはさるまい馬鹿あ吐をナ靜かにするもとは出来な  
い福島正則の許にあつて鬼とまで紳名せられた此塙團右衛門直之が見物致  
すである騒々しいとあらば其許から立退くが宜しいと使の者を睨め付けた  
大野修理も耳傾けて聞いて居りましたが、塙團右衛門直之と聞いて僅はど吃  
驚した此様な者にからかつた所が仕方がない福島へ使ひを遣つて掛合ふと  
思つたがソレも大人氣な話と云ひし此儘に捨て置いては一旦言ひ出した  
ことであるから大野修理の面目にもかゝる如何して宜からんと思つて居る  
中に其言葉を聞いて隣りの座敷に居りましたのは是れ何人ぞと云ひませ

門 衛 右 團 塙

うか陸奥に其名も高き伊達政宗其人をございます政宗心の中に思ふやう謀  
て其名前を聞いて居つたが塙團右衛門直之と云へる奴は悪むべき奴ぢや戦  
場にて威張るから兎も角遊興を致そ芝居の場に来て邪魔を致すとは不届  
千萬ヨシ〜一つ名古屋山三郎を此座敷へ呼び寄せ遊らしめの爲めに彼れ  
と喧嘩をさせて遣らうと懸て自分が居りました右手へ名古屋山三郎を呼寄  
せますと山三郎はソレへ出て参りまして 山三郎、コレは〜御殿様今日は  
未熟なる出雲のお國の芝居を御見物下され誠に忝じけふ存じます 政宗、  
ア、山三郎能く参つた今日予が参つたのは國の芝居を見に来たのではない其  
方を見に参つた其方の藝は又格別ぢやぞ 山三郎、是れは又有難き御説を蒙  
むるものか 政宗、イ、ヤ其様に謙遜致すには及ばない話は變るが其方は  
安藝の福島には未だ最負にあらぬかナ 山三郎、左様にござります、御縁海  
して未だ福島様の御前には出たこともございませぬ今日迄の所では福島様  
は外の御殿様方とは違つて國を御最負に遊さばれたるもございませぬ

門 衛 右 團 塙

政宗、ア、左様かい今其方を一番最負にするは誰だい 山三郎、左ればにござ  
る秀康殿にてござる 政宗、ア、秀康か 山三郎、先つ頃も國を御呼び遊ばし  
て一曲の舞を御覽遊ばされてくには日本一の女歌舞妓ぢやどの有難き御説  
を下されましてございます實にくににとつては面目至極でござる 政宗、イ  
ヤ其方は大層謙遜致すが誰とて未熟なものを褒める筈がない彼には彼方も  
日頃感心致して居る其方は彼の女子を妻と致したノと言つて政宗は近言を  
一目見るや政宗に附従つて居ました宗家の者がゲラ〜と打笑ひ 近習、ア  
、山三郎は宜い妻を待たれたソレを知らずに何れの馬鹿者か知らぬが國の  
色香に迷ひ毎日々々通つて来る者があるゾ 山三郎、左様に候か實に殿の御前  
に如何はしき事を申しませやうにございませぬが拙者の如き風せいを如何に  
も國は二かき良人と思ひ操を正しく致して居りませ世には馬鹿者もあつ  
て其操を破らさんと此芝居小屋に足を踏み込むとはサテ〜笑止千萬氣の  
毒でござる 近習、ア、其方は國と最早婚禮を致せしか 山三郎、左ればに

さる未だ表面的な婚禮を仕まつらさ候 近習何故ならば婚禮を致さぬか  
山三郎左様にございまを御案内の通り彼も歌舞妓役者でござる又拙者にて  
も同じ歌舞妓役者のこととございまを故婚禮を致しては却つて世間の思惑  
も如何ならんと差扣へて居りました殊には殿の御前に伺ひまして舞ひの一  
曲も演る者が良人ありと申しては如何と存じます故に扣えて居りました  
次第にござる 政宗ア、左様かッレはッ心つかひ尤もに存る此政宗に  
致しても國の色香は愛せずとも彼れの藝は氣に入つた其方も亦同じく國を  
此外なき女子と愛するの満更其方と此方では縁なきものではなかい若しも  
何時なりと婚禮致す譯けならば此政宗が媒介者となつて遣はすが如何であ  
るナ 山三郎難有御詮には候へ共甚だ恐多きふとに心得ます何れ時節到來  
致せしならばまた殿の御世話に相成ることも候はん 近習コレ山三只今殿  
の仰せらるゝ通り一刻も早く婚禮を爲すが宜しからん左もかければ執念く  
附き纏つて或は手管を以て或は黄金を撒き散らして其方の妻をねどらんと

する奸物もあるぞ其奸物と云ふは餘の者にあらず今しも怒鳴りし……のウ  
山三劍呑ぢや〜斯様な奸物もあるに依つて一刻も早く婚禮を披露するが  
宜しからう如何にお國か操を正すとは云ひながら執念く附き纏はれた日に  
は操を破ることおしとも云へないぞヨ山三此所は能く〜氣を附けヨ

第卅七席

と聞いて山三カラ〜と打笑ひ 山三郎殿の仰せ有難くは存じますれど彼  
のお國に於きましては決して左様なこととはございませぬ彼が眼中には此山  
三を除いては外に一人の男はありと云ふお國の心掛け如何なる惡魔が魅つ  
ても如何に金を振撒れても金の力と腕づくで我妻のくにが自由にふるべき  
ものではございませぬ若しも相手が腕づくで此山三を無き者にせん杯と云  
ふからは多少体術も心得てござるに依つて一人二人の葉武者ならば後々の  
疑らしめの爲めに片端から斬倒し申さん 近習コレ山三左様其方が論つて  
居ると若し暗夜の道中でも致そを待受けて其方等の首を取らんとする馬鹿

門 衛 右 團 塙

者があつたならば如何致そか 山三郎左様な馬鹿者が候へば十人はものか  
は百人二百人と雖どもかどか恐るゝことの候べき山三不幸にして未だ千軍  
萬馬の間を往來せざれども荷も帯刀致して居り又幼少の折に鍛いあげた所  
のト傳の術を備へて居りまそ百人千人なりとも何を恐るゝみどの候べき  
近臣コリヤ山三餘りの高言は失敗の基ぞや傳へ聞く塚原ト傳流の奥儀を極  
めたりとは云ひながら生兵法であるから千軍萬馬の間を往來せし者の相手  
かりとあつては何ぞ打勝つとあるべきや 山三郎御尤には候へ共吾れにも  
腕に覺へあり五人や十人の物共が現はれ出でたればとて何でう恐るゝこと  
の候べき刀に手を掛けるにも及ばず捻り殺して見せ申さん 近臣山三其方  
は過日福島家に於て怪物を退治した塙團右衛門直之と云ふ者を其方は知れ  
りや 山三郎其名は微かに聞及び候へ共未だ面會致したことはござらぬ  
近臣ハ、ア左様ならば話して聞かさうが彼は加藤嘉明等と朝鮮本島を踏み  
にちりし者なり刺さへ朝鮮國に於て虎を打殺し其刺身をは食ひしと云ふ剛

門 衛 右 團 塙

の者が其方が妻の戀風に迷はされ其方を狙ひ居ると云ふことを知らざるか世  
の戀がたき程恐るべきものはないぞと聞いて山三郎はチロリと團右衛門の  
顔を睨めつけ 山三郎「ナアニ縱令朝鮮に於て小虎一匹打殺ろしたとて此山  
三の眼から見る時は小兒の如き白痴者我が妻に執心あつて此山三を狙ふと  
あらば憚りながら此山三の股倉に踏まいて美事極まり申すべし」塙團右衛門  
直之も餘りの高言に烈火の如くに怒り 直之「餘りと云へば不禮なることを  
言はるゝものか伊達も伊達殿なり又賤しむべき俳優のくせに此團右衛門  
を股倉にかけて殺め殺すとは不禮千萬川捨はからぬ今の言葉は聞捨てには  
ならんぞ 一平「イヤどうも随分高言を吐ますナ併し面白く 直之「コレ  
一平何が面白いの其方は血迷ひはせぬか 一平「旦那御冗談仰しやつちや往  
けまさん私に芝居を見て血迷する杯と云ふるとはありませぬ如何ぞ其方  
でも何とか言つて遣らうではござらぬか 直之「オ、ソレもさうぢやノ聞け  
ば山三と云ふ曲物は身分をも顧みず鬻杯を生やして居ると云ふが真とであ



塙 團 右 衛 門

るか 一「左様にございませる顔に髯を生やして居るばかりではなく胸元にも大分髯がある」と云ふことでござる世の譬ひに胸毛のある奴は臆病だと申します。随分山三と云ふ下司奴は口には高言は吐きまそれと至つて臆病者のさうにござる然もあければ歌舞妓役者のゐくくの如きに儘にされて居る譯もござるまい 直之「成程左様かナ……成程聞けば髯の生えて居る奴は鐵砲の音を聞くと大抵逃出すと云ふが左様かノ 一平「如何にも髯の生えて居る奴は重に臆病未練の弱者でござるソレが證據には朝鮮人は皆な髯が生えて居りませるが至つてハヤ臆病でござるアレを見ても御分りにあるでございませう 直之「成程左様であるかナ、シテ見ると髯の生えて居る奴は十中八九は意氣地がよいと極つて居るナ氣意地のよい奴はとるに足らぬ子供にも劣る奴が役者風情になつて人の玩弄物にふるるのであらうな 一平「如何にも左様でございませうと頻りに話をして居りませしたのを聞いて流石の名古屋山三郎もムツとして 山三郎「如何に彼が塙團右衛門直之と申する奴にて候か

塙 團 右 衛 門

無禮な事を申する奴を一生して居たからとて意氣地がよいと極つたものではよい、伊達殿如何思召そ 政宗「警令髯が生えて居つても豪い人物も澤山あるソ、加藤主計頭杯は滿髯花々として宛然髯から生れた如き顔色然るに大明朝鮮國にあつては鬼將軍と呼ばれたり古へ關羽張飛は其勇無双なれば是亦其滿髯は三尺に餘れる大豪傑あり、寧ろ鬚髯の多き者は英雄豪傑なりと聞く、山三「汝も髯がある故豪傑であるゾ、髯の無き者は之を妬むのぢや、儲も笑止一平「旦那またやり込られやしたナ 直之「然らば是非に及ばぬ彼れ山三が戻りを待つて……一平「目にも見せて呉れませう 直之「宜しい然らば直に立戻らう、多寡の知れたる役者共相手にそべき團右衛門からねども」ト立上つて山三郎の前を行過ぎやうとして故意と山三の横顔を刀のみぢりてスツト擦るる爲めに皮破れ肉さけてダラ／＼と血が流れ出す、一平は素知らぬ振りにてすり寄つて来て山三の頭をボガリと叩いて立去りました。

門 衛 右 團 塙

伊達政宗は人事とは云ひながら餘りの不慮に満面に怒氣を舍んで 政宗山  
三其方の顔破れて血が出るぞ早や療法を致せ……不慮者谷めエと家來に下  
知を爲したるに依つて 家來ハ一ツと應へて立上らんとす此時名古屋山三  
郎は鮮血の滴るをも顧みませんでツト立つて今や南座を出でんとする直之  
が太刀の鑓を引留め 山三郎不慮者待て直之は後を誤向いて 直之は此  
方に用があるか 山三郎汝は何故あつて鑓を以て吾が顔を負傷しぞ 直之  
ナニ其方の顔を破りしと 此方は一向左様な事は存せぬわい 山三郎存せ  
ぬとは言はせぬ不慮にも程ふそあれ假りにも腰に大小を手取む者が斯くま  
で狭き機敷なれば身を縮めて通るが當然なるに狭き所の機敷を切若無人の  
舉動汝は此の機敷の後方に人の居るを知らぬかソレとも汝の両眼は節穴同  
然るるか 直之何を吐すか狭き機敷の後方に居る奴ころ不慮なりヤツ其處  
除け何を隠さん乃公は塙團右衛門直之かり用事あらば吾が館に來れと言ひ  
放つて塙團右衛門は出んとする山三郎はさうはやらじと跡追駈けて 山三

門 衛 右 團 塙

郎コリヤ團右衛門直之とやら侍て 直之汝の如き愚鈍者に用はかし 山  
三郎逃ぐるとは身法未練ソレとも汝は何れに居る者なるか 直之何處と  
知れたこと用事あらば何時にても豊後橋の福島家へ來つて吾が屋敷を問へ  
然らば汝の名は何と吐そか 山三郎吾れころは當時俳優中に其人ありと知  
られたる名古屋山三郎なり 直之フハ、ハ、左様か然らば尙ほ以て河原乞  
食をよに用はし其處除け 山三郎イヤ避かぬとしかも四條の往來にて骨  
格逸しき武士が往かんとするをさうはやらじと帶際を捉へた男は打つて變  
つて身長の小づくりな男物見高いは世の慣ひ見物は臭きに蠅の集まる如く  
甘きに蠅の集まる如くに集つた 甲いらい事が出來ました是れは一体何で  
そな 乙イヤ事の起りと云ふは鞘を當てたとか鑓をあてたとか當てんどか  
云ふとから起つたこと……で 甲さうでそか 丙何と言ふ御方ぞそか 乙サ  
テ、お前はんか知りやあへんかいナ 丙私知らんさかいだ、教へてお呉れ  
やす 乙ソソなら申しませうかいナ、此起りと云ふは此方の御武士が出雲の

塙 團 右 衛 門

お國の色香に迷ふて毎日々々見物に來なはるさかいに…… 丙ソレが何うしたんどす 乙ソレから間違が出来たんで此方の小さい鬘ムシヤクセヤとした男は名古屋山三郎と云ふ男歌舞伎でおそ又此方の大いお男は福嶋様の御番代でおす 丙ソレからアノ塙團右衛門直之と云ふてお加藤左馬助はんの所の御屋敷を退く時におにかいらい字を書付けて走りやはつたアノ方でおそか 乙さうどもソレでオ名古屋山三郎の方には仙臺の伊達はんが附いて居り又片方には福島はんが附いて居おはるから今に戦さにおりまひよう安藝の國と仙臺との戦争でおす何方が勝つか負けるか分りやへんが兎に角やつて見やはるが宜い杯と噂をして居る中に團右衛門は威猛け高になつて直之其方は其處に立ふさがつて此方を通さぬと云ふか然らば何うすれば宜いのぢや 山三郎何うするとは知れたること大地に兩手を衝いて免せと言へば勘辨して遣はさむ 直之馬鹿を申せ河原乞食の分際にて武士に向つて大地に兩手を衝けとは不禮千萬 山三郎左様仰せられれば已むを得ず山三

塙 團 右 衛 門

郎とて今もそ斯く賤しき業をして居るもの、原を置せば武士の後胤あり此儘に泣寝入つては先祖の位牌に對し其昔し兩刀を帯びたる手前に對しても面目次第もあきこと、是より汝と何れに於てか勝負を決せん團右衛門直之は阿々と打笑ひ、ナニ吾れと勝負を致そとナ小癩な奴ぢや相手とするに足らざれど其方の望みを詳むも如何なれば勝負致してとらせん 山三郎橋の下には幸ひにも水少なければイデヤ河原に出で勝負を決せん月は牙え渡つて一點の曇りあき十四日の夜 山三郎生命は彼處の河原にて受取り申さん 直之能くも吐したるを蠅螂の龍車に向ふとや云はん大膽にも能くぞ吾れに及向ひ致すと申せしナ鶏の肉を割くに何とて牛刀を用ゐることを爲さんや兎に角其處逃げ 山三郎汝ぢ吾れを鶏に比せるか吾れ若し鶏あれば汝は正しく鼠なり 直之不禮あり山三とやら黙れ吾れ昔くも福島の番代あり汝の如き河原乞食に鼠と言はれて此團右衛門の顔が立たんやイデや汝の首は可憫ぢがら打取り呉れん 山三郎オ、望む所ありイデ來れ 直之一平參れ一平

も今更驚いて 一平「イヤハヤ、えらい勝負にあつたワイ、と思ふて居る中に、  
人はバツ／＼と四條の河原に往つた様子、此事早くも南座に聞えるや、数千の  
見物、今四條の河原に於て、福島の家、塙團右衛門直之と男歌舞妓、名古屋山三  
郎が決闘をせると云ふ噂さ、ワツと云つてガヤ／＼して居ると、雖も幕が開く  
と共にソレに立出でたる出雲のお國、双眼に澄々たる涙を浮べて、満場の客に  
向ひまして

第卅九席

お國「偕て是れよりお名残りの一曲を演じませる筈でございまして、あれど真  
しや未だ晴れての式は致さねど生涯我身の連合ひども思ふ名古屋山三郎殿  
は今日御客様の中にて不禮せしものありとやらにて、今しも四條の河原に伴  
はれて首を刎ねるとか、細ねられるとか云ふ危急の場合、妾の身の上によりか  
いらし災難を外事にして、妻たる者の國が無憂に於て舞曲を演でることども叶  
ひませぬければ、セメては良人の先途を見届けの爲めに、參る所存若し吾が良

塙團右衛門

人が首を打たれまれば、國は女、身ながらも豫て習ひ覺はの短刀もて、武  
士の生命を貫はむ覺悟なり、美ん畢連添ふ名古屋山三郎の仇を報ひ候らはん  
是れ吾身の勤め、營業の手前、先敵ながら今宵は是にて舞曲も終り候はん、御客  
様には宜しく國の心中を御披露下され、幸ひにして吾が生命無事ならば、今宵  
の御埋合も致し、あん若も吾身に幸なくして、生命を茲に終りなば、今宵は生涯  
の御名残り、是迄も長く御最負を蒙りたる御客様に、此世の別れどもなりぬら  
ん、永々の御最負は厚く御禮申上げたくども、中々妾の言葉には盡され、今宵  
却つて吾身と夫が若し無き身に、敵立ち致し候へば、何卒一片の御回向を御願  
み候ふごと、美眼に玲瓏たる涙を湛はての此一言、滿場の見物も中には、貫ひ泣  
きに泣くものもありて、宛然水を打つたる如き有様、此中の彌次馬連は、甲「ヤ  
決闘があるさうな、乙「早く往つて見ん吾も／＼と云ふので、南座は裂れるば  
かりドヤ／＼と見物は、戶外へ出て仕舞つた、甲「サア見物すべし、乙「  
サア仕合を視ねば、あらん、丙「次國を見るべし、丁「芝居ぢや、形容ばかりだが

門 衛 右 團 塙

眞實の仕合ひは面白ろい／＼ア出雲のお國の仇討ちやど、口々に叫びながら見物は皆を四條河原に詰掛けた大橋は瓜も立たぬばかりの人の山何時も賑ふ四條塙頃しも春のことなれば寒からず暑からず月はあるし眺望は好しいやどうも恐ろしい群衆其中に塙團右衛門は不意の喧嘩に人目を忍ぶ細笠とでもなく斯くなる以上は己を得てきて羽織を脱ぎ捨て袴の股立高くどり大刀を引抜いてピタリとつけたる大上段名古屋も等しく大刀を引抜いて山三郎「イデヤ塙殿首申受けんぞ 直之同じく生命を貰はんぞと互に隙を狙つて打込まんとぞる打込む大刀を引外し外されつ洗々たる鴨河の派に映じて閃めく刃の光りは月とひかりを争ふて最と物寂し春の闇かに引替へて却つて鴨河の寒さを覺ゆる程の有様火に相對して刃の稻妻瓦に争つて居る數萬の見物誰あつて咳拂ひさへそる者もかく何れも片唾を呑み手に汗握つて勝負如何にと待構へたり、山三郎も中々の達者なれば斬付斬付られて暫らくの間火花を散して取つたりしが遙か彼方に見あつたる伊達政宗大音を揚げて

門 衛 右 團 塙

政宗、國助太刀致してやれ伊達政宗此處に見て居ぞと呼つたり、見物の中に見てあつたる國は此處ぞと思つてバラ／＼と名古屋山三郎の傍らに來つて優しき聲音の中に怒りを含んで お國、何方の御方様かは存じませんが妾は名古屋山三郎が妻國と申す者にて候、只今良人の助太刀仕つると一刀抜いて斬付けた塙團右衛門は不意に斬付けられてヒラリと後へ下がり 直之、婿は女の分際として無益の助太刀致そか女なりとて用捨はからぬ當の敵たる山三郎ばかりか妻と名乗りし出雲の國まで素首渡もか益なきこととは知りながら斯くあるからは是非に及ばぬ汝等二人の生命を取つて呉れんと呼つては見たが道が塙團右衛門直之心中に謂らく千軍萬馬の間に屍を曝そは固より當然のみどなれど下賤の者を對手にして生命を打つたどて何とせん今お國を殺し山三郎を殺そは最と易けれど殺したればとて功勞手柄にもならずア、よしなきことを爲てけりと今更心に愧ぢて大刀も思ふやうには振舞はし兼る風情あり誰か仲裁に遣入つて呉れる者があれば宜しい、誰ぞ和談をして呉れ

る者はいかど死んぞよわつて居りませる其中に群衆の中を掻分けて現はれ出でたる大兵肥満の武士多くの家來を引連れて 武士「出雲の國暫らく待て名古屋山三郎も待てソレなる塙團右衛門を打据ねるならば汝等の力を頼まぬ乃公自から斬捨て呉れん汝等暫らく扣ね居らうぞ其聲聞いて 山三郎「何故あつて此勝負を御止めなさるナ 武士「アイヤ山三郎汝等兩人は暫らく侍て夫等の理由は後より申聞けん……ヤレ塙團右衛門直之汝は誰に斷つて福嶋の臣下となりしぞ誰の許を得て正則を主人と頂きしぞ其許しを得ざるに主取り致そとは不禮なり加藤左馬助嘉明當時福嶋の家來塙團右衛門直之の生命を今貰ふたぞサア此左馬助が貰ふたぞと四十有餘名の部下を率いて進み寄る左馬助は朝鮮に於ける有名の勇將嘉明が韓山唐嶋にての苦戦は中々にて以て名を現はしたる程の腕前塙團右衛門とて中々悔ふことは出来ませぬ殊に舊主人左馬助と闘いては抵抗もならず如何にせんと遠がの團右衛門直之も進退茲に谷まつたり、直之「左馬助殿御免候へ、嘉明「黙れ直之「勝負

の上にて汝の生命を申受けんイデア直之吾れに及向ひ致して見いと言はせも敢へず直之に斬つてかゝること思ひきや鳴の流の真只中へ素早く身を躍らしてドンブリと飛び込み水勢をきつて泳ぎ出し一瞬の間に向ふの岸に着くかと思ふと居あつかつて仕舞つた

第四十席

主人直之が川に飛込んで逃げて仕舞ふたものでございまをから家來の一平は呆然にとられて暫時言葉も出ぬ 一平「イヤ〜塙殿何故御逃げをされた遠がに御身の旦那……殿様舊主人に出會つては致方もござらんかとソレから伏見の豊後橋まで一目散に逃げ歸つて巳の家へ歸つて見ると團右衛門は泥鼠の如くツブ濡れにあつて呆然として居る 團右衛門「ヤ一平今夜程詰らぬことはない 一平「左様でそナ餘まり詰りもしあかつたみとでございますナ此時團右衛門は愁然として 直之「一平時を移さず市中に悪い噂が立つて乃公も此處には居られぬやうにあるかも知れぬと大きに心配して居たが其

塙 團 右 衛 門

翌日になると表手の方に讀賣が吐鳴つて居る。讀賣「イヤ是は此度世に珍らしき出来事然も所に京都南座に於きまして福島の家來塙團右衛門直之と云ふ武士が出雲のお國と名古屋山三郎の兩人に追かけられて逃ぐるに所なく餘義なく四條の河原にて決闘したる其時に卑怯未練にも、直之の武士も、弱き二人の刃先きに手向ひあらじと思ひさや河に飛込んで逃出した哀れ至極の顛末を文久二文で事明細と怒鳴られて、塙團右衛門「是は了つた一平買つて来い、一平へエと云つて買つて来た、真先に繪を見た所がイヤハヤ何とも言へない、團右衛門が大小を構いで一目散に逃げ出せ、其後影を見送つてお國が笑つて居る、山三郎大刀を振あげて撲り倒さんとぞる其股倉をくゞつて居るのが一平でございます、さう云ふ差槍でございませうから直之「ア、皆ふ是門も一度は怒つて見たが其通りだから何とも仕方がない、直之「ア、皆ふ是れ吾が過ちなり過ちは過ちとして其過ちを改むる法はあいか、併し舊主人左馬助はマサカ此儘には捨て置きませまいと思つて居る内に加藤左馬助は福

塙 團 右 衛 門

塙家に対して強硬談判に及んだ、借て嘉明の申さるゝには、嘉明「福嶋殿今日推參致せしは餘の義には候はず御身が如何にしても塙團右衛門を其臣下に爲し置くにあらば吾が耻辱此上もなし是非に及ばぬに依つて御身が伏見の屋敷へ吾が家來三百人を繰込ませ塙團右衛門の首を打取るに依つて左様御承知あれ、若しソレが不都合とあらば彼れ塙團右衛門を拙者に御渡しあれ、その手強よき談判、正則も今更詮方なく惜い武士とは思つたが別室に直之を呼んで正則「借直之其許も詰らぬ真似をせられたナ、アレから其許の評判は愈々悪く途に嘉明からの談判と相成つた次第、此場合に於て正則もマサカ可矢を以てもとど言ひ難い、是れも今更是非に及ばぬこと、マア旅用の金を是丈け其許に與へるに依つて之を以て何れへなりとも立退いて呉れ、塙團右衛門「豫て覺悟の前でござる、日本至る所何れの土地も皆を塙團右衛門の住家なり、決して御心配には及びませぬ、天下は一人の天下にあらず、事と次第に依らば此塙團右衛門なりとて將軍にもあれんどは限らぬ、なれども吾は決して石田三成等の二の

塙 團 右 衛 門

舞ひは致さずア、惜みても尙ほ餘りあるは石田あるか安國寺あるかな小  
西あるか若し彼等此世に居りしならば徳川殿に斯くまで跋扈はさせまじ  
きものをと云ふを間違ひて正則形を改め、正則其許は徳川に事へる所存か  
果して徳川に事へる所存ならば正則が周旋て遣はそ、此時團右衛門眼を怒ら  
せ聲を振立て、直之、吾れ縦令屍を野に曝すとも何とて徳川殿の粟一粒かり  
ども食ふべき、吾れ是れよりして諸國を漫遊して志の合ふ人あらば其處に事  
へん、縦しや何くへ往つても事ふべき所なくして元の默阿彌となつて行雲流  
水に身を任せるばかり、併し秀頼公十五歳になつても家康公に於て將軍職を  
御渡しにならぬ以上は其時、此團右衛門再び鎧甲を身に纏ひて徳川に弓  
を引く所存あり、福嶋殿の御考へは如何に候か、問ひかけられて正則は暫時  
默然として居りましたが、正則、矢張吾れとても同様あり、大坂方の御恩は山  
より高し、若し然る場合には願くば直之與に與に力となつて徳川内府へ敵對  
せん、先づソレ迄は忍んで居らうぞ、無事で居れ直之、直之、然らば福嶋殿隨分

塙 團 右 衛 門

御健康に御暮し遊ばされて……正則、然らば是にて一先づ御別れ申さんと  
袂を分つて直之は福嶋家を立退きました、  
女歌舞妓の國の色香に迷つて遂に天下の大豪傑塙團右衛門直之とも言はれ  
る者が浪人して昨日の榮果に引替へて今日は飯の食ひあげ、借も女と云ふも  
のは善からぬものヨソレも一夜の情を買ひしにあらき、只だ踊り跳ねる所に  
心を奪はれて此始末實に慎しむべきよとてございませる、團右衛門直之も  
熱々考へた、直之、ア、乃公は女に好かれぬ男よナ、もう、今後は婦人杯は  
見向もそまい唯願ふ所は徳川將軍を對手に致して天下に美名を轟かして呉  
れん、然るにても當世にあつて大坂方の爲めに力を盡すべき人は何人である  
か、吾れ是れより鎮西の間を徘徊して同志の士を求めんと、團右衛門は漂然と  
して伏見を立去り、別に志す所とてなきみと故播州播磨の方へ足を向けて、遂  
に播磨路にかゝり須磨明石等を見物かして昔時源平の盛衰をぞ追想し、或は  
嘆じ或は慰め、筋骨ふどりて臍自づから聲を發するやも知らざる程にてあつ



たりしが斯くてあるべきにあらざると、愈々足を進めさせ、茲に思ひがけなくも天下の英雄に出會致しまする一條は次席と致しませ

第四十一席

門衛右團塙

前回に述べました通り有樂の團右衛門も水は方圓の器に従ふの喻にれれず、圖らるも當時盛んに流行りました歌舞音曲に耳を傾け、鴨河原に於て情けなくも河原乞食の山三郎の爲に武士たるの面目を汚した揚句、舊主加藤嘉明の爲に苦情を持た込まれ、古今に英名を留めたる有樂の福嶋正則も苦情付の人物を我匠下となし、置くみともならず、心から走も直之をして、伏見の邸を引拂はせて再び浪人と相成つたのも身から出た鎧を忍みんやうもございませぬ、斯うおつて見ると團右衛門も平氣なものでございませぬ、到處に青山ありと云ふ風で幾許かの黄金を懐にして、漂然として伏見の邸を立出でました、豫て染川の祇園の茶屋へ参り、裏道を試みて、馳て此地を立出でましたのは早や夏の初でございませぬ、出は出たが別に何處へ行くとも云ふ當のある譯でもな、兎も

門衛右團塙

角大坂へ行かうと云ふので取敢えず大坂を指して参り、プラ／＼彼方此方と經廻り歩いて居りましたが、去ればとて頼るべき人のあるではなし、一向話らぬので足の向くに任せて紀州路へと志して参つて見たが、何處も同じ秋の夕暮と、同様に團右衛門の身に取つては何の風情もございませぬ、團右衛門は只茫然と野山の景色を眺めながら世に此團右衛門の志を知るものなしとは情けない卒、是れより九州四國へ向けて行くが都合であらう、關東へ行けば随分我に碌を興ふるものも多くあるであらう、第一石田三成の跡を引受けたる彼の井伊直政は佐和山を領して居るが、我れ行かば必き抱ねるに違ひないが、彼に仕ふるも好ましくない兎も、角是れより備前の岡山へ参り、彼地より越州路を下るか、但しは久方振に船を浮べて筑前へ乗込み、黒田長政殿の故郷に到り、後藤又兵衛の親戚を訪ねて、彼が浪人となりし由來を問ふて見ん、夫れから久留米に到つて四國へ渡り、藤堂の舊領をば搜ぐるの爲やう、其中に又何か宜い事もあらうと、心を定めて腰に大小を打込み、頭に深編笠を戴いて、足に任せて

塙 團 右 衛 門

山陽道の方へどブラリ〜と歩み出した途、中別に何のお話もあらず、間もなく播磨路へ入込みまして彼方此方を眺むれば何時もながら播磨の國の夏景色は又一入の眺め見渡せば眼中に入る淡路嶋波の間に、物産けれど實に千鳥の通ふ海原は此處なるかと、細堂の中から打眺めては其景色の珍しきを賞し又後を振仰げば眼に見ゆるは一の谷、二の谷、三の谷、其の昔の義経が平家の一門を驅ひし處は此處なるかと坐る懐舊の思ひあり一方に教盛寺を見づ、通行かんと致しませると傍にアツモリ蕎麥と飯木に染出した蕎麥屋があります、團右衛門の廻り廻るを見て、其蕎麥屋では響りに怒鳴つて居ります「ヤア〜旅のお客様お寄りなされ〜」此家は名物のアツモリ蕎麥召上りませ、座敷と云へば離座敷は千疊敷、此方に見ゆるは須磨の浦向ふに見ゆるは淡路嶋、蕎麥はアツ掛アツモリ蕎麥色の白いは玉依姫、サアさ〜アンタ蕎麥召上りませ、蕎麥召上かりませと頻りに怒鳴つて居ります、團右衛門は立止まつて何だ名物の蕎麥を喫べと云ふのか、可しく〜そんな蕎麥か知らぬ

塙 團 右 衛 門

へが話の種子ぢや喰つて遣さうと蕎麥屋へ追入つて裏口へ参つた所が成程海を眺めはあるが千疊敷の座敷は思か十疊敷の座敷さへ、あゝ團右衛門は疑訝な顔をしてふりや店の者、只今奥の座敷は千疊敷など、仰山を事を謂ふが此座敷は十疊にも足らんではないか千疊敷だ、杯と旅の客を欺くとは不届千高店の者、あんたはんソナへに怒るものぢや、おへん、貴下はんは紀州からお入來おはつたか、何處からお入來おはつたか、能うは知りませんけれども千疊敷と申したのはコリヤ家やおまへん、此前の淡路嶋へ此播磨灘の事を能う言ふのでござ、丁度此處から眺めれば千疊の壘を敷いたやうな海面でござ、アチヤに見えるのが貴下紀州でござ、コチヤが淡路嶋やと云ふて眞實に自然の千疊敷の座敷と云ふ話でござ、おから貴下うなへにエロー小言被仰らんでお呉れや、團、アーム、何かベチヤ〜、理屈を吐かそ、可い〜、蠟と教盛蕎麥を一杯持つて來たれ、店の者、コチヤへ能うお上りやす〜、團、然らば上つて緩くり喰はうか、と座敷の真中へ陣取りまして、團右衛門は頻りに蕎麥を賞美して

居りまゝ其傍に何人でございませるか是れも大刀帯びたる儘ツカ〜と上つて参りましてドツカと座り込みこりやく〜早う蕎麥を持って 女ハア貴下はんよ蕎麥はブツ掛に致しませうか盛に致しませうか 土ウムブツ掛を持って 女ハいと云つて臆て脇に持来りたるアツモリ蕎麥是れもヅク〜喰べ始めた團右衛門は一足先へ参つて居たのでございませうから既に二つの蕎麥を喰ひ尽して三ツ目の蕎麥を喰はんどぞる折しも如何やしけん汁の中に蟲一匹這入つて居るのを見一赫と怒りヤア〜蕎麥屋の主假にも天下の武士たるものに向つて虫を一匹喰はるとは無禮ではあいか我れ幼より悪食をふしたりと雖も未だ嘗て虫を喰ひし例はないぞ無禮にも程ころあれと手に持つて居りました彼の虫の這入りて居る茶碗を突然表に投出した所が其傍に同じく蕎麥を喰つて居りました侍の首の處へ其茶碗の汁がバツさど打掛つた如何に間違ひとは云ふものゝ蕎麥の汁を浴びせられては誰でも黙つて居る氣遣へはございませんこれで黙つて居るやうではマア意氣地をし

と云ふて好い人物でございませずヒヤリと來たから大抵の人から直ぐに怒るべき筈であるが此侍は左のみ怒りもせず最と落付拂つて箸を下ろし

第四十二席

これはエライ事を致すもの哉……アイヤ其處をお武家何故あつて拙者に斯様を穢はしき汁を掛けたか其許は何人なるかと問掛けられて團右衛門も少しく赤面の体にてこれは〜お侍誠に以て相濟まぬ儀でござる何れの誰方かは存せんなれど御無禮を致した拙者は大坂のものでござるが仔細あつて主に離れ浪人の身に相成つて今しも筑前の方へ足を向けんと致する途中須磨の浦邊を通り掛り端かくもアツモリ蕎麥に呼込まれ一杯二杯と嗜む中に卑陋かり汁の中に虫の居りしに氣も焦燥ち之を投棄てんと致せし處圖らずも御貴殿の襟元にブツ掛けし段重々不屈の至り平に御詫仕らん 侍已に我首を汚せしからは詫びたどて別に許すも許さぬもあいが兎に角武士が両手を支へて詫ぶるとあらば強て咎むると云ふ譯にいがらん宜しい左様ならば

塙 團 右 衛 門

お許し申そが失禮ながら其許は塙團右衛門直之殿に候はせや、團右衛門は不意に其名を指されて少しく驚きたる体にて拙者を塙團右衛門と存じあるか侍さればあり朝鮮に参つて遭はれ御名士と共に一塵の手柄を顯はし天下の豪のものと呼ばれた名將なり然るに朝鮮より歸るや否や幾程もなく哀れ加藤左馬助の爲に其國を逐はれ其後福島殿の館に足を駐られしと聞こひしがマタク御許へはされしか去りとはく、塙イヤ是れは畏入つたり能うこそ御存知爾う云ふ貴公は何れの誰方にて候ふぞ、侍既に其許の素生相分りしがらば我れ名乗らざるも如何である何をか隠さん我れは長曾我部の臣にして牟禮孫兵衛友康と申そものにて候なり、塙みればく其許は牟禮氏でござつたかお互に戰場にて顔を見合へしこともござれども扱は太平無事の日斯様を處にて對面致すはイヤ早や今日が始めて只今御無禮の段は平にお詫仕る偏に御容赦あれ、牟禮左様に鄭重なお詫に預つては拙者却つて痛入る次第でござる、塙只今其許の言はれた通り世に意氣地なきは斯く謂ふ塙

塙 團 右 衛 門

團右衛門かり天下の諸般多しと雖ども我を知つて用ゐて呉れるものどては一人もござらん情けあや彼の加藤左馬助の邸を去つてより一旦福島家に腰を据えたれども飽まで執念深き左馬助の爲に故陣を言はれ倒頭福島家を追出されて又元の木阿彌イヤ浪人どまつたが其元を糺せば女ゆへ誰を怨みんやうもござらぬ、牟禮ハ、ア女ゆへとは面白し貴殿の如き豪のものが女共に心を傾けられたとは近頃の珍聞でござる、レテ其女と云ふは都の娼妓かを、塙さればなり娼妓にも齊しき歌舞妓役者の出雲のお國となん呼ぶ婢女でござる、ハ、ハア、牟禮ハ、ア出雲のお國とは名代の美人これは面白く定めしお望は叶えたであらうな、塙所が其望が叶はんで揚句の果に扱々な耻を擡いて再び浪人どまつた次第ぢや、牟禮さりとは尙更面白し肉体の快楽を遂げて一身を懸るは是れ彼の無頼の奴原の仕業なり天下の豪傑の綾かゝるべきものではござらん左は去りながら鬼をも纏ぐ塙團右衛門直之とも云はるゝものが高の知れたる女一匹が自由にならんで赤耻を擡き夫れが爲に

か柳箱となり最ども廣き京大坂に五尺の躰の置所おしとは扱も面白し扱も  
笑止併し夫等は定めし一時の戯れでござらう、後來望みある御貴殿の事好い  
後々の龜鑑必きく御悔あるを塙上げたり下げたり玩はるゝは拙者も餘  
り好ましくござらん、牟禮イヤこれは失禮千萬御容赦あれ夫れに就て御貴  
殿に伺ひたい事がござるが去ぬる慶長の五年十一月朔日六條磧に於て石田  
治部と小西行長及び安國寺惠瓊の三人が首刎ねらる折柄に不圖彼の地に  
於て御貴殿の妻を認めしが全くあの時お居であつたらうを團右衛門はまを  
く呆れて牟禮氏其許は能うぞ夫れをば御存知ある、牟禮蛇の路はへびと  
やら夫れ位の事が分らんで天下の英雄豪傑と交りて結ぶことが出来やうか  
塙これは畏入つたりは拙者の主人左馬助に暇を遣はして都へ罷越し何れ  
へか宿を求めんと彼方此方と搜して居る中に不圖石田三成が死刑に處せら  
るゝと云ふ話を承つた音に聞えし石田三成折悪しく顔さへ見たことなけれ  
ば如何なる人物なるか一度見まほしとて仕置場に至つて見れば見ると聞く

とは大きな相違有れば日本國の宇を割いて己れが味方と多し秀頼公の天下  
を横領したる徳川内府を敵とした程の人物だけあつて成程体は五尺に満た  
ぬ小男なれど満ちく居る其智慧は天下を覆へすかと思へば凄じき人物  
申をも耻かしけれと我舊主人左馬助を掌の平に乗せて自由自在に玩んだる  
適れある豪傑其豪傑が徳川内府と戦つて敗れた揚句刑場の際と消ゆるから  
は残念ながら最早天下に彼れ三成の後を襲いで徳川に敵對するものはあら  
じ嗚呼三成が斯くなるからは大坂の滅亡も幾きに在りと思はせ嘆息致した  
り其許は彼の死を如何思召しあさるか、

第四拾三席

此時牟禮孫兵衛左も勿論らしき顔付にて如何にも貴殿の聞はるゝ通り有難  
に三成は豪傑なり天下に諸侯多しと雖も時めく徳川内府を敵として取つた  
ものは石田三成の外にはござらん去ればにや我主人長曾我部元親も三成が  
敗軍と聞いて疵ながら掌の裡の珠を取られし如く歎息致したでござる所く

と聞いたる馬園右衛門突と膝進めてハ、ア然らば御貴殿の御主人も……  
車禮如何にも 塙、其夜六條磧に鼻したる首三ツ 車禮而かも其夜は霜降  
りて笠さへ凝る鴨河原に…… 塙英雄豪傑の首を鼻そも本意からずと人目  
を忍んで進寄りしに誰かは知らず我より先に安國寺の首に手を掛けて行か  
んとする曲物あり 車禮其時安國寺の首を手に持つて逃失せんとせしは塙  
く謂ふ孫兵衛其際誰とも分らねど左手に石田の首を提げて忍び行かんぞす  
る曲物ありしゆえ某は立止まつて獨り小西の首を鼻そも本意なしと引返し  
て無門に手を掛けんづ爲しつれば…… 塙我れも同じ思ひにて小西の首を  
鼻はんと互に手をば掛けたる折…… 車禮傍の乞食眼を覺まし故と云つて  
打掛らんする容子ゆゑ不便ながらも友康は一刀サラリと抜放つて其場に切  
つて落しノ目に掛らぬ其共にど安國寺の首提げ其場を去りぬと聞いて 園  
右衛門扱は御貴殿は何ぞ安國寺と由緒あらるゝか…… 我も其時小西の首を  
鼻はんと思へしおれど乞食風情を斬るも益なしと感念して石田の首のみ切

後へ五條の方へ逃伸びて其首をば深草の或る寺に隠しましたり 車禮其時  
我は七條の方へ下りて安國寺の首をば興福寺の山内へ引らし 塙扱は奇縁  
ぢや〜 車禮アイヤ其夜に相見し人は正しく馬園右衛門直之殿にて候ひ  
しか 塙車禮孫兵衛氏にておられしか 車禮如何にも其夜拙者は貴殿と  
定せし此車禮の眼力…… 塙凄しものでござる…… 昔語りとは申しなが  
借も不思議な事も候もの哉 車禮再ひ此所で遇ふのも何かの結芽出たし  
〜と英雄互に胸襟を披きてアツモリ蕎麥屋の一間に語り合ふも實に奇遇  
と云へば奇遇でございまする 車禮塙氏熱い所を一献如何でござる  
今の話は誠にヤヤ夢のやうな話でござつた此時馬園右衛門少しく容を改めて  
車禮氏斯く互に心の底を打明けて語らふ以上は拙者も心腹を打明けてお話  
申すが其許も同感であらうな 車禮謂ふにや及ぶ我を左な言はんと待  
えし處能うぞ謂ふて呉れた塙氏何なりと遠慮かう語り給へ 塙友康氏彼れ  
家康は目の上の瘤とも云ふべき石田小西を滅したからは是れより益々野心

増長して定めし大坂を我物にせんと致してござらう其許のを見込は如何で

ござる 牟禮さればあり此友康の考と主人とは同じ考でござる彼の家康は  
今や大坂をば百二十萬石に破じ剩へ種々難多なる難題を申出して淀殿を苦  
しめ又秀頼公は御弱冠にして柔弱の脚にもあることおれば彼の位姿ある  
親爺は又候如何なる事を工むやも計り難い然れば大坂城は程なくして關東  
の掌の程に歸すべきか誠に頼み甲斐なき事とござる福島と云へ加藤と云へ  
黒田と云へ細川と云へ皆是れ太閤是出の諸侯あるに今は誰一人として關東  
に味方せぬものはあいと云ふ有様殊に關ヶ原の戦ひより左しも時めきたる  
毛利宗さへ哀れや七十四萬石の御高も今は三十二萬石に減されて手足の伸  
びぬやうに縛られて凡て是れまで豊太閤の恩顧を受けたる大坂方の人々は  
下司下郎たりども一步も關東に足を踏出そことのならぬやう江州には井伊  
直政を置き又勢州桑名には本多忠勝を据けて咽喉を扼り關西の諸侯をして  
一足も踏出させぬ其用意の嚴しき手配の行届いたるには此友康も驚入つた

増長して定めし大坂を我物にせんと致してござらう其許のを見込は如何で

でござる「關右衛門は手配でグッ／＼作りながら家康と云ふ奴はかか／＼  
喰ひぬ奴ぢや左すれば彼が秀頼の天下を奪はんどの野心は明白である  
牟禮待つた増氏……承れば藤堂高虎をも伊勢の安濃津に國替にするとか云  
ふ噂でござる是れをん彼の御親爺が厚く大坂の御恩を受けた藤堂をば後奉  
關東に味方させやうとの計略中々油断のならぬ手配でござる併し藤堂は今  
尙ほ伊豫の今治に居ることおれば正しく國替になるかあらぬかは取保し  
難きみとでござるが互に語らふて居る共は興力同心が先拂ひしつゝ來る  
から何事ならんぞ不圖見ると違はれも如何に行列美々敷きの方を御通行  
るは是れぞ藤堂高虎殿が伊豫を出で播磨路に掛り是れより播磨路の池  
田家を使い伏見に進まんぞとる途中でございまをる藤堂高虎殿の御通行と  
見て取りまして

第四拾四席

増長して定めし大坂を我物にせんと致してござらう其許のを見込は如何で

塙團右衛門

し時屋々藤堂家に入致し藤堂高虎とは知合の間柄であるが常に彼が謂はるゝには我等決して大坂の御恩を忘るべからず天下亂れて麻の如しと云ふ程ではおいが扱あらば一ト取ひおさんと待構に居るものも随分ある物騒の世の中なれば何時如何なる枯事出来せんも計り難し其時は我等は大坂の爲めには飽迄盡そ覺悟ぢやと謂はたれ事あるも夫れや之れやを思へば如何に徳川の威勢盛なればとて藤堂殿が心變り致すなど云ふことのあるべき道理もまいが先刻より物詰られたる其許の言葉を思へば何うやら藤堂殿で怪しきやうなれど若し彼れ藤堂變心致したとあらば徳川家康は如何なる略を以て彼を變心させたか又あれ程まで大坂の爲に尽すと突はれた藤堂が何ゆへ變心致したか其許と拙者藤堂と面會致して其仔細を糺さうではござらんかサア牟禮氏如何でござる然し某は素浪人の身分なれば我れ一人では彼れ或は面會せぬと云ふかも知れぬけれど其許を長曾我部家の重役今日一僕をも伴はざるは何ぞ仔細あつての事であらうが兎も角其許は身分あつ

塙團右衛門

て斯く通行を幸ひに兩人して高虎に見えて關東將軍の内意と彼が變心の次第を承らんと追つたのは塙團右衛門聊か心に思ひ當る所あつて故意と斯く言出したものと見える牟禮ヤ一塙氏それは無益かり藤堂とて木石でもあらねば太閤の御恩を思はざるにあらねども威勢盛んにして居崇りおしとさへ云ふ今や關東の勢は飛ぶ鳥をも墮せ程なれば余我かく彼に従へて居るのであらう我主人長曾我部元親は不肖なれども藤堂と同じく太閤の恩を荷つて居れば謂ふと云ふ塙台にて有志の士と其々に一命を大坂に捧ぐるは當然の事である然し達て其許が藤堂殿に面會致して仔細を糺すどあらば強て糺む程でもない時機に依つたら行列を止めても高虎公に見え申さんと存せりありと云ふて居る内に今まで厳しく進み居りたる藤堂家の家來がバタツと止まつた何事か起りしかと不圖見れば高虎公は怨龍を止めて須磨の海邊の景色を眺めて居る容子家來の一人ある仁右衛門高虎公の御前に進み出で仁御前様如何思召し遊ばされます當所の景色に又格別一入の眺めと存じま



門 衛 右 圓 塙

するが御威如何に候か 藤堂爾うであるなり人丸神社にて見ると須磨の御  
邊にて見る景色とは大分相違致そなり池田殿は良い處を所領を致されて結  
構な事である 仁「御意でござる」と云い了るか終らぬ中にか側に付添ふて居  
た而も孰れも血相變えて刀の柄に手を掛け 近匠ソレへ参りしは何者なる  
か無禮至極を控にいッ「此時牟禮孫兵衛素然としてか騒ぎあるを拙者は長曾  
我部元親の臣にして牟禮孫兵衛と申すものでござる 塙扱又拙者は加藤嘉  
明の浪人塙圓右衛門でござると聞いて藤堂仁右衛門疑乎と圓右衛門の多を  
見詰て居りましたが 仁「これはく 珍しや塙氏…… 牟禮氏能うみう……  
ア、今日は御貴殿方も須磨の浦御見物であるかな圓右衛門はッッ」と膝の上  
に両手を支き藤堂家には何時もあがら御健勝に渡らせられて圓右衛門至極  
大處に存する此時高虎ア、珍らしや加藤家股肱の良臣圓右衛門直之無事ぞ  
あるちど微笑しながら圓右衛門ア、此頃承れば加藤の處を出でしより藤島  
家に居つたと云ふことであるが 塙御意にござります 仁「ッム然う云へば

門 衛 右 圓 塙

塙氏其許は京都にて何物かど果合を致した其首尾は大分世間の評判は悪  
やうであるが如何でござるか 塙みればく 仁右衛門殿其儀は平に御免々  
々 仁「勝敗は武家の常左まで隠せにも及まじ 塙イヤ早や爾うお尋ねに  
預つては赤面の至り…… 仁「福島殿も大分弱はりしや承つたが左様で  
ござるか 塙何とも恐入つてお話の致しやうもござらん 仁「ハ、ハア天下の  
豪傑も千慮に一失は免れぬものと見える…… 時に牟禮氏容子を窺へば須磨  
の浦見物とも見受けられぬが何を御用事でもござるか 牟禮如何にも…… 只  
今此處へ参せしは餘の儀に候はせ織田右衛門と共高虎公に糺し申上度  
儀あつて能出で候と申して 高虎公「フ、ム子に糺さんとは何事か 牟禮餘  
の儀には候はねと聊か内々御尋ね申上げたき次第あれば仁右衛門殿御り  
がら暫し人擁みを願ひたうござる 仁「殿の今日の御用は少しく急ぎの御用  
にて今夜は兵庫に一夜の宿りを致すを得である左れば長話は御免蒙むるが  
暫しの間とあらばアレなる千鳥の堀下にて承り申さんどて僅か其處から牟

町ばかりしかなない處でございませすが藤堂は其松下に籠籠を下ろして控えた

第四十五席

仁右衛門は直之並に孫兵衛に向ひ御兩人殿に御用とは如何なる用事にて候か  
牟禮餘の儀には候はせ兩人が糺し申上げたき一條は大坂の事とござ  
る仁大坂城の一件とは何事とござるか牟禮御大問の隠れ遊ばされし後  
は我等兩人は申せに及ばせ天下一統の者必を御嫡男なる秀頼公が御白の位  
を繼がせらるゝ事と存せしに豈に思ひきや天下は關東内府公へ御預けと  
成つた仁如何にも其通り此時直之進み出で牟禮氏暫く……去ぬる慶長五  
年關野野ヶ原の取ひより古の榮華に引替えて今は大坂城はあれどもなきが  
如し定めて御貴殿も御承知であらうが秀頼公は敢て野心を抱きしにあら  
然るに關東將軍は之を謀叛なりと疑ひし今は其御高百二十萬石に減し住か  
に觀河原三國の主たらしめたりは御悼しき限りなき儀ではござらぬか斯く

の次第にては今より數年の後は必づ徳川家康は彼地をも奪ふに相違なから  
ん左すれば此後大坂の一門は如何に成行くべきか氣遣はしき次第とござ  
る近頃將軍の御覺目出度屋公定めて將軍家の御内情御承知とござらう若  
し故大問の恩義を忘れずとならば願くば此處にてあり度う存すと誠を籠  
めて述べられける高虎公も途りにての此間には殆んど弱はつた山より天下  
の大坂野々しく云ふべきことでない高虎公は暫く伺向いてお居でにかつた  
が兎も角此處は懸をに若くはないと思ひしからしや團右衛門……孫兵衛其  
方共の志は尤も千萬高虎至極誠心致した我も關東の御容子は別殿承知致さ  
ぬが將軍に於かれては一向左様か思ひはない其許共も承知の通り秀頼公は  
年向は幼くして未だ天下の兵馬の權を握るべき時節でない責めて御年三十  
にも相成らば勿論徳川家に於ては御渡しなるに相違ない 嗚然らば藤堂公  
其時關東將軍は如何なる所存とござるか秀頼公に仕へる御所存あるか此  
儀承りたし 藤堂左ればなりいよく秀頼公御成人の後天下をお渡しに

堀 團 右 衛 門

相成るに違ひないも存するが確かな事を申せば先づ天下は二に分るもの  
思へば間途はあまの關東將軍は江戸に居て關入州から奥羽の地を領し  
頼公は大坂に居て畿内は始め中國から四國九州の鎮撫に任ざると心得なば  
間違ひもあるまじ假にも故大岡の恩を蒙りしものは何れ徳川家に隨身な  
致すことこの候べき團右衛門……孫兵衛取越若勢は却つて無益でござる  
道は怪しからぬ事を仰せらるゝもの哉若しも此未西に豊臣東徳川に天下が  
二つに別れた隙には威勢威めく徳川の事なれば天下の諸候多くは徳川に  
さ申さん足下も又徳川の爲めに爲さんとするの決心と見えるわい左もあり  
せん加藤清正さへ既に徳川の爲めに……藤堂こりや團右衛門無膽申そな  
加藤肥後殿に於ては假令骨が碎かるゝとも何ゆへ家康に従ふべきぞ胡んや  
此藤堂高虎不肖なりと雖も今まで蒙りし故大岡の恩重し假んば此頭  
らるゝとも誠心關東家に仕ふることのあるべきや我れ深く汝の志を知  
るゾ故斯くは我心を明かすなり團右衛門以來過言は無要なるぞと聞いて

堀 團 右 衛 門

團右衛門は飛立つ程に悦び其御一言……はりて團右衛門安心仕つて候……  
半禮友麻氏如何でござる有難は藤堂公末御母存ざる然らば御足を御止  
申そまでのこともなかりしに御足を御駐なせし段共た以て恐縮致す藤堂  
汝等の疑ひ晴れたとからば予も満足に存せぬアイヤ團右衛門……孫兵衛  
振りぢやに依つて今宵予と共に神戸へ……つて語り明しては如何であるな  
人の身の上殿の用事もあるまじイザ引返さぬかと云はれたが引返して見  
た所が別に致方もあるまいと思つたものでございまそから團八は連て辭退  
致し此處にて藤堂高虎と相別れ半禮は難波より伏見の方へと参りませぬ  
右衛門は是より備前岡山を指して参りませしが何の風情もあいな轉じて  
廣橋に遊びませよ細を浮べて筑前の博多に到り黒田公の領内を巡遊して  
後入信米に参り米の知己もあつたものでございまそから久留米の田中義  
の領内に暫く足を駐めて居りませしが別に話もない長く人の家に見  
身と相成つて居る時にも参りませぬので又々其處を立去つて柳川に参つて

門 衛 右 團 塙

暫く足を止め再び取つて返して筑前博多に來り天満宮の參拜を済まして立  
戻らんとする折しも黒田家の家來十有餘名の爲に難題を云ひ掛けられ餘儀  
なく太宰府の傍に於て十三人を切つて落とし船を浮べて逃さんとする此時  
筑前の黒田家の臣下のものに劍道の指南をして居りました旅の浪人物に其  
名も高き岩見重太郎後年薄田隼人黨と立合に及び遂に兄弟の約を結ぶの  
一席後談と致します

第四拾六席

借引進まして申上まするは塙團右衛門直之の御物語りで御座います直之は  
一度筑前筑後を廻り彼れより九州路を彷徨まして何時かは豊太閤の御恩を  
報ひ關東の威勢を碎かむと云ふ了簡で廻り廻つて参りましたるは筑前の太  
宰府即ち天満天神の神前で御座いましたか時しも秋の最中に致して中秋の  
月を見るも一兩日にてあらんかと思はれる頃身には麻の單へ絹を着致し輪  
を着け羽織を着し深き編笠を被つて頼りに太宰天満宮を参拜を致して居り

門 衛 右 團 塙

まも元來太宰天満宮は菅原道真公が自ら世を歎じ給ひ果敢なくならせられ  
たを後世之を祀られしは實に無公の罪人を後世に作られざるやう致さんと  
云ふの御智願であるとか申しませる實に然もあるへき事と云ふ片々  
には管公か手植の松或は飛梅をさし云ふ梅がある

東風吹かば香を起せ梅の花

あるじなしとて春を忘れぞ

と詠み給ひしが梅は粗より遙々と筑紫まで行きしと云ふ古事を知くに付  
ても唯だ涙を流しまするばかり彼の梅松櫻さでの歌も矢張りうれらから出  
たものと見へます即ち

梅は飛び櫻は粘るゝ世の中に

何とて松は情あかるむ

と詠ひしは梅は筑紫へ行きそれが爲め庭前の櫻は枯れて仕舞つたと云ふ  
の歌で一株の松だけ残つた所で新様に詠まれたと云ふか所は御座います

塙 團 右 衛 門

るがうれども如何後世の人口に勝致しなした御物語で御座いまそ此處  
に塙團右衛門心の中に考へるやう國家を安穩にして時の皇帝の宸機を安ん  
じ奉り以て天下萬民の安寧をも祈りせめて是より天拜山へも往かんかと思  
へるやにはハヤ暮合附近く相成つたれば然らば今宵は昔に名高き阿多の町  
に赴き九州一の美人を以し物言ふ花を手折らばやとソリソリと團右衛門  
直之行き過ぎんと致そお柄以ぎ来る秋風の身に染み渡る涼しさ思はず團右  
衛門膝を放ちソムス斯は帷子にては少し涼き思く相成つたハヤ袴を着る時  
にも此からんが勇士何條袴を着つらん寒氣を凌ぐ折柄にも早へ紐にて車足  
れり何は兎もあれ帷子の時節にあらきとブラリと歩み行く今や天淵宮  
の鳥居を越へて彼方に進まんとする折柄器々ど吹き来るは正に秋風の昔に  
やあらん此時左右より數人の侍それへ出で 侍アイヤそれへ行かれる御注  
士暫くお待ち下され 團御呼びおさるは何んぞ御用あつての事か 侍イヤ  
別に用事と云ふでは御座らぬ君等は頼前の侍士にて候…… 團ハ、アそれ

塙 團 右 衛 門

如何致された 侍其方をお呼び申せしは御事では御座らぬ殿より新身の  
一刃を吾等に送られ此の新身を試めせと申され候 團ウム新身を試めせと  
おそれ如何致した 侍吾々は是まで死闘は試めした事あれど死闘を試め  
したるとは御座らぬ 團ウム貴公等は未だ生ける人を斬つたる事なきか方  
はるか生闘を切つた事がないゆゑ生闘を試めたいと言はるゝか 侍それ  
に就いて…… 御貴殿は今天滿宮へ参詣せられて其の戻るさ大分に涼しさを  
覺へるやと仰せられて居るがお見受け申せば追々寒氣に向ふ時節なるに  
帷子一枚此世に生きて居つても左程の御利益にもならん走らんと存する失  
禮には候へ共其許に今宵酒肴を馳走致したいと存じお好みの物此塙に調へ  
参つたが何んど吾々が志をお開届下され新身を試めしにまつて下さらんか  
と云ふのを聞いて團右衛門直之腹の中に思ふやうサテ世の中に奇怪な奴も  
あればあるもの生とし活ける者何れか生をば貴重せざる者やある然るに人  
の命を獲りに取らんとは何事あるか無禮とや言はん實に沙汰の限り併し斯

ふ云ふ奴を賜るも亦た一興此方から試めして呉れんけれども國民の端切なる者を殺すも不憚な譯……何か喰はせると云ふゆゑ幸ひ腹が空いて居るか  
ら一ツ馳走にあつて遣らうと思案致し 團成程貴公等のお望みも面白い我  
は天下の浪人にして名前は命無要左衛門と云ふ者……之を聞いて一同は驚  
いた 待エ何んと言はるし 團命は何時でもお持ちなさい命無要左衛門と  
云ふ位なものたアハハハ、我の名前は斯くの通りだが足下等の名前を承り  
たい 甲吾は鬼柳典膳と申する者 乙吾は隅川美喜之進と申する者 ドンヂ  
リに扣へたるは玉津島伊織花巻権一郎と申する者 團ハ、ア花巻権一郎  
ッボコ権一郎斎斎を見たやうな名前だなハハ、其の新身と云ふのはど  
んなもので御座る關物で御座るか備前物で御座るか但しは相州物で御座る  
か如何なるものか知らんがお試めしなさると云ふから速かに仰せに従ふで  
御座らう何時ありとも我が首を絶たんとならば首を断つが宜しい我が命を  
取らんとされば命を取らるべしモウ此世は厭きた命無要左衛門ゆゑ隨意に

願はふけれども此世の名残りに馳走をそると云ふから鬼柳氏何なりと馳走  
をお頼み申す如何ある者でも宜しい 典御貴殿が爾う仰せらるゝならば御  
馳走申すので御座らうソレ其品を是れへと仲間共へ吩咐けまそる處へ  
持ち出ししましたは鳥の養附け或は魚肉の造り身芋の養轉し種々様々ものを  
を列べ立て酒は大饒子に一抔白丁に一本飯は團飯に致して胡麻を周圍に付  
けたのを出す

第四十七席

此の御馳走と云ふのは何時も此の新身を試めし時馳走をかりそこで乞食な  
きは飽くまで食つて夢中になつて居る所を不意に斬り付けると云ふのであ  
るが随分乱暴な話でありませう様々なものを列べ立て、典サア、何んで  
も御随意に…… 團是は結構拙者も丁度空腹ゆゑ博多に赴いて腹を拵へん  
と思ひ天満宮の社前を出るが否や早速の御馳走身に取つて過分に存する折  
角の御馳走を頂かぬのも却つて御無禮ゆゑ遠慮なしに頂戴いたそ胡麻と云

門 衛 右 團 塙

ふものは精分を付けるどの扱も味の美きものと團右衛門胡麻握飯をムシャ  
リくムシャリく幾つともあく食ひうれから芋の裏袖し鳥の裏付け魚肉  
の造り身大概皆な食つて仕舞つた典膳に於ては之を見て 典恐ろしいと  
も食ひ意地の張つた奴奇へ奴もある者だ何んど喰へやうもかい、どうも是は  
馬鹿らしいと思つて尙ほも容子を見て居りまゝと團右衛門に於ては一向  
顧着おしに側の銚子に取て酒を注いぢやアガブリく又た注いではガブリ  
くど腹一杯食つたり飲んだりして左も心地宜げに 團ア、宜い心地だ思  
ひ計らざる酒の酔良い酒に酔ふた心地は又格別鬼柳典膳は塙團右衛門直之  
に向つて 典御約束で御座るから願くば誠の姓名を名乗られて御遺言をお  
し下されたし、さすれば御親族の許へお知らせ申せ、お願も時に依りまゝ、命  
無要左衛門とは馬鹿げた事を仰せらるゝものか、どうか願くは眞の姓名を  
伺ひたい 團ナニ我が姓名を聞いて足下等何んど致そ 典貴殿のお命を貴  
ふ爲めに…… 團ウハツ、この貴重なる人命を狼りに取られてなる

門 衛 右 團 塙

べきか、それともお好みとあれば此の命差上げても宜しい食ふ物は食つて腹  
を肥した上は御貴殿の爲めに犠牲にもならう、けれども只だ犠牲になるのは  
残念なれば足下等の命も事に依ればお買ひ申そかも知れん、サア我ばかりで  
はない、足下等の命も貴ふ相互に命の取替とあればそれにて頂上イデヤ來れ  
つと立ち上つた有様は宛ながら仁王の怒れる如くで御座いまそ之を見て鬼  
柳典膳 典然らば物を食して置きながら我が及金に掛るは誰ぢやと申すか  
團武士たる者が腰に兩刀を帯びたるは何の爲めあるぞ此兩刀は身を守る爲  
めの刀なり、我が身を殺さんとする者あれば餘儀なく之を抜いて應ずべし我  
身に仇なさぬ者なれば我に於ても黙しもせん、仇かす者あれば是非に及ばん  
三面六臂の鬼神ありとも敵手になして此身を守らん爲めの兩腰なり、我は足  
下に此命を遣らぬと申すわい 典無禮な事を申すものかな、借は汝は浪人者  
の物食するか、然らば鬼柳典膳が槍玉に揚げ呉れんと言はせもあい、立ち上  
り、手槍取るよと見へたるが、エイヤツとばかりと突き込んで来る、時しも丁度

門 衛 右 團 搦

日も暮れて月は今や中天に昇らんとするばかりあり幸ひ十二日の事あれば空は一點の雲なく月は鮮かに照り渡り何地へも限なく牙え居れば敵も味方も能う見へる所へ典膳が突き出そ槍さはさせじとヒラリ体を繰はした塙直之高の知れたる鬼柳典膳此の千軍萬馬の間を往來なしたる塙團右衛門直之を汝は何と心得へぞと言ひも終らぬ彼の槍取るよと見へたるがエイと典膳の槍を引たれば不意に引かれてダヂ〜〜 躊躇きながら槍を放して一刀引抜き斬り込み来るを身を繰はし進みさ片足上げてエイと一聲叫ぶよと見れば陰裏から堪らず典膳ブンデンドウ打倒れる之を見た隈川美喜之進捨置いてはあらずと是も同じく斬り掛けて来る奴を体を開いてエイッ胸の邊りを突きましたゆえワツと言つて倒れたり玉津島に於ては汝ッ惜ッくき奴と太刀引き抜き切り込み来る 團心得たりと團右衛門今は是非なしと玉津島の斬込一刀ヒラリ身を繰はしエイと左りの腕を押へ彼の刀を奪ひ取つて玉津島の首をバツタリ討ち落して仕舞つた名前は玉津島で御座

門 衛 右 團 搦

いますか首を纏られては堪らない其儘朱に染つて打倒れる之を見て花巻一郎斯は敵はしと我を忘れて仲間と共にバラ〜と逃げて行つて仕舞ふ折酒一人の者者向ふの方より來つて駆け往く花巻と計らる顔を合はしました花巻イヤ貴殿は岩見氏では御座らぬかと問ひ掛けられた若者 重イヤ云ふ貴公は花巻氏如何なされた 花巻イヤ容易ならぬ奴に出會して玉津嶋は不憫ながら首を刎ねられ又鬼柳隈川は重傷を負つた様子或は息の根を止められたは兎もあれ當て身が酷いから命が絶へて居るかも知れぬ兎に角岩見氏足下の戻つて來たのが幸ひ何卒吾等に一臂を貸して給はれ三面六臂の鬼神よりも恐ろしき者かは知らねども足下おれば充分彼奴を討ち取るに必定何卒三人の仇を報ひ下される譯には成りませぬか 重吾等も諸國を經歷をして偶々故郷に立寄つて主家の安否を伺ひ奉らんとおしたる者おれど今足下等の害を被るを見て捨置く譯にも往かぬ宜しい助太刀申さうと聽て團右衛門の所へ駆け寄り御免と言ひさす大刀引き抜いたる彼の若者 重



れなる御士吾は隈川鬼柳玉津島花巻とは水魚の交際を爲そ者にて候  
他國を廻り唯今歸國なしつるが餘りと言へば人もなげある足下の振舞ひ、イ  
ザお手合せを仕つらん 團此は面白し團右衛門直之汝の命買ふたりと大上  
段に振振りどタリと付けて互にエイとばかりに氣合を掛けた片々の若侍士  
もイツカナ後とへ退かず上段に振り振り暫らく物をも言はせ息を殺して腕  
み合ひました然もあるべきことで此若者みそ筑前名島の名將小早川隆景  
の匠一千二百石の高取り岩見重左衛門の嫡男岩見重太郎後年薄田隼人兼亮  
とて大坂七手の大將の一人で御座いまするが今塙團右衛門と不意の立合其  
の勝敗は如何相成りませるか次第に致しまそ

第四十八席

岩見重太郎と塙團右衛門直之と立會に及びましたが岩見重太郎の太刀先き  
の度さに團右衛門も感心致し 團ハア〜暫くうれあるお方及をお引き下  
され吾に於ても足下の如く諸國を廻らせんと雖も未だ足下の如き手練者

を御見受け申せしはあし、足下願はくば御姓名を聞かされよ彼の岩見重太郎  
兼亮も太刀を引いて 重吾も陸奥まで足を向けて参りしなれども貴公の  
如き鋭き太刀を見しことなし抑も足下は何れのお方あるぞ 團然らばかり  
吾より名告るべし吾は曩きに加藤左馬助嘉明に仕へ征韓の際朝鮮に渡海を  
し鶴林八道を蹂躪なして韓山の驛ひに主人を助けて職ふたるか團青野ヶ原  
の戦ひに主人嘉明と議論合はせして浪人致したる塙團右衛門直之にて候岩  
見重太郎兼亮驚いて太刀を鞘に收め 重イヤ是は御無禮を致したりお許し  
あれ……拙者ことは足下御存知あるやおきや知らねども小早川の臣岩見重  
太郎兼亮と申する者にて候父不慮の最期を遂げしゆ此仇を報ひん爲め諸  
國を廻らせず者なるが未だ其仇を討つべき機會之なく誠に残念至極にて候  
團開は承つてお氣の毒千萬失禮なれども塙團右衛門直之足下の爲めに勢を  
取るべし若し其仇敵眼前に居るならば必ら走足下の爲めに尽し申さん斯く  
云ふ塙團右衛門直之は浪人致し居る身の上あれば足下の爲めとあらば如何

塙 團 右 衛 門

あるみどでも致そでござらう、足下の仇とは何人にて候か、重然ればあり番が仇とすべき者は廣瀬軍藏と云へる者にて御座る、彼は剣術柔術鐵砲に馴たる遊ばれなる人物あり、團、開は面白し不肖なれども朝鮮に乗込む大明の軍勢を憫やましたる此の團右衛門高の知れたる軍學者の一人や二人首引き抜いて御覽に入れんなれども此所にては話しもあらざれば何れへか赴いて種々御話申そへし今吾が手に掛けて彼處に倒れて居る奴原は不憫なれどもア、意氣地なきは玉津嶋とやら鬼柳、隈川の兩人に息吹き返させ呉れんと急所の痛傷で倒れて居る兩人へ當て身を呉れましたから、漸くに蘇生致しました此人々は岩見重太郎の爲には朋友であるから、重太郎は鬼柳、隈川の兩人に對つて、重御兩所決して御無禮をなさるべからず、此のお方は加藤左馬助の家來に鬼と呼ばれたる塙團右衛門殿と申し朝鮮にて其名を轟したるお方ありと知り給はざるや、玉津嶋は無禮にも後ろより斬り込んだを必憎しと思召して首を討ちたるあり、岩見重太郎も刃を以て向ひしを耻かしく存するの

塙 團 右 衛 門

み足下等宜しく御譯おされと聞いて鬼柳與兼並に隈川美喜之進をみへ花巻も出て、ヤレ、是は、其許が塙殿でござるか、イヤ、ハヤ、どうも失禮を致しました、前に爾う仰せ下さらば吾等御無禮は致さぬものをイヤ、飛んだ失禮を致し、何んども申譯も御座いません、偏へにお許しの程を願ひ奉る、と三拜九拜三拜首を垂れて只だ譯ひ入るのみで御座いませ、團、イヤ、氣の毒なは此玉津嶋伊織で御座る、與、イヤ、此男は元來少し好からぬ男で首を刎ねられても宜い人物なので御座います、其様な人物も無さうあるのだが斯うあるとイヤ、ハヤ、堪つたものでは御座いません、そゝで鬼柳、隈川に於て玉津嶋の死骸を引き取りました、  
借も此方は岩見重太郎愛亮、團右衛門を同道致して博多の町へ参り人の多く立ち入らざる所の松月樓と云ふ家の奥座敷を借りまして、今宵は十二日の月を眺めながら一酌を酌まんと酒を命じ献しつ献されつ心置きなく此の松月樓の奥座敷で物語りを至しました、借て重太郎がどう云ふ物語りをしたかど

云ふと自分が今日までの一寸した成行きで御座いませぬ此の所一閱ばかりは重太郎の仇討の概略を述べなければなりませぬ臨道へ這入るので恐れ入りまするがお話致して置きませぬと未に至つて歸りが附きませぬとゆえ、諸君申述べまするが、初筑前國相良郡名島と云ふ所は小早川隆景殿が三十四萬石を領されてお在で遊ばした所で御座いませぬ既に朝鮮に赴いて小早川一人踏み止つて其名前を轟かしたる小早川左衛門隆景朝鮮から歸朝致して後には益々其の勢ひが盛んで御座いませぬ然るに小早川の臣下に千二百石を取る岩見重左衛門と云へる所のお方で御座いませぬ此のお方は軍學兵法何れどよく明かお方御座いませぬ其の重左衛門に三人の子供がある長男を重藏殿と言はれませしてそれから次男を重太郎と言はれませぬ此の二人ながら至つて温順の性質で御座いませぬが兄の重藏殿は學問にのみ心を寄せ漢書に眼を曝すと云ふ弟の重太郎殿に於ては同じく漢書にも眼を曝して居りまするが重もに孫子吳子なご、云ふ兵書に眼を着けて劍術を好んで學びま

第四十九席

殊に伯父に當れる薄田七右衛門の方へ預けられて居りませして戸田流の極意を授つて居ります、重藏は相續人ゆへ家に居りませして頻りに弟重太郎の過激あるを戒めて居りまするが重太郎は動もすれば大刀を引き抜いて犬をかか居ると犬を斬つて仕舞ふと云ふやうな性質で御座いませぬ長女をお辻どのと云て二人の男の中に一人の女子故重左衛門殿も大層愛して居られます然るに茲に一ツの間違ひが出来た其の間違ひと云ふのは外では御座いませぬが重太郎先生が常に戸田流を能く傳ひませするし妹のお辻は年頃、浪で御座いませから何時も外出の時兄と一緒に歩いて居りまするが其の麗はしい事夥しい容貌美にして何と譬へやうもまい此の妹を連れては重太郎が諸方を歩ぎ又時としては兄の重藏が連れて歩きまするので無骨なる名島藩士の中にも斯くまで美しき女子あらむとは思ひ設けぬ天女の下界に下たりしか生辨天

の再来か唐士の揚貴妃我朝の小町も三舎を避けんばかりある美人のお辻を  
れば此のお辻に悪想をして居る者も潮山御座います悪想と云ふではないが  
願くば彼の婦人を傍へ招んで酌でもして貰ひたいと云ふ恐ろしい所の考を  
以て居た若侍は日野六之丞に廣瀬權十郎大島勘之助の三人此三人は何時  
お辻殿へと暮つて居ります然るに此同僚で野村金八大谷三平杯と云ふ連  
中が一番彼の女を何方かで騙つて遣らうと云つて居ります或日のみと明  
徳稻荷の御祭禮ゆに、お辻殿は参詣致さんと其様な事のあらうとは知りませ  
んから纏箱したる衣類に白綾子の帯を締め髪は麗はしう結へ上げまして仲  
間を供に連れて吾家を立出ました總て明徳稻荷へ参詣を致し序でに入幡の  
神社へも参詣して戻らんと來掛る所へ片々の茶店に居りました日野六之丞  
廣瀬權十郎大嶋勘之助の三人早くも見附けて 日野ソラ見へた彼處にお辻  
殿が…… オ、今日は幸ひ重太郎も重藏も居らぬ、僅つた仲間一人だから何う  
ぢや各々方騙り者にして遣らうでは御座らんか 廣瀬それは亦一興で御座

る…… コレへ 岩見の御令儀…… お辻殿ちよつとお待ち下さい つじ何ん  
ぞ妾に改めて御用でも御座いますか 廣瀬如何にも改めてお話致すことが  
御座る、それゆゑ此處へお招きを致したので御座る つじどう云ふ御用で御  
座いまするか願くば仰せ聞けられて…… 廣瀬イヤ、どう云ふ用も斯う云ふ  
用も御座らん改めてお話致さうと云ふのは外ではない、此處に居られる日野  
六之丞殿御身の御尊父にお話致して仰ぎ願くば妻女に申受けたいと斯う云  
ふて居りますか御身は日野氏の妻女にお成り遊ばす心なきや つじ是は  
ソタリ何をお戯れ遊ばします、まだ手前は年齢も行かぬ殊に兄も御座います  
ゆゑ爾う云ふふとは兄の方へ宜しく仰せ聞けられて…… 父の方へ仰せ聞け  
られたう存じませる 廣瀬イヤ親父や兄に言つたどて何んで吾等の如き小  
祿の者へ下さるものか、サアお手前日野氏の御縁組は吾々が媒酌を致すか  
らちよつと此所にてお約束だけなすつて下さい、お約束さへして下さらば  
れで宜しい、後とはどうなど致すから只だ約束だけを…… つじろのやうな

お願言を仰せられては困ります何んで約束を云ふ父の許さぬ不義淫奔  
……父兄の許さぬ不義を何んで涙多に出来ませう 廣瀬エ、イ出  
ぬことが……ノウ日野氏 日野六之丞を連れ出て  
にお嫌ひなさるものでは御座らぬ思ひ集れば懸に……ふものはないも  
のぢや、サアどうぞ此方へお寄んなさいと袂を掴んでグッと引かれて  
驚お辻がアレーを放してと言ひながら日野六之丞の手を放して行かん  
とそれば前より廣瀬權十郎大手を廣げて 廣瀬お辻の开は情け無いと云  
ふものマアお待ちなさいと止めても何條聞くべきか一心不亂に逃げ出さん  
とそれと大島勘之助側より袂を押へれば廣瀬も同じく袂を押へる日野六之  
丞頸ヲ玉に噛り付かんとする有様之を見て居た多くの見物「ヤアどうも乱暴  
な奴若侍どうも酷い奴だ軍學指南の岩見様のお銀様に彼様な巫山巖た真似  
をして仲間が打たれて手對ひする事も出来ず憎くいのはおの若侍彼のお兄  
イ様は今日はどうなされだと言つて一人後とへ引き返そと恰も宜し妹が今

日は仲間を連れて稻荷へ参詣をしたと聞いて湖田の屋敷から出て来た重太  
郎四邊を見れば一人の若い者がツカ／＼と重太郎の前へ参りまして若者  
旦那大變で御座います貴方のお妹御を日野に廣瀬と大島のお三方で蒸い事  
をしてお居でにかりませ仲間も打たれてどうするも出来ずお困りの御  
様子で御座いますと聞いて重太郎彼の若者に一禮なし捨置かれじと言ひさ  
ま我を忘れて飛び込み来り 重太郎「エ、イ憎ッくき事をそ、曲者かな思ひ  
知れと言はせもあへず妹の頸玉に掴つて戯れ掛つた日野の襟髪取つて肩に  
掛つぎエイと一と聲叫けよと見ればズンデンドウ日野六之丞遙か彼方に殺  
げられたり

第五十席

廣瀬權十郎何をす岩見の重太と取つて返して重太郎の胸倉に手を掛けん  
とする其手を引いてエイとばかりに是も同じく肩に掛け大地へ投げ付けた  
大島勘之助斯は敵はじと太刀拔へて斬り掛けんとする奴を腰に狭んだ扇面

塙 團 右 衛 門

を取るより早く大島の眼と鼻の間を叩いたから堪らぬ、ウンと言つて倒れた様子、重太郎は之を見向きもやらぬ辻を助け、重サア、早く早くお出なさい、女子の身として斯る所へ来るから可かぬ、必ず人込へは来るもので、はるいと妹を連れて立返つて仕舞ふ、それを早く見たのが村上弾正井上五郎兵衛、粟谷四郎兵衛、是は皆小早川の老匠で御座います、それから適ばれる重太郎の働きと右の次第を左衛門隆景に申上りました所が、隆景殿の御成程、ら重太郎兼亮は、尚ほ部屋住みの身分ではあるが、新地五百石遣はせとせ、有つて早速殿の御前へ召出され、五百石賜つた上、赤銅作りの太刀一振をば、重太郎に下し置かれた、妹を助けたのみならず、日野廣瀬大嶋の三人を投げた、云ふので、大層御褒美を戴きお賞めに與つた、それを聞きました、日野廣瀬大島の三人は無念骨髄に徹し、どうもハヤ何んども申さうやうもない、どうしたら宜らうと云ふと、野村金八、大谷三平は、其場には列なりません、が眼の寄る所に球が寄る、常に同じやうな悪漢で御座いますからして、野村是は殘念で堪

塙 團 右 衛 門

らぬぢやないか、斯うなつた以上は仕方がない、日野氏、廣瀬氏、大島氏計略は密あるを以て宜しとぞ、さうぢや重太郎のやうな奴に無闇に出世をされぢや、如何とも致方がない、一層吾等貴殿等と共に彼れ重太郎を殺して仕舞はふぢや、ア、あいか、そんな強い奴だつて不意なれば殺せぬことは御座らん、不意を討つて仕舞はふぢやないか、廣瀬如何にも野村氏の言はるゝ通りをるが宜からう、だが其計略は如何したら宜からうか、互に密々相談を致しました、其時重太郎は、薄田方へ居りましたから、野村金八は手紙を出し、御貴殿此度新地五百石を賜はられ、赤銅作りの太刀を拜領されたと云ふは、吾々に於ても實に悦ばしい、めで御座る、責めては御貴殿にお祝ひを爲さんため、大谷と拙者に於て御覽申を積りで御座るから、城下の海老屋へお出来を願ふ、それに就いては、過日失禮を致した日野廣瀬、大島の三人が、前非後悔を仕りましたゆゑ、是より御貴殿と水魚の交際を致したいと云ふに依つて願はくば、同所へお入來を蒙りたいと、斯う云つて來ましたから、重太郎は、原より精神水品の如き人

二百十二  
で御座います、委細承知致し吾れ何んも他人に恨を蒙るることやあらん然らば仰せに従つて城下の海老屋へ参らうと城下外れの海老屋へ重太郎は何んの氣をしに來られました時は如月の末ッ方殊に九州のこどゆえ氣候何んもなく温暖くして梅はハヤ末になり櫻花當に開かんとそるばかりで御座います。懸て酒酌に及びましたる頃、日野廣瀬、大島の三人は岩見に對ひ、初岩見先日は意外の失禮をば致した、御貴殿のお令跡へ對して無禮をし刺さへ御貴殿をも刀を抜いて斬らんと致せしに御貴殿の爲め吾々共痛く投げ付けられた其時上役の村上彈正、井上五郎兵衛、栗谷四郎兵衛等に折悪くも視咎められたは吾々の不面目とは云ふもの、御貴殿の爲めには誠に折宜き事で御座らうそれが爲めトッ、御貴殿は御出世なされ吾々は愈々世の中に出ることが出来ぬ、就ては乾度心を改めて御貴殿の配下となつて劍術の一手をば御教授に與りたく、吳々も願ひ上げる。重爾う仰せられては重太郎面目も御座らん、吾少しく戸田流を學ばしたれど是れも伯父上の情け何んぞ能く存せらるる

ので御座らう此間の出來事は定めし御貴殿達が醉ふて上の彼の始末と存するが如何で御座るか、と云へば野村金八、大谷三平の兩人、イヤ前非後悔を致したさうで御座るから今までの事は水に流してお許を願ひたい、互に水に流して是れから蓋を取つて互に酌み交して居りませう、中に此方は胸に一物あつての事なれば、銘々重太郎に勸める、忽ち重太郎は泥の如く酔つて仕舞ひましたから、重是でお暇致すと云つて、只だ一人別れて闇の夜を七本槍と云ふ所まで來りました、如何に重太郎なりとも泥のやうに酔ふてはさうしても長く歩むことの出來るものではない、イデ彼重太郎の命を縮め呉れん、と野村大谷日野、風瀬、大島の面々五人が、らに襷を十字に絞ち、今や七本槍と言へる河添へまで手に、白刀を携へて岩見の跡を追ひ來る、重太郎、此所に於て據なく、右五人の命を取らねばならぬ、とに成行くと云ふお話、ちよつと一息吐いて申上げませ

塙 團 右 衛 門

借重太郎はそれとも知らず七本柳まで参りましたる折柄今まで皓々と牙渡りたる月光は俄かに出る雲の爲めに半ば掩はれしも、露々と流るゝ水は最と清く柳は河添へにあつて宛ながら眠れる如し、重太郎は颯々眼々影を大地に寫してブラリ／＼と行き過ぎんとする折柄野村金八、大谷三平の兩人後とより岩見氏……岩見氏と聲を掛けて来りましたゆゑ、重是は／＼最前か別れ申す其の砌り其の許は彼家より何れの遊里へか足を向けると云ふて居たが然はかくしてこれへお入來になつたるは亦にか御用でも御座いませるか、野村イヤ御貴殿に少々お頼みがあつて参つた下見ると、柳十字に綾あして後鉢巻をして居るから、重何か狼藉者でも出て参つたから拙者に賤貸せよとの仰せで御座るか宜しい不肖おれども重太郎酔ふては居るが狼藉者の五人や十人参るともビクとも致さぬ御貴殿の爲めに御助力致さん然はさりながらうれど知るから多くの酒を飲むまじきものを、些と飲み過ぎて寢念な事を仕つた、野村イヤ其の飲み過ぎたのが此方の僥倖御貴殿が飲み過ぎさ

塙 團 右 衛 門

れば自分等に於ては如何あらんと存じて居たる矢先き酒過ぎたは吾等の幸はひ御氣の毒だが御貴殿の命を乞ひ申したい、重ナニヲ……野村其語ふて居るのが幸ひありと忽ち斬り込む野村金八、重太郎心得たり扱は吾に酒を強いて斯くまで泥のやうに酔はせしは命を取らん計略なりしか卑怯ありと一刀の柄に手を掛けブラリと抜いた、重太郎差の物は中身は栗田口國次なれば切れ味こそは覺え知れど真向より斬込む金八心得たりと重太郎の斬込んで來る太刀を体を縮めて横に拂ひしが受け損じたと見へて金八は腰の邊に深傷を負つた、ダヂ／＼と隔踰くのを見て大谷三平、後ろより物をも言はず重太郎の肩先を目掛けて斬り込んだ、重太郎は肩先を斬られたとは言ひながら彼れが腕の鈍いのだと重太郎の躰を變はせが早いのだ、其上衣類が厚かつたゆゑ着物のみでまだ肉へは掛りません、其中に太刀を逆にして大谷三平の右の小手を斬りければ三平は太刀を持つたあり、小手を斬られて打ち倒れる、此時傍より日野六之丞憎々曲者、戀の仇とも云ふべきは汝なり吾々を植



塙 團 右 衛 門

に出世を爲したる汝の命は貰つたぞと斬り込んで来る奴を 重エ、イ小癩  
かど横に拂つた一太刀に眼の上三寸ばかり深く斬られて六之丞は其場にバ  
ツタリ打ち倒れる、此時廣瀬權十郎 廣瀬汝レツと言つて斬込むも是も同じ  
く秘を拂つて足をば深く斬り付けたり、大島勘之助汝レツ 重太郎、汝の命は大  
島が貰つたぞと言はせもやらす重太郎が斬込む一刃真向より唐竹割哀れや  
勘之助大刀握つたまゝ、朱に染つて倒れたり、岩見重太郎餘儀なく其處に座し  
て血汐を拭ひ扱も斯様な殺生はしまじと思ひしが今は是非おしア、モウ是  
までなり最早免るゝ道はあらざれば速かに訴へ出でんと鳴尾飛彈殿がお掛  
りなればと鳴尾方へ訴へに及ぶ 重唯今城下の海老屋に於て野村、大谷、日野  
廣瀬、大島等の諸氏が吾れを響應した揚句七本柳まで吾を欺して連れ出し無  
法にも討つて掛りしゆゑ武士の意氣づく餘儀なく五人をば斬り棄て、候是  
も日頃八幡社内にての一條より我が出世をなしたと云ふを根に持つて御  
座らうが殿の御馬前に死すべき命を持ちながら私に勝負を挑み、御家臣の面

塙 團 右 衛 門

々を斬り棄てたる段重々不忠至極なれば宜しく御處分を仰ぐと鳴尾飛彈殿  
へ願つて出ましたから鳴尾飛彈より岩見重左衛門に知らせた重左衛門と兄  
の重藏は只だ眉を擧めるばかり 重左斯くの如くなれば重太郎は家を失ふ  
に均しされせも野村、日野等は中々の門閥家あれば伴重太郎には何卒割腹仰  
せ付けられるやうにと鳴尾飛彈殿まで申出ると飛彈殿は殿の御裁許を仰ぐ  
べしと此の趣きを左衛門隆景に申し上げる、すると隆景殿カラ、ツと打ち  
笑ひ 隆今日泰平に相成つたに依つて一人二人の命を惜むるれども乱世の  
戦りにあつては何んぞ一人二人の命を惜まんや豊太閤世に在して朝野お手  
入れの際杯には我邦より彼の地に渡り死するもの數知れぬ思へば、岩見  
の如きは稀なる所の人傑たり、重太郎の如き者一人あらば野村、日野等五人十  
人居らぬとて何んぞ惜まん、さりながらそれにては依估にも當れば重太郎儀  
は根本市右衛門方へ預ける生死は重役の評議に任かす、と仰せせられたるこ  
で重役一同集つて評議に相成りまると村上彈正は助命を願ひ、井上に於て

門 衛 右 團 塙

も助命を願ふと云ふやうに皆々助命を願ふ、小早川隆景に於ても殺すことは素より好まぬので御座るから、隆然らば當分謹慎申付けるといつて鳴尾飛彈へ重太郎へは謹慎申付くべしとの御沙汰、依つて鳴尾殿より致して此の趣き重太郎へ申し渡せ

第五十二席

時に重太郎兼亮自分から願つて、重斯く人を害して免がれざる罪を殿の御仁心を以て謹慎仰せ付けられ拙者謹慎の身と相成りしは身に取らまして有難き事此上もまい今は天下泰平の世されども何日何時國家に大乱の起るも知れず就ては御當家小早川のお家にも間者の入り込み居るやも知れず、これゆゑに此御恩に報ひん爲め私に於ては武者修業をなして國家の形勢を探り關東家康公の御様子をも詳しく探らんと存する、仰ぎ願くは軍法武器馬具戰争の進退等を修業致したく日本六十餘州を廻り見たき心得に候、就ては五百石の領地は御返納申上げ他日全く武術の修業行届き人並になつて立戻りま

門 衛 右 團 塙

たる際には宜しくお召抱を願ひたう存じますると願ひを上げました事ゆゑ小早川隆景殿に於ても大にお悦び遊ばし、天晴れ感心の至り、それでこゝろ岩目重左衛門の忤かりと右の願ひをお開濟に相成り、金子若干を賜はりました、茲に於て重太郎兼亮父重左衛門及び兄弟に別れを告げ、伯父薄田にも別れを告げて武者修業に出て仕舞ひました

此方は木下中納言秀顯に於かれましては軍學指南者と云ふので連れて參つたのは廣瀬軍藏と云ふ者で、此者が重左衛門と武術の勝負を致しました所が重左衛門が負けた、そゝで武術の師範役をば忤重藏に命ぜられましたが併しながら軍學の事に就いて論じますると軍藏や重藏如きはマダ、岩見重左衛門にナカ、及ぶ所では御座りません、そこで再び重左衛門に軍學師範役を命ぜられました、五百石加増に相成りました、すると家中の面々が秀顯公が御養子にあつたのはエライ、エライけれども何しろ連れて來た廣瀬軍藏なんて云ふ者はエラクはないけれども、劍術は岩見重左衛門が負けた劍術には

塙團右衛門

負けたが軍學兵法の議論にあつてはナカク廣瀬の及ぶ所ではない、繩張り  
の仕方から或は敵陣へ進む様子何から何まで抜目のない岩見氏旨い者だと  
云ふ話を聞いて廣瀬軍藏悪るい了簡を出したア、重左衛門が居た日には吾  
れは長く當家に居る事叶はず、一層彼れ重左衛門の命を縮めて呉れんと願  
あるのを覗つて居る、或時重左衛門が秀顯公と恭を圍んで夜更に及ぶ廣瀬軍  
藏此の機失ふべからずと立ち戻りて来るのを待受けて居る、斯かる事とは驚  
知らぬ重左衛門吾屋敷へ戻らんと間を侵して來掛るを豫ねて待つたる廣瀬  
軍藏一ツ橋を渡つたる馬場先きにて卑怯にもズドンと一發打ち放てば重左  
衛門の足に中る、重左衛門アツと倒れる所へ飛び掛り息斷を刺さんと致す  
重左衛門、残念ありと軍藏の左の足の指を食ひ切つたが憐れむべしトツ  
軍藏の爲めに果敢なき最期を遂げました所へ仲の重藏飛び來つたが最早後  
の祭り死骸へ喰付いて涙を流し、重藏ア、残念な事を爲したり、今少し早か  
りなば父上を斯かる姿にさせんもの、吾が父を殺せしは何者あるかと嘆いて

塙團右衛門

も最早歸らぬ事泣くく死骸の御檢屍を願ふ、そゝで山縣七郎右衛門、石井内  
紀の兩人が檢屍として御出張に相成り、お調べに成りました所が圖らぬも廣  
瀬軍藏の印籠が其處に落ちて居たと云ふので愈々廣瀬軍藏に相違ない云  
ふことにあると軍藏面目を失つて山越しに出奔をして仕舞つた、殿に於ても  
重左衛門の死を惜しき事に思召され、金百兩と長光の刀を引出物として重藏  
と妹のお辻に下し置かれ、之にて敵を討てとの仰せ、重藏有難く存じ奉りま  
そる、弟重太郎にも面會致し詳しく此事を申聞かせ、正に敵討ち仕らん憎ッく  
き奴は廣瀬軍藏で御座いますと、御前を退つて來る、借うれから致して重藏  
お辻の兩人は馴れぬ旅路をば巡り廻つて計らぬも京大坂へ來つて段々様子  
を尋ねると江戸の徳川家へ仕へたと云ふ話して御座いますから、然らば  
江戸の旗本でも置まつて居るであらう、何しろ江戸は繁華で諸國の大名が皆  
江戸へ行く、關西の諸侯は黒田細川を初めとして江戸へ参勤交代をしない者  
は、おいと云ふ話だから、速に江戸へ行つて見やうと涙ながらに東海道を下り

まして其の途中も弟の重太郎に會ひもやせんかと百方に心を配る重藏の苦  
勞は一通りありません然るに情けなくも板橋宿へ掛ると重藏が病氣に罹  
臥して居るのをお辻が看病を致して居りました

第五十三席

そると廣瀬軍藏の配下の者が早くも之を聞き知り憎ッくさ奴殺して仕舞へ  
ど病氣に惱み身動きならぬ重藏を引出して賜殺しに致し尙ほお辻をも殺さ  
んとおしたうれを大久保宇内と云ふ者が出て救つたけれども眞心あつて救  
つたと云ふ譯ではないほんの義理一片で救つたもので御座います、ナカ  
此奴悪漢で御座いますして忽ちお辻の色香に迷ひお辻を口説き立てた 宇  
前も斯うやつて馴れぬ旅路を遙々と遠い筑前の名島から東の武藏へ来て頼  
みに思ふ兄貴と云ふものは殺されて仕舞ひ、モウ一人の兄と云ふのは何處に  
居るやら知れぬどの事今は誰をか頼むべき者もないお前の身の上決して悪  
い様にはしさい敵の廣瀬軍藏と云ふ奴はソラ恐ろしい奴で兄貴を返り討ち

にした其の敵は配度私が討つて遣るけれども討つて遣る代りに吾心に従は  
んければ不可ん私の心に従ふことが出来ぬと云ふならうれまでの事敵を討  
つて遣ることは出来ぬ私の心に従へば敵を討つた其の上は又お前の兄の重  
太郎殿にも會はせて遣ると言はれまして憐憫のやうでも未通女の哀しさッ  
イ旨々を欺されて つじ爾う云ふことで御座いますをあらば妾は貴方のお心  
に従ひませうぞ兄にも會はせて頂き又二ツには父の敵と死んだ兄の敵を  
討つて下さりませと只だ重太郎に逢ひたい敵を討つて貰ひたいと云ふ事  
のみ思ひ詰めて居りますをからお辻は大久保宇内の爲に心にもお下紐を解く  
のも唯だ是が爲め知らぬ他國に思はぬ男と添ひ臥しの身は何んたる因果か  
ど泣かぬ日としては御座いません悪漢宇内は固より實意あつて救つた譯では  
なし已れサシ 玩弄にした揚句遂にお辻を欺して人賣りの手に渡し宇都  
宮の三州屋と云ふ家へ遣つて仕舞ひました錢を取りたい爲めに斯かる事を  
致したは實に悪むべき奴で御座います借もお辻は三州屋に賣られましてよ

門 衛 右 團 塙

り夜毎に變る枕の數引手數多の客の中には敵廣瀬軍蔵も來るかも知れん若  
し來をらば只だ一刺しに刺して呉れんと思へども昨日の苦勞に引き替へて  
尙ほ愈増した今日の悲み、嫌な客にも比翼朝源平藤橘四性の人に枕を交はす  
遊女賣女人には犬猫同様に罵詈雑言されるも親の爲め兄の爲めど血の涙を流し  
て居る折柄、圍らる其處へ來つたる岩見重太郎一夜の春を買はん爲めなるか  
將た如何なる目的あつての事かバツマリ顔を合して見れば斯は如何に吾兄  
妹のお辻で御座います つじ、ヤア貴方は兄さんでは御座いませぬか 重、オ  
、妹のお辻であつたかどうして斯かる姿に…… つじ、ハイ…… マア能く此  
處へ來て下すつたが遅かつた、モウ少し早ければ兄の重蔵さんも殺され  
はせぬものを…… 實は兄さんが武者修業に出た跡で是々斯く……と云ふの  
を聞いて 重、それでは父上は廣瀬軍蔵に討たれたるか、エ、オ、無念骨隨に徹  
する…… ヲテ又兄上重蔵殿も廣瀬の爲めに板橋にて討たれ、和女は大久保宇  
内に欺れて斯かる姿になりつるかア、吾れ國に居るならば斯様を事にはせ

門 衛 右 團 塙

ぬものを…… 今更言ふても詮なき事ながら無念ぢやと重太郎如き程の者で  
も目に涙曇らせば つじ、兄さん妻も此様な所に居られませぬぞうぞ一緒に  
…… 重、尤もぢや、と據あぐ致して重太郎吾が妹のお辻今は若浦と名告  
つて居る女子を連れて此の家を逃げ出し、雀の宮まで來た折柄三州屋の邸へ  
に依つて取押へられ、情けなや重太郎は女を連れ出した科に依り獄屋へ下さ  
れお辻に於ては獄屋で舌を噛切つて相果てましたと云ふのは兄重太郎が賊  
を働いたと云ふ嫌疑を受けたと聞き然らば、オ、世の中へ出られぬと思ひ又  
此身も獄屋へ入れられた位から一層死んだがまだと不運を啣ちて自殺を  
致したので御座いませぬ親と云ひ重蔵と云ひお辻は人手に掛らんまでも誠  
に憐れを語で御座います扱も岩見重太郎は晴天白日の身と相成り無事出獄  
に及び是より諸國を尋ねたが廣瀬の在所も相分らず餘儀なく一度故郷へ立  
戻つて参りましたが最早小早川の家も將に危なからんとするばかり塙團右  
衛門重太郎に面談して見れば此話し 重、扱こそ國右衛門殿宜い所てお目に

塙 團 右 衛 門

掛つた身に取つての幸ひ吾が仇は殿様御座れば何分も難ひ申すも長き物語に 團右衛門委細承知致した必ず心配仕給ふ事と是までの話を成らる間いて此處を別れて是より文字々關まで繰り出し舟を浮べて長門に來り長門より周防に廻り廻り廻つて再び來りしは是れか人京の眞島ヶ原、鶴川の威勢は旭の昇るが如く、獨り加へて恐ろしきは彼の大佛建立に及んで片瀬は龜に國家安康の文字を刻んだ爲め端なく鶴川の疑を受け又大坂の疑を受けて今や身を退くと云ふことを聞いて大いに嘆息致し其身は乞食の姿を致したんたる事かや蒲餅小屋に這入つて居る所へ鶴川の家臣坂倉伊賀守、團右衛門を訪ふて塙團右衛門を徳川へ召抱へんと云ふのを團右衛門直之に於ては一粒の米だに食さずと言つて之を彈ね付ける是ぞ即ち團右衛門直之が能く家康を驚かしむるの一條、扱是から致して塙團右衛門直之、岩見重太郎の仇討ちと聞いて感き丹波へ乗込み來り重太郎の仇を報はせ、重太郎は薄田隼人どぶつて大坂へ召抱へられ團右衛門直之今ぞ諸國を經歴する時機來れりと自ら

塙 團 右 衛 門

頭髪を圓めて銀牛と相成り愈々團右衛門直之の本体を現はすそのお話しで御座いまするが追々に座を重ねて辯じ申上げませ

第五十四席

、前同に續いて申上げませも塙團右衛門直之、岩見重太郎兼亮に面會にんで重太郎の身の上就つて自一至十の話を聞き互ひに後日を約して立別れました其後何時までか九州地方に居るも心ならずと心得再び大坂へ立越へ來がますると大坂の有様と云ふものは實に憐れ果敢なき有様見るに付け聞くに付けて涙の種子ばかり若し豊太閤世にあらば斯かる事もあるまじきに何んぞ情けなき此の有様かを責めて鬼將軍と呼ばるゝ清正が世に在つたら斯くまでには爲さぬものを是と云ふのも淺井氏の淀君が餘り跋扈する故か人野父子等がある故か思へば齒痒き事ありと座る嘆息を致し其後何を考へましたるか遂に大坂を後とにふし、思へば人間の果敢なき例へやうもあらざる事と聽て伏見の夜舟にて上つて參ります上り船が長いと申し

門 衛 右 團 塙

まするが長くても構はぬ急がぬ旅ゆえ歩くより寝て居た方が宜いと云ふ連中は伏見の上り船に乗り込みまするうみで團右衛門思ふやう船中の慰みにもあらず一ツ乗込んで居る奴の腹の内を聴いて見やうと云ふので一同の容子を見ますると皆荷物や何かあるものばかりで御座います、商人体の男は頼りに張面を記けて居る侍士の男は何やら話をして居るから塙團右衛門頼りに耳を傾けて聞いて居りますると皆大坂の噂で御座います、傍に居た商人体の男、商人貴公方はどう思ひかはるか存じませへんが、此頃關東の……高い聲では言はれませんが關東と大坂の間柄と云ふものは大變な事ッちやさうでおます、乙うないな話とそ容子を聞くと此間大佛はんの鐘の事とす何やか知りませへんが大岡様の伊佛事はお止めになつたさうだが何でも片桐はんが悪いやうに聞きませした、丙はんもせそか其様な事があつたかい、乙其統とす、何んでも片桐はんが鐘に國家安藤と云ふ銘を入れやしたとやらで駿府の大御所さんからエライ御沙汰があつたさうな私も能うは知らん

門 衛 右 團 塙

きそがお武家さん貴公御存知とせか、侍それは分つて居る、商人分つて居りますか、侍考へて見ませ、大坂の天下を徳川が取つて已れ天下を掌握しやうと云ふに極つて居る、商人高い聲でガン／＼鳴りやはると徳川方の武士に聞えてエライ事にありませう、侍何が居らうと構はぬ、吾は徳川の臣でもなければ大坂の臣でもない、所謂天下の浪人あれば何方の事も思はぬ、即ち左右の事をば良い加減に計らつて述べよ、商人爾うとせか、面白く話とすな、全休何様な事でおます、侍爾う何様な事と言はれては大いに困る、依つて第一大坂の難儀と云ふのは慶長の五年關ヶ原の戦ひ彼れが首尾能く往たから大層エライ事にあつたが惜しいか、關ヶ原で三成が破れた、それに馬鹿なのは加藤だの黒田だの細川だ、彼奴等の馬鹿さ加減が分らぬ、商人ヤア貴公聞ませう、黒田様やの細川さんやの加藤さんはエライ方でおませんか、あの石田三成が何んで豪らうおませ、五奉行の一人ぢやと云て威張つて居なはつたが、臆言を構へて三十人のお妾を殺したのもあの石田加藤が朝鮮

門 衛 右 團 塙

から還つて来たのを押込めたのもあの石田天下の騒動を引起したのもあの石田大坂の土地の者に苦しめたのもあの石田何んでも太閤はんが薨去にあつた後はあの石田が勝手の手をして居たさかい黒田はんや加藤はんが徳川さんのお味方になるのは當り前の事やあまへんか 侍コレ〜 其方三成の事を大層悪く言ふが何んぞ三成に恨みでもあるか 商人へエ…… 大坂の御用達をそが三成が巾が利いた時分随分金を貸して遣つたが戦争に敗れくさつて遂々其金も取れぬに仕舞ました彼様な奴は人間ぢやアあまへん彼は狂人か間拔か阿呆ぞあの様な奴は又と世の中にはあまへんか 侍貴様は只だ人を罵詈雑言ぢや…… 商人土臺私には罵るより踏みしるが強らう御座います 侍爾う貴様のやうに云ふては不可ぬ徳川の威勢益々盛んに成つて来たのは石田が悪いのではありません皆加藤左馬助を始めとして黒田蜂須賀皆是れ徳川へ随軍したるがゆに尤も大御所の事を豪い清正が在つては流石の徳川も及ばぬと見て清正を毒殺して仕舞つたが思は氣の毒千萬……

門 衛 右 團 塙

第五十五席

と云ふのを聞きまして

寝て居つた塙團右衛門ムツクと起き上つて彼の侍の前に出で 團ヤアお武家足下は何れの何人であるか承りたい、イヤ何んと言はるゝ加藤肥後守が毒殺されたと云ふもだが吾も天下の浪人なれば此事は聞き棄てやらぬ、ロモ家康ども言はるべき者が身法にも清正を毒殺する如き事はなからうと思ふと塙團右衛門直之固より加藤清正の死んだ事は知つて居るので御座います、が彼の侍の話を釣り出を爲め素知らぬ振して問ひ掛ければ彼方の侍尙ほも話を次ぎ 侍ヤア御貴殿は徳川家の御家臣かは知らねども肥後守の毒殺されしを御存じなきか 團ヤア毒殺されしとは如何なる物にて殺されしか侍然ればなり去る十六年秀頼公關東將軍上洛せられる大御所上洛と聞いて内大臣の官を以て共に上洛なす其折柄淀殿は之を拒みしを加藤殿が大野父子を叱り付け淀殿を翻めて京へ一日も止まらず其の日の内に戻りしは清正



塙 團 右 衛 門

が計ひ又徳川家の姫君を秀頼公に嫁せしめたるは片桐の計ひなるが是れ即ち關東と大坂との間を圓滑にせしめんとすの計策だ所があの御所の狸老翁は何んの孫娘の一人位は何んとも思はぬぞうでも宜いと云ふ奴をれば彼の北條氏直に吾が孫娘を遣つて置きながら其北條を打ち滅ばし遂に其孫娘をば池田三左衛門輝政に呉れたそれやふれやを見れば狸老翁のそる事は實に何んど申して宜しき奴なるか言語に斷へたる振舞ひされば關東の邪魔になるは加藤清正それに就いて家康の狸老翁より尙は上手を越へたるは當時京都の所司代板倉伊賀守賞するに餘あり 塙團右衛門フム伊賀の野郎は何んでそれ程豪い町人共之を聞いてアアエライ事が始つた所司代を捉へて伊賀の野郎だの將軍を狸老翁だのと言やはるが若し關東の方に聞えたらドエライ事になるかも知れんさかい口を噤んでウウ何も言はぬで居りませう 團右郎が如何せられた 侍外ではない彼の伊賀の親父澁川八右衛門此奴ナカくの奴をれば仲伊賀守と謀り今關東の邪魔物とあるべきは加藤肥後守

塙 團 右 衛 門

清正なり彼奴生して置いてはならじとそこで加藤を澁川が招んだ清正は圖らずも禮廻りに來り其處此處と巡り歩いて澁川の屋敷へ至る折節伊賀は居らむ澁川一人ありしが客間に通し珍味を以て饗應なし大御所より賜はりし饅頭かりとて四ツに切り其のト切を己れが食してト切れを清正に呉れる清正も澁川が食した故に之を食つて仕舞つた聽て暇を告げて立戻るずると程なく四肢痺れ出したが豪傑の清正少しも驚かぬ船を浮かべて肥後熊本に戻りしと聞く澁川は是より三日を出でず東山に於て相果てた板倉伊賀之を聞いて涙を内に飲み親を殺すも天下の爲めと泰然として願みも勇士適はれかるか賞すべきかか天下の英傑澁川親子又清正はろれより病に罹りしが死を察して我が像を刻ませ天守に飾り其後果敢なき最期を遂げたと云ふ其時清正言へる由我れ亡き後は天下必也徳川に歸さん責めては秀頼公をして今の儘にて長く豊臣の天下を定めさせたいと一書を認め何れへか遣はしたりと云ふ又世の人は片桐且元をして柔弱の者なり後れたる者なりと云

門 衛 右 團 塙

へど何條片桐が後れべきや天下の英傑片桐且元心を付けて用いおば適はれ  
なる大將なれど平生は宛ながら猫の如し誰だ憐れなるは大坂に大野父子等  
の憂こる事ぞと天を仰いで嘆息をも塙團右衛門直之之れを聞いて 團ウム  
……それはく聞き樂からぬ大御所の狸老爺貴殿の言ふ如く天下は一人の  
天下に非老天下の人の天下あり扱は遣り居つたお、ア御貴殿の姓名は何ん  
と言はるゝか吾も同じ意思あるが何人なるか承りたい 侍拙者より貴殿の  
姓名を承りたい併し船の中にては名告るまい吾も伏見に着おさは何れへか  
参つて名告るべし 團うれも宜からん」と云ふ中に伏見備後橋の稻荷前に船  
が着きました此處で皆上陸して仕舞ふ態で團右衛門茶屋に昇つて酒食を致  
し音に名高き稻荷山の森に來り最前の武士や來れど待受けて居る彼の侍も  
悠々としてそれへ來り是れはくお待遠うで御座る其許は何れの誰人にて

第五十六席

門 衛 右 團 塙

團吾は元加藤左馬之助嘉明の臣塙團右衛門直之にて候貴殿は……侍吾は  
加藤清正の臣にして當時浪人加藤清左衛門と申せる者 團左様にて候ひし  
か御貴殿は如何にして浪人せられたるや伺ひたい 清吾浪人なせしは深き  
仔細あり然はさりながら御貴殿が團右衛門殿からお話申さむ遠から大坂  
關東手切れにゐるは必定依つて吾は殿の命を受け大坂の前途を案じ煩ひて  
實は大坂の爲めに紀州久動山へ赴き真田左衛門尉幸村に面會おし清正より  
頼みの一輪内實の事細々と物語りを致して相頼みしが承れば片桐且元に於  
ては真田幸村に萬事を打ち明けたと云ふ事茲に起りおは必ず真田幸村は大  
坂へ一臂を貸さんと乗込むは必定にて候はん御貴殿も其時は大坂へ一臂を  
貸して賜はれ吾は是より徳川の舉動を探り尙は知れざれば止むを得ずして  
死地へ身を沈めん舉動相分りおは其時は再び真田方へ知らせる覺悟若し事  
起りなば徳川を相手として貴殿と共に縦横無盡に驅け散らし運ぶくば枕を  
並べて死かんと思ふが如何思召さるゝ哉、ア塙氏御貴殿は吾を知り給はせ

塙 團 右 衛 門

や 團 爾う仰せられ、ば朝鮮國にて貴殿をばお見受け申した事が御座るが  
貴殿の様子をお見受け申し殆んど威服致そ 清左様仰せられては甚だ迷惑  
致そ、吾とても今は浪人の身、塙氏のお考へは如何思はせらるゝか知らねども  
逆も大坂は永くは保ちませまい、それに就いても彼の真田幸村は信州上田に  
於て徳川の軍勢を喰止め遂に關野ヶ原の戦ひに間に合はざるやう致せし  
程の大豪傑天下に稀なる大元師、げれども大坂の覆へらんとする時一木何ん  
ぞ支へ難きは道理あり我等に於ては固より及びも付かざる事と推察仕る  
團 縦令何んと言はるゝも此度ばかりは大坂方勝利とは述べ難し、げれども餘  
りと言へば大坂恩顧の大名等が冷眼に過ぎて居るからの事、萬一秀頼公を見  
殺すに至りなば捨置かれざるは吾々なり、鶴林八道を蹂躪なし大明の軍勢を  
物の數とも思はず加藤嘉明の方に在つて、韓山唐島の戦ひに敵を破りし塙團  
右衛門直之何條徳川に弓矢を引かで置くべきか、加藤殿には是れより何れへ  
往かれる 清吾は是より妾を替へて徳川の勳勢を窺はん爲め駿河に下る覺

塙 團 右 衛 門

悟にて候 團、御用心召され駿府には本多佐渡なんぞ云ふ郎同様の奴が御  
座る、油断をなせば危き事あり能く御勘考あるべし 清、忝う御座る其御  
注意承知至したり、然らば後して御目に掛り申さん、御免と今兩人が立ち別れ  
んとする折柄、最前より誰やら窺ふものありつるが森の木蔭より稻荷の下に  
驅け往かんとする様子 團、加藤氏油断しなさるゝ、清、心得たりと流石は千  
軍萬馬往來おしたる強の者、手早く取つた手裏劍、エイと聲して打ち付くれば  
太股がサと通されて何條堪らぬ逆蜻蛉になつて石段に轉ろび落ちた、團右衛  
門透さず飛來り彼れの襟髪を取つて押へ拳を壓めて二ツ三ツボカ／＼と來  
た、所が拳も餘程痛い、塙團右衛門の拳と來た日にやア榮螺のやうな拳だから  
堪らない 男、ウム…… 團、コレ汝は吾々兩人の話を立て聞き致せし、サア何  
者なるか名告れ 男、吾は所司代板倉の目附役石井藤左衛門と申する者、唯今  
のお話承つて驚き入り逃げ出さんとして此塙の仕備さうぞお許を願ひます  
團、清左衛門殿如何致す 清、匹夫の勇には似たれども此奴が居らば他言致さ

二百三十八  
ん他言せざるやうに息の根を止めては如何に…… 團此奴一人位の事で吾等の身に係はるやうでは逆も駄目だ板倉伊賀はそれ程少量の者ではあるまひ少量なれば少量で宜い、ヤイ石井藤左衛門吾は天下の浪人近日伊賀の首を貫ふと云ふて呉れ頼みは是までだ許して呉れる甚い頼みをしたものもあればあるもの、石井藤左衛門驚いて這々の体で伏見を逃げて直ちに伊賀守に面談を申入れる、伊賀守は早速面談に及び 板倉石井…… 如何なる用事あつて相見へたか藤左衛門頭を垂れ 石天下の一大事出来致しました 板倉天下の一大事とは何事だ 石別に容易ならざる事件出来致したと云ふでも御座いませんが今日伏見より致して稻荷山へ兩人の怪しき人物が登りました是ぞ只者ならずと存じて窺ひましたるに其一人は蓋に加藤左馬助の臣にして今は浪人あし居る塙團右衛門直之今一人は加藤肥後守に仕へたる加藤清左衛門と申する者如何なる事を申やと耳を澄まして窺へば加藤の申するやう大坂危き事眼前に有り如何はせんと云ふと其時は塙團右衛門大坂へ力を入

れるどの事

第五十七席

まだそればかりでは御座らぬ大御所の事を狸老爺と申する事もチヨツくと承はりました實に捨置くべき奴にあらむ加藤は職府に赴き大御所の様子を探ると申しましたそれを聞きましたから早く申上げんと驅出す折無残や加藤清左衛門に手裏剣を打ち付けられて轉びしに塙團右衛門に襟髪押へられて拳も拳榮螺のやうな拳で叩かれましたと加藤は其奴生かして置いては他言の虞れあり切り殺して仕舞へど申しましたから既に命の無いものと覺悟を致して居りました 伊賀守ツム其時塙團右衛門はさう致した 石團右衛門の申すには高の知れたる目付役杯を殺して何かはせん命は助け遣はす其代り塙團右衛門近々板倉伊賀の首を貫ふと能く云ふて呉れと申しましたされば御油断遊ばしてはかりません早々お捕へ遊ばそ御用意を願はしう存じませ伊賀守之を聞いて思はせ高笑ひ「アツハ、、何時に變らぬ塙團右

塙團右衛門

衛門の面白さよ、彼れは一方の持口を命じなば天晴なる大將なれど平生は宛ながら小兒の如し、併し其方を殺さぬ放ち飯せしは彼れも千古稀れなる勇士なり、威走べきものだ、加藤清左衛門より彼の方人物は上は手あり何んぞ捕ふるに及ぶべき、塙一人世に有つたどて何をか恐るゝに足らぬ、大御所之を聞き給はゞ定めて面白く思召さん、彼等の如きは固より承知の事、蚤蚊と同じやうおもひ人の血を吸らんとしても吸る事が出来ぬわ、アツハ、ハ、ハ、石井大儀である、マア、貴様打ち殺されぬのが仕合せだ、目出度い、と言はれて、それきりだから今更何んども申うしやうもふいので目出度い仕舞では詰らぬと思つて、石手配りでも致しませるか、伊賀イヤ手配りにも及ばぬ、何れ彼が面談に来るであらう、と其儘打棄て置かれる、塙右衛門直之は、考へて見たが若し此姿にて這入らば目を着けられもせん、ヨ、委を變るに如かじと翌日伏見をブラリ、と歩るき廻つて豫ねて存じて居ります高田屋仁兵衛と云ふ道具店へ遣つて参る、仁兵衛に於ては、仁旦那様御何用で御座います、塙

塙團右衛門

氣の毒だが乃公の小刀と衣類を皆買つて呉れ、仁旦那様小刀や衣類を皆買つてさうおさいいます、塙大刀丈は要るが外のものには皆買つて仕舞ふ、それから短刀が貴様の方にあるなら懐刀と云ふ奴を買ふから、仁旦那様さうおさいいます、塙少し了簡がある、何んでも宜いから買へ、仁旦那様宜しい織きませう、塙幾らでも價は構はぬ、うれに氣の毒だが當分養つて呉れ、金はあるよ、金の事など心配するに及ばぬ、實は乃公も京都の様子を探くるのだ、仁それは旦那様、香ですな、塙劍香でも構はぬ、貴様も大坂表へ往つたし、太閤が伏見にお在の時分、御厚恩を蒙つたから忘れはしめない、仁死んだつて忘れません、塙死んでも忘れぬ、爾うかくては敵はぬ、仁忘れものぢやア御座いません、塙それから乃公が明日から商賣を始める、仁へエ旦那様、商賣をささいませ、塙明日から乞巧を、仁、戯談言つちやア不可ません、高田屋仁兵衛の家から乞食杯が知られては困ります、塙乞食でも普通の乞食ぢやない、歌を聞つて錢を買ふて歩くのだ、仁何を為さらうと乞食だけは御勘辨を願ひませ

門 衛 右 團 塙

す外のものなら何を爲そつても何んですが…… 團それでは貴様の所から  
夜の明けぬ中に飛び出して他人に知れぬやうに致さう併し何時乞食の風姿  
で飯つて来るかも知れぬからうこは承知して呉れ 仁へエー 團金は幾ら  
でも拂つて遣る 仁有難う御座いますと仁兵衛も義理に揃んで據なく承知し  
た之を蔭で聞いた女房は驚いた 女房貴方は何んだつて乞食杯を家へ置く  
んでせよ 仁彼は上等の乞食…… 女房乞食に上等下等もあるもんでそか  
仁乞食にもへッチョコ乞食奏任乞食勅任乞食と乞食にも色々ある昔は奏任  
勅任さんどふことは言へません是は私の餘計口今の世とは違ひませが餘程  
變つた乞食が出来上つた錢もあれば食物もあると云ふ立派な乞食團右衛門  
身に紫襦袢を纏ふて毎日ブラリ〜と諸方を彷徨ふて居りましたが終には  
高田屋へも戻らぬ何處へ往つたか更に行方も分らぬ相成りました借も團右  
衛門に於きましては乞食と姿を變へて京都に入り洛中洛外を徘徊して京  
都所司代板倉伊賀守の存意如何と窺つた板倉伊賀に於いては嚴重かもので

門 衛 右 團 塙

ナカ〜 油断を爲さぬ居る事ゆゑ團右衛門板倉の首を打ち落さんと思へど  
もろれも成らぬ今日日月さへ牙を渡り宛ながら晝の如く心も清き團右衛門  
直之唯だ一人場所は名に負ふ眞葛ヶ原まで來りしが風が持て来る長樂寺の  
鐘の音木魚の音さへ聞ゆるに思はぬ聲を放ち 團世の中に秋の月は淋しと  
云ふが左もありけんわかづきばかり憂きものはかして云ふたは何處の何奴  
か扱も好き景色よきと草叢に吾を隠れて團右衛門直之前後も知らず一眠入  
り此時數名の侍團右衛門直之を捕へんと窺つて居りました斯は抑も何者で御  
座いませうか次席と致しませ

第五拾八席

凡そ人間は下等に落ちる程易いものはないさうで御座います上等になる程  
六ヶ敷いと申しませすが成程うれに相違御座いません貽の立ち食や天麩羅の  
立食は誰れでも出来るが會席料理を食への御座敷へ往つて物を食へと言は  
れると何んだか食へない能く乞食を三日すると其時を忘れないと申しませ

が、是は忘れられぬかも知れぬ、青天井を吾が家どおし疊は地盤花々たる草を食どおし往還は吾が財産食ふ物は諸方へ参つて貰ふて来ては之を食ひ其外に是と云ふ心置くべきものも御座いません、イクハヤ何んと申して宜いか、團右衛門直之の境涯段々乞食の中間が出来た、カッタイの才六、メツカチの助片胸の六藏、なんと云ふ變なものか自分の一緒に相小屋に居る、是等の者と打ら興じて物語りを致します、そると才六、源助、金藏共も元を洗つて見れば満更親からの乞食でもない、相當の者であつた様子に尙ほ探つて見ると、就中才六と云ふ奴は、どうやら徳川家の廻し者らしいから、才六に参つて様々ある事を聞いた事が御座いませぬ、しかも其葛ヶ原へ来る其前日塙所は名に負ふ塙塙をば横に切れて佛光寺橋を渡りした此方に一ツの原が御座います、其原中で團右衛門、才六の兩人酒を飽腹飲んで互に語り合ふ内、團時に才六……貴様に聞くが、貴様は關東の者で關東の事を能く知つて居るやうだが、今の大御所と云ふ方は、元今川に居つて今川が死んでから信長に頼んであれ程になつ

たが其父廣忠と云ふ人は左のみ豪い者で、いと云ふが然うか、才、うりやア貴方立派に世の中を密んで居る御身とは言ひながら、其位の事が分らぬであるもんで、すか、徳川の家は新田足利が先祖だとか言つて居りますが、兎も角然う豪い方でないと云ふのは、貴方も御承知、併し今の、大御所が實に徳川家へ對しては先づ古今獨歩のお方でせうなア、團、ウム……貴様乞食にしてはナカ、く、豪い事を言ふな、才、貴方が又豊大岡の事を筑阿彌彌助の憚でない云ふから、私も矢張り家康公のお話を、するさ、關東と關西と分れて居るから、ツイ斯う云ふ話にゐるのだ、團、うれがら貴様に聞くが、家康公の總領と云ふのは、彼れは全体、岡崎四郎三郎と言へる彼の人か、才、彼の人かと云ふのは、其いなア、爾うです、けれども彼れは二番目のお子様、團、フ、ム……總領は誰れだ、才、貴方は御存知ないのか、御總領は御婦人で、奥平美作守の奥方になつて居るのが一番の御總領、其次が岡崎様を、團、あれは今川の家來の娘を、室にして、月山の御前と言つた彼れの子か、才、あれは織田信長の娘を貰つて出来

門 衛 右 團 塙

た即ち信長の娘の子うれゆは月山殿が甚く悪んで彼のやうに…… 團新塙  
軍家は彼れは五番目の子だと云ふが然うか 才新將軍家は秀頼公の弟君四  
番目のお子だ 團ハ、一爾うか夫れは知らなかつた彼れは五番目の子だと  
思つて居たが左様かフ、ン、ソ、テ近頃大層衰へて居る忠輝と云ふのがある  
が彼れは何んだ 才忠輝と云ふのは上總介と言つた御人何んにも役に立つ  
氣遣ないお子は多くあらつしやるが上總介は随分乱暴をしたお方だ先づ新  
將軍家を除いては外に豪いお方はない新將軍家は實に豪いお方だが能くお  
見立てにあつたものは考へて見れば秀康と云ふお子を除いて彼の弟御を世  
に立てられたと云ふ大御所の眼力と云ふものは大したもんだと思ひやそ  
ア 團爾うか乃公も知らなかつた、ソ、テ見ると男の子は澤山あるか 才イヤ  
また外にもあります忠吉殿宜吉殿義直殿頼宣殿頼房殿…… 團マア、待  
て其様に男があるのか 才エ、澤山のお子持ですから…… まだ女のお子様  
があります 團フ、ン、うんなら新將軍一人殺つても駄目だ…… 才何だ駄

門 衛 右 團 塙

目だ…… 團イヤ此方の話ハ、ア爾うか家康は其の癖奥方に早く別れて仕  
舞つたがそれで爾う子を拵へると云ふは天下の福者天下に子あきを貧民と  
云ふ子のあるのは又格別子福者と云ふのは頼母しいうれに付けても板倉伊  
賀もナカ、一豪らさうだな 才今度は尊公にお聞き申すが大岡様は本來彼  
様に出世なさるノお方ぢやアないんでそア信長が居たければ太岡様に出  
世の仕様がないのさ明智光秀の爲めに信長公が殺されたあの時に本來なれ  
ば徳川が將軍にあつても宜いのだうれを横合から秀吉が飛び出して關白に  
なつたのは恐ろしい其處を我慢して居た徳川が豪いでそなそれゆえ徳川が  
マア、今日にあつて天下を握ると云ふのは當り前の話太岡のは無理の話  
だと才六の言ふのを聞いて塙團右衛門 團コレ貴様は何んたる事を言ふ奴  
だ 才何んたる事も御座ぬせせん

第五十九席

團貴様は太岡殿の心中を知ぬから不可ん豊太岡は普通の御丁筋ではないぞ



門 衛 右 團 塙

才へエーぞんを御了簡…… 團太閤の御了簡では天下を徳川に譲つても宜  
いと云ふ思召はあつしやる御自分も信長が御存命であれば信長の勇氣を  
借りて朝鮮は愚かのこと大明國を打ち破り御自分が大明の王にならんと云  
ふお考へは遠からず在りあすつたされば信長公亡き後朝鮮にお手入もを  
ふされたではないか然るに文祿年間小西行長が倭辨を以て中頃和睦を爲  
し大明の使者日本に來り國書を太閤に奉つた其書に汝日本の國王たれと云  
らことがあつたから是が爲め大に憤り給ひ彼れより獻したる衣類冠を抛げ  
捨て書を裂いて再び戰爭に成り清正蔚山に籠城を爲したるは貴様も知り居  
らんうれを思ひ之を思へば何んぞ豊太閤は日本の地を望むべきか御年あら  
ば最早今頃は大明國は我邦とかり頼いて大明のみならず臺灣カンボツチ  
々暹羅を始めとし南に向つたる島々は日本の物となり尙ほ對岸にあつては  
天竺鞞鞞露西亞皆是れ日本の物とあり尙ほ進んでは名前の知れざる和蘭陀  
英吉利と言へる國わりと聞くそれ等を皆日本の國となし日本國領地の棒杭

門 衛 右 團 塙

を打ち太閤殿下は世界の王と成らせられ又日本の大君天子は即ち世界中央  
の天子に成らせられて太閤は其次を占めん然る時は徳川にも臺灣國位はあ  
遣はしにふる左様あれば團右衛門は天竺を貰つて彼の釋迦如來に頼んで還  
俗おし裸体で生涯を送る積りであつたるが扱も殘念なる事しけり才六之を  
聞いて驚いた 才尊公位氣樂な人はあ、それより飯籠へ残り物でも詰めて  
貰つて何か美味いものでも食いたいあア 團爾う言へば其様なものか残り  
酒の一抔も飲むべしアツハハハハと笑つて別れた其翌晩月に浮かれて眞葛ヶ  
原吾を忘れて寝ねたるに草原分けてバラ／＼と現はれ出す侍近寄りも  
せず團右衛門の様子を窺つて居る月は皓々として牙え渡り限なく照せせも  
草木も寝たる秋の最夜中打ち込む鐘は丸山のハヤ九ツゴーン、思はず目  
醒めし團右衛門ウーイ最前鴨川に賣つて居りし地酒を飲み思ひ引らる南  
寺にて彼の才六に出會ひ源助六殿等に強ひられて又一抔それより別れて戻  
らんとして知恩院へ参り又手造酒を一抔飲みたればこそ吾を忘れて南柯の

塙 團 右 衛 門

一、夢今見し夢は上洛の太閤殿下御自身太刀を下され關東の家康の白鬚首を討てよどの君命又秀頼公吾に大兵を興へて速かに駿府を打ち破れどの仰せ木村長門守重成拙者と加藤の三人仰せを受けて出でんとを關東の間者才六奴か吾れに打ち蒐つて來りしゆゑ悪くき奴と締め殺し駿府城へ乗り寄せて大砲一發打ち放し大御所家康の轉び出す所を取り押へ首刎ねたと思へば目が醒めたアッハ、ハ、ハ、ハ、夢は五臟の疲れとは謂ふもの、扱妙なものだど四邊を見れば照る月に産さへあらぬ真葛ヶ原左右を圍む大勢の侍士油断からじと太刀引き寄せ 團エーイドリヤ往かうか秋の夜中に只だ一人臂を枕に寝て居ても虫より外に訪ふ人のおいと云ふのもぞうやら淋しい乞食の身ながら八坂を抜けて祇園に出で遊里塙の三味の音でも聞きながら寝むると云ふのも又一興ドリヤ往かんぞと團右衛門直之足踏出せば三方四方より聲掛けて待テ…… 團待てとは吾か 侍如何にも貴様だど云ふ侍キツと打見れば斯は如何に身には充分の支度をあし大小帯びたる一人を月の明

塙 團 右 衛 門

しに能く見れば昨日も今日も酒飲んで互に語り合つたる同じ乞食の才六あれば 團ヤイ貴様は才六だお 才吾こそは今日が今日どて非人の仲間に入りり才六と云つて居りしが全くは板倉家に仕へる目付役大時才三郎と申せるもので御座る昨日も今日も關東の事を御身に告げて御身の心を探りしに全く大坂に竭す心を見抜きし故早速板倉殿に申し入れ徳川に敵意ある御身を捕へんと吾々敵名來たりしなり又塙團右衛門直之の命ちを貰つて來いと板倉殿の仰せを受けて來たりしゆゑ氣の毒ながら貴殿の命ちは大時才六お貴ひ申す

第六十席

團來たな乞食難澁な盲で御座る難澁な不具者で御座ると飯籠持つて様々の物貰つて歩く最にも果敢なき乞食の境涯さはさりながら夏とは違ひ是からは乞食とても一枚も上に羽織つて寒さを凌ぎ酒を飲まねば秋の夜を凌ぎ難うぞ思ひ居る九月の中頃唯だ一ト打ちに真葛ヶ原で切られて仕舞へば團

塙團右衛門

右衛門直之寒さも知らず相果る之に増したる幸ひなし其くばサツパリ遣つて貰ひたいと言へば、サツパリ遣つてお呉んなさい才六殿は以前お馴染ではあるし止むを得ない、サツパリ遣つてお呉んなさい才六殿は以前お馴染ではあるしお目附とあれば斬り方も上手であらう、けれども塙團右衛門両手もあるし足もある、唯だヨツとして斬られぬお氣の毒だが此處に居る五人や十人首戴いてから相果る、其思召しにてお打ち下さい 才、ソレツ…… 塙團右衛門を召捕れ侍エ、神妙に致せと言はせも敢へず左右より討て掛り扱を塙團右衛門大刀しく了簡もあればこそ組んで来る奴を引き寄せざる事を堅めて殿り附けたら目が飛び出すと云ふのは嘘らしいが實際、腦骨を叩くと目がズーッと中から出る、劇場でもやるやうに飛び出しはしません、が甚く叩くと出ます、今一人組付かんとする奴を塙團右衛門足を掛けて蹴付ければ腹所ではおい、構れにも臍の下を甚く蹴られて、ウーンと云つて打倒れる、之はと思つたか、大時に於ては一刀引抜き 侍、塙團右衛門直之、汝の命は貰つたぞと言はせも敢へず、十六七人、一

塙團右衛門

度に斬つて掛る 團心得たりと直之に於ては大刀引抜き右に渡り左りに渡り八方十方に切り捲くる、折柄、板倉伊賀守に於ては燈火照して其處に来り伊賀コレ大時才三其方必らず早まるを…… 塙團右衛門直之所司代板倉伊賀守直談なさん、往來もさき異葛ヶ原、サアサ是れへ 團イヤ伊賀久し振で逢つた貴様も大層年を老つたなア 伊賀老いて見れば止を得ぬ塙團右衛門御身もえらう老けて来たか 團年老いて見れば止むを得ぬ 伊賀、真似するなイヤ、實に吾等の同心目附等を以て唯今は無禮を致したが實は御身の腕前が鈍つたか鈍らぬか試めし見たるが老て益々壯んあるには感服致す、聞けば御身は大坂に力を竭そとの事あるが萬一關東、大坂の手違ひあるに臨んで御身一人大坂方へ参つたとして恐るゝ如き大御所にもわらず新將軍にも在さる御身を活けたりとて殺したとて板倉伊賀に於ては蚤に食はれた程も感じもせぬ、御身を殺したとて忠臣と言れもせん、是れは話だ天晴れを勇士をムザ／＼殺すは残念願くは勇士の血統を世の中に取り置きたいが斯く云ふ板倉の望みだ

以前に出雲で吾と同じ役儀を勤めた事もある其の貴様は乞食吾は所司代隔てし事だが心の内は隔てぬ板倉は塙を殺すやうな男でかい事は貴様も存じて居らう團右衛門之を聞いて居りましたが團成程伊賀は伊賀丈けで本ッ葉待とは餘程遠ふ斬られた所がそれまで御座る何んで左様な事に驚くべきかどうも團右衛門是まで苦勞をしたが無駄苦勞で御座る時に伊賀殿何んぞ別に御用でもあるのが伊賀實は足下の腕前を試めし見たが朝鮮以來千軍萬馬往來おしたる丈け又格別感あるに餘りありコレ用意致した酒を出せハツと答へて何やら知らねど重詰を出した魚の養付け傍に這兎つて居りまそのは栗のキントン其他味の好きもの澤山其の所へ銀の銚子を取出す團是は乞食に過ぎたもので御座る伊賀過ぎたか過ぎんかマア一杯飲むが宜い團是は忝う御座る伊賀盃も何かと思ふたが別に斯うと云ふものもない幸ひ奇ある器があると金の象眼を入れさせて己れが用ゐて居る是を取り出したるは最とも怪しき觸骸の盃團伊賀……不潔なる人間の觸骸首其の

盃は如何致と云ふと伊賀は其觸骸盃にて酒を飲み伊賀是は實に悦ばしい觸骸首であるから吾が飲んでから其許に差をどかみくと酌がセグツと飲み乾し伊賀サア伊賀の盃受けて呉れよと献されて團右衛門受ける觸骸盃團クム……何處の墓場で拾つて来たひれふる山の墓場で拾たらとんを者の觸骸首か是は大分大きいからイヤハヤ、ひさい者だらう伊賀それか貴様は色氣がないだらうが女の觸骸首だ團何んど……穢はしき女の觸骸首此様な物を……伊賀貴様が戀に焦がれて命まで取り合はんとした出雲のお團の觸骸首だ團是がかアッハ、ハ、ハ、伊賀マアそれで一杯飲め出雲のお團は伊達政宗の爲めに關東に下らんとしたのを伊賀が止め置いたるに團人山三郎に別れてから憂きを忍んで相果てた其の果てたる砌り願はくば吾が身体を焼いて貰いたいけれども頭丈けは残して置いて吾を慕ふた塙團右衛門と云ふ穢ない面の男に責めては骸骨でも拜ませて遣りたいと出雲のお團が言ふた故其首は汝に與へる

團 黙れッ……此 獨 體 首 は 女 の 首 に あ ら ず 是 ぞ 男 子 の 首 ち 汝 吾 れ に 此 獨 體  
 首 で 酒 を 飲 ま せ 跡 に て 笑 わ ん と 云 ふ 積 り な ら ん 如 何 亦 者 の 首 だ か 申 せ 申  
 さ べ れ ば 吾 は 此 儘 に て 置 く 事 難 し 何 奴 の 獨 體 だ か 申 せ 伊 賀 然 ら ば 汝 に 告  
 げ 呉 れ ん 其 獨 體 は 出 雲 の 國 の 獨 體 に あ ら ず 無 殘 や 亦 石 田 三 成 が 奸 計 に て  
 高 野 の 山 で 御 最 期 あり し 前 の 關 白 秀 次 の 其 首 を 竊 み 來 り て 此 伊 賀 が 金 象 眼  
 を 入 れ 末 世 の 重 寶 と 致 せ し 秀 次 公 の 獨 體 盃 飲 ん で 君 を ば 慰 め よ と 云 ふ 伊 賀  
 の 眼 は 血 走 て 涙 ハ ラ ー 牙 に 渡 る 月 も 今 は 曇 ら ん と 亦 し 眞 島 ヶ 原 は 寂  
 ど して 人 影 も 亦 く 虫 の 音 さ へ も 最 と 悲 し 團 右 衛 門 直 之 此 の 獨 體 を 見 て 我 を  
 忘 れ 團 右 衛 門 …… 扱 は 秀 次 公 の 獨 體 盃 なる か 悲 し や 如 何 に 父 子 の 仲 悪 し と  
 雖 ぞ も 畜 生 塚 を 建 て ら れ て 屍 を 山 に 捨 て 給 ふ と 何 事 ぞ 伊 賀 殿 能 く も 高 野  
 へ 參 ら れ て 此 獨 體 を 拾 は れ し ぞ 懐 か し や 秀 次 の 君 御 身 は 殺 生 殘 酷 を 亦 さ れ  
 し の 之 衆 臣 君 を 疎 ん じ 世 に 意 氣 地 な き は 京 の 三 好 どの よ と 言 は れ し も 遂 に

運 強 う して 關 白 職 まで 成 ら せ ら れ し に 親 族 の 者 三 四 十 人 を 手 妾 に 爲 し 亂 行  
 を せ ら れ し の 亦 人 々 關 白 と 言 は せ して 腕 白 者 と 罵 り し を 太 閤 開 召 し 哀 れ  
 に 思 召 し た る も 情 け 亦 や 石 田 の 舌 頭 に 掛 け ら れ て 遂 に 高 野 に 於 て 果 敢 な  
 御 最 期 せ ら れ 付 け 之 に 付 けて も 只 だ 涙 の み 塙 團 右 衛 門 上 洛 に 於 て 御 見 奉 り  
 し が 下 賤 の 身 と して 言 葉 も 交 は ず 如 何 に 無 道 な り と も 關 白 の 御 身 天 子 の  
 崩 御 に 殺 生 を せ し 罪 免 か れ 亦 畜 生 と ぞ 呼 ば れ し が 左 は さ り 亦 が ら 其 關 白  
 に 獨 體 の 盃 乞 食 と 成 た る 團 右 衛 門 直 之 手 に 取 り 上 ぐ る 身 の 果 報 有 難 し 忝 け  
 な し 是 も 即 ち 伊 賀 殿 の 亦 喜 ば し う 存 じ 候 伊 賀 左 程 まで に 太 閤 殿 下 の 事  
 秀 次 の 事 を 思 ふ 其 許 亦 大 御 所 の 仁 惠 は 又 格 別 三 千 石 に て も 五 千 石 に て  
 も 召 抱 へ る 如 何 に 其 方 は 伊 賀 の 周 旋 に て 關 東 の 味 方 に 成 り 吳 れ ざ る か 團 右  
 衛 門 獨 體 盃 を 手 に 携 へ 團 斯 は 伊 賀 殿 の 言 葉 と も 思 へ ぬ 朝 日 の 登 る 關 東 亦  
 り ぞ て 團 右 衛 門 直 之 の 欲 せ ざ る 徳 川 に 對 して 如 何 に 飯 羹 欲 し ぞ て 大 坂 を  
 見 棄 て 關 東 に 味 方 を 致 せ 團 右 衛 門 に は 候 はず 伊 賀 然 ら ば 關 東 の 家 康 公

門 衛 右 團 塙

へ弓矢引いて見る氣か 團ヤア弓矢引くと言へば伊賀殿も吾をば誅さすば止むまい、ト云つて弓矢も引けず、さはさりながら今見る獨體盃、團右衛門直之今ど煩惱の垢を去り今日より出家遁世致し豊太閤并に秀次公の佛事を吊ふで御座らう 伊賀何んど其方は侍を止めて何んどする 團何んどぞると云ふ事は御座らん、吾は是より廣福寺の長老を頼み黒髪を剃ろし大小を抛つて身は黒染の袈裟衣、されば何どか名乗るべきか吾が姓は牛の如く吾が身体は鐵の如し今日改めて鐵牛となりぬれば伊賀殿も團右衛門直之に獨體盃を賜はれたし 伊賀面白き汝の一言然らば直之其方今日よりは名を改めて鐵牛和尚…… 團ヤア御免蒙むると一刀引き抜き鬚節アツツリ 團南無阿彌陀佛く 此獨體盃は吾が爲めには一世の紀念能くも佛事を營まむ、生者必滅會者定離、遁生菩薩南無阿彌陀佛…… 伊賀最早戦手に出る念は無からう、團右衛門…… 團戦手に出る念はかいけれど、イッサに出る念は事に依ると出るかも知れぬ、南無阿彌陀佛く 伊賀コレくうれでは出家にかりし甲斐

門 衛 右 團 塙

がふいではいか 團、けし然ればかりも言へね、坊主にあつても時に取つては戦争も爲すゑとあり、昔根來寺の僧侶が戦ひし例もあれば石山の本願寺に金挺棒を振ひし坊主がある、坊主たりども只だ人の菩提を吊ふばかりでない、南無阿彌陀佛ば表向き、事に依つたら殺生を致すやも知れぬ、只だ當分は墨染の衣…… 伊賀面白し時節あらば又會はんと悠々として立戻る、ハヤ月も傾むき掛ゝる秋の夜の虫の音も聲を止める頃、乞食姿で悠々と來る塙團右衛門、廣福寺の門に入り三日と経たぬ間に變り果てたる墨染の大坊主、ホクく 南無阿彌陀佛の殊勝氣に斯かる頭になつて居ても心に丸くなさざるか、事もあらんに岩見重太郎が父の仇を報う時來れりど一報來るや鐵牛の團右衛門前約をすつて出張なし、助太刀をる奴を盛殺しにして岩見に別れ再び浪華に立ち戻る、此方は岩見重太郎、大坂の招ぎに應じ伯父の姓を冒して薄田隼人兼亮と名乗つて大坂に籠る、此方鉄牛法師の塙團右衛門殊勝氣に彌陀を吊ふて居りました、が遂に慶長十九年關東大坂お手切、茲に於て後藤と入城に

及び塙團右衛門が岩見の手助けをする一件次第に辨じませ

第六十二席

塙團右衛門

エ、引續きまして塙團右衛門直之のお話を辨じませる、岩見重太郎兼亮が丹後の天の橋立で父の警たる廣瀬軍蔵を始め數百人を對手に爲して本懐を達せんと致しましたことがございませぬ、此時塙團右衛門が鐵牛といふ僧侶でありながら鐵の棒小脇に挿込んで躍り出で岩見重太郎兼亮の片腕をかつて終に警とし思へる奴輩塵殺しにして仕舞ひ、其儘團右衛門直之は元の鐵牛とあつて京都の興福寺に罷り歸り重太郎兼亮は大坂に廻つて薄田と稱へる伯父の姓を冒して薄田隼人兼亮と成りました、此の復讐を委しく辨じませるとまるで岩見重太郎の傳記に相成りませぬ、此處等の處はぐんど略しまして早速鐵牛法師の入城といふのを辨するやう致します、さて鐵牛に於ては關東關西の御手切れこそ近きに在りど自己承知致して居りませぬ、毎日の様に洛中洛外を鼠の衣を懸けたる儘四方をぶらぶら歩い

塙團右衛門

て居るうちにも心は矢猛にはやり何か考案のある様子愈よ慶長十九年九月と相成つたれば塙團右衛門直之がゑ、ぞ則ち日頃の恩に報ふる所と兼ねて心得て居りましたか興福寺をブラリと立出で、仕舞ひ、馴染重つて居る伏見の高田屋といふ家にやつて參る、山田屋と云ふのは道具店でございませぬ、鐵刀は言ふも更なり、其他の物はズラリと飾り、武藝十八般に渡るの品々、何一つとして缺けたるは無い、彼の家に來つた鐵牛の團右衛門直之、鐵牛、山田屋の主人暫くであつた、亭主、ヤア鐵牛様でございませぬか、貴坊のお前も久しく拜見致しませんでございませぬ、お前もあがらざるも其の御元氣で結構でございませぬ、鐵牛、イヤ結構でございませぬ、亭主、併し貴坊様は元は朝鮮へ行つて虎狩まで爲そつた、と云ふ加藤嘉明様の御家來であらう、しやいませ、から、其の強さ加減と云ふものは何の位だか分りませぬ、坊さんにお成りませぬ、たら矢ッ張引導を御渡しになる事がありませぬ、鐵牛、それは常住坐臥經文ばかり讀んで居る亭主、お経はお讀みに成りませぬ、鐵牛、それは常住坐臥經文ばかり讀んで居る

門 衛 右 團 塙

亭主へエ左様でございますカナ、けれども貴坊に引導渡されたら迎も極樂往生は出来ませぬ、鐵牛の團右衛門も、鐵牛アツハ、高田屋仁兵衛亭主へエ、鐵牛貴様が死んだら乃公が引導渡してやる、亭主へエさうでせうか、極樂往生かりませうか、鐵牛、駄目だナ、亭主、駄目ですか、鐵牛、貴様は此世から罪を造つて居る面からして地獄々々して居る、亭主、元蔵言つちやア、いけませぬ何うしても極樂へは往けませんか、鐵牛、ア、性けんナ、地獄往生疑ひかし、亭主、オヤ、地獄往生……、即身成佛と云ひますが成佛しませうか、鐵牛、ム、成佛はむづかしい佛にあどは成らんナ、亭主へエ何に成りませう、鐵牛、先づ成犬だ、亭主、エ、鐵牛、成犬即身、亭主、成犬とは何でげせう、鐵牛、身は即ち犬と成る、亭主、ムツ、元蔵言ちやア、いけませぬ、犬を成らぬ成られるものでせうか、鐵牛、イ、ヤさうでない、貴様は娑婆で種々の罪を造つて居る、一分の物を二兩に賣り二兩の物を五兩に賣り、盜賊は他人の物を盗むが故に首を刎られる、亭主へエ、鐵牛、汝は商賣をして他人の物を偷むより甚だ

門 衛 右 團 塙

しい現世で首が繫がつて居る代りに來世には形は犬とあり首ばかり人間物を食はんとすれば其の飯より焔然へて喰ふ能はせられ果敢なき針の山登れば降る血ノ池地獄奇責の責めは遅れがたない、亭主、イヤからくりを話しちや困りませ、鐵牛、ナニ本當だ、亭主、貴坊おどは何に成しまそ、鐵牛、乃公は地獄に行く、畏れ多くも前に物故せられたる豊太岡と諸共に閻魔大王を膝の下に飼ひ、赤鬼青鬼奴等を皆我が後に撞着たらしめる、今頃は閻魔殿下閻魔をば手下に使つて太閤大王と成られて居るであらう、おどから我等が往つたれば先づ鬼の代理だ、亭主へエ貴坊が……、鐵牛、法師が鬼の代理をば鐵牛といふ名からして可笑い……、けれども貴坊は坊さんになつてそれでも丹後の天の橋立で二三十人撲殺したとか何ぞか云ひますがさうですか、鐵牛、先づさうヨ、亭主、そんな坊主がありませうか人を殺そをさ、云ふ坊主が……、鐵牛、坊主は元來人を殺そものだ、亭主、助けるんぢや無いのですか、助けるのでせう、鐵牛、助けちやア喰ふに困るぢやないか、亭主、さうして……、鐵牛、



殺して仕舞つて寺に来るから坊主が喰へる南無阿彌陀佛と云ふのは早く死んで地獄に行けといふのだ 亭主、嘘ッ言つて地獄に行けなんて早く極樂に往けと云ふンでせう 鐵牛、極樂だつて地獄だつて死んでから往くんだもの分るものか早く死ねといふのが南無阿彌陀佛といふことだ南無阿彌陀佛を唱へる奴はまア馬鹿だナ 亭主、南無妙法蓮華經は 鐵牛、矢ッ張同じことだ 亭主、さうでそかナ 鐵牛、早く死ねといふことだ、そんな馬鹿な事を唱へる奴があるものか人間は一日でも餘計に生きて居たいと云ふのが性質であるのに早く死にたいなぞいふことがあるものか 亭主、さうでそかナ 鐵牛、だから現世から祠堂金といつて金を上げればそれは冥途へ往つて宜いことがある 亭主、ごまかしちやア往けません金を出せなんて…… けれど黄金佛と云つて現世でもつて黄金で佛を作ると大變宜いと云ふふを申すすがさうでせうかな

第六十三席

鐵牛、それア大變宜いな 亭主、先づまアこの位おつたら出来ませうナ 鐵牛、さうだナ百両もあつたらば立派な黄金佛が出来其れをお前が仕舞つて置けば大した事だナ 亭主、さうでそかナ何うです鐵牛さん貴坊に其の黄金佛といふのが出来ませうか 鐵牛、出来ぬもは無い 亭主、興福寺に兆殿司といふ方が賣いた五百圓漢といふのがあるさうでございますナ 鐵牛、さう 亭主、貴坊御存知ですか 鐵牛、ム、知つて居るども 亭主、其内一幅私ア藏ぎたいと思つて居るんで何が何うでせう其れを一幅偷んで下さいませんか 鐵牛、坊主に偷めとは怪しからん奴ぢや汝れ…… 亭主、イヤ是れは粗忽申上げました何うか償ひて藏ぎたいもので…… 鐵牛、貸してもやるが賣つちやアいかん 亭主、エ、賣りやアしません何うです其の黄金佛も貴坊一つ拵へて下さへませか 鐵牛、百両出せば興福寺に黄金佛が一つある今の大和尚に話して其の百金を預けて黄金佛をお前が受取つて来るのだ、さうして新に黄金佛を興福寺の大和尚に鑑らして賣ふ、さうするどお前も佛果を得る

塙 團 右 衛 門

と云ふ譯だ 亭主本當にさう云ふことが出来ませうか 鉄牛さうすれば死  
殿司の袖も必らぬ前の手に這入る 亭主さうでもか十世の中に此の位  
らゐるものは無いでせうか 鉄牛それは聞らぬか 亭主何しろさう願ひませ  
うか私に百兩の金子は茲に持つて居ますが…… 鉄牛それでは其れを出さ  
つしやい 亭主けれども貴坊其れを持つて伏見の黒染へ往つて女郎買を  
をしては往けません 鉄牛此どうんを事を致すか…… ア、コレは好  
い銀がある十其の銀を一個…… 是れば黒糸織した 亭主左様でございまを  
鉄牛是れば乃公が持つて往く 亭主何に成さるのでせ 鉄牛十二宜い銀と  
甲を鐵櫃に入れて…… それから此の百兩の金子は乃公が受取る 亭主へ  
宜しうございます 鉄牛それから鐵か、ムッ太刀は預けてあつたナ 亭主へ  
エ貴坊の太刀は預つて居ります 鉄牛あれを此れに出せ 亭主何うなさる  
んです 鉄牛皆な包みにして豊後橋の側から船に載せて大坂に下る 亭主  
何をなさるんでせ 鉄牛實は今か前か出した百兩を賣金儲と云ふのはあり

塙 團 右 衛 門

や嘘だ是から乃公が大坂に入城して秀頼公の爲に盡す坊主も餘り感心しな  
ぬから元の武士にあつて美ン事討死をしやうと斯う決心して居るのだナ此  
の百兩は彼方に往つて届けるが當分の間家來などの支度をするのに鳥渡借  
り物だ 亭主是れア鉄牛様乱暴だ黄金…… 鉄牛黄金佛も何もあるものか  
御身知らぬや太閤の御恩を、既に當地には聚樂の御殿も造らせられ伏見桃山  
御殿を造らせられた甲斐もなく終に三成の事を機會となして天下を  
掌握に及び秀頼公十五歳に成り給はし御戻しに成ると云ふたるのも皆是れ  
詐り言今に至れば國家安康の鐘の銘を奇貨として情けなくも關東關西手切  
れに成らんす今日の有様、今承はれば後藤又兵衛基次入城を爲し、續いて眞  
田左衛門幸村入城を爲すと聞く塙團右衛門直之も入城なまで成るべきか既  
に明石掃部介なる者が密かに我が興福寺に來り御身朝鮮以來の武勇を現は  
し彼の關東家康を取つて押へて呉れざるかとの頼み坊主頭には候へも哀  
れ君家の爲には死を以て盡し申さんと答へたり今や天下の人皆徳川を尊奉

塙 團 右 衛 門

かし太閤故參の武士黒田細川は言ふも更なり福島加藤等に至るまで皆徳川へ心を寄ると聞く此時に當つて眞田左衛門幸村は徳川方に現在の兄の在るをも懸はす遂に秀頼公の御味方に參ると云ふは天晴れ父昌幸の言葉を用ひたると思はれたりされども大坂城には倭奸阿蘇の前者大野父子ありと聞けば此の點ひ果して違はるや否やは知れされども假令何に致せ一たびは入城に及んで徳川の爲に力を盡す奴輩片々端から打つて打すくめ切つて切すくめ思ふ存分愛目を見せんと存するなり御身と雖も速かに我等と共に大坂に下り入城致しそそれ迄は俱に盡力致して呉れヨ頼むは仁兵衛百兩の金は軍用金あり、鑓櫃は當分借受けた 亭主是れは驚いた金を貸して鑓櫃を貸しておまけの果に貴坊の爲に人足や何かを雇つて歩くんでそか 鉄牛其れに就けても故太閤殿下の御恩を思ひ 亭主エ、宜しうございまそ太閤様の頃には種々ど何うも御厄介にあつたのでございます何と云つて仕方がありませんエ、やりませうア、據あいなア、情けあいな 鏡牛コレ愚圖

塙 團 右 衛 門

々々言ふナ 亭主へエもう愚圖々々申しません 道具屋仁兵衛こいでもつて四方を奔走し人足を拵へて家來様に仕立あげ早くも淀の船に乗込んで大坂八軒屋に着きました是より致して道具屋仁兵衛先立ちと相成り何れからか馬を一回持來りまして大將一人此の馬に跨つてさても其時の打掛を見てあれば黒糸織し金小寶の大鏡同ヒ宅の三枚鑓鹿の角の前立打つたる甲を頂きまして多くの人々を連れて意氣揚々と乗込みまする所の塙團右衛門直之の勢ひ又凄じいことございまそる大野父子は態々出迎を致しませるといふ間もなく後藤基次に出會ひ長曾我部元親に出逢ひ昔朝敵をば蹂躪おしたる物語をぞ致して居ります尋で眞田左衛門幸村も入城に相成るどころが眞田に於ては伴大助を入城せしめて自分山伏の如き姿を致して疾く大坂城に來つて大野修理之亮を驚かす此等の話を傳聞きましたる城中の人々實に眞田は智謀の武士此の位の人物は實に得易からぬ所であると銘々安堵の息ひをしまそる

塙 團 右 衛 門

第六十四席

塙團右衛門直之は兼ねてより兄弟も只ならざる薄田隼人兼亮が今土手組を  
は一二を争ふ人と相成り七手の大將の一人をれば難ての事に團右衛門直之  
を訪れて自己が小屋に伴つて参り先づ酒をを勤めまして兼亮ヤア塙能  
くこそ入城して呉れた我等心足らざるの時にはか手前の爲に力を添へられ  
たが今や大坂は孤城落日の有様御身入城の上は諸共に力を戮して此城を守  
り願はくば再び豊臣氏の天下を仰がうではござらぬか就ては大坂城の毒虫  
といふのは言はせど知れた彼の大野父子でござらう是等の者は事の序に除  
かねば相成らぬが就ては先達て誰人を大將に致そといふ評議がござつた  
や大野の了簡では自己が何と云ふ考にあるやうでござるが如何思召され  
るか先づ某の考では軍師は眞田幸村に致して大將は則ち長曾我部後藤本村  
斯く云ふ薄田並に貴君と大坂城の五大將を極めたるものでござるが貴君  
の御考は眞田氏を軍師として宜しいと思召すか如何でござる團右衛門直之

塙 團 右 衛 門

盃を下に描きまして直之先づ眞田だナ既に慶長五年關野ヶ原の戦ひに  
關東將軍秀忠上田の城を抜かむとして終に抜くこと能はぬ大軍を持つて狼  
狽へたと云ふのは意ふに眞田昌幸父子の軍略に依つてなり今幸村此の城に  
來れる上は關東何萬の軍寄するとも恐るべからぬ城は難攻不落に致して支  
える者は眞田幸村又た戰場々數巧者の長曾我部後藤不肖ながら斯く言ふ塙  
團右衛門直之失禮ながら薄田隼人兼亮殿若冠あれども今天下の人の感もべ  
き木村長門守重成彼の人々ある上は關東家康來るとも恐るゝ事なし左は去  
りながら只恐るべきは大野父子とか、ナ評議は如何ある義にてござるか  
兼亮其評議を明日が大事速に明日評議仕らん云ので愈々其翌日に相成  
て評議と云ふこと觸れ出されましてございませ上段の間には正二位右大臣  
評議と云ふことが觸れ出されましてございませ上段の間には正二位右大臣  
則ち故太閤の御遺兒秀頼公蜀紅錦の御陣羽織を召されまして悠然と控え給  
ひました奥の方に御簾が下げて此の中には淀殿並に其外の婦人方左の上座

門 衛 右 團 塙

には織田源吾長登入道次に大野美濃守入道道犬齋大野修理亮治長同主馬頭  
治房織田左衛門佐雲生寺入道渡邊内藏助乳木村長門守重成大野信濃守治徳  
郡主馬頭宗保なき云ふ者がズラリと居並ぶ又土手組の方には速水甲斐守  
青木民部少輔眞野豊後守堀田圖書頭伊東丹後守中島式部少輔野々村伊豫守  
藤田隼人今木源右衛門等の人々又此度入城なしたる面々には眞田左衛門佐  
幸村長曾我部宮内少輔盛親後藤又兵衛基次塙團右衛門直之其他毛利細川南  
條三浦萩野山口明石仙石小倉増田等の人々益に百三十八人千疊敷狹しとば  
かりに居並んだる有様實に繪に書けるやうに思はれました秀頼公上意には  
秀頼其方違存じの如く應仁の頃細川勝元山名宗全權を争ひ天下の乱を起し  
てより以來年月を経ると雖ども泰平に歸ることをなく元龜天正に至るまで  
上は帝王より下萬民に至るまで更に安堵の思ひを爲さざる處に父秀吉の武  
略によつて四海泰平に歸し庶民業に安んずることを得たり然るに去ぬる慶  
長三年父秀吉他界の時に斯く言ふ秀頼幼弱なるによつて天下の政務を暫く

門 衛 右 團 塙

徳川に委ね我十五歳に至りなば天下を歸し讓るべきの處慶長五年石田三成  
亂を起そ其折を幸ひとして罪を我に蔽せて外様大名の如くに會釋し剩へ約  
束を變じて將軍職を我が子に譲り我を下人同様に致さんとし此度大佛供養  
の鐘の銘文に咒咀調伏の意ありあど難題を申懸け殊に三ヶ條の無禮を言  
ひ送ること是非に及ばぬ仰々此度の三ヶ條固より承引すべき謂はれなし父  
より譲られたる當城何の面目あつてか退るべき又諸大名同様に關東へ參勤  
いたすべきこと誰人に對して愧かしからせや生甲斐もなき次第なり且又一  
人の母君を關東へ人質として送らんこと此上もなき不孝に非せや所詮は運  
を天に任せて只だ汝等が忠勤を頼みに關東に向つて弓矢の勝を争はんと思  
ふあり依て大軍を取控ぐべき計略評定を致し吳候へよと御目に涙を浮か  
ひていと哀れげに仰せられる一同ハツと平伏致し懐舊の情に逼られて言葉  
も無くて囁喃此時大野修理亮改めて執權に相成りしゆへ斯様なる評定の席  
にて先を越されては相成らせと存じましてか席を進出て 修理當城は日本

門 衛 右 團 塙

無双の要害假令百萬騎を以て攻むるとも容易に落城あるべからず其上兵糧  
矢玉火藥に至るまで不足なく固より金銀は澤山に之ある故參新參の諸大將  
心を一決して堅く守り防ぎ戦はゞ家康並に秀忠日本の軍勢を率ゐて來り  
ふども、ヤツカ即時に落つべからず且又遠路を來り攻れば兵糧薪炭塩味増等  
も積ままし然る時には陣中必らず動搖せん其處に乗じて打つて出せば一舉  
にして關東勢を遂崩し勝利を得んこと疑ひなし各位如何思はるゝや

第六十五席

此時主馬頭進出で 主馬只今兄修理亮殿の申さるゝ處至極の理なり最早冬  
の季にいたり關東勢は野陣を張りて寒氣忍び難く味方は全く城の中にあつ  
て坐ちがらにして敵を防ぐると甚だ容易あり又敵寒風を憂へて酒食を以て  
身を暖むるときには其の勇氣強しと雖も遙け易し大軍を率いて長陣を爲さ  
ば兵糧自ら不足せん軍中に兵糧足らざる時は忽ち怨みを生じ酒食多ければ  
將おやむと謂へり彼と云ひ此と云ひ敵の變を生ぜんこと疑ひ之を更に北

門 衛 右 團 塙

の方は中津川の流を用ひて二重の柵を結び中島を中に取込み東の方は深江  
繩手より鴨野今福を中に取込み二重柵を取結び西は天王寺を味方の出張り  
とし、それより道頓堀福田ヶ崎博勢ヶ淵又た乾の方には野田福島是等を要害  
に構へて悉く砦を堅め而して西國船出の運船を看付けし十三萬餘の兵士を  
以て斯く御手配あるからば君の御開運疑ひあるまじと手に取る如くに言上  
に及ぶ此時親父の道犬大に喜び扇を開いて煽ぎ立て 道犬流石は兩陣武略  
に勝れた樂もししく其時御殿の中なる淀殿には 淀君只今修理が申した  
る處皆々何と聞きしぞや主馬が申す所尤も有り追付け天下は此方の者じや  
と武道の事も存じませぬゆへ女心の淺ましや大野兄弟の言ふこと道理だ  
思つて居る後藤も木村も暫く言葉もかくて居りましたが、無遠慮なる塙團  
衛門直之大口開いてカラ／＼と笑ひ 直之如何に各位聞き給ひしか、薄田集  
人殿も在すらん、後藤基次殿も在りつらん、軍師具田殿も在しつらん、大野兄弟  
が今の一言何事ぞとざる假令御殿中に在る女性何と宜ふども是等は探る

門 衛 右 團 塙

に足らざる事あり、女子は固より斯かる席にハヤ／＼ハリ出へしものにも無  
きに狼りにシヤ／＼ハリ出るとは何事あるが右大臣殿の御前をも憚らず無  
禮沙汰の限りにあらまや、御大将軍師の言葉を聽かれて然るべう存じ候なり  
假令右大臣公たりとて軍師の言葉御用ひなきに於ては是れ道に非き、只今  
大野兄弟の一言ころ片腹痛けれ、金銀兵糧玉藥淨山をれば籠城然るべくと申  
されしが直之愚考によれば甚だ以て然るべからず、畢竟弓矢の道御存知なけ  
ればこそ斯くは申せしならん、凡そ要害を頼みて籠城いたしと云ふは味方小  
勢にして出でし戦ふこと能はざるか若くは三萬四萬の後詰もあらば籠城然  
るべしと雖も左る頼みもなき籠城は致さぬこそ宜けれ、石を疊んで塙とな  
し、鐵をもつて門と爲したる城廓に籠ればとて日本國中の敵を引受け、一城を  
特みに立籠ること軍法に於て有る間敷いと、失禮ながら團右衛門直之は存  
ざる、但し大名後詰の約束に假令籠城なり難ければ徳川に人質にても候ふか  
如何でござる、大野殿前田島津の勢ひ若くば其他の強大名が御味方致すべき

門 衛 右 團 塙

証據も候ふか、大野殿承りたい、軍師の御思召は如何でござる、薄田塙暫く待  
て、軍師の御言葉も待たずに御身狼りに言を放つは無遠慮千萬あり、直之無  
遠慮ありとは申しながら大野父子か餘りと云へば無遠慮あり、薄田大野父  
子が無遠慮なりとて彼は固より齒牙に懸くべき人物でないワ、直之齒牙に  
かくべき人物でないとて彼も同じく人間の形をして居る如何に道犬とて犬  
ではあるまひイヤ之を聴くと道犬ハツタと怒つて、道犬執權の父を犬とは  
何事、新參の塙直之無禮あり、今一言いふて見よ、直之何だ、犬武士豊太閤世に  
在る時には汝何役を致した、汝れ御幼君に仕へてみよ、則ち淺井家の縁家たる  
に依つて今盛んなりと雖も本是れ無能無才のしれ物、身不肖ながら塙團右  
衛門直之故太閤の御恩を受けたる加藤嘉明の家臣一たび天下を浪々なし名  
を鐵牛と呼んで坊主となり、坊主より又武士と成り、武士から坊主に成り、又坊  
主から武士と成る變るが早いカヲデ、コデン、變化極りもなき塙直之、道犬如  
き所の猪狗武士、我が小拳を喰つて冥途に往き居れ、實にはや乱暴狼籍、暇さ評

門 衛 右 團 塙

二百七十八  
定の中に榮螺のやうなる事をかためて己に大野道犬の横ッつばうを張倒さ  
んとした薄田隼人も是れには驚き後ろから隼人團公待つた何時に襲らぬ  
貴公の亂暴……直之岩見の重的其處放せど揺ぶるうちに又兵備がムーン  
どばかりに團右衛門直之を押へて先づ退けど暫く團右衛門を退ける跡でも  
つて真田幸村が籠城の法は無いと云ふことを滔々ど述べも則ち關東將軍の  
勇氣充満ちて居るふと兵士の總て屈服して居ること百串百般を説いて終に  
大野父子を回せましたのでございませすから大野父子も今は喝の音も出ぬ  
い軍師の言葉通りにと云ふふとに相成つて仕舞つたそれから七手の人々に  
於きましては巡檢といふことに相成りませる又大野父子木村薄田毛利長曾  
我部塙團右衛門を……云ふ廿八人は先づ大手より豊志谷口玉造口堀留口農  
人橋口本町橋口高麗橋口此の橋に導連火を仕掛けると云ふのでございませ  
真田に於ては先づ導連火と云ふものは未だ日本では用ぬ物でござる  
朝鮮では小西が難義を致したと云ふことでござるから是は我等が何ぞか致

門 衛 右 團 塙

そと云ふので塙團右衛門が連れて諸方を巡檢に及びまして天満橋口京橋口  
よりさきの今福山田口黒門口辰巳の方なぞを見ませる後には此處を真田山  
なぞ申しました幸村は又本丸に歸りまして櫓の天主等残らぬ巡檢を致も  
まして先づ出丸を一つ持いかければならぬと云ふので伯母瀬山に出丸を造  
る後に之を真田が丸と名づけました  
そふで幸村は言ふも更なり後藤木村の勢ひ盛んに相成り引續いて薄田隼人  
並に塙團右衛門直之の勢ひ盛んに相成り時々大野父子と衝突を致し團  
右衛門性來酒すぎでございませしたか或時酒を飲んで圖らずも真田幸村が關  
東家康公を刺して來よとて倅大助を出しやつたる頃にやわりけん九分の醉  
を爲して農人橋にて十六人の關東武士則ち間者を取つて仰える之が爲に大  
野修理亮と再び白刃を振つて血の雨を降らせる迄に至るのお話し次回に申  
上げます



塙 團 右 衛 門

扱伺ひまゐるは塙團右衛門に置ましては大坂に入城以來大いに真田後藤其  
他の人々に取用ゐられ大野父子とは誠に仲悪しきことござりましたなれど  
も團右衛門の言ふことは随分人々も尤もと言はれるやうなことに相成りま  
してございます、團右衛門イデヤ見よ大野父子は我れ戦争になつたる以上は  
必ら走彼等を惱まして呉れるは目前なり我が武勇の程を知らしむる時は何  
時あるか必や彼等をば惱め呉れんと思ふ中に愈々籠城と極まり徳川將軍の  
御同勢大御所の御同勢をも御進みになると云ふ慶長十九年十月廿二日には  
愈々新將軍進發と相成ることゆゑ諸方の手配りも嚴重大御所に於ても正し  
く大坂を十重二十重に圍んで一舉にして振むと云ふ所の有様でござります  
るゆゑ大坂方にてはろれん、持口を固めむ爲めに評議を凝しませば大野修  
理は我儘を振舞ひ容易に諸將の議を容れませぬでございました、それ故に諸  
將に虛病杯を構へて居る、真田は此事を聞いて大ひに驚き關東の大軍既に半  
途まで出馬ありと聞く、治長一人の奸曲に依て諸將の決心せざる時は戦備の

塙 團 右 衛 門

程も覺束なしと一人氣を焦ちまして謀計を定めて木村長門守を招ぎまして  
新様く、に計ひ候らへと申されましたゆゑ重成委細を承知致し塙團右衛門  
直之を招ぎまして相談に及び、重此度秀頼公仰せられるは關東の大軍半途  
まで押寄來りしに七組の面々更に出逢もなく虛病を構へて引籠り居るやう  
にては又だ暇はざる前に謀計を失ふと云ふものなり、斯の如くにては所詮關  
東とは合戦は敵ふまじ依ては敵に向ひて不覺を取らぬより寧ろ秀頼千疊殿  
に於て切腹致すべく存する間各々我が自害を見物せよとのみにて拙者此  
使者に仰付られたり、此事をば早く七組の人々に告げ呉れよ、塙氏は七組の人  
々の頭門おれば此事を告げ候らへと言はれた時に素より正直なる塙團右衛  
門直之ハッと驚き、直斯は如何に斯は開も如何に容易からざるものと承は  
るものかな秀頼公に御切腹をさせ申し吾々うれにて悦ばしきものと候らは  
ん思へば夢に夢見し心地仕まつると暫時は正直無二の塙團右衛門直之涙を  
留べ早くも後藤又兵衛に此事を塙團右衛門から告げると又兵衛も、又然うか

塙 團 右 衛 門

な塙御身何と思はれる 團別は何とも思はんかれども斯るふどかあつては  
實に容易ならじと心得るが貴君は何と思ふ 又どうも何と思つた所が仕方  
がない斯く仲間割れが致して仕舞つては如何とも仕方がないと思ふ何卒此  
不和をば圓滑にしたい我れは考へ和熟を取結ばふと云ふのが望みであるが  
何とか和熟を取結ぶ工風はないか 直然ればそれに就いて大野父子が願ひ  
に思ふは小幡勘兵衛なりそれ故に一層のこと小幡勘兵衛の叙を塙直之我れ  
途中に招ぎて首打放して呉れる彼れ之首打放したる其時に幾分か効を奏そ  
るであらうと思ふがどうだ又兵衛完爾と笑で 又イヤ〜彼一人殺したと  
て豈勝利になるべきものではない彼等を殺した所が如何とも仕方がないマ  
ア〜彼れを殺すことは暫らく待ち候らへ何しろ此和熟を計るの外は計略  
ふるべからずと言はれましたソコで塙團右衛門七組の眞野豊後守の所へ來  
て 直切眞野誠に以て貴君等に於ては心持が悪からうけれどもどうか今度  
は是非共に秀頼公が斯く仰せられ御腹を召す候と云ふのがあるから其慮の

塙 團 右 衛 門

所はどうか我慢をして呉れる後藤又兵衛も心配をして居るからと言はれて  
豊然う云ふふとなれば是非に及ばぬ我慢ならぬ所だけれども後藤と言ひ眞  
田と言ひ貴殿と言ひ心配をして呉れるならば兎にも角にも出張致せであら  
うと此處で心持が解けましたゆえに各々持場〜へ出張致しました切幸村  
の考へど大きに異かりましたけれども何は兎もわれ秀頼公に於ては金の千  
顆瓢箪の馬印しに指物は五色の吹貫其外赤旗五十流れ定絞の旗七十流れを  
拵立て塙中本丸に控へ惣勢五萬八千奈騎是から持場〜を備へるゝとに相  
成りましたは又物凄きこととさいます此方は御話替つて大御所には江戸  
の新將軍に出馬の催促ありて河内の藤井寺に陣を移され先陣には藤堂和泉  
守中川内膳正松平因幡守分部佐宗太夫三千八百人二陣には有馬中務大輔五  
千餘騎三陣には森右近太夫三百人別所豊後守竹中伊賀守千五百人本多兵衛  
守五千入松平武藏守一萬餘人加藤式部大輔河部内膳正一萬人次に三浦長門  
守安藤帶刀一柳監物神保長三郎分部左京其外の諸大名雲霞の如く群り立た

二百八十四  
軍勢都合五萬八千餘騎本陣を中に圍み京都一條より鳥羽街道を經し淀に  
來りし折柄城將稻葉彦六郎一道城を出て君を伴ひ城中に入り參らそられよ  
り本街道を轉じて南都の方へ進發せられました

第六十七席

此事幸村方へ細作の者より早くも注進に及んだれば幸村大いに悦び再び  
隱鹿右衛門と云ふ忍びの術に馴れて居る者がありまをから之に命じて南の  
部の手に備へて敵を偵察せしめた所鹿右衛門立歸り神保長三郎一柳監物  
部左京大夫の三將控へ居れりと申しましたゆゑに幸村然らば先づ奇計を  
らし敵の膽を奪はんと豫て用意の無紋の旗を取出し自ら神保一柳分部の旗  
を書き山利鎌之助香郷右衛門青山彌十郎増田九郎同荒次郎の五人の手に  
は分部が旗を持せ其勢三百餘人一手に海野六郎兵衛木辻別右衛門同元助別  
府者狭の四人には神保が旗を與へ其勢三百餘人一手は明石又七郎三好清海  
入道同爲三寛金五郎の四人には一柳が旗を渡し其勢凡そ三百人何れも大坂

を申の刻に出立ち山の手を廻り間道を越して進みます且又木村長門守重成  
塙團右衛門直之薄田隼人兼亮の三人にも三千餘づゝの兵を興へ大砲を用意  
致し同じく南都に向はれました然るに關東勢は斯るふとゞは露知らを明日  
は大坂へ出張して土地の巡見なさんものをと勇氣凛々として酒を飲んで誠  
に心持が宜い杯と云つて居る様子折柄ソアソツと聲を掛けて何者とも知ら  
ず押來りました ○ヤア、承はれ汝は大恩を受けて大恩を忘れたる所の  
曲覺悟に及べど言ひ様に打蒐つたり何者なれば斯る狼藉をかそものある  
かど更に分らざるのは是れなん關東勢の先鋒に相成りましたる所の連中で  
ございまして何者あるかと言ひ居る中に眞田勢の中より由利鎌之助三百人  
を率ひ分部が旗を翻へして躍り込んで參りました様子なれば分部主従に於  
ては斯は如何に何をかなと味方の夜討とは合点往すと云ふ中に神保長三郎  
之にありと名乗て躍り込んで來る者がある合点往すと云ふ中に同士討ちだ  
情けなや分部も神保も海野或は由利鎌之助の爲めにサン／＼に討破られ

門 衛 右 團 塙

仕舞ひましたる様子でございませ。之を承はつたる所の關東の大御所に於ては容易ならんこと。思召し悪くも所の大坂勢定めて真田の計略にてあらむ速やかに兵を纏めて引揚げよと仰せられる間もあればこそ分部神保其他の者はサンに打ち負け何れどもなく逃げ去たり。然は去りながら西尾豊後守近藤登之助竹腰山城守三百餘人大御所の傍にあつて大坂勢を敵らんとなしたる時に塙團右衛門直之に於ては大砲の音凄まじく射掛るや否やイデ我が勇氣を見せんと言はせも敢て無二無三に馬を仰つて乗込んで來つた團右衛門に於ては四方八方に眼を配り大御所は何れに居るか徳川將軍は何れに居るか塙團右衛門直之にあり大御所の御首頂戴致そと例の黒顔の鎧を着致したる儘鐵棒を振り西國名代の鬼鹿毛と云ふ名馬に打跨り無二無三に打て歩くので塙團右衛門に打れる者數知れずと云ふべきが當るを幸ひ兜の頂上より打つてノ、打廻したるが爲めに大御所の軍は散れくどまつて仕舞つたる時に幸村鎗を取て他から現はれ出たから人跡所に於ては新よ敵はヒ

門 衛 右 團 塙

ぞ思ひにけん今は生たる御心地なく乗給ふ馬は駭足あるもどじ處を逃るに思はれ給ひ殊に前は深き溝にて行べき道外になければ心中に深く八幡菩薩を念じ給ひ鞭を機に両角入るれば此馬忽ち一寸許りの溝をスボリリッど行く飛んだ幸村續いて飛越へしに馬諸共に水の深みへ落ました様子流石の家康公も之には驚かれ幸村馬を引揚げ見れば夜は既に曉方に相成り大御所は何れへ行れしか行衛も分らざりました。團右衛門直之幸村の傍へ來て見ると馬だけは確かにあるが大御所の行衛が知れぬ扱は運好く家康は何れへか運れたなと思つたけれども仕方がございません大御所は辛くも此場を抜け出し奈良の町南の麓に到られし頃は早や門の扉開けて四五人の男何やらん物語つて居りませから大御所悦んで聲を懸け給ひしに鎧を着されしを見て大いに驚き逃さん体なれば急に之を呼戻され。家如何に汝等我れを内へ引入れ早く門を閉て呉れよ褒美は後に與へるからと仰せられ彼の男ヤッぞ安心して門を閉ました大御所は春日の前に到り見給ふに只一人早起し

たる桶屋がございました主人と見へて男一人店を出して居りましたから御所を懸け家如何に汝我れを暫らく隠匿ひ呉れよ褒美は後にて與ふるからと言つて此處に隠匿はれまして漸く危難を免るゝやうあるとに相成りました此時大久保彦左衛門安藤帶刀兩人來り委細を尋ねて桶よりどり出させ石川河内守方へ伴ひ行きました之を桶被せの難と云ふ漸やくに家康公は危ふきを御免れにあり是は容易ならんと遂に用意に用意いたしてソコデ住吉へ御出張に相成りました

第六十八席

扱家康公は住吉へ御進發せられましてより愈々敵の舉動をば探りまする隙に於ては襲はんくと云ふ有様就中真田が謀略と云ふものは一通りあらんでありまをけれども此處で真田の講義を致すと塙團右衛門直之の御物語がふくつて遂に真田幸村の傳に及ぼしませるものとゆゑ據るらく真田の御物語は面白き所もございますけれども省いて伺ひませる先づ第一戦に大勝利

を真田が得第二戦に後藤又兵衛薄田隼人並びに塙團右衛門が大御所を憐まして呉れなければならぬと斯く評議をよ決しまして池田武藏守松平左衛門督が構へて居りまする陳營へ無二無三に討て掛りましてござります流石に池田武藏守は音に名高き所の三左衛門が嫡男にして新太郎少將が父君なれば何條後藤が何萬薄田が如何程の兵ありとも恐れじと暫時の間は揉合つて居りました後藤又兵衛大音を掲げて又ヤア武術文學の達人と聞ねたる所の武藏守利隆見参くと雖を取直しまして敵陣へ躍入つたる武藏守利隆後藤を見て利珍らしや又兵衛基次汝も今日の得物にあさんと大將武藏守利隆馬を返して鎗を取直さんとぞる折柄斯くと見て池田勢の中より大木惣太夫猪越左兵衛兩人鎗を取て向ばんとすれば後藤基次少も恐れる氣色なく大木を一槍に突て落し尙も進んで來りし程に猪越恐れて引退きしゆゑ池田勢殘念かりと脇直に突入り後藤を討取らんと戦ふ折柄彼方の方より乱曲の馬印を押立て曾根崎の森より三千餘騎薄田隼人兼亮真先きに進み後よ

塙 團 右 衛 門

り致して塙團右衛門直之の身を以て掛つたれば池田松平の兩將大ひに斬崩され、堀を引退くを何處までも跡を慕ふて後藤薄田堀の三氏に於ては無二無三に斬崩したれば、何かは以て堪るべきや池田松平の軍勢元の神騎の方へ引退かんとて、淵海を厭ふ隙もかく我れもくど馬を乗入れれば水を飲て死せむれば又濁れ流れて行くものもありませぬ。此時池田武藏守は我軍勢を引離れ、川を渡らんとして旗本の備へを立直し、向も後藤薄田と戦ひながら其後の川を渡りました。薄田に於ては、薄田追取て武藏守が川を越さんと爲る所に打て出んと急り居るから後藤調し、て先づ是程の大將を敢なく討つは惜むべきなりと聞かざるや塙團右衛門鎧を取て向はんきとして居りました。けれども是も制されたゆゑ餘儀なく傍へにあつたる棍棒を取て武藏守利隆が怒々として川を渡つて引退させし所へ塙團右衛門直之のエイツと投たる棒は丁度池田利隆殿の兜の八幡座へガンと當つた。利隆殿馬より落なんとしてウムと後ズを振向れて塙團右衛門を睨み、怒

塙 團 右 衛 門

々ど落行きしは、速まじく塙團右衛門の力今少しく強かりせば、武藏守利隆殿は敢なく此河に落入つて死すべかりしを惜むらくは、塙團右衛門直之の投げ棒の力の脱けたるをや、之を以て塙團右衛門後來までも人の噂に残りました。池田家の投棒と言はれましたのは、是でござりませうか。扱愈々十二月に住吉より大御所は茶臼山に陣を移され、大坂表に於ては高名をなしたる諸大名には、此處に來りて勝軍を賞し、新將軍秀忠公にも松平越後守を使者として賀を申上げられました。此時越前福井より塞を献上致し、申すことでもございます。塙團東勢に於ては、城方の南手を攻落し、大いに勇み、大御所にも既に住吉より茶臼山に本陣を移されました。城中の諸大將之を聞いて、斯てはからじと大野織田等の面々種々評定致して、其上は城中を手堅く固め、持口を嚴重にして出で戦ふことなく、其中關東より福島、黒田等の攻登つて、反應を待より外あかるべしと眉を擡めて居たる所へ、笹御殿出丸より幸村、大助の兩人登城致せしゆゑ、皆々大ひに悦び、良策であるべしと囁きて居ります。中に幸村、大助定

め、の席に着き先づ秀頼公淀君へ寒冷の挨拶を致し其外古老七組諸將等へも同様の禮を遣ふと幸村口を開き幸此度味方の敗軍は何としたることにて候やと遊りを見廻し苦り切て申せば古老を初め敗北せし諸大將面目なき体にて何の應答も無い幸村言葉を正し幸惣別軍の憤ひにて勝敗は素より計るべからざるものなれば敗せしとて軍が下手を云ふにもあらず百敗百勝とて終りに勝を全くの勝と致す彼の基局を見給へ始めに幾許か敗色の見えし方必至の勢力を盡す時は局を終るに及んで勝を取ることは是れ有り之に反して始めに略ぼ利を得たる方は氣の緩にて遂に敗ること幾々之有り然らば此度の合戦に味方敗北あればとて例へば基の如く必死となれば果して勝無きことあるべからざるれば扱措き拙者は既に一計を案じ置き候へば明後口を以て城中より軍を發し茶臼へ此方より攻掛り候はゞ必らず家康が首級を見るふと之有べしと何の苦も無く申されました

第六十九席

諸將之に力を得て何にもせよ御邊然るべく斗り給はれと言いながら折々心中には今勝誇たる關東勢に此方より軍を仕向けるは危いことだと呆れて居ります真田父子は悠然として城中を出で出丸へ歸りました跡にて諸將は幸村の一言を彼是れと評議致し幸村は智謀の將おれば仔細入りあらんされども餘りに取ても付ぬふとを申そ者かな杯と眩き居るも道理なり幸村が心中にては小幡勘兵衛に此由を聞かせ關東へ有りの儘を知らせて其反をかんと云ふ計略後藤基次塙直之も其様なみとは更に心付ません幸村が計略心許なしと思ひ彼れが方に到り心中を尋ねると既に立出んとする所へ長曾我部元親木村長門守重成來りまして元親と申しまそには元如何に塙氏後藤氏今日の真田が一言は其許には如何思召す斯く申されると後藤又兵衛は又左様でござる木村氏何と思ふ塙團右衛門が直我等は矩才ある者でござるから諸將方の御話を承りたい此時後藤は聲を微め又然らば拙者も此事甚だ訝しく思ひしゆ之唯今幸村の方へ參らんと思ふ所に候されど大凡打盡

塙 團 右 衛 門

じ候に城中にある小幡勘兵衛は正しく關東方へ内通なす者ゆに眞田は之に氣を留め深く計りしこと、思ふが何にもせよ御同道致して出丸に赴むかんと云ふ木村之を聞き、重小幡勘兵衛同様の者には是あらば何故殺し給はざるや拙者も豫て彼れを胡亂者と思へども確と分らざるに依り殺せべき機會がござらぬと言ふと塙團右衛門が直イッ拙者速かに二度まで殺さんと致したかれども人々止められるから遂に殺さずに置たが殺すべき時は何時でもある塙團衛門直之是から參つて殺すべし後藤之を止め、又イヤ、今まで殺さざるは幸村が深き智計に候へば我々四人共に同道致して出丸に到り其由を申されてから後のことに致さうとそれより四人連立つて幸村が許に到り交した幸村出丸にあつて四名を招かれ閑室に伴ひて先づ體の骨切りでござるとか或は蕪漬けでござるとか種々な物を列へ胸中酒々落々として心に閑日月ある所ろ英雄酒を嗜みながら木村四名に向つて申そやう、幸能くこそ諸將に於ても我れを尋ねられたり我が胸中を察し來られしこそ辱ぢけか

塙 團 右 衛 門

く斯く忠良の其許達が在すゆに今日城中にて拙者日頃の存念を申出でました後藤之を聞き、又今日貴殿城中にて茶臼山を攻んど仰せられしは小幡勘兵衛に之を告げ知らせ關東勢に油断をさせ別に良計を運らさんとのみとあるべし如何でござるか長會我部木村塙の五人及び吾々之を承知致したく罷越せしが如何思召すや幸村手を拍て大ひに感じ、幸誠に其許達の仰せらるの通り我が胸中を能くも洞察たり如何にも御考への通りにて候此時塙團右衛門直良計とは如何なる御工風に候後藤基次が、甚其良計をば幸村殿御話下され、幸然れば此儀外に候はず今宵夜討を掛けんと存するなり基次大ひに驚き元親直之互ひに顔を見合せて唯驚ひて居ります、扱此事に就きまして幸村は泰然として居る様子ゆに後藤長會我部塙の三人御貴殿は物に狂ひ給ふのか縱令其の許勇猛にもせよ關東方へ一人夜討に向はんとは飛で火に入る夏の虫唯死を招くに異ならず如何なれば左様あるみとを宣ふや願くば承はりたい其許夜討と云ふは虚言でござらう、幸村涙を流して、幸拙者血



言は言はず一人夜討に出んとするは是外からを蒸白山に忍び入り大御所を  
日懸け討取らんと思ふを然らば拙者は所詮活ては歸らるまじ大御所だに  
討取らば日頃の存念是にて足りぬることなれば我れ死せし上は俸れ大助を  
拙者と思はれ目を掛けて給はれよ然れども若しも此事仕損じたる其時は誠  
中に立歸らん事最と易し然も其許等は我が胸中を如何にして斯様に知り給  
ひしぞと述たる故に後藤初め他の人々は夢に夢見た心地致し實に驚き入り  
しんどか其許の御心中感じ入つたと言ふて居る中に幸村聽て長さ一尺許  
りの種ヶ島と云ふ鐵砲を取出し 幸是は箱砂筒とて豫て我父の秘藏せられ  
し鐵砲にて火繩なくして打つみどの自由なる鐵砲にて候 ○ハ、ア是なる  
が其許の御父君がと後藤長曾我部本村塙等各々手に取て見まする様子 又  
義ある哉幸村願忠ある哉眞田氏威し入つたり此鐵砲を以て家康を討取り御  
身も之れにて死せる御所存ならん幸村答へて 幸實に然れば是れが今  
生の水訣とられより酒を出し互ひに盃を廻らし餘所の見る目も物違じくと

さいませ

第七十席

幸村は少しも愁ふる色なく四人諸共申の刻まで酒宴をなして時刻移りまし  
たから涙ながら立別ました眞田如何なる働きを以て關東大軍の中に入り大  
御所を仕留んとするや心許なき幸村が謀計かきと寝食をも忘れて案じて居  
られまをさても幸村は君の爲めに一命を捨て家康を討取らんとて俸太助を  
招かれまして 幸我れ今宵關東の陣中に討入り大御所を討取り潔よく討死  
なさんと欲する間汝は跡に残り秀頼公に仕へ忠義を盡すべし必ら我遺命  
を背くことなかれと申されました大助治幸涙を流し 治斯は情なき仰せを  
承たまはるものか拙者受上の教へを背くかは知らぬと千金にも替へ難き  
大切の御身を以て鐵壁の如く取圍みたる天下の諸將の集まりし中へ一人向  
ひ給はんこと是まで斯る例あるを聞かず御不覺のことにて候はせやと諫  
めますると幸村冷笑ひを致し 幸コレ汝が知る所にあらぬ必らず心を痛む

塙 團 右 衛 門

るこどおかれど穴山望月根津、鏡相木等を呼出し、幸我れ若討死してあらば此後治幸を我れと思ひ、随分忠義を盡せと言つて其儘幸村は松屋町通り南へと足に任して急ぎ行く、向ふより本多士佐守の下人が提灯を携へ用事あり氣に鰐谷の方へ走り行く、幸村天の與へど悦んで前後を顧み宿砂筒を取出し、狙ひすましてズドンと放てば過たず下人の胸腹打貫たり、下人は耐らぬ仰向に反り空を掴んで相果てました、幸村ハツと傍へより提灯吹消し懐中の割符を奪ひ取り逸足早く立退ひて仕舞ひ生靈の方へ行き伊達正宗が陣に着き此方を見れば篝火を焚居けるに幸村立寄り、幸如何に各々方扱々寒きよとござる拙者鰐谷へ用事あつて参りし後道にて提灯を吹消し難義に候間少し火に暖まりたし許し候へと言ひおがら手を差伸して暫時茲に休息しそれより提灯に火を點し挨拶かして立退んどそると役人共が見谷めました、幸是は本田の使者にて唯今歸り道にて候と言ふに役人共も提灯に葵の紋があるゆゑ難なく此處を通させましたから幸村はそれより井伊藤堂の陣々を其通り

塙 團 右 衛 門

にして押通り懸て一心寺の門前に到り直に門内に入らんとすれば陣屋の役人此夜は加藤遠江守山村丹下にてございまそ幸村を見るより何處へ参る者ぞと咎めまされれば幸村は例の手にて、幸本多が家の者にて候と言ふと、遠然らば割符を所持なすかと問ひしに、幸是にて候と奪ひ取つた割符を出して預け置き遂に此處を易々と通り抜け茶臼山の本陣へ忍び入り彼方此方と徨ひ終に奥の方へと忍び入りましたが知る者は更にございません、然るに其夜は大御所越前の寒鰐をば賞断せんとて諸將を招き此度の勝軍を祝ひなせられて酒宴を催され頻りに盃を傾けて居られました時に俄かに剛へ赴かんとせられましたから大久保安藤は公に尾けて剛へ附従ひ來りましたが實に危いことでござりました、真田幸村に於きましては既に大御所の間近に忍び入り今や大御所の來らんかと心を碎いて待て居りました所大御所俄かに剛へ立給ひ大久保彦左衛門兼松又八、小栗大六、安藤帶刀、成瀬軍人前後に従ひ既に廊下の所まで來掛りましたゆゑ幸村得たりと縁の下より鐵砲を密と差

門 衛 右 團 塙

向けましたアハヤ一撃と思ひければ大勢の足音にて撃放をこどが出来ま  
せん餘義なく又様の下へ這入り込み大御所の歸り給ふ廊下の下に屈み居る  
斯くとは知らず大御所は廊を出て手を淨めんと致されました成瀬隼人銀の  
湯桶にて盥水を注ぎ安藤帶刀手拭を差上げ大久保傍に控へ居りし處思ひも  
依らぬ廊下の下より一聲の鐵砲鳴渡り其彈丸大御所の左りの耳元をヌツと  
割つた何かば堪らん大御所はアツと言つて倒れ給へば附添ふ面々慌て驚  
ソレ曲者なるぞ搦め取れと呼はり君を圍み奥へ入れれば大小名も是は  
驚き釜の湯の湧くが如く上を下へと云ふ騒ぎでございまを大御所は其儘一  
間に打臥され半井路庵駈着て氣付けを差上げ尙能く容体伺ふに差したる  
重傷にても在さねと思ひも依らぬことゆゑ氣を失ひ皆々種々に介抱する斯  
くて陣中にては曲者を搦め捕らんと隅々隈々を厳しく鑿穿致せしが曲者と  
見ゆる者もなく其中に幸村遁れ出んと爲す所に外の雜兵共皆一同に詮議の  
爲め押込られし其中に幸村も同じく見咎められて終に雜兵部屋に押込めら

門 衛 右 團 塙

れましたから幸村も今は籠の中の鳥の如く通るゝ道がございません幸村は  
日頃の存念を達せんとて心を籠めし謀計も關東の運強くして又々仕損じた  
るは口惜き限りと切齒を爲して居られましたが誠には是非をきみとござい  
まを如何にもして此塙を遁れ城中に立歸りて再び思慮を運らさんと思へど  
も看守の役人嚴重なれば遁れ出べき様もあく如何はせんと考へて居りませ  
る中皆合詞を以て出るどのみどがチラリウと耳に這入つたけれども其合詞  
を知らぬことゆゑに之を聞出さむと肝要だと懸て幸村一人の者に向ひ  
幸御手前の向ふに居る人は名は何と申しませを彼の男答へて ○彼れは彌六  
と云ひませ

第七十一席

幸村悦び直に彌六の方に近寄られ 幸珍らしや彌六殿久しく面會ざりしが  
堅固なけやと言へば深夜と云ひ點燈もなければ彌六 彌左様宜ふは儀兵衛  
殿あるか幸村可笑さを忍びて 幸實に儀兵衛ありと押々しくおつて物語り

門 衛 右 團 塙

彌其方今宵の騒動を聞いたか 幸此騒動にて吾々は此中へ押込まれたれば委しき故を知らざらるに情なきことこそ出来せり餘りに急ぎて合詞を忘れて仕舞つたり彌六驚き 彌扱々一大事なみとを忘れしものかなそれを知らざれば汝の身の上に難儀掛らん我々は本多家の家來あれば鶴と龜との合詞なれども其許は關山城守の家來あれば合詞は知らせど然も氣の毒なる体にて答へましたから幸村之を聞き心中に點頭此場を去て待て居る中に小門を開き門前には皆鎧薙刀を構へ最と嚴重に固めて居りまを丹羽組淺野組松平組杯と段々に呼出し程なく本多組と呼出したゆえ幸村鶴と答へましたに依て難かく此場を通れ出しました斯くて此場を逃げましたが外の陣門又々嚴しく固めて塙際には松明箱を焚き中々迂闊とは越ることが出来ません幸村再び困り如何はせんと案を案する所へ南手の塙に人無きを幸ひ之を越さんと塙に登りて下を見れば一丈計りにして芝の上で大勢箱を焚て居りますから南無三此處も越ることが出来ぬと暫時猶豫して居りましたが纏て大刀をスラリ

門 衛 右 團 塙

と抜放ちドツと計りに飛越れば箱火を焚て居し者思ひ依らざる事なるに周章狼狽ソレ曲者がど云ふ所を何の苦もなく五六人斬伏せ跡は八方へ駈散して難なく出丸に向つて通れしましたソレツと云ふ中に曲者を追駈て参つたる人々大凡七八十人幸村は如何に豪かりと雖も何んぞ七八十人に及ぶべきや此時何者なるか知らねども大刀を引振て躍り出で七八十人に斬て掛つた七八十人の者に於ては右往左往に斬立てられ見る／＼中に十四五人を斬倒し血刀を提げて幸村を出丸まで落した者がある真田出丸の片邊に來りて我が臣下にてありつるかと思へば出向ひたるは由利鎌之助を始め其他の人々ありヌルト別に幸村の書面を裂て出で來りしは何人なるかと思へば是れなん即ち塙團右衛門直之あり幸村塙直之をば喚び 幸直之殿血汐に身体を染め給ひて如何せられしか 直イヤ實は後藤長曾我部本村殿に我れは七組の人々と持口で固め居りしが考へ見れば貴殿の強膽如何に天下の剛勇ありさて何で及ぶべきやと存じ候ゆえ我れに於ては據るなく人々の手を通れ

門 衛 右 團 塙

計らずも致して其許の御命若し召されたと云ふも知らば我れも徳川の陣中に躍り込み美事討死なさんと存候へしが計らぬも致して御貴殿無事に居られ大勢の者に圍まれて居るがゆえ智勇は御貴殿に及ばなくとも武勇は御貴殿に優る積り七八十人の奴輩を片つ端から斬落し是まで近れ候茶臼山に於て大御所を美事討留め候や團右衛門直之承たまはりたい幸村取眼に涙を浮べて幸義あるかな塙氏勇なるかな直之殿天晴れ貴殿は一方の大將大野治長の爲めに召出されたる御方なるに却つて我れへ心を併し御幕へ下さるの段辱しけなく存あるそののみあら致して此度に於ては我が胸中を後藤長曾我部木村殿と共に尋ねられ今又我れが不思議の段を通れ大御所家康を討損じ来りし所を助けられたは團右衛門直之幸村何とも御禮の申さうやうあるべからせ生々世々忘るべからせ辱けおくる存する直其御言葉恐縮致してござる團右衛門直之御貴殿の無事を悦び此事後藤木村長曾我部に告げん薄田隼人も定めて吾々の出たるを心配致し居るならん兎にも角にも吾等

門 衛 右 團 塙

は是より薄田隼人へ委細を告げしと取返して薄田隼人並ひに木村後藤長曾我部等へ此話を致したゆえ何は兎もあれ凄まじいふどをやつて無事に立戻られたは天晴れの義でござる賞をるに餘りあるみどでござるとエラ／＼賞賛を致されました此後に於て木村重成に於ては鳴野に於て武勇を現はし正木小山を討取り後藤基次は今福出張に及びました敵勢を惱まし木村重成は雲州勢を破り關東勢大敗に及び蜂須賀阿波守の軍に大野主馬之助治房並びに塙團右衛門大將と致して夜討に及び塙團右衛門に打破られ阿波守に於ては一度敗走致しましたなれども名に負ふ夜討のことゆゑに大野治房が失敗の爲め團右衛門の武勇も此時十分に働くこと能はせ其儘退いて仕舞いましてございまそ此處の戦ひは物別れにかり關東勢は悉く敗走又た木村は出丸に於て關東勢を惱ますみど一通りならせ關東勢は情なくも木村の奇計に陥入りました小幡に於ては木村が謀計に乗て愈々已れ關東へ意を漏し又内通をなして居ります之を聞いて塙團右衛門直之は小幡勅兵衛を捨置

塙 團 右 衛 門

ては相成らぬ彼奴をば捕て押へんければならぬと遂に團右衛門直之小幡勘兵衛なる者をば捕て押へて關東の間者なることを言はしむると云ふ塙團右衛門直之の武勇を以て小幡勘兵衛を押へます所の御話でございまそ

第七十二席

引續き申上げます扱塙團右衛門は勇氣勝れて居りまして先づ七組の入々の上に出で即ち薄田隼人とは兄弟の約をかして居りまそる者から人皆大いに恐れをそ然ればにや有名なる後藤又兵衛を彼れは宜き話對手となし木村重成をも我が友として居りまする位でありますから臆病未練なる所の大野修理亮は旨く折りに觸ては塙團右衛門を我が手に入れんとすること屢々でござります團右衛門は彼れは佞奸邪智實に惡むべき奴だと思ひながらも彼れが甘言に乗せられ戦争は下手でござりますけれども口辯は旨いに依て遂に彼れが言葉に従ふこと屢々でござりまそるから折々は眞田後藤の爲めに笑はれること环幾許なるや計り難い程でござりまそるゆゑ至つて殘念に思

塙 團 右 衛 門

つて居りまそる然るに關東勢は眞田丸を攻めぐみ評議區々にして一決せざる處新將軍秀忠公も之を憂ひ給ひ味方斯くては敗軍致す事はれ全く決死の心おき故なり死地に入て攻懸らば縦令眞田智者かりと雖も味方の大軍を争で防ぎをほすことを得べけんや此儀御身如何と言はれた時もう諸將も再びの奇謀に愚果たるみど、見へまして默然として一言も言ふ者はござりません此時伊達政宗申されまするには 政誠に此儀然るべし依ては味方の勢を十二段に別ち之を番手と名付け唯南手の一方より攻立て候へば何條破れぬみどの候はんや此儀如何と申しければ諸將は之を聞き胸中に恐れを抱かれ伊達殿には迷惑なることを言ひ出されし者か何れの手が先手に向ふやは知らねども向ふたる者こう一番に討れん難義ある謀事かぞと首を縮めて居られました時に新將軍秀忠公大いに悦び 秀此儀誠に妙計あり然らば早々番手を以て攻落さんと其手別けを致されまして大勢の大名なればとて番手を闇取りに定め十二支の旗を建て段々と備へを定られました其闇を取

塙 團 右 衛 門

ることに致して各々其圖を見て其順に従ひ子丑寅の十二段に軍立を致しました其軍立は子が第一番にして三字對馬守丑が太田原備前守寅が丹波勘助卯が本多佐渡守辰が大久保新八郎己が六郷伊賀守午が安部惣太郎未が松平周防守申が菅沼新八郎酉が井伊掃部頭戌が森山城守亥が松平對馬守斯く十二段が定まりましたゆゑ支を盡し旗を建て順序を極め其勢十一萬餘騎幸村の方へ攻掛る様子真田左衛門佐幸村之を見て手を拍て打笑ひ扱は關東の大軍度々の戰爭にて手懸して此度は番手攻をかし死地に入て戦はんとは爲したるぞ仕様こそあるなりと故と大いに怖れたる体にて大助を従へ速かに登城に及び幸村秀頼公の御前へ出で幸關勢度々の合戦に打負け此度は真田丸を攻べき爲め番手攻を巧みしと相見へ候幸村防ぎ候はんとは思へども關東方にも是までの敗軍を遣はり必死となつて攻め掛ることに候へば如何に幸村秘術を盡し防ぐと雖も此度は中々戦ひ勝つゝ候はず明日の合戦には真田丸も落城致し滅べし就ては幸村父子出丸に於て腹掻切て相果申を

塙 團 右 衛 門

べく存じ候今生の對面も是まで候へば御暇乞いの爲め參向仕まつり候ありと兩人ハラ／＼と涙を流して申されましたから秀頼公初め城中の諸士も大いに力を落し頼みきつたる真田父子に於て討死とあつては何を頼みに籠城すべきぞと互に顔を見合せたり中にも大野織田兩人は顔色土の如く見へ秀頼公も落膽して今軍師幸村とも云はるゝものが斯の如くあつては争で籠城叶はんや然る上は潔よく城を開き討死するより外なし如何なれば軍師斯様に我れを捨給ふぞ若し我れに過まらあつてのことならば改むるに豈憚らんやと涙を流して申されまをる幸村は之を慰め參らせ幸何條君を恨み奉まつることの候べきや是れ誠には是非もなき次第に候斯く申をも敵の備へ十二段の中七段までは防ぎ候はんれども残る五段は心許なく候間是に依て斯く申し候なりと言ひ出ると小幡勘兵衛進み出で勘誠に真田殿の御一言道理には候へども然らば木村後藤塙團右衛門の三將を差添へ其許此三將と共に防ぎ給ひなば残り五段は破れ候はんと申されました故幸村答て幸如

塙 團 右 衛 門

何様此將を授け給は十二段の備へを打破ること何より以て易しと思ひ  
つれど此三將には黒門口を固め候へば此方へ呼寄せること叶ふまじ塙團右  
衛門とて大野殿の傍に居らるゝ者かれは何條以て吾々が借行くことの叶ひ  
申そべきや小幡は不興氣にて勘其許には何故拙者を左様に輕んじ召さる  
真田駭き真井は又何故に勘然ればなり拙者は入城致してより未だ尺寸  
の功もあし故に木村後藤の兩將を真田丸に呼寄せられ其代として拙者を赤門  
口に差向けられても然るべし塙殿は居らすとも大野殿は別に異心も候まじ  
然るに其計ひさへあきは何事あるぞと怒りの面色顔に現はれました幸村確  
と手を拍ち幸是は誠に心付ざることあり御身を輕しめたるにあらま全く  
其許を忘れたるあり實に此事然るべし然らば勘兵衛殿黒門口を御守り下さ  
いと斯く申されました故に幸村は後藤木村の兩將を伴ひ小幡勘兵衛に黒  
門口を守らせ此方は出丸に歸つて來りましたるが此時後藤木村の兩人真田に  
向ひ豫て小幡勘兵衛は關東の間者ど知りながら大切なる黒門口を守らせた

塙 團 右 衛 門

と云ふのは愈々合点往きと思ふと申されました其中に塙團右衛門は酒一升  
五合を飲み纏て出丸へと乗込んで参りました。

第七十三席

團願くば幸村殿に面會致したい木村も後藤も之を聞き探こそ塙は何か心あ  
つて來りしに相違あからんそれころ塙に面白しと直ちに三將の前へ塙團右  
衛門直之を招いて幸如何に直之御身何とて來られしか直イヤ別儀では  
ござらぬ此度小幡勘兵衛に大切なる黒門口を固めさせるは御心あつてのこ  
どか又は御心なくてのことか何故あつて彼の要所を固めさせるか願くは其  
次第を承たまはりたい塙團右衛門直之是まで彼れを殺さんとするもど數度  
あり御貴殿がどうあつても之を許さぬと云ふは何事にて候ぞ幸イヤ其儀  
團右衛門殿怒り給ふに及ばせ黒門口には守將山口左馬之助が固め居るうれ  
へ彼れが加はりたればとて何事かある彼れ必らき我が計略を知せ敵と相應  
援して御身等が真田丸に討死するぞ聞かば打悦ばん且つは後藤木村殿の居



塙 團 右 衛 門

らざるを幸ひ關東勢を引入れて散々に秀頼公の御首をも討んどの心底なり  
さればこそ其裏を計るが我が計略我手下の忍びの者小野善兵衛を尾け居れ  
ば彼れが訴へに依り何か一つの証據を得て速かに勘兵衛を打取て押へて敵  
を欺くの材料になさんと存するをり兎に角小野喜兵衛なる者を以て様子を  
窺はすればと暫らく御待ち下さい小野喜兵衛と云ふ者は中々忍びの術に長  
たる者でありませし此小野喜兵衛なる者が塙團右衛門の居る中に茶臼山の御  
陣に忍ばせ置まると云ふと聽て小野喜兵衛の齎し來つた秘密の書と云ふ  
ものは外のものではございません  
密書を以て申述候然らば此度番手攻の御軍立に相成り就ては流石の幸村  
も是には大いに當惑致し十二段の備の内七粗までは破り得べく候へども  
跡五段は中々破り候事成難く候由申せしに付き其時拙者進み出で後藤木  
村の兩人をも真田丸へ遣はし俱に防戦せらるべし拙者は兩人に代り黒門  
口を守り候と申ければ幸村大いに悦び然らば貴殿兩人に代り給へどて拙

塙 團 右 衛 門

者を黒門口へ向られ候就ては明朝寅の一刻に朱引の提灯を以て相圖とし  
て城門を開き御勢を引入申べく候間此機必ら老御外しかく御人數指向ら  
るべし取急ぎ認め粗文の儘具申候處斯の如くに御座候以上

十二月 日

小幡勘兵衛

之を見て幸村各々に向ひ 幸ぞうでござる塙團右衛門驚いて 直イヤ成程  
幸村殿の智謀こそ恐れ入つたりウ、ムエタイものだといつて居る中此小野  
喜兵衛と云ふ者が早くも關東へ此趣きを知せましてござりまするから大ひ  
に關東將軍も御悦び遊ばされて、ウム是からは宜しからん明日寅の刻に黒門  
口を攻むると云ふ御返辭を得て立歸つて來た幸村、木村、後藤の三人が押開い  
て塙團右衛門に示した團右衛門に於ては此秘密の書を見るや否やハッど怒  
立て 直誰彼れと言はんより斯く云ふ塙團右衛門に御任せ下され勘兵衛を  
る者に對面を致し彼を取て押へ申すべし 幸必ら老御怒りあつて彼を討殺  
し候やうなことであつては後來までの害に候はん成たけ穩便に事を謀り下さ

塙 團 右 衛 門

るべし 直其儀御心配御無用に候、必ら老穩便に計らひ申し軍師の御前へ彼  
を引來るべしと團右衛門直之に於ましては淺香郷右衛門と言へる者と申合  
し速かに黒門口の小幡勸兵衛の方へ軍師よりの使者ありと申して乗込ま  
ました、斯様なみとは夢更知る由もなければ何事であるかと斯様心得まし  
勸兵衛は忝々しく正座へ直して對面に及びました 勸是はく御使者御苦  
勞千萬なり陣中には随分と心付居り候と挨拶致す淺香打笑ひ 郷左様でさ  
ざるか……塙團右衛門殿、團右衛門直之小幡勸兵衛に向ひ 直御手前に少々  
御尋ね申し度ことあつて參つた 勸ハッア如何なることあつて御入來あり  
しか 直我れ今日軍師の命に依て參つたり 勸ハ、アそれは何事で 直兎  
に角我等兩人と共に軍師の許へ御入來下され 勸此大切なる持口を渡して  
置きながら今となつて尋ねるものとありとは小幡合点參らせ其仔細を伺へた  
し淺香郷右衛門答へて 郷其仔細何とも存せず唯連來るべしとのことゆ  
ゑ同道下され小幡心中に若しや密書の漏もやせんかと思ひ舌震ひふし身の

塙 團 右 衛 門

毛も懐ちて俄に恐ろしくあり 勸イヤイヤ 今日に參るまじ明朝は早天に參  
り申さんと答へました此時塙團右衛門大いに怒り 直左様言はるゝが是非  
々々同道すべし同道せざれば斯くの如しと團右衛門直之襟首を押へて此方  
へ引き惜くき奴なるかなと勸兵衛の頭を團右衛門拳を固めてボカアリく  
と擲り倒した 勸斯は無禮なり塙氏何故あつて斯る亂暴をなさるゝや放せ  
くと頻りに言ひましたけれども團右衛門直之耳にも入れず 直ヤアく  
小幡の乗物は是へ出せと言はせもあへき團右衛門直之小幡勸兵衛の襟髪を掴  
んで宙を引提げツカくと駈出した團右衛門の勢ひに何條敵し得べけん小  
幡勸兵衛は放し鶴のやうに手足をもがけさ及ぶべからせ淺香郷右衛門繩取  
て勸兵衛を縛しめ駕輿へ投込んでドンくドンく出丸へ構いで來まして  
團右衛門直之拳を固めてドンくと追駈け來たる眞田丸に來り早くも木村  
の面前に出させましたから團右衛門更に拳を固めて十許りコッソクコッ  
ソくと擲いた 幸ア、イヤ塙氏然う御擲きあつては甚だ不都合に候暫ら

く御待ちあれど之を止めて幸村が勘兵衛の方をチロリツと見た小幡勘兵衛  
大いに怒り勘何故あつて塙團右衛門淺香郷右衛門を遣はして我れを羅目  
に掛けしぞや願くば仔細を語り候へ眞田左衛門幸村ハツタと睨んで小幡勘  
兵衛の様子を窺はれました團右衛門はイヤ殺すに若かじと太刀の柄に手  
を掛け引抜いてイヤと言へば首刎んぞ有様でござります此塙の始末如何相成  
りませるか

第七十四席

幸村懸てのことに塙團右衛門の抜し太刀を止めまして 幸ヤア〜 御身懸  
りに斬り候は宜しからむ暫時御待ち下さるべし 直何故あつて我れを止め  
給ふや 幸イヤ斬るべき時には我れより御手前に御願み申しても斬らん  
り今は斬るべき時にあらず調べるだけは調べて見んければ相成らん……コ  
イヤ其方に於ては實に憎むべき奴あるぞ此幸村を欺かんとしても欺くこと  
は罷ならぬぞ 勘何故あつて欺くこと罷からんと云ふや 幸夫は汝の胸に

塙團右衛門

塙團右衛門

覺えあらん既に其方は城中評定の時に我等宇治瀬田の間に出張し敵を迎へ  
て戦はんと云ひし時汝不吉ありと言つて支へしは是れ汝が問者あるもと言  
はでも知れたり汝彼の時に何故に宇治瀬田の間に出張することを不吉とは  
言ひたるぞサア如何にてありつるやと問詰られ小幡勘兵衛は今言葉もな  
く黙然として居りしが涙をハラ〜と流し 勘扱も〜 幸村殿には疑ひ深  
きみとあるかな此事は其時何心なく不吉と心に浮びし故言はぬは却つて不  
忠ありと存じ遂に斯くは申せしかり何條左様あるもどの候はんや 幸ハツ  
ハ、ハ、不吉なりと思ひしと開は汝の道辭あり汝不吉と言ひしは實意に出  
し忠言にて全く問者にてはかかりしか 勘不吉と言ひし事如何にも左様に  
て事秀頼公の御爲めを思ひ申出さるは日本の神の誓ひに掛けて偽りはさ  
さらぬ 幸然らば汝此者を見知り候はんソレ其者を出せ懸て小野喜兵衛を  
縛り引出せば小幡之を見るが否やハツと驚き斯は隠謀の顯はれしかと思へ  
ども然あらぬ体にて小野を睨み 勘已れ今朝不調法あつて手割にせんと思

門 衛 右 團 塙

ひしが人々の止むるに依て助け遣はせしに开を遺恨に思ひ我を軍師に問ひ  
せしに見へしよか……それなる所の小野喜兵衛ある者は不届至極を奴に候  
幸村然らば繩を解くべしとて急に縛めを解せて小幡に向ひ 幸汝愈々偽は  
りあしどあらば此處にて誓文を書き人々の疑ひを散せよ小幡心得候とて誓  
文をサラ〜と認め幸村に渡そ幸村受取て密書と引合して見ました小幡  
めよと言はせも敢て再び團右衛門直之腕を捕てグツツと引張らんとした小  
幡是はと思ふ間もかく團右衛門の爲めにズル〜引立られし故腕はメリ  
〜ホキンと折れぬ 勲塙氏餘り乱暴ではござらぬか 直何の此様を奴一  
本二本の腕を折るに何の仔細やあらんと幸村居丈高になり 幸汝言はして  
置けば際限もなき謔言如何に辨舌を以て偽はるども見よ〜汝が今認めし  
誓文と關東方へ送りし密書と同筆あり汝是にても未だ申開きあるや密書は  
之にあり早々小幡勘兵衛を獄中に入れよと何の容赦もかく遂に獄屋へ入れ  
たるは誠以て氣味好きことなりと團右衛門は雀躍をなして居りまも然る

門 衛 右 團 塙

に大御所の御返事が小幡へ来りました開いて視ると其文に  
密書を以て申送られ候趣き委細承知致し候相違なく約束の刻限に黒門口  
より討入り可申候時到達はず門を開き案内せらるゝやう忠志の至り  
分に存す事終りて後恩賞は望みに任そへきもの也

十一月 日

家 康 判

小幡勘兵衛殿へ

と斯く書てありしを見て塙團右衛門兩眼より涙のこぼき涙ハラ〜と流し  
直軍師々々如何かれば斯る悪人が此城中に入込み候や思へば涙の種子なり  
思へば無念骨髄に徹し候なり後藤氏木村氏如何團右衛門直之彼が首抜き吳  
れんど悲憤に堪え兼ねたる團右衛門をば幸村願み 幸ア、後藤氏木村殿塙  
直之殿を御覽せよ天晴れ天下の豪雄なりと言へど扱も其心は即ち最と優し  
きことゝもかなと團右衛門直之を賞賛致されてそれより黒門口には眞田太  
助治幸穴山小助兩人に八千餘騎を率ゐさせ城中には後藤又兵衛基次をして

門 衛 右 團 塙

八千餘騎の兵を埋伏せしめ幸村は不意に御本陣に斬入る手筈塙團右衛門直之は基次と共に斬込んと云ふ手筈を定めて時刻を見計つて關東勢の寄來るを今かくと待掛たり關東勢は斯るもどくは夢にも知らず茶臼山にて十二段の諸將は大いに勇み既に時刻近くなりしかば皆押詰て控へたり斯くて時刻來りしとて大御所には大軍を引率して進み出で黒門口へ掛る、眞田は總軍へ下知を傳へ鎮りかへつて待居りまをる内寅の刻にも及びしゆ黒門口より朱引の提灯を差出し振廻せば關東勢心得たりと掛橋を向ふより突出し我れ先きにと争ひ勇んで込入りたり然るに敵は一人もなく鎮まり切て在りければ一番に進みし三宅對馬守氣に取られ小幡は居らぬか提灯は何れより出したるやとキヨロ／＼しながら尋ねれども影だに見へせ扱は又計略に陥りたるかと急に驚き引退き引や／＼と聲揚れども後より込む大軍に引くにも退れを諸軍勢は僅かの橋の上にて揉合ける其内に橋の掛口外して仕舞ひたれば諸軍一度に堀の中へ落入り死する者は何の位あるか數知れませぬ、上

門 衛 右 團 塙

を下へと騒動する時黒門口の矢倉より一聲の砲と響くと齧しく塙中よりいたして木村長門守眞田大助穴山小助一萬六千餘騎にて算盤橋を押出しドーッと暖めて斬り掛くるに關東勢は周章狼狽右往左往に散乱いたしました、

第七十五席

其所へ後ろの杉山より後藤又兵衛基次塙團右衛門直之八千餘騎にて討て出で唯一挫ぎに掛散したれば關東勢は人心なく逃げ迷ふ大御所後陣に在て此体を見給ひ扱々此度も欺かれしか残念あり斯は开も如何にと暫時は呆れて物をも言はず在る夜軍とは言ひ其混雜甚だしければ是非なく茶臼山へ引退かんと馬を返させ給ふ折しもあれド、ド、ド、と云ふ大鼓と共に眞田幸村八千餘騎を幸ひ鯨波の聲を揚げ六文錢の旗を押立て關東勢の諸將が中へ割て入り人なき巷を行くが如く當るを幸ひ切拂ひ薙立て／＼本陣近くへ切入ければ加賀黄門利長一萬餘騎にて之を防ぎ前後より眞田を併々と取

搦 團 右 衛 門

圖みましたければ真田が勢は之を一戦に破る中にも真田が四十八將の一  
人三好新左衛門門入道清海同新兵衛入道爲三由利基利淺香郷右衛門近藤無  
手之助相木森之助杯勇を震つて進めや進めと聲を限りに下知しながら郎等  
を引立て自身真先に現はれ切て廻りましたれば加賀の御同勢も大御所の  
御同勢も敗軍とかり尙後藤藩の兩人にも四方へ渡り合たれば是が爲めに  
十二段は打崩られサン／＼になつて退いた漸やく夜の明なるとする時勝鬨  
を掲げて木村の同勢は元の所へ引上げて仕舞ひました此時大御所は驚いて  
何たる敗軍なるぞ思へば此位激しいことはいとエライ目に會されて  
仕舞ひました其後搦團右衛門に於ては大勝利に及んだ趣きをば後藤又兵衛  
と諸共に出仕の上秀頼公に申上げました之を聞いて淀殿にも御出席に相成  
り御賞賛一方からず取別け木村へは秀頼公より長光の太刀を下され大助に  
も短刀を賜はり其他長曾我部木村以下の面々にも引出物あり後藤又兵衛は  
入城の節正三位に任せらるゝと云ふ内意あつたが種々評議の末此度從五位

搦 團 右 衛 門

の下隠岐守に任せられましたが又兵衛諷んで 又某し任官を望みて入城せ  
しに御座候は此儀御覽下されたしと言へば真田大助進み出で 大是は後  
藤氏の存念とは覺えず軍師たる者官職を望むは常のことあり道にあらざし  
て望むは格別功ある者に向て賜はる所のもの何條辭とことやあらん軍勢を  
指揮仕給ふにも無官にては輕んぶるものおしとも云い難し早々御受けある  
べしと申されける搦團右衛門も共に 直斯は御尤ものことなり後藤氏に於  
ては任官あるべし若年の大助殿の御言葉至極千鳥と搦團右衛門も共に此所  
で釣合を取て行く御得させましたゆゑに後藤も然らば御請仕らんと遂に承  
諾を致されました時に搦團右衛門が 團如何でござる彼の捕へ置たる小幡  
勘兵衛關東方へ内通したり致するもとは疾くより軍師が知り給ひし譯辭は  
何と致される此時木村が 木然ればなり先年紀州九度山村に於て助けし山  
本九兵衛は忍びの妙を得たる者おれば許して城中に入れ忍び組に爲し置け  
るが九兵衛は我が爲め隨身致して能くも盡して呉れたり然れば小幡が内通

塙團右衛門

のこと並びに城内之に組したる者まで探り知るを得たり此忍組の中には關東の廻し者多分にありましたのを小幡は追々に手につけ其上星台口門の鑿預り内藤甚太夫繩手徳十郎玉置政藏猪口武助杯も皆小幡に引連れて内謀に粗し何時にても關東より攻入らば持口の味方を害し内より討て出んど約せし者諸口に多かりしそれを我が臣下の山本が皆悉く捕り知り証據に所持せし小札を奪つて斯く申し出たりと申しました此處に於て改めて千疊懸に於まして秀頼公の座を設け列座には織田有樂齋大野道犬同修理亮主馬介淺井周防守稻垣右衛門尉連見甲斐守仙石入道宗也齋湯淺右近名島民部多田入道藤彈齋戸田民部少輔七組の番頭主馬野々村伊豫守堀田圖書介伊藤丹後守青木民部少輔中村式部少輔眞野豊後守を始め渡邊三浦生駒今木南部後藤木村長曾我部塙杯の面々相談の上堀田幸人に命じて小幡勲兵衛を引來りまそる塙團右衛門直之に於ては直願くば小幡を責るは私に仰せ付られるやうと云ふ薄田隼人並びに塙團右衛門直之の兩人は小幡の傍に居りますと木村

塙團右衛門

は小幡勲兵衛に向ひ幸汝は關東の犬となつて當城へ忍び入り關東勢の攻寄せを待て陣中に火を掛けんと巧み忍び組の内へ廻し者を入れ置き利さへ内藤甚太夫繩手徳十郎等の御家人までを自分の方へ引込しは以ての外武士道に背きたる者なれば其咎に依て首を刎ね鼻首に掛て諸人の見懸しにこそべしとあれば小幡は唯首を垂れ一言も言はせ大野が方に向ひ頻りに目配せを致しました大野は我が平日已れに媚諛ひ諸評定にも彼に利を付るやうに成置ける故今日の時宜を餘所に見ても居られざれば進み出で申しますやう道軍師の計らひ尤もかりと雖どもそれにては刑罰酷に過べきか賞は重くし罰は軽くせよと古賢の教訓もこれあれば軍師宜しく賢慮ありたしと云ふと幸村莞爾と笑ひ山本が注進にて召捕置し御家人内藤繩手玉置等其外小幡が家來月ヶ瀬與右衛門木股甚助池長八等の三人をも引出し又申さるゝ様幸斯る人非人の者共は残らず首を刎べきをかれども畜類にも劣りし者斯たりとて何の詮もなければ皆々助命致そべし然ながら以來の見せしめに印を付

門 衛 右 團 塙

て、呉れんず」と小幡を始め御家來並びに小幡の家來其外關東より廻者の忍び  
足輕共に至るまで悉く引出させて左右の指を殘らさ切替しました

第七十六席

其内小幡へは顔へ入れ鬘をふして皆追放致されましたから引退きました引  
退きながら小幡勘兵衛は無念の齒噛みをなしてア、情なきことかると彼方  
を眺め思ひ知れやと小幡は面目かく睨むと團右衛門直之 直一昨日來れ已  
れのやうな意氣地のさき奴は何餘長く命保たうと云ふ小幡等に於ては其儘  
本多佐渡守殿方へノソく出掛けました佐渡守 佐汝斯る姿にて來るとは  
實に不禮至極かり速かに汝の首刎べきかりとてトウく本多佐渡守の爲め  
に首刎られたは笑ふに絶へたることでござりませるが是は是非に及ばん天  
の憎しみなり是をば後に塙團右衛門が聞いて 直悦こふべしく斯る憤は  
しきことは多くはあらざるをりと思ふ悦ばれて居られました是より致しま  
して戦ひは次第に運んで來りしが家康は深慮あるべき人なれば幸村を説伏

門 衛 右 團 塙

せて十萬石になさんとしたけれども幸村は謹んでを辭し御國盛らさ賜は  
るども何條家康公に従はん碌の多少を以て勤むべきものにあらそと答へ  
られたので仕方なく先づ大塙城に在りまする十一月二十日家康大野治長に  
命じ講和をなさしめんと致しましたそれは先月以來屢々和を議したれど今  
に至つて返事がない仕方がないなら宜しく秀頼を譲めて和をなされしと云  
ふこと此書を携へて城に入りました家康公村田權右衛門是は織田殿の知己  
でございます是も城にあり和議を請ひました、二十四日和議の途に書信往復  
を以て決せざるを知り村田吉藏を出してさうか斯う云ふことにして我が捕  
虜はお前の方へ返すから何卒以て和議をするやうにと請はれました、それで  
家康公は阿茶局を京都より召して和議のことを段々言ひ入れんとせ、後れ秀  
頼は關東へ下ることを望まぬ是が爲めに和議がからせに居りましたが家康  
深くおへまして常光院をして之を説しめ常光院は京極御守のお母上又現  
を城中にありますから今阿茶局を召すは其使者に立てん爲めでござり



門 衛 右 團 塙

す、應て此使者に立てまして段々其奥を拵へて是から表向きに相成ましたの  
でございませす。ソコで愈々此事に就て秀頼家康、秀忠の誓書と云ふものが互ひ  
に取替すことに相成りました。木村長門守が此使者をするると云ふでありませ  
其誓書はどうか云ふものだど云ふと

一 今後両將部浪人以下異議あるべからざることを

一 秀頼地行前々の如く相違あるべからざることを

一 大坂開城有之る旨何國と雖も望み次第相進すべきを

此事をば誓つて大坂へ申入れました。又秀頼大御所へ到し之も誓書を入れま  
して先づ別段もなく此處で以て和議をば一旦に調のへるやうなものとになり  
ました。ソコで以て御勅使が彌々十二月十五日に來られました。庭田大納言秀  
宗卿、榊原大納言資義卿、茶臼山の木陣へ参られた。それで十四日の夜より安藤  
帶刀、成瀬隼人等の兩人を御迎として差出し、假れ翌日己の刻に至り、茶臼山へ  
御着になりまして大御所並びに將軍に御顔あり、うれより膝掌を以て大坂

門 衛 右 團 塙

城中へ勅使として庭田、榊原の兩卿追つけ御入城相成るべしと申送らる。此  
城中には如何なるもどかあるかと思つて、應て秀頼公は鐵門まで態々御出迎  
ひ千疊原へ御通しに相成りませす。庭田大納言が勅書を捧げられ、秀頼公は之  
を頂戴致し取上げて讀上げました。其勅文に

家康、秀頼和議あるべき事

兩家東西に分れて戦ひ止ざれば上下の難儀少からず依て兩家和睦の儀  
を整へ居たる家康より婚たる秀頼に此事勸むべし。此儀背くに於ては違勅

かり汝等夫れ之を了せよと

讀終る。庭田大納言殿又曰く、秀宗、此度關東の本陣茶臼山に至り、繪言を傳ふ  
る所大御所は得心にて候間、此旨城中にて違背あらば違勅の筋なるべしと述  
らる之を聞いて、眞田幸村進み出で申されませるに、幸恐れながら大岡秀吉  
の緒を繼ぎ天子を補佐し奉つる當主秀頼事争でか勅命を違背仕つらん。東國  
の望みは如何なる事かは存じ奉つら申候へども、當城主にも望み有之り。此儀

若し叶はせどなれば拙者等は唯一死あるのみに候と言へば後藤、木村、塙、團、右衛門は其田を傍に呼び、又貴族の申さるゝ所は無用たるべし、夫よりは兩卿を城内に留置て否やの勅答は何時までも延し置くこと好からめと言へば幸村、幸、イヤ、く、ろれにては勅命に背く道理あり、唯我等に任せ置れよと言ひ捨て再び勅使に云々の議を申上げました、たけれども事濟せして大納言秀宗卿には茶臼山へ参り給ひて事の整はざる由を大御所へ通じおされましたから大御所笑ひ給ひ免角、双方の願ひ御聞入れあるべしとて常光院、同茶の局に京極若狭守御差、添城内に遣さる幸村は高麗橋より本丸まで弓懸砲にて固めさせ千疊敷へ通し、關、方、の望の次第を伺いたいと言ひました。

第七十七席

秀宗、關、東、にて望みの次第は外廓を破却するか、諸浪人を放逐せるか、又は淀原を人質とするか、此二ヶ條の中何れなりと御承知あらば和睦爲さんと、言へば幸村は之を拜承して馳て秀頼公に向ひ、幸、外、廓、の堀を埋め給ふと、御

無用たるべし、唯浪人放逐のみと然るべし、然候へば斯く申す幸村をはじめ最早此日本の天地に身を置く所も是をかく一同一死を覺悟仕つる計りにて候と申しければ、秀頼公聞給ひ、秀頼の如き有功の輩らを放逐するも、吾が意にあらづ、外廓を埋むるも、心にはあらねども、望みに任せんとありしに、幸村をはじめ、面々の者共是非なく、然らば其如くなさるとにも、せよ、此方の望みも、立られ、然るべし、先づ大和紀伊、播磨丹波の四ヶ國を大坂の領とし、尼ヶ崎、高槻、岸和田の城々を明渡すことならば、外廓を破却仕つらんと、御答へあるべしとて、此旨勅使へ申上げ、夫より茶臼山へ更に申し立られました、大御所聞給ひ、何の仔細ありて、四ヶ國を望まれしか、情しなから、斯くあるに於ては、大和紀伊の二ヶ國を望みに任せんとあつて、漸やく和議を結ぶ運びになりければ、茲に於て來る十二月廿二日に、全くの誓紙取替せと相成りました、扱誓紙取替せと成りて、木村長門守に、此事を命じて、目出度、且は和睦に相成りまして、外廓を破却し、外堀を埋めました、此後は一切干戈を動かさず、相成らせどあつて若し

門 衛 右 團 塙

動かせば逆勅であると云ふ恐ろしい條を加へました之に就て真田幸村か大御所に面會を致しまして決判狀を貰つて來たと云ふのでございますから真田幸村と云ふ人も随分エライ人で先づ此處に放まして全く慶長十九年の戦争は終つて仕舞ひましたソコで改たまつて元和元年の其年も明けて仕舞ふと人々は去年の恐ろしき戦争の爲めに何となく氣も衰まじくありけるが御褒美杯も多くありましたゆゑ是から後は何となく女子羅に心を寄せると云ふやうなふとが幾らもござりまゐる是總の間違と云ふので是非に及びませんものでございます採茲に大野修理亮に於ましては是から内も出世をせんと云ふ野心勃勃々でございまを所へ大野左馬介大將の役を離されしを本意なく思ふて何卒して功を立て以前に耻辱を雪がしたいと思ふ中に此處に故太閤の大工島頭を命ぜられて居る中井大和守と云ふ者あり無二の關東方と成て此節大和の法隆寺に隠居して居りますれば是を大野が相應の敵よと思はれました塙團右衛門岡部大學米田監物を副將として大野に征討申

門 衛 右 團 塙

し付られしに幸村一には之を命じたのは少し了見がある者此奴を殺して仕舞はなければ工合が悪いと斯う云ふものでございますから兎に角彼れを殺して仕舞つてさうして事を謀らんと云ふと幸村はマア〜詰らぬ戦争を終つて仕舞た以上には其様な馬鹿なことをしたつて詰らぬから止めた方が宜しいと云ふと塙團右衛門は竊に來りまして幸村に直如何致したらば宜しうございませうと云ふと幸村は幸何に構はん御手前が彼れを討つ杯と云ふて手掛た所が詰らぬ何でも構はぬから大野が戦争を止めて貰ひたい彼の者を討たう杯と云ふは不都合だ當分の内戦争は止めた方が宜しいと言つた天下は今治まらんとする時に敵を討たう杯と云ふは甚だしいことでござる速かに御止めおさい然もなければ幸村秀頼公に申上げて直ちに貴方をば攻めると言ひました不意に攻られては堪らんと思つて流石の大野もそれ限りに相成て仕舞ひました幸村と關東との折合ひも是から僅かの關暇に崩れるであらう沖も水くは太平無事で居る氣問はないと言はれた幸ひなるのは中井大

塙 團 右 衛 門

和守でございませ和陸にあつた間もなく討れると云ふ所遂に討れると云ふ  
ことだけは止めにあつたが仕合せでござりました此處に塙團右衛門直之は  
元和元年の春さうか致して我れに於ては好き美人でも相手にせうせ大坂は  
長いことはいがら一番君の馬前に討死をそる前に懸いで見たいもんだと  
詰らぬことを考へそれよりは江口邊りを始めと致しまして京の鳥原は言ふ  
も更なり其處等此處等をばブラリくと遊んで居られませる然るに其頃  
い江口の遊君で名高き薄田隼人兼亮と言ひ換したる女子に雁はしき者あり  
と聞き隼人程の豪の者さへ女子を顧るゝとならば我れも亦一夜の愉快に日  
頃の鬱を散するも宜からめと江口の里に名の得たる玉織と云ふ頗ぶるの美  
人旭の樓上にて玉織を呼んで夜毎毎日に騒ぎ廻る薄田隼人も苦々しい顔を  
して塙團右衛門程の者が女子の爲めに心を奪はれると云ふのは随分面白い  
みとである一つ彼れを惱まして呉れんものをと薄田隼人が一日工風を凝し  
て塙團右衛門の心を試すと云ふ團右衛門直之玉織と云ふ美人の爲めに其身

塙 團 右 衛 門

を苦しめ是れぞ今生の遊びの終りとなつて情かくも元和二年美事討死を  
げませると云ふまでの御物語後回の一席の讀終りと致します

第七拾八席

永々申續きましたたる塙團右衛門直之の御物語でござりませる既に塙團右衛門  
直之は討らるも致しまして近頃江口の玉織と云ふ美人に思ひ染め夜毎毎日  
に足向けませる此玉織と云へる美人は實に名高き所の揚貴妃にも優ると  
云ふ最も美人でござりませる塙團右衛門は鬘顔を顯はし毛牖の現はれたる大  
兵肥満の大男かれども玉織は然のみ悪うも取扱はせ日毎毎の客の間に塙  
團右衛門直之を良き人と思ひ大切に致して居りませる元和元年二月の頃か  
ら遠ひ始めて三月の中旬天下は再び乱れんとするの時なれども塙團右衛門は  
悠々として酒を飲み面白く遊んで居られませる或夜風に吹れて彼の樓上に  
塙直之は酔倒れて居りませしたる所玉織が側へ來り 玉貴方はん一寸お起さ  
かはれ御風石すど宜うあらん春の氣候は最と温暖でをすすけれども亦折々

寒い風が来て身を強う苦しめる程に一寸貴方お起やはれ、ナア貴方氣を確かに御持ちあはれ、エラウ其様に寝てござると却つて宜いことはをさせんサア塙さん……直何を言て居るエイ捨置け玉織風吹ふども何來るとも其處は恐れぬ塙直之何も心配するには及ばぬ必らず、心配致そな、ウーン其様なことで心配致して堪るべきか打捨て置け、玉それは打捨て置けと其様に仰せられるから打捨て置ても置ませうあれど、どうあつても貴方に風を引かしては宜うをません此處に幸ひ櫻花開き初たもありませぬゆゑ御酒の御肴にサア持て來た是れ御覽せやと玉織が塙直之の顔にさ付れば斯は開も如何に吉野の花か値しは京都の祇園の櫻にて候か兎に角薫り床しき櫻花風邪の道は知らぬども兎と言はれし團右衛門思はを顔を掛げつ、直是は、宜い賜物かを櫻の花の薫り床しき景面白き説あるか、ヤア玉織貴様は江口の邊君とは言へ又格別ぢや能々大坂近郷からは女で通ひ來る眞實男の直之可愛と思ひ呉れるか、玉何で憎ふておりせうか貴方は大坂方の大將さんエラウ

可愛いておらんので、直ヤア言て居る可愛いうておらん杯と言ふ、それは貴方が大法螺であらう、未だ外に良い者もあるだらう、玉何の廣い世界に塙さん位好いた御方は宜うさいで……直イヤ言て居る貴様は關東の板倉伊賀守勝重と云ふ老人を客にしたことはないか、玉其様ことがあるものでおそれば宜う知らん關東の板倉さんは私しぢやをません、外の方です、直ヤア言へ未だ關東方で随分エライ者がある、本多中務大輔の伴が貴様の方へ通ふたと云ふ話があるが然うか、玉それ知りやあせん、直イヤ言て居る普賢菩薩の再來か知らぬとも男たらしの玉織君ツク、御身を見るに我れが若き頃はいにエラウ馴染んだ女子に似て居る馴染だぢやない思ひを懸けて弾かれて京の河原に立往生してエラウ笑はれたことがある、出雲のお國に其儘生寫しぢやせ、玉ア、イヤ止めてお呉れませ、出雲のお國は名古屋山三と歌舞伎狂言した女子、彼の女子に似て居るとあれば外にない美人ぞが私しや知らん伊達政宗さんに思はれてエライ愛身を愛した

門 衛 右 團 塙

と云ふ其様か御方とは似ても似付ん此玉織止してお呉やはれ 直「ハッハ、  
、止せんな痴話も口説もハ、アアイヤもうコレ膝を枕に寝して呉れ 玉  
アノ戦争は何時始まりまそか 塙馬鹿を言へ戦争は治まつた以上何んで始  
る天下は太平無事ぢや悦べく 玉「愚計り仰せなはれ何んで悦ばれませう  
直「イヤ全く悦べ實に結構なことだ 玉「貴方はん御城中に九萬人から御在で  
なさると云ふが全くでござりませうか 直「ウム九萬人かお居る 玉「然う……  
其中で木村重成さんど云ふ御方はエライ御方ぞもかな 直「ウム木村はエラ  
イ人間だお、ナカく 天晴だ木村重成位の間人は先づ天下廣しと誰ぞもある  
まいふ 玉「それ程エライ御方さんぞもか 直「エライにもエラクまいにも先  
づ彼の位な人間は天下にないな 玉「ハア男も美しいさうでか 直「マアく、男  
も美ひ男も美ければ人間も強いし智恵もあるし學問も出来るし彼様か人物  
は先づまいふ 玉「其様な御方ど一盞御酒飲だらさんかに樂しみやど此様に  
思ふ…… 直「ヤイく、ヤイ己れは不屈な奴だ木村重成に貴様はエラウ惚込

門 衛 右 團 塙

んで居るか 玉「本統ども重成さんの爲めなら其様なマア苦勞をしても宜い  
と思つて本統にマア悦んで居るのでと 直「それはエライ、ハッハ、ハ、大  
もなく重成に貴様思ひを懸けて居るか 玉「思ひを懸けて居るのやをません  
眞實ぞと 直「是は驚いた眞實であつては堪らぬな、ナニ眞實から眞實で宜い  
……マアく、そんで宜い 玉「重成さんが詠れた歌を私は宜う知て居りませ  
直「どんな歌だ……

春霞秋の霧かど見まぐるに

大内山の鹿の一聲

玉「宜い歌やをさうも…… 直「何んだ春霞秋の霧かど見まぐるに大内山の鹿  
の一聲「ナカく、面白いな何を遣たか 玉「薄田はんが此頃に来れて来る程に  
宜う言て遣れど此様に仰せやはつたから私は薄田さんに頼んで置たで木村  
はんが來やはつたら外の御方へは構はんが貴方にだけ宜う斷つて置くでさ  
うぞ憎氣してお呉れでない 直「ヤイく、ヤイ悪い奴だな己れどうも甚だし



門 衛 右 團 一 城

門の耳に口を寄せ密かに語りしことあり團右衛門之を聞くが否や大ひに  
き速かに此所を去りましたは容易からざることなり扱みを關東關西再び手  
切れどなつたるなり何時ぞや大野殿が中井大和守の首を討放さむ彼は故太  
閤の恩を忘れし奴なりと言はれしが今こゝ彼れを討つのは好機會來りしなり  
大和の法隆寺へ乗込むこそ然らんと城團右衛門、岡部大學、米田盛物の三人が  
大野に頼めましたる所大野はそれ宜からむと云ふので忽ち五百餘騎の兵を  
貸與へた依て岡部は團私の遺恨は兎も角も君のことに何ぞ遺恨あるべし  
彼の中井なれば速かに討ん團右衛門直之密かに手の者に申合め一手は放火  
させ一手は郡山の城へ向はせむと云ふ手筈を極めましてさざりまをるけれ  
ども幸村が幸先づ暫く待て左様をみとは止めろと言はれてトウ／＼先づ  
愚圖々々致して居りましたる時に愈々御手切れになつたゆゑ最早止められ  
ても捨置くに及ばぬとて法隆寺に至り放火して攻入たるに中井は豫て此事  
を聞くより家内を引連れて京都に立退たる跡なれば一人も敵はかき郡山の

門 衛 右 團 一 城

城將備井隼人正は魔風に火の手燃んたるを見て法隆寺は大切の伽藍あり  
君にも常に大切に思召を所敵の爲めに焼れては申譯あしと手勢を引連れ  
行く所に城團右衛門は掃進ひながら道を變へ筒井が留守の城に向つて城が  
郎黨坂田庄三郎兼兵一人門前に差掛りました城兵の歸つた様子にて持成門  
を閉て奥れ開て奥れと言つた何者であるかど番人が窺ふ所を一刀を引抜て  
六人まで斬殺し内に入て門を開きました城が諸勢一同に馳入り留守居の者  
共を對手とみし戦つたが手に立つ者一人もなく城兵も防敵はじと思ひ  
けん八方に逃出して仕舞ひました其中に城に火を放け焼立しを筒井は道を  
急いで小泉の邊りまで行く所後陣より報じて郡山の方に火の手見え候と告  
るに筒井引返さんと思はれば城が伏勢一度に起り斬立てられしに筒井は不意  
を討れて敵は走脱し方へ逃げ行きました扱又大和勢の植村新八郎寺澤兵  
庫頭、倉屋後守、岡部内膳正は一時に馳行き大勢の中に取込み戦ふに大野主  
馬介等散々に建立らるゝと城團右衛門馳來つて大ひに苦戦を致し遂に敵を



門 衛 右 團 塙

追崩しました其大野主膳介は主理亮が命に依りまして塙の跡より乘込んで大和に於て手柄をなさむと塙が止めるのも聞かぬに出来りしたのでございませぬ、扱大和の植村新八郎寺澤兵庫頭松永豊後守岡部内膳正に於ては大野の新手を追立て塙團右衛門に於ては十分に戦ひましたゆゑ中々に勢ひ盛んでござりませぬ、此時淺野金森小出等は持城を固め居れば大野は南の方の地を固めんと願ふゆゑ淀殿真田の意見を問はれました所幸村 幸無用でござる、と返答致しました然るに大野は強て懇望して止ざれば幸村 幸其許には大和路の合戦に岡部米田の諸將塙の苦戦の功名に列なり給ふと雖も是御邊が功ではおいと云ひ伏られて然らば賭して行んと云はれる位ゆゑに勝手にかさい強々敗れたらば未練なく腹切らるゝ方宜からんと罵られましてございませぬ、たけれど大野に於ては縦令何であるとも恐るクもやわると云ふので先づ真田と軍令狀杯を取替し大野は又塙岡部米田を従へ二万五千の兵にて岸和田に押掛け十日餘りの合戦に何の仕出したることもなけ

門 衛 右 團 塙

れば塙團右衛門は大野に向ひ 直斯く數日を送る中に淺野等に後を取切られなば大事とならん大野答へて何んぞ左様に敵を恐るゝことあるべからず塙は兎角に一言もかく却つて従卒に下知し一人に三人前の兵糧を支度させ翌日兵共之を腰に付けさせ手勢百五十騎を引卒し南の方へ打立ました此由大野聞込み岡部を呼びまして 修何で塙團右衛門は彼のやうおことをするか岡部 大是は尤もの事に之有り候天野が申さるゝには 修貴殿と塙とは取て不和にてありながら又彼をば賞ること甚だ不審ではないか 大然ればなり君子は其事を悪んで其人を悪ます善事は善と申さなければならぬ私

第八十席

此時淺野が先陣田子勅兵衛大名新左衛門同じく與右衛門藤井六郎大夫等屈

一 門 衛 右 團 塙

豊の兵を撰抜して各々尼ヶ崎まで向ひ既に榎井川に陣して居りました端々  
くも塙團右衛門に行達い先陣上田主水龜田大隅等諸軍を下知し一様にせん  
どて討て掛りました團右衛門は此勢ひを見て居ましたが最早是までなり死  
そべき時に死せざれば死に勝る耻ありと時に四月二十六日大坂に於ては薄  
田華人兼亮白根に馳向つて戦ふと云ふやうなことをば言ふて来りませる者  
杯がございませるゆゑ塙團右衛門は熟々前途を考へどうせ長きみとは及び  
に付かぬとゆゑに美事に戦ふて相果るゝを武士の常なりウム、それこそ宜  
らんとて塙團右衛門直之に於ては茲で死を決しおければならぬ、岡部に於て  
も同じく死を決して居られませる其時塙團右衛門直之は黒革の鎧に同じ毛  
の兜を被りまして太刀腰に打込たるが鎧を取て敵に向はんと致して居りま  
そ此折柄岡部は大音を揚げ 大如何に塙御身と我れとは常には少しく敵同  
士の如くありと雖も今日日は君への恩酬に相果るならん如何に互ひに危き  
を助け合はん如何に〜と言はせもあへず 直オ、それを宜からんと團右

門 衛 右 團 塙

衛門も岡部と共に堤へ馬を乗上げて一息吐て居りしに岡部が曰く淺野勢今  
吾々に敗られたに依て大いに怒り大勢にて攻来らん然る時は此小勢にて防  
戦心許なく大野へ加勢を乞はんか塙團右衛門 直實に道理なりとて即ち後  
詰のこどを申遣したから大野は之を聞き大いに怒り 倭軍法に背き振掛け  
せし者に何とて加勢の兵を差向んやと使の者を厳しく叱り返さんと爲した  
るを米田監物傍より 監如何に大野殿今兩人に加勢なくば彼等必らき討死  
せん然る時は君への不忠なり貴殿何とせらるゝやと諫むればも大野は少し  
も用ぬを使者に向ひて早々に立歸り此由主人に申聞せと追返しなしたから  
取て返して之を塙團部に告げた所大いに怒り 直斯かる不法ある人物に仕  
へては縱令如何様に紛骨をも逆も勝利は之有まじ眞田が一言今更思ひ  
當れりイザ潔よく討死致し黄泉の下に忠を盡さん岡部や拔るな 大塙心得  
て候なりと言はせもあへき一度戦ひを挑みたる淺野は龜田上田等の取軍せ  
しを以ての外に立腹しければ兩人は面目なく又榎井川へ押寄せました塙團



二百五十  
が一つ飛來り塙が喉を射貫きしかば塙は堪らず馬より落て憐れ慕なく相  
果たり岡部は此体を見て心は矢竹に逸れども其身は深傷を負たることゆゑ  
今は軍せんこと叶ひ難く川邊に來り 大團右衛門くと呼べども塙は急所  
の痛手に早死したれば岡部は大音聲にて 大團右衛門今こち中直りして死  
出の旅路に同道せんと團右衛門の身体を抱へ榎井川へ身を投じ腹一文字に  
横切り相果たは天晴美事の討死でござりまする米田は此處に於まして無念  
骨髓に徹したが仕方がない此事眞田に申入ると眞田は涙を拭し 幸惜き  
所の勇士兩名を殺せしものか塙團右衛門は天晴ある勇士あり彼を殺せし  
は返すも無念であるも嘆いても今は仕方がございません然るに首をば  
擧げられたのは淺野但馬守殿でござりました此首を家康公へ御披露申上げ  
たる所家康は御嘆あつて團右衛門の首を御覽に相成り 家思へば不憫なる  
みどを致したり足輕大將なれど天晴よと家康公も太層に塙を惜まれました  
と云ふ有難稀世の豪傑も塙直之の討死致したを惜まれたとは天晴彼が終世

塙 團 右 衛 門 大尾

の巻でござりませる此のお話しは之を以つて大團圓と致しませ、へエ御退  
屈様……

明治卅一年六月十日 印刷  
全 年同月廿日 發行

塙園右衛門奥附

淺草區公園第六區三號百四

講演者 桃川燕林

東京市日本橋區本石町一丁目四番地

發行者 戶田爲治郎

同上

發行所 太成堂戶田書店

淺草區森田町五番地

印刷者 小宮定吉



終

